

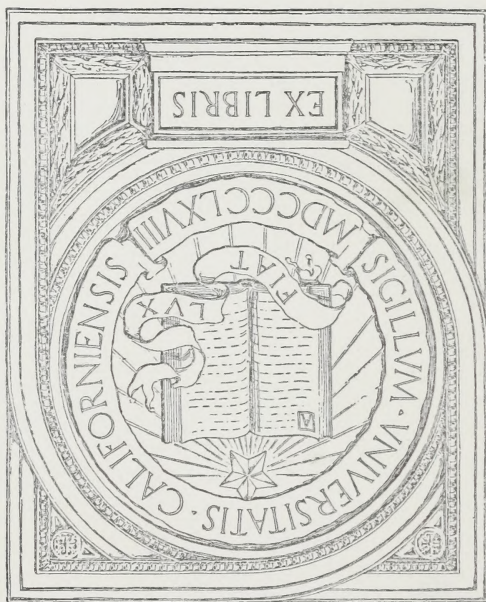








ORIENTAL  
COLLECTION



EX LIBRIS

UNIVERSITY OF CALIFORNIA  
MEDICAL CENTER LIBRARY  
SAN FRANCISCO




春陽堂藏版

第六冊

註頭  
國譯本草綱目





Digitized by the Internet Archive  
in 2012



春陽堂藏版

第六冊

註頭  
國譯本草綱目





譯文  
考定  
考定  
考定  
考定  
考定  
考定  
顧問  
監修・校註  
原著

鈴木 木矢岡 脇水野富太 牧野富太 木村博 白井光太 明  
海一 康村野宗 利 五 太郎 昭 太郎 珍  
眞 康 野 信 鐵 太 博 光 太 時  
鈴 木 矢 岡 脇 水 野 富 太 牧 野 富 太 木 村 博 白 井 光 太 明



R127.1

A82

L6933<sup>2</sup>

J5A

V.6

1929-34

O.C.

四.....由跋

〇三.....虎寧天南星

三.....白附子

〇一.....烏頭

八.....漏蘆子

六.....側子

一.....天雄

毒草類

本草綱目草部第十七卷下

目次

頭註國譯本草綱目 第六冊





透山根

海芋.....

格注草.....

葶麻.....

虱建草

牛扁.....

陰臺命

毛茛.....

石龍內(胡椒菜).....

茵芋.....

秦草.....

醉魚草.....

薔花.....

光花.....



山躑躅 羊不喫草

羊躑躅.....六

曼陀羅花.....六

押蘆

坐琴草.....四

鳳仙.....〇

玉簪.....八

鳶尾.....六

射干.....七

鬼臼.....一七

蚤休.....七

半夏.....八

葶藶草

蒟蒻.....五

〇九.....黃環(狼駝子).....

鐵葛

一五.....葛.....

四.....王瓜(土瓜).....

一三.....栲樓(天花粉).....

九二.....月季花.....

二五.....營實 增 藤.....

〇二.....紫葳(凌霄花).....

二五.....旋花(大乙金鎖) 鼓子花.....

九一.....牽牛子.....

六六.....預知子.....

合 子草

四九.....槭藤子.....

九八.....馬兜鈴(土青木香).....



番木鱉子	七八
木鱉子	一八
使君	六
蛇母	七五
懸鉤子	三七
覆盆子	七六
蓬蘽	一六
五味子	三五
雞火關	五四
兔絲子	五四
蔓草類	三一
草部第十卷目錄	三一
本草綱目	上
草部第十卷	上
本草綱目	七三



八 | 三 | ..... 伏雞子根

七 | 三 | ..... 鵝抱

五 | 三 | ..... 鷓鴣

四 | 三 | ..... 女萎

〇 | 三 | ..... 白斂

三 | 〇 | 三 | ..... 十茯苓

九 | 九 | 三 | ..... 援葵

五 | 九 | 三 | ..... 藟藟

蔓草類

本草綱目草部第十八卷 下

〇 | 九 | ..... 何首烏

白并

六 | 九 | ..... 百部

天門冬

三 | 六 | ..... 天門冬



三	藤	.....
一四	紫藤	.....
四	天仙藤	.....
七	含羞藤	.....
六	甘露藤	.....
六	甘藤	.....
九	忍冬(金銀花)	.....
四	千歲藥	.....
四	常春藤	.....
四	扶芳藤	.....
四	地錦	.....
三	木蓮	.....
三	絡石	.....
一	羊桃	.....

八三.....律草

八三.....烏斂母(五葉藤)

四八三.....紫葛

二八三.....赤地利

八七三.....蘿摩

五七三.....白英(鬼目排風子)

三七三.....白花藤

三七三.....白牙藿

一七三.....黃藤

倒掛藤

八三.....釣藤

天壽根

八三.....通脫木

四三三.....通草

萍蓬草(水栗).....四九

蘋.....四九五

水萍.....四八

苦草.....四八七

菰.....三八

蒲黃.....六七

白菖.....四七

菖蒲.....二六

龍舌草.....一六

牛舌實 麝香

酸模.....四八

羊蹄.....四五

鮮草.....四二

酸惡



澤瀉.....三二四

水草類

一.....草部第十九卷目錄

本草綱目草部第十九卷

七三四.....附錄諸藤(十九種)

五三四.....藤黃

四三四.....千里及(千里光)

折傷木 每始王木 風延莓

一三四.....落鴈木

〇三四.....紫藤

九三四.....省藤

七三四.....百稜藤

六三四.....清風藤

烈節

三葉酸草

三

酢漿草

〇五

螺麝草(鏡面草)

六五

石胡荽

五五

虎耳草

五四

佛甲草

一五

景天

石垂

〇四

石莧

江蓠草

七五

石長生

五四

金星草

三三

石韋

八三

骨碎補

石斛.....三五

石草類

草部第十二卷目錄.....一

本草綱目草部第十二卷

水松.....三三

石帆.....一三五

越王餘算.....〇二五

昆布.....六一五

海帶.....五一五

海蘊.....四二五

海藻.....一一五

水藻.....九〇五

葦.....五〇五

荇菜.....一〇五



玉柏.....一九

地生草

卷柏.....二六

土馬駿.....二六

百藥草

烏韭.....二四

紫衣

昨葉何草(瓦松).....一八

屋遊.....二五

垣衣.....二七

地衣草(仰天度)

石蕊.....二五

船底苔

井中苔、及び澤壁.....二七

三七五.....乾苔

元英.....陟釐

苔類

四一.....草部第二十一卷目錄

本草綱目草部第二十一卷

四六.....白龍鬚

三六.....紫背金盤

半回天 野蘭 雞翁藤

二六.....星機

一六.....仙人掌草

〇六.....仙人掌

〇五.....離隔草

金瘡小草

五六.....地錦（血見愁）

本草綱目  
卷十七  
下



本草綱目	三十九種	五二六
宋圖經外類	十二種	八一六
宋開寶本草	一種	七一六
唐海藥本草	一種	七一六
本草拾遺	十二種	三二六
名醫別錄	七十八種	〇〇六
神農本草經	二種	〇〇六
雜草	九種	七九六
雜草有名未用		
馬勃		四九四
艾納		
桑花		三九六
石松		三九六









子ノ註見  
綿州、龍州  
附

に自然に生じて發育するものだ。故に別錄の鳥喙<sup>くわい</sup>の註に「長三寸巳上」のものを天  
ものが出来るやうな類である。一種は、他の地方に生ずるもので、草鳥頭の類のや  
もの、或は種々な附子<sup>ぶし</sup>が盡く變じて成したもので、即ち芋を種ゑておぼろな形狀の  
時珍<sup>ししん</sup>曰く、天雄に二種ある。一、種は、蜀地方で附子を種ゑてその中に生じた長い  
の出るを思むと同様だ。  
培して天雄の生ずるのを非常に忌む。それは收穫の利益が薄いかで、養蠶<sup>やうさん</sup>に白  
子や側子を生ぜず、年を経て獨り長い大になつたもの。蜀地方では、裁  
承<sup>しょう</sup>曰く、天雄に關しては、諸説に十分盡されてゐる。ただ始めに種ゑたまで附  
平が解釋の引合に出されたのだ。  
。が爾雅に「芰<sup>き</sup>は草なり」とあるがそれだ。今はその草を建と詛<sup>そ</sup>るので、遂に建  
平に産したから名<sup>な</sup>けたといふは誤りだ。鳥頭の苗<sup>さへ</sup>は草——音<sup>おん</sup>は斬<sup>せん</sup>——と名<sup>な</sup>け  
餘處<sup>よじよ</sup>はたとひ有つても力が弱く、到底<sup>たいてい</sup>似つかない。陶氏<sup>たうし</sup>が、この三物<sup>さんぶつ</sup>は俱<sup>俱</sup>に建  
赤<sup>せき</sup>曰く、天雄、附子、烏頭は、いづれも蜀道の綿州、龍州に産するものが佳し。  
それは佳品でない。

き、元氣を扶け、また傷寒陰毒を治す。烏頭、附子、天雄を、いづれも炮いて皮、除、冷し、大、小便が滑數し、小便便が白く濁り、六脈の沈、微なるを治し、固冷を除、（五）手、足が厥

附方

新三。

【建湯元陽】

こ思ふ。

で熟雄を服す『とあるは、天雄を炮いて研り、酒で一錢を服することとをいふもの酒、ただ意味の説明に於て明確でない。雷鼓の炮、煖論の序に『咳逆の數なるには、ただ朱震亨だけが下部に用ゐる藥の佐となる』といふのは見方として正しいが、上焦の陽虛を補す『といふたが、いづれも實を上に向ふものと誤認したためだ。』に向つて苗を生ずる處だ。寇宗奭は、それこそ『昔に就かぬ』といひ、張元素は附、天雄の實は皆下に向つて生ずるもので、その氣は下行する。その勝は上焦に屬する。その場合は參、芪を用へべきものだ。天雄を用へべきものではない。を補するは結果に於て上を益することになるのだ。上焦陽虛ならば心脾の範圍に時珍曰く、烏、附、天雄は、いづれも下焦、命門の陽虛を補する藥であつて、

②。固冷ハ厥ニ同  
③。犯スルハ外下  
④。外攻ハ部ヲ

震亨曰、天雄、烏頭は氣が壯んで形の堂堂たるものだ。下部に用ゐる藥の佐と

元。素曰く、天雄以外に能く上焦の陽虛を補し得るものがない。

だ。故にその功の力を取るのである。

用ゐる。やはり大なるものを取る。その尖角は熱性多くして背て下部に就かぬもの

を。宗。曰く、虛寒を補するには必ず附子を用ゐ、風患者は多く天雄を

發明

し、陰汗を止める。炮いて含めば喉痺を治す【大明】

破り、膿を排し、痛を止め、骨を續ぎ、瘀血を消す。背脊僵、霍亂轉筋。汗を發

を通じ、皮膚を利し、血脈を調へる。四肢不遂、胸膈の水を下し、痰癰癰結を

を治し、陽道を助け、水臟を溫め、腰、膝を補し、精を益し、目を明かにし、九竅

毒を治し、風を治し、氣能く氣促を止め、禽、蟲の毒を殺す【一】一切の風、一切の氣

に人入れて搗いて食へ【食(五)】食へば、人をしめて、勇ならしめる【天雄、冷痺、軟脚、

淮南子に天雄、雄雞。志氣益す】とあり、注に『天雄の雄雞の(四)腸中

し、人をして武勇ならしめ、力作して倦まざらしめる【別錄】西。曰く、按ずるに、

聚、關節が重くして歩行不能なるを療じ、骨間の痛を除き、陰氣を長じ、志を強く

云。散散ハ上行ナリ云。

ト云。癰癰ノ誤ナリ

ノ字アリ。觀ニ食ニ上ニ生  
ニ誤。一ニ腸ハ服ノ





恭。曰く、側子、附子は、いれども鳥頭の下旁に出るもので、その小なるものを側は用ゐなかつたが、近來の醫師が脚氣の治療に用ゐて多く效驗がある。

集解。弘景曰く、この物は附子の邊角の大なるものを削り取つたものだ。昔

はハ剪セン子シと書シいてある。時珍曰く、附子の側に生ずるから名けたものだ。許慎の説文に

釋名

側子

(別錄下品) 附子の側に著て出来た根の名。

雞、鶏逆サカす。かゝつて初めに三箇を呑み、漸次に六七箇まで増加する。房事、魚、

續返す。なほ皮の落ちぬときは一夜漬けて取出し、晒し乾して浸して皮を摩り去

り、及び根を採つて土を去り、洗はずに搗いた汁に細粒の黑豆を漬けて皮を摩り去

苗、し、生錢をつつて酒を服用す。(龍仲景金匱要略) 大風惡いんふう【惡風】三月、四月に天雄、烏頭の

に、生錢をつつて酒を服用す。(龍仲景金匱要略) 大風惡いんふう【惡風】三月、四月に天雄、烏頭の

する。肘後方【失精】天雄三兩を炮ホき、白朮八兩、桂枝六兩、龍骨三兩を散

臍を裂き去り、等分を咬咀して四錢つづつて、水二盞、薑五十片と八分にして煎じて温服

氣味
主　治
發　明

陽を回復するに、は、瀉薬など、物を加減して用うべし。『凡そ年久しき瀉患者の元  
陽中甚しい處がある』とある。又、按ずるに、『五夫人類編にあるが、兩足に瀉を生じ、是  
と云ふ者に対して輕輕しく用ゐると、熱氣が虚に乗じて結核に變ぜしめ、害をなすこと  
から、瀉薬を加減して用うべし。』楊士直の直指方に『凡そ年久しき瀉患者の元  
氣味苦く辛く、毒あり』とある。蓋しこの物は服御には堪へぬが、ただ瘡科の  
通りに治療して果して少粉賦有様だつたとき、ある夜、按ずるに、『五夫人類編にあるが、兩足に瀉を生じ、是  
と云ふ者に対して輕輕しく用ゐると、熱氣が虚に乗じて結核に變ぜしめ、害をなすこと  
から、瀉薬を加減して用うべし。』楊士直の直指方に『凡そ年久しき瀉患者の元  
氣味苦く辛く、毒あり』とある。蓋しこの物は服御には堪へぬが、ただ瘡科の

卷二十一 斤之二 爲、用、益、利、丹、丸

るものも虎掌こたての記載に『西川成府の歳貢は、天雄二十一對、附子五十對、烏頭五十對、漏蘂五十對、大

細なもので、藍から濁るほど小さいといふところから命名された。南星の最小な星

名錄

木龍子(龍) 炮夾論(論) 虎掌(掌)

紅  
白

要に記載してあるが、薬として多くは記録されない。

時珍曰く、唐の侍郎希聲の難痰風を治する薬に側子湯といふがあつて、外臺秘

がよ。服め視力を喪失するところがある。

分の氣が結成したもので、形體も見る影もない粗末なものである。湯に入れては服せぬ

これは上焦の陽虚を補するに適するのだ。木鼈子なるものは、前記各種の物の餘

に充て達するに適する治風薬である。天雄は長く失つて、その氣は上に親しむ。

のもので、その體に一定の位置がなく、その氣は軽く揚るものだ。四肢に發散し皮膚

を得てゐる。中央に居を占め、守つて移らないのも側子はその旁側に散生する

氣を得てゐる。機曰く、烏頭そのものは生育の主腦たる元種であつて、母として氣

發明

療す【】冷酒で調へて服すれば、全身の風癰を治するに神妙である【】雷發

の疼冷、寒熱癰。又、胎を墮す【】脚氣、治風、濕痺、大風、筋骨の癰急を

八月に採收する。畏、惡の關係は附子に同じ。主 治 【】癰腫、風痺、關節、腰、脚

これを疑つたのである。草鳥頭から取つた汁は晒して毒藥を作る。それは、禽獸を  
 もので、此にいふ鳥頭とは違ふ。蘇秦はこの間の事實を知らぬところから、反つて  
 喙といふが、功力はやはり天雄と同じ鳥  
 だ。附子、天雄の兩岐生したのも鳥  
 形に因んだ名稱であつて、その實は一物  
 たのもことで、今俗に兩頭尖と呼ぶ。  
 土附子ばそれだ。鳥喙とは兩岐が偶生し  
 ものをば淮鳥頭といふ。日華子北江の所に  
 ひ、ま竹節鳥頭ともいふ。北江に出る  
 草に鳥頭といふ、俗に草頭といふ  
 時珍曰、これは、鳥頭の特產地以外の土地に野生したもので、俗に草頭とい  
 ば、何と名付けたものだらう。  
 のものは少ない。鳥頭の兩岐の鳥喙と名けるならば、天雄、附子の兩岐のもの  
 曰く、鳥喙、即ち鳥頭の異名だ。この物には三岐のものもあるが、しかし兩岐  
 口であらう。



〔附〕  
 射鳥頭草





し、大熱にして大毒あり。大明。曰く、味苦く辛し、熱にしし毒あり。之才。曰く、辛き毒あり。善。曰く、雷公、桐君、黃帝は甘し、毒ありといふ。權。曰く、辛き毒あり。大熱にして大

鳥頭 氣味

共に煮熟してその毒を去つて用ゐる。【別錄。大熱にして大毒あり】

時珍。曰く、草烏頭は、或は生で用ゐ、或は炮いて用ゐ、或は烏大豆

修治

ぬ。

必ず急にこの草を食つてその毒を解すところある。牧靡とは何の薬であるか然せず。寧郡の鳥勾山に牧靡といふ草がある。鳥鵲が誤つては更に甚しい『又建遇へば懼れる。或は草に類似したものだ。飛鳥がこれに觸れば墮ち、走獸がこれに反つて濕り、湿地に置けば反つて乾く。雀は、雀の形は雀の頭やうで、乾地に置けば甚なものだ。段成式の西陽雛組に『雀手』の點がある。毒の點はより上に激く内部分白く、皺があつて枯燥なる點が異なる。法もいふ方なく、その根は外部が黒くこれは野生のもので、又、釀造して用ゐるといふ方なく、實はいづれも川烏頭と同様であるが、時珍。曰く、處處にある。根、苗、花、實はいづれも川烏頭と同様であるが、

がら日光で晒乾してて膏を作る。それは射罔と名けてて毒箭を作るものだ。大。明。曰く、土附子を生で皮を去り、搗いて濾した汁を澄清し、少しづつ添加しながら。人。間。に。中。れ。ば。や。ほ。り。死。亡。す。る。か。ら、速。か。に。解。毒。の。方。法。を。講。ぜ。ね。ば。な。ら。ぬ。朗。陵。に。晒。し。煎。じ。て。射。罔。を。作。る。獵。夫。が。そ。れ。を。箭。に。傳。け。て。禽。獸。を。射。と。十。步。に。し。て。倒。れ。に。弘。景。曰。く、今。は。四。月。に。採。つ。て。用。ゐ、五。枚。八。月。に。も。採。る。莖。の。汁。を。搗。き。搾。り、日。光。は。厚。く、莖。は。四。角。で。中。が。空。だ。葉。は。四。枚。四。枚。と。相。當、膏。と。似。て。ゐ。る。葉。て。陰。乾。す。る。長。さ。三。寸。以。上。の。も。の。は。天。雄。で。あ。る。普。く、正。月。に。始。め。て。生。え。る。葉。つ。別。錄。に。曰。く、鳥。頭、鳥。喙。は。朗。陵。の。山。谷。に。生。ず。る。正。月、二。月。に。採。つ

集解

とあるは鳥喙の苗のことだ。

ば直ちに死ぬに『とあるは此にいふ鳥頭で、川鳥頭のことではない。』『菊葉』に『菊葉』とある。西國には獨白草といふが生え、それを煎じて薬を作り、箭に敷いて人を射れる。秋、鳥頭を採收して毒薬を作り、禽獸を射る。『とあり。陳藏器引いた續漢五行志は、射に用ゐるところから射罔なる名稱があるのだ。後魏書に遼東、塞外では、

難に止つて、毒を以て毒を攻むるだけのものだ。川島頭や附子などやうに、右腎、  
 左腎、頭、頸を間き、澄に浸し、能く風寒を治すといつて、その毒を認めて、  
 この物を、陽事を益し、男子の腎衰を治すといつて、あるが、その毒を認めて、  
 中風、頑固なもの、及び急病には、輕に施すべし、殺すにたつたものは、比較的に  
 やや固工で栽培し、加ふるに、射固は非常な毒藥であつて、川島頭、附子など、  
 明發

立乃に人を殺す【藏器】

もその一味だだけで禦き得る。主治】尸<sup>カ</sup>瘵、癰疽、及び頭中風<sup>カ</sup>癰疽<sup>カ</sup>（別録）瘵。

近づつ瘡、瘰癧核、瘰癧腫。蛇咬には、先づ瘵を肉の四畔に塗り、漸次瘵にこれ塗る。及び黄水のあるにはこれ瘵に熱、及び瘵に至る。遂ふ病として習習瘵を患へて骨に透り、生血の出るもの、及び新なる傷破には塗つてはならぬ。

字アリ。(八)大觀ニ痺ニ下痛  
(七)大觀ニ青ニ作ル。

毒に中つたとき、は、甘草、薑汁、小豆葉、浮萍、冷水、煎じ、服せられ、ば、いづれ

射圃氣味

【苦し、大毒あり】之。才。曰く、温なり。大。明。曰く、人が射闕の



ル。六 大 觀ニ癰腫ニ作

痒ニ作ル。五 大 觀ニ寒癰ニ囊

脚痛ノ字ヲ下作リ。四 大 觀ニ疾ニ作肩。

汗するもの。の癰<sup>おの</sup>癰<sup>おの</sup>の歳月に互つて消せぬもの【頸權】大風、頭痺に主效がある【公、桐君、黃帝は毒ありといふ。權曰、苦く辛く、大熱なり。○畏、惡の關係は烏頭雷、烏喙一名兩頭尖氣味辛し、微溫にして大毒あり】善。曰く、神農、雷

を強くする【癰權】頭風、喉痺、癰腫、疔毒を治す【時珍】志、冷痰の心を包むもの、腸腹の痛、痰癰塊、齒痛、陽事益し、の、目中痛で長時間物を視得ざるものを消す。又、胎を墮す【別錄】惡風の憎寒、胸上の痰冷で食物の落付かぬもの、心腹冷痰の間に痛で俯仰すへからざるもを除き、積聚寒熱を破る。その汁を煎じたりは射固と名け、禽獸を殺す【本經】寒濕痺、欬逆、上氣

治主

解す。

く、丹砂、砒石を伏し、豉汁を忌み、飴、糖を畏れる。黑豆、冷水は能くその毒を草、遠志が使となる。生薑、桔樓、貝母、白欬、白痰、反し、黎蘆を惡む。時珍曰

丸にし、十九つの空をに心をに鹽湯で服す。これを至寶丹と名ける。【一】切の頭風【神  
 頭を取り、木臼に入れて三百杵搗いて餅にし、焙じ乾して末にし、酒糊で梧子大の  
 草鳥頭四兩を皮を去り、大豆半升を鹽一兩と共に沙三伏時煮て、豆を去つては、  
 ならぬ、麻する處あるのだ。これを鄂洛小金丹と名ける。○經驗世方では、  
 方では、生草鳥頭、晚蠶分を末にし、生地龍を取つて搗き和し、少量の醋を入  
 れて糊で梧子大の丸にし、四五丸を白湯で服す。甚だ妙である。多く服しては  
 焼いて病所を熏する。これを雷丸と名ける。（孫天集方）【諸風の不遂】朱氏の集驗  
 香各一錢、木鼈子五箇を末にし、熟艾と共に揉み軟げ、一塊にして鈔紙で包み、  
 風時漏下血一切の風毒は、草鳥頭、川鳥頭、兩尖各三錢、硫黃、勝香、丁香、  
 にし、三十つ丸つつの溫酒で服す。（簡易方）【癰瘻頭風】骨節の疼痛、下元の虛冷、諸  
 したとまを去り、豆を取つて焙じ乾して末にし、よと醃してて梧子大の丸にし  
 藥各一兩を末にし、生鳥豆一升を、頭と翅を去つた斑斑と共に煮ててて豆が熟が  
 丸——草鳥頭を皮を去つてて四兩、川鳥頭を炮いて皮を去つてて二兩、乳香、沒  
 これをを霹靂前と名ける。【中風癰瘻】手足が顛掉し、言語が蹇澀するには、（金匱要略）在經

に納れる。これを提益散と名ける。王海峽陰證略例(二)【通不便】即ち前記の方である。

【方】陰毒傷寒【生草烏頭を末にし、葱頭に蘸けて穀道の中

能く惡塊を破り、寒熱を逐ひ、冷のものを消し、熱のものをば潰すのである。

久し漬れてゐるものは能く黑爛を去る。この二藥はその味が辛烈であつて、

肉桂を加へて末にし、薑汁と熱酒で調へて塗るが宜し。破れぬものは内消し、

みみを發するもの、或は一切陰疽、腫毒には、いつれも草烏頭、南星等分に少量の

楊梅。更曰く、凡そ風寒濕骨内、骨の冷痛、及び損傷が年久しく痛

は能く禽獸を殺す。これに勿論氣が鋒利でなければならぬわけだ。

し、蹠を尋ね、徑に達して直ちに病に達するものである。前して射因としたもの

適に機曰く、鳥喙は、形が鳥のやうで氣が鋒利だ。經絡を通じ、關節を利用するに

戒すべきことである。

ので、腹に入ると直ちに麻痺し、遂に治術の施しやうなき状態に陥つた。大いに警

とを自負してゐたが、適々風癱を病んだとき、草烏頭、木鼈子の藥を過多に服した

命門を補する功力のあらう筈はない。吾が蕪州の知府郝某は、醫師の心得のある



分を末にして靴の底に塗り、また草鞋を水で微し濯しこれをつけて穿く。千里を  
 濕を除去、歩行を健にする。扶壽方。】遠路歩行のため脚腫、草烏、細辛、防風等  
 草烏、細辛、防風等分を末にし、靴下の中心へ塗り、また護膝の内に入れる。能く風  
 を去つて研末し、醋で調へて貼る。須臾に痛が止む。小便方。】痛みを作す膝風  
 濕癰を忌む。妊婦は服してはならぬ。端竹堂方。】腰、脚の冷痛。【烏頭三箇を皮、  
 にして醋糊で梧子大の丸にし、十九乃至三十九つを就寢時に温酒で服す。油膩、  
 事方。】風濕走痛。【黒奴頭丸——兩頭尖、五靈脂各一兩、乳香、沒藥、常歸三錢を末  
 は丸を二服にして薄荷湯に溶かして服す。微しし麻痺するが、あるを度とす。】  
 に水を滴らしして彈子大の丸にし、四十歳以下患者は六回に分服し、病の甚しきに  
 濕痺木。【黒神丸——草烏頭を皮の皮を研り、五靈脂と等分を末にし、六月六日  
 分つづつを、冷風濕氣に生じ蒸湯で服し、麻木には葱白湯で服す。】諸人忌。】風  
 煮る。その藥は石のやうに堅くなる。のだからそれを取出して晒し乾し末にし、五  
 の末を入れ、その上にな豆腐を填めて壓排して乾かし、それを鍋に入れて一夜そ  
 散——草烏頭半斤を皮を去つて末にし、一箇の袋に入れて生で豆腐を入れてその中にそ



【年久しき麻痺】或は歴節の走氣で疼痛し、不仁なるには、男女に拘はらず、神授  
入れて共に前に湯で服し、少頃して葱白の熱粥を食ひ、汗を出す。立ちに癒える。

事親方では、草烏尖、白芷をいづれも生で研末し、半錢つづつを、冷酒一盞に葱白根を

風病毒域方では、草烏頭を末にし、一二分づつを、温酒で服して汗を出す。○儒門

す。服して後、身痺し、汗が出で癒える。風に當らぬやうにする。【乾坤秘韞】破傷

生薑から取った汁で煮糊で和して梧子大の丸にし、一日二回、三十九つづつを服

をまた草と楮葉とで蓋ひ、汗が出で黄ばむを待ち、晝夜晒して春いて末にし、上

もので和して餅にし、盤の中へ草を鋪いて楮葉を載せ、た上へ餅を置き、その上

一箇、生附子一箇をいづれも末にし、葱一斤、薑一斤を共に搗つて泥のやうにした

風證【頭風、痛風、黃鵠脚、葱、薑の自然汁を好き酒に和して熱服する。】乾坤秘韞

一盃を三服に分け、葱、薑の自然汁を好き酒に和して熱服する。【乾坤秘韞】一切の

まぜて夜間は、そのまゝ露らし、かかて膏に得るまゝに晒して小さき錠に、その

地上に一小坑を掘つて、中へ火で焼いた中へその盆を入れ、毎日竹片で一回づつ攪さ

應丹——生草烏頭、生天麻を各洗つて等分を搗り爛らし、汁を絞つてて盆に傾け入れ、

石膽等分を末にし、一錢つづつを醋で皂莢を煮た汁で薄く調へて腫上に貼き入る。數  
を入れ、牙に捺り、并に鼻中に嚙ぐ。牙關は自ら開く。○濟生方では、草烏頭尖、  
を喉痺口噤【開かずして死せんとするに、草烏頭、皂莢等分を末にして麝香少量  
核ほどの大いさになり、倒さくは、治療せねば難くなる。生烏頭を搗り取つてて湯のあるうちに煮  
及び風聲の如くなるは、治療せねば難くなる。生烏頭を搗り取つてて湯のあるうちに煮  
の丸にし、十丸つづつを茶で服す。一切の熱物を忌む。○聖濟總錄【耳鳴、耳癢、流水、  
草烏を皮を去つて半兩、荖北一兩、川芎二兩をいづれも生で研末して麝香で練豆大  
の證には、草烏頭、犀角等分を末にして葱の汁で調へ、痛の左、右に隨つて太  
陽、及び額上に塗る。眼に入らぬやうにし、風を避ける。○濟生方【臭穢なる膿液  
のと末にし、一錢つづつを薄荷と薑の湯で食後に服す。○婦人の頭痛【血  
皮、尖を去つて半兩、川烏頭を生で皮、尖を去つて一兩、麝香、乳香、兒香三箇は  
に傷み、痰飲を停聚して上懸し、或は偏、或は正の頭痛するに、草烏頭を炮いて  
薄荷湯で冷服し、更に猪の左、右に隨つて鼻の嚏【指同方】風、痰、頭痛【體虛で風  
風の久患、草烏頭尖を生で一分、赤小豆三十五粒、麝香一字、半錢を

ナ  
ヲ  
加  
多  
兒  
當  
腹  
瀉  
湯  
ノ  
類  
一  
名  
瀉  
瀉  
湯  
ノ  
類  
一











つたもの【腫痛するは急に治療を要する。遅れるほど毒が深くなるものだ。生烏頭  
 上に傅け、紙條を貼つて氣孔を通じて置くが妙である】(醫林正宗)【馬汗の瘡に瘡入  
 半兩、木鼈子二箇を米醋で細か磨り、搗爛した葱頭、蛇蛻少量を入れ、調勻し  
 猪油で和して搽る。普濟方【癰疽の初めに破れずして寒熱を作すには、草烏頭  
 一兩、諸瘡【未だ破れぬものには、草烏頭を末にし、輕少粉を少量を入れて服す。  
 竹刀で切つて搗き、醋糊で綠豆大の丸にし、三十丸つづつを空心に鹽湯で服す。  
 一兩を溶かした水に一夜浸し、赤く炒つて末にし、猪腰子一頭を去つて煨熟  
 その毒を解す。癰疽【癰疽の瘡に瘡入は、草烏頭を去つて煨熟  
 溫酒で服す。草烏の毒性は制し難いものだから、五七日間は黑豆で煮た粥を食つて  
 り、熱に乗じて枵さ歸つて末に残るだけ醋糊で搗き、大の丸にし、三十丸つづつを空心に  
 心の内部が米粒一點ほど白く残るだけ醋糊で搗き、白部が多いといひ、再び炒て  
 餘分の油を傾け出し、再び黒色になつて烟の出るまで炒り、その筒を裂いていいて乾  
 し、清油四兩、鹽四兩と共に銚に入れて深黄色に炒り、鹽と藥とだけ銚内に留めて乾  
 し、痺痛するには、草烏頭一斤を刮刮洗つて皮を去り、極めめて清淨にして攤攤て乾

醋で磨つて塗るもよし。（永類方）【大風癰瘡】全身黒色となり、肌體が不定時に麻木  
 その汁を塗る。瘡に口あるには四邊に塗り、乾けば再び塗る。また單に草烏のみを  
 背、疥瘡、便毒等の證には、二鳥膏——草烏頭、川烏頭を互に井華水に磨り落し、  
 汗の出る程度に寢具を厚く被る。また頭風をも治す。（乾坤秘要）【惡毒瘡】及び發  
 酒で送下する。或は惡心して三四口嘔するときは、冷水を一口飲めば止む。かくて  
 し、豌豆の大丸にして雄黃を衣にかき、一丸つづつを、先づ葱一本を細かに嚙んで熱  
 出す。（普濟方）【背瘡發背】草烏頭を皮を去つて末にし、鬚を葱の末と搗き、和  
 根が出る、又、ある方では、兩頭尖一兩、巴豆四箇を搗いて貼る。瘡は自から抜  
 す。（唐鑑經方）【生烏頭】生烏頭を切片して醋で熬り、膏にして攤いて貼る。翌日  
 一兩を末にして無根水で調へ、口だけを残して擦り、紙で蓋ふ。乾けば水で潤ほ  
 藥を點ける。（外科集方）【初期】草烏頭七箇、川烏頭三箇、杏仁九箇、飛羅（飛羅）  
 ぬもの草烏を末にし、津液で調へて肛門内痔に點けられ反つて出る。そこで枯出  
 炒つて末にし、酒糊で緑豆の丸にし、二十九つづつを鹽湯で服す。（普濟）【内痔の共  
 尿遺失して判らぬには、草烏頭一兩を七日間童尿に浸して皮を去り、鹽と共に



【附方】新二十。【中風の風】白附子、白附子散——白附子、白

た『とある。

休は頰に負傷して癰があつたので、王莽が、玉屑、白附子香を賜はつて癰を消せさせ孔からこの名稱を得たのであるが、附子の類ではない。按ずるに、楚國先賢傳に『孔

發明

て用ゐる【李琦】肝の風虚を補す【好古】風痰【震亨】

足弱、力無きもの。疥癬、風瘡、陰下の濕癢。頭部、面部の痕には、面脂に入れ

主治

陽であつて、藥勢を導いて上行する。

大。曰、毒なし。珂、小毒あり。藥に入るには炮いて用ゐる。曰、果、純

氣味

辛く甘く、大温にして小毒あり【保】

は文がある。筋があり、

時。珍。曰、根は草烏頭の小さいものにそのままだ、長さ一寸ばかり、乾いたもの

及び遼東に生ずる。苗は附子とよく似たものだ』とある。

学所報、附方、研

文獻、附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

附方、研

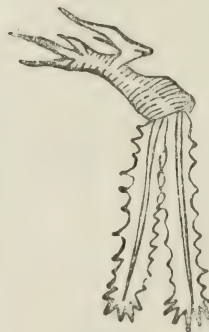


新羅國、東海、徐表の南州異物志に

玊曰く、

も  
の  
だ。

〔子 附 白〕



葉が周匝して穂の間に生える。根は形が天雞に似た。砂磧、下濕地に生え、獨莖で鼠尾草に似て、細

葉曰く、もととは高麗に産したが、今は涼州以西に盛する。蜀郡には一向にな

の物は久しく絶えた。一向に眞物はな

別錄に曰く、白附子は蜀に生ずる。三月に採收する。弘景曰く、

後發の明項を見よ。

釋名  
集解

科 學 和 名  
Aconitum koreanum, R. Raym. ?  
名 名 和 名  
白 附 子 (別錄下品)

(千金)

けて頻りに易へられ血が出て癒える。梅師方(沙虱の中【毒】射罔を傳けるが佳し。末を瘡口に傳ける。良久して黄水が出て癒える。)(藥苑方)(蛇、蟻の瘡傷【射罔を傳

充テラルガ正當トモ思  
テモナル此品ヲ  
ニ水ノ麗ニ産スル  
モノアル。ル  
「集解」。  
Raym. A. koreanum, R.  
A. koreanum, R.  
入ハユクニ知。  
ra, L. 知。  
。或ハ A. Antho-  
ルニ事  
Nepallus, L. 事  
ハ或ハ或ハ A.  
ハ白學士手ノ考ノ説  
ル。理國ノ今ノ野ノ  
乾生ガ其時苗ノ  
テ生ガ其度一年間  
其長ク保肥前  
子牧野云ノ、白

ちに癒えたる。楊氏家藏方

が風虚を病んで極端な精神逆に陥つたときも、吳内翰がこの薬を三、四服與へて直  
 州の李博士が、これで吳内翰の女孫の病を治療して甚だ效があつた。康州の陳侍郎  
 水で煎じた湯で服す。また大人の風虚を治し、吐を止め、痰を化す。宣和年間、眞  
 星生兩、黑附子一錢を、いづれも炮いて皮を去つて末にし、錢二つを生薑五片を  
 末にし、生錢二つを米を飲するが良し。(保幼大を方)【白附子】驚風に、白附子生兩、天南  
 す。(楊氏家藏便方)【小兒の吐逆】定まらず、虚風で喘息するは、白附子、藿香等分を  
 附子一箇を末にして唾液で調へて舌上に塗り、涎を吐出する。(聖方)【偏墜】氣痛  
 白附子末、枳殼等分を研末して舌上に塗り、涎を吐出する。(聖方)【喉痺】喉腫痛  
 半錢を入れ、濕紙で包んで煨熟し、五更に食つて温酒で飲下す。(聖方)【耳聾】耳  
 水の出るもの【白附子】炮き、羌活一兩と末にし、猪と羊の腎各一箇、それぞれ末  
 末を白蜜で和し、紙に塗つて貼る。久くして自から落ちる。(衛生易簡方)



藏。昇。曰く、天南星は安東の山谷に生ずる。葉は荷のやうで、獨莖だ根を川をぬる。

保。昇。曰く、莖の端に八九枚の葉があり、花は莖の間から出る。

由跋のことだ。

[南天・掌虎]



い。陶氏の説の、半夏に似たといふは夏の二三倍ほどあり、根で、大いさは半といふは、一見虎の掌のやうだ。由跋が、卵ほど、すべ、扁柿に似て四畔に圓大なるものは拳ほど、小なるものは生、杖やが、莖を、扶けてゐる。根は、莖が一本一莖の端に一枚の葉が、

赤。曰く、これは由跋の宿根のことだ。その昔は、葉が一本一莖の端に一枚の葉が、方薬には甚だ用ゐない。四邊に子虎があつて虎の掌のやうなものなうのだ。今では多くは三四片に破つたものを用ゐ、採つて陰乾する。弘景曰く、近道にもある。形は半夏に似てゐるが大きいだけで、

胡。索ノ見。註ハ山草類。延。

大觀ニ作ル。

參照ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。

石。州ノ見。註ハ山草類。





るに生<sup>う</sup>きものを用ゐるこがある。その場合、温湯で洗滌してから白藥湯、或時<sup>うやひ</sup>珍<sup>しん</sup>曰く、凡そ天南星を用ゐるには、一兩以上ものに限るがよし。風痰を治すで、炮<sup>う</sup>いて裂いて用ゐる。

間湯に浸して一日三四湯を換へ、涎を洗ひ去つて暴乾して用ゐる。或は、再び火を修治<sup>しゆぢ</sup>。頌曰く、九月に虎掌の根を採り、皮、臍を去つて器中に入れ、五七日

甚しい誤だ。

ものだ。今は俗に、大なるものが鬼曰く、小なるものが南星だといつてゐるが、時珍<sup>しん</sup>曰く、大なるものを虎掌、小なるものを山賊といふ。一種類の

寒熱積氣<sup>かんねつせきき</sup>を治す。やはり虎掌と同名のだから此に附記する。

つて虎掌のやうだ。三四葉が一本に生える。冬も青く、花、實は結ばない。心疼、る一<sup>いち</sup>種<sup>しゆ</sup>の草<sup>そう</sup>は、葉は大いさ掌ほどあつて、表面が青、背が紫で、四<sup>よ</sup>叶<sup>へつ</sup>に牙<sup>が</sup>がある。江州<sup>かう</sup>に産すつて、大なるものは四邊に牙<sup>が</sup>があるが、採收の際に倒れ去る。本<sup>ほん</sup>經<sup>けい</sup>の虎掌であつて、肌が細かく、炮<sup>う</sup>けば裂け易い。その點で辨し得る。南星、即ち本<sup>ほん</sup>經<sup>けい</sup>の虎掌であつて、か、莖<sup>き</sup>弱<sup>じやく</sup>は、莖<sup>き</sup>に斑<sup>はん</sup>があつて花が紫だ。南星は、根が小さく柔か、賦<sup>ふ</sup>が

大<sup>だい</sup>ノ<sup>の</sup>觀<sup>かん</sup>ニ<sup>に</sup>芽<sup>め</sup>ニ<sup>に</sup>作<sup>さく</sup>ル。  
星<sup>せい</sup>ハ<sup>ハ</sup>藥<sup>やく</sup>字<sup>じ</sup>アリ。  
ノ<sup>の</sup>註<sup>ちゆ</sup>ニ<sup>に</sup>藥<sup>やく</sup>字<sup>じ</sup>ハ<sup>ハ</sup>草<sup>そう</sup>ニ<sup>に</sup>下<sup>か</sup>南<sup>なん</sup>星<sup>せい</sup>見<sup>けん</sup>。石<sup>せき</sup>部<sup>ぶ</sup>雲<sup>うん</sup>母<sup>ぼ</sup>母<sup>ぼ</sup>。

水ノ註ナ州見。部井泉

今ノ河北ノ黃河以北  
ノ河北ノ黃河以北

南星と呼んでゐる。

又曰く、天南星は處處の平澤にある。三月苗が生え、荷梗に似たもので、莖は高  
く、莖葉とよく似たものだ。世人は多く誤り採つて、一向にその異同を知らずに  
つて石櫚子に似た紅色の子を結ぶ。二月、八月根を採る。その根は芋に似て圓く扁  
一尺ほど、葉は莖葉のやうで兩枝抱く。五月蛇頭に似た花を開き、七月穗にな  
る。

が残りてから根を採取するものだ。現に冀州地方では菜畑の中にこれを種多、天  
下が尖つてゐて、中に微青色の花があり、麻子大ほどの實を結ぶ。實は熟すれ  
ば白色になり、白く落ちて地上に散布し、その子一粒から一莖を生ずる。九月苗  
が中から匙のやうな一枚の葉が生えて、莖を包んで房になり、旁に一口を開き、  
一、莖に七八本の莖が生え、時に莖を出して穗になり、鼠尾のやうで直上に伸  
び、高さ一尺餘の獨莖で、上に爪のやうな尖つて圓い五六出の葉があつて散り  
生、卵ほどにあつて、たゞ年久しものは根が圓く、一寸ほどのにもなり、大なるものは雞  
頭曰く、虎掌は、今は河北の州郡にある。初生の根は豆ほどだが漸次長し、



味は。時珍曰く、虎掌、天南星は、手、足、太陰、脾、肺の藥である。

發明

治す時珍

【功】力は生夏に同じ【好】舌【驚】癇、口眼喎斜、喉痺、舌結、核、解頤を

【素】傳ける【蛇】蟲の咬傷、疥癬、惡瘡【大】腸【上】焦、痰、及び血運を去る元

【攻】め、癰腫を消し、血を散らし、胎を墮す【實】【金】瘡、折傷、胸を利し、痰を掃

【天】南星は、中風、痺に主效あり、痰を除去し、氣を下し、胸を利し、痰を利し、痰を

【濕】、除く【別】錄【疔】瘡、癰、傷寒時疫、陰を強くする【經】陰下

【主】治【心】痛、寒熱、結氣、積聚、伏梁、傷筋、痿、拘攣【水】道、利す【本】經

を加へて炮けば毒とならぬ。生は能く難黄、丹砂、煅硝を伏す。

生薑を畏る。時珍曰く、防風と配合すれば麻せぬ。牛膽と配合すれば燥せぬ。火力

は、黄蘗で煮く。章く、牙。蜀漆が使となる。芥草を惡む。大明曰く、附子、乾薑、

降すべく、乃ち肺の經にある。本藥である。震亨曰く、この藥の力を下せしめんとするに

く、辛烈にしして平なり。呆曰く、苦く、辛く、毒あり。陰中の陽であつて、升す可く、

【三】解頤、腫。

【二】大觀ニ破ニ作ル

食ヲ可シト云フ。

原ノ料ニシテ、其ノ製有

スル故ニ、粉然レドモ

植物ヲ然レドモ、毒

毒ヲ起ス。云々及實炎

咽ヲ起ス。消化器ニ有

辛ク、喉烈ニシテ、經

未ニ根ヲ入ルニ至





7. (四) 兩眉ノ中間チ云

夏等分を末にし、薑汁、竹瀝で一錢を灌ぎ下し、そこでて(二)印堂に灸する。(摘玄方) 半、南星、右に貼り、右の喘斜に左に貼る。(左方) 【角弓の如く反張するもの】南星、半、右に貼り、左の喘斜に調へ、自然汁で薑の末して研末を生で研末を天南星を猪心血で梧子大の丸にし、一丸うつつ防風を香風かい一兩、硃砂を末にし、猪心血で梧子大の丸にし、一丸うつつ防風を香風かいにして二、三字を雄猪膽汁で調へて服す。(金匱心經) 【治癒、利痰】天南星を煨き、小兒の癰瘡に瘡に瘡に瘡にして言不能なるには、天南星を濕の湯にもよし。(婦生寶鑑) 末で梧子大の丸にし、一丸うつつ人參湯で服す。右青蒲、麥門冬の湯にもよし。(婦生寶鑑) 末を和勻し、三歲の小兒は半錢を生薑、防風の煎湯で調へて服す。また久嗽、薑汁糊も出して剉み、再び炒して末にし、その末五錢、煨けた天麻の研末(一)錢、麝香一字、好酒半盞を沃い、ただ中に入れて、その上に炭を二條に架け渡し、發裂する候まで取り、錢の麝を去つた天南星、一兩を、黄土に搗り、三寸の坑を炭火五斤で赤く煨いて散——小兒の吐瀉、或は、冷藥の誤服から脾虛して發した風痰慢驚を治す。重さ九王

毎日正午に一服、半錢を剉き、湯で調へて空心に服す。(經方) 【吐瀉慢驚】天王





五升を入れて、滲み乾かした中に入れて、入れ、盆で覆ふ。灰で氣の走らぬやうに寒  
 を見るを治す。天南星一斤を、先づ一尺の土坑を掘つて炭火三十斤で赤く焼き、酒  
 を失ひ、或は痰が心竅に迷つたために恍惚として健忘となり、妄言し、怪しきもの  
 易簡方（方）】心竅（心）の痰迷——心膽驚に襲はれたために精神がその含るころ  
 香飲——南星四錢、木香一錢、水二盞、生薑四十片を六分に煎して溫服する。（王）  
 葉湯に溶かして服す。（金）】壯年男子の風痰【及び中風、氣の初起には、星  
 一錢半、龍腦、麝香一字を入れて研末し、煉蜜で炙子（炙）の丸にし、一丸づつを竹  
 毒の壅滯に心を涼し驚を應ず。抱龍丸——牛膽、南星二兩に金錢薄荷十片、丹砂  
 から熨斗で熨す。或は香附、華菱末を頻りに鼻中に吹く。（直）】小兒の風痰【  
 體涕は自から収まる。大蘇、華菱末で餅にし、紗を隔てて貼る。額前に貼る。その上  
 甘草五分と共に煎じ、た湯で服す。三四服すれば、硬物が自から出て、腦氣が流轉し、  
 には、大きく白く南星を切片し、沸湯に二回泡けて乾燥し、二錢づつを、棗七七箇、  
 水（水）を煎沸した中に入れて煮て五七沸し、漉出して放置し、溫なるやうに薑湯で吞



夏各一兩、天麻半兩、白麴三兩を末にし、水で梧子大の丸にし、三十丸つづきを生を、先  
 頭運【目眩し、吐逆し、煩懣し、飲食の落ち付かぬには、玉壺丸（玉壺丸）生南星、生半  
 鹽醋で煮た糊で前記の法に如く丸にして服す。（いづれも経絡發濟方世方に記載がある）】風痰  
 食後に薑湯で二十丸つづきを服す。又、上清丸——天南星、茴香等分を生で研末し、  
 頭痛【忍び難きには、天南星一兩、荆芥葉一兩を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、  
 つて研末し、一字づつ酒で調へて服す。重體のものには生錢を服す。（手錢方）】風痰待  
 つて赤く焼いた中に入れ、醋（は）一盞を沃ぎ、氣の透（は）らぬやうに蓋なく冷えるを掘  
 效する。（聖濟方）婦人【頭風】目を攻めて痛むには、天南星一箇を用ゐ、地に坑を掘  
 るもよし。（三因方）破傷風【瘡】生南星末を水で調へて瘡の四圍に塗る。水がでて奏  
 内傷、墜落、壓傷等には、酒と童尿とで二錢を灌（か）げば癒（な）る。また煎じて服す  
 死んたものも心さへなほ温ならば、熱した童尿で二錢を調へて灌（か）ぐ。爭鬭、毆打の  
 でに傷へて瘡に敷く。水を出して妙である。そで一錢を温酒で調へて服す。已水  
 濕に傷んで發病し、強直して癰の如きものを治す。天南星、防風等分を末にし、水  
 破傷中風【胡氏奪命散——又、玉真散と名ける。打撲、金刃傷、及び破傷風、

す。危氏得效方（方）。小兒の解顛【顛が開いて合はず、鼻が塞つて通ぜぬには、天南星をものには、天南星を炮いて末にし、水で調へて顛上に貼り、手を炙つてそれを熨（ぬぐ）る。自然銅を磨りあろした酒で調へて服す（勝金方）。】初生兒の顛（ひん）に貼る【頭熱の塞を星一兩を豆ほどの大いさに剉（くだ）み、爐灰汁に一夜浸して洗淨して末にし、錢つつつ酒糊で梧子大の丸にし、二十丸つづ酒を以て服す（普濟方）。】吐血の止まぬも【天南星一兩を灰を黃色に炒りて末にし、】諸藥の效なきには、天南星、石灰を黃色に炒りて末にし、膠風瀉（方）は再服する。又、ある方では、醋で南星末を調へて足の心に貼る。不省なるに、每錢を、東京集（方）を、鍾を八分に煎した湯で溫服する。南星末を末にし、不省なるに、人事は、これを服すれば陽を回復する。これを回陽散と名ける。し、丞相が嘗て用ゐた效驗があつた（楊氏家藏丸）。吐、泄の止まぬもの【四肢が厥逆砂一兩を二兩を入れ、薑汁糊で梧子大の丸にし、五十九つづを薑湯で服す。】蔡丞相、して一夜置き、取り出し酒を和した水で洗淨し、切片して焙じ乾し、末にして硃し、天南星一斤を、七坑を赤く燒くといひ酒一斗を沃（く）き、伏（た）せ、盆で覆ひ泥で固濟（こけい）す。天南星丸の形——

[illegible]

○ 小田原

莖の端に八九枚の葉がある。根は圓く扁くした

你。昇。日。々。泰。泰。一。本。の。蒸。が。抽。出。で、

३७५२

二尺ほどで弱く弱かに似てゐる。根は雞卵ほ

藏○器○曰く、由跋は林下に生ずる。草は喜

四、咖啡に於ては、その生ずる所も、その樹根が、即ち鹿島だ。

赤○曰く、由ゆ阪はつといふは虎掌の新根のことだ。半夏よりも二倍大きく、



由 跋 (別錄下品) 前條虎堂(まひ)るて(なん)んし(う)の(ノ)蹴球選手ヲル●

甲 趺

[illegible]



云。俗。二。八。力。廿。  
(一六)頰部ノ寒壤ヲ

二四



の時珍曰、陳之小品方にも、やはり東海鳶尾を由跋としてあるのだから、その

智が、これに半夏に對する正確な智識を缺くのみならず、鳶尾と由跋とも正確な

あるといふ。それをめいために鳶尾を由跋といひ、由跋をば半夏といふわけになつたて

赤曰く、陶氏のいふものは(1)鳶尾根、即ち(2)頭のことだ。又、虎掌は半夏に似て

る。形は(3)烏髮のやうで地に布き、花は紫色だ。根は附子に似てゐる。苦酒に醃

正誤

及ばないやうなものである。

ものならば氣が十分だから用ゐて佳し。あたかも附子に附いて生ずる側子は附子に

時珍曰く、これは天南星の小なるものである。その氣がまだ十分でないから服食は

(1) 鳶尾根

(2) 頭

(3) 烏髮見。主部白雲



る。味は苦し、諸種中毒に主效がある。毒を食つたときは酒に研つて服用。秋、冬に花があり、弱頭やうな赤色の子が直く出る。冬に根を採つて用ゐず、冬を凌いで過す、

附 錄

を多く食つて皆癒えた』とある。

ので遂に多量に食つたところ、療病はそれで愈えた。又、數人の肥癰患者もこれに忌みずくに食ひ、ある時隣家で毒弱を作るを見えてそれを賣つて食つた。美味だつた。肥癰患者が、あらゆるもの

發 明

味で調理して食へば消渴に主效がある【問費】

【主 治】癰腫、風腫には腫上に摩し傳ける。癰を砕いて灰汁で煮て餅にし、五

體に益せぬ。冷氣の人は少し食ふがよし。生では喉を刺戟して性をは冷である。甚だ人

根 氣 味

なものだ『とある。斑杖といふその物は、天南星の類にして斑のあるものだ。

葛、栗などの利用すべきものがある。この物もやはり人民の食物として有益、

(一) 癰ノ病ヲ結核。  
(二) 癰ノ病ヲ結核。  
(三) 癰ノ病ヲ結核。  
(四) 癰ノ病ヲ結核。  
(五) 癰ノ病ヲ結核。  
(六) 癰ノ病ヲ結核。  
(七) 癰ノ病ヲ結核。  
(八) 癰ノ病ヲ結核。  
(九) 癰ノ病ヲ結核。  
(十) 癰ノ病ヲ結核。

rend. 1897 (124) 1368.

et Heim: Compt.

Clanliaguet, Heber

Tokyo, 1894(2)115,

Agr. Imp Univ.

江暢太郎 Coll.

シ、又布帛用原料

食ノ用原料

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々

有アルモノ云々



連（四） 啓（四） 註ハ中見  
 京 州ハ施州見  
 類 郡 類 郡

似てゐる『いとひ、楊慎が丹鉛錄に『蒟醬、即ちこのものだ』といつたのはいい、汁を味で調理して食ふ、と、水母の絲のやうである。馬忘が『その苗は半夏が、汁を用なれば固まらぬもの。その固つたものを細に切り、沸湯でゆが、灰と凝り固つたものとなる。それを切片して苦酒、五味に淹れ、食用になる。灰或は片に切り、酪汁（酪汁）で煮て十餘日、幾回か水を換へ、濁り洗ひ、更に五六回煮、理は白く、味はやり人を麻す。秋後に根を採り、外皮をよく淨擦して、或は搗き、子を生ずるいふが、蓋しうではない。二年を経た根は碗やもり苗が自生する。滴露（滴露）からよく似てゐるが、ただ斑が多いのだ。舊根から移植すると、長さ二一尺になる。南星の苗と春に生えた苗を五月になつてそれに移植すると、長さ二一尺になる。南星の苗、中（中）でもこれと栽培する。栽培の下に適するもので、坑を掘つてて糞肥を積み、時珍（時珍）曰く、蒟醬は蜀中に産し、施州（施州）にもあつて、やばり鬼頭と呼んでゐる。（蜀）聞ふ。

蒟は莖に斑があり、花が紫だが、南星は莖に斑がなく、花が黄色だ。それからその點が異なぬ。商人の所持するものは往往にしてこの物だ。但し南星は肌が細膩なもので、蒟

○ 藥用には人なほ。

敬、曰、  
白く、  
傍に、  
子に、  
は、  
眞に、  
半に、  
似て、  
ある、  
た、  
だ、  
は、  
咬め、  
は、  
微、  
酸、  
味、  
が、  
加、  
つ、  
て、

か、苗が同じになくはいとある。

平澤に生じた甚だ小さいものをも美眼夏と名ける。山賊はたよく夏に似てゐる。平澤に生じた甚だ小さいものをも美眼夏と名ける。山賊はたよく夏に似てゐる。

八月に根を採り、二日間灰に煮め、湯で洗つ

大さく下が小さく、皮が黄で肉が白い。五月、

海藥の葉に似てゐる根は下州につて上りぬ。

葉に似てゐる。しほしほ江に生ずるもの

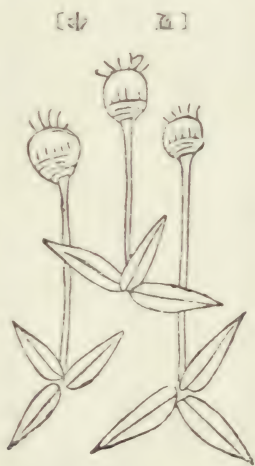
でその端に三枚の葉が生え、淺緑色で隨う竹

の作として、二月一日、東京、東京が、一木

るので山坂を半夏と誤つたのだ。

近來は兩者を互用してゐるが、その効果の狀

江南には大いさ徑一寸ほどのものがあつて、



頤。曰く、所在にあるか、齊州の

態は大いに異ふ。これらは、山が似て

南方では特にそれと重なるものとして

て勝れぬものとしてある。

三光字アリ。

○

(八)大觀二 每二 作

諸石龍涎石証子兄

力ヲ  
ル  
○

(六)大觀二異ノ次ニ









濕痰を治するには、薑汁、白礬湯を和し、風痰を治するには、薑汁、及び皂莢の煮  
 飛震の醫通に『痰の範圍の病は半夏を主とし、麴にしたりたを半夏麴佳し。  
 で饅に入れ、黄衣の生ずるを待つて日光で乾しして用ゐる。これを半夏麴といふ。白  
 饅これを生夏餅といふ。或は、研末し、薑汁（うやうやん）で和して餅にし、楮葉で包ん  
 る。これを生夏粉といふ。或は、研末し、薑汁で和して餅にし、日光乾して用ゐ  
 る。研末し、薑汁を入れた湯に三日間浸し、澄ました水を漉し去り、晒し乾して用ゐ  
 湯を換（か）へ、七日間浸して乾燥し、切片して薑汁を拌ぜ、焙じて藥に入れる。或は、日  
 時。曰く、半夏を完全に修治するには、ただ洗つて皮垢を去り、湯に泡けて逐日

怒（おど）りしむるものである。

た中に投じ、三回洗つて用ゐる。もし洗ひ盡さず用ゐれば、氣逆して肝氣を  
 毀（こ）ふ。曰く、修治方法は、半夏四兩を、白芥子（はくがいし）末二兩、醋（しやく）二兩を攪（か）廻して瀉（しやく）らせ

る。とは必ず生薑を用ゐる。それは毒を制するためである。

を盡くす。さうせねば毒があつて咽喉を刺激するものだ。方の中に半夏があ  
 修治。弘景曰く、凡そこれを用ゐるには、十回ばか湯洗つて滑かなもの

修治

ば言はないが、蓋し益脾の效はこの物の能く水を處分する力に因るのであつて、  
 宗。陽明に作用するのだ。

少陽、陽明に作用するのだ。

が、やはり柴胡、黄芩の往来寒熱に對する主效を助けるのであつて、これまた足の

とて、ろから、現に柴胡中これを用ゐるが、それは嘔を止める爲めではある

作用するからである。痰を除くのは足の太陰に作用するからである。柴胡が使とな

るである。俗に半夏を肺の藥としてあるは誤りだ。嘔を止めるのは足の陽明に

有形にしては燥の作用をなす。結果に於いては、濕を流し、燥を潤すこととなし、

形のものであり痰は有形のものであつて、半夏は無形に對しては潤の作用をなし、

が、痰の本を泄することは不能である。本を泄すとは腎を泄することだ。痰は無

效といふ。痰そのものは痰となり、肺に入つては涕となる。痰あるを嗽といひ、痰なきを

り、脾に入つては痰となり、肺に入つては涕となる。泣となり、心に入つては汗とな

腎自らの臟に入つては睡となり、肝に入つては五濕となす『ことあつて、その液は、

好古。曰く、經に『腎は五液を主り、化して五濕となす』ことあつて、その液は、

(二) 汗ノ液ノ意。  
 (三) 経ノ液ノ意。  
 (四) 汗ノ液ノ意。  
 (五) 汗ノ液ノ意。





る。又、和劑局方には『半夏丸を用ゐて老人の虚秘を治す』とある。いづれもその滑、  
聊攝成氏は『半夏は辛にして散である。水氣を行つて腎の燥を潤ほす』といつてゐ、  
ひ、丹溪氏は『陳湯は、能く大便を潤ほし、また小便を長からしめる』といひ、  
古張氏は『半夏、南星は、痰そのものを治するから嗽が自から癒えるのだ』とい  
所謂『辛は氣を走して能く液を化し、辛は以てこれを潤ほす』とはこの事實だ。潔  
やはりよく潤ほす。故に濕を行つて大便を通じ、利して小便を泄するのである。  
や滑にして味辛く、性は温である。涎は滑にして能く潤ほす。幸、温は能く散じて  
入るの器といふのだ。半夏は能く痰、及び腹に主效があるもので、その體たる  
時珍曰く、脾に濕が留らねば痰は生じない。故に脾は痰を主の源、肺は痰を貯

やうなものである。

治すべきものがない。若し貝母を以て代用するならば、それは首を伸べて死を待つ  
寒澹し、言語不能となり、生死旦夕に迫る。かゝる場合には、半夏、南星以外では  
なり、久しきに互れば痰が上攻して昏慣せしめ、口鼻し、偏廢し、僵仆して痰  
炙燂はいづれも能く脾、胃に濕熱を生ずる。それで涎が化して痰と

ナカサコ  
（二）五指  
ス。痰（四）  
炙燂ハ美  
食ヲ足コ  
ト。利カ  
（二）痰澹  
ハ半身不  
隨。



貝母（三）を禁ず。半夏は禁ず。痰は脾の液であつて、美味血（三）の見えるもの、諸鬱の咽痛、喉痺、肺癰、肺痿、疰、乳難（三）は、すべからず。痰は、或は痰中であつて、代用し得べし。理由は、い。咳、嘔、吐、痰、虚勞の吐血、胃の經の藥で用ゐるが、貝母は大陰、肺の經の藥、半夏は大陰、脾の經、陽明、胃の經の藥で機。曰く、俗間では、半夏は性燥にして毒あるところから、多くは貝母をこれが代

血を燥して病勢を増加する。心得て置くべし。とだ。

なれば、まことに適當だが、痰、失血の諸痰の場合にこれを用ゐては、反つて能く中には半夏がある。半夏はその性が燥烈なものであれば皆用ゐるが、それも二陳湯の批判に墨守して、凡そ痰あるものであれば皆用ゐるが、それも二陳湯の無

れで已んだ。

大棗各三十箇、水一升を鑿瓶（三）へ入、慢火で焼いて、熟水にし、時に呷（三）せるとそきは瀉す』とある。ある男子は夜間數へ行つたが、人が、生薑（三）一兩、半夏、脾は濕を惡み、瀉すれば濡困（三）し、因れば水の處分が不能となる。『水勝つと



ある度をとする。病の新たに發つたものは、一孟飲盡せば安眠し、汗が出て病が已  
升、生夏五合を入萬回汲か通れば立ち安らかに眠れる。『とある。その方は、千里  
流の水八升を一萬回汲か通れば立ち安らかに眠れる。』とある。その方は、千里  
せ。それで陰、陽が通れば立ち安らかに眠れる。『とある。その方は、千里  
して陰氣が虛する。故に目を瞑り得ぬのである。これが治法は、生夏湯に一劑を得ず  
燥なるものへ岐伯は『衛氣が陽にに行れば陽が滿ち、陰に入るを得ず性  
へやうか。甲乙經にはこれを用ゐて不眠症を治す』とある。これをしも果として性  
藥を用ゐては、二重にその津液を用ゐて不眠症を治す』とある。これは醫師の罪だ。藥の答とい  
とする。ただ陰虛、勞損は濕熱の邪でなければないのである。それで、それに效を利しし濕を行  
はない。二物は多能く血を散ずるものだから、破傷、打撲はいづれもこれを主藥  
い。古方は、咽、喉痺、吐血、下血を治するのだ。二物の性が燥なるため禁劑では  
誤である。濕が去れば咽痛、喉痺、吐血、下血を治するのだ。二物の性が燥なるため禁劑では  
潤の作用を中心としたものだ。世間一般に南星、半夏を性の燥なるものと心得るは已



餅で梧子大の丸にし、三十九つを薑湯で服用す。已に吐いたものにハ檳榔（ひんがう）を加へる。  
 とし、眩運して倒れんとするにハ、生夏一兩、雄黃三錢を末にし、薑汁で浸した蒸  
 梧子大の丸にし、五十つを薑湯で服用す。（華氏方）【風痰喘逆】元（えん）として吐かん  
 汁で和し餅にして焙乾し、神麴（しんぎよく）二兩、枳實（しきじつ）末四兩、白朮（びやく）末二兩を人れ、薑汁糊で  
 【風痰、瀼、痰、青壺丸】生夏一斤、天南星二兩を各湯に泡けし乾して末にし、薑  
 服す。極めて效がある。また風痰咳嗽、二便不通、風痰頭眩をも治す。（張氏治法要方）  
 し、水煮て浮き起つた時漉し、搗いて梧子大の丸にし、五十つを薑湯で  
 石を煨き、各一兩、天麻半兩、雄黃（ゆうわう）二錢、小麥麴三兩を末にし、水で和して餅に  
 し、目眩し、顔色青黄で脈の弦（せん）するにハ、水煮金花丸（しゅうけいけ）生夏、生天南星、寒水  
 兩を用ゐ、生兩つを薑湯で服用す。（奇效方）【風痰の頭運嘔逆】柳局（りゅうきよく）方【瘰癧中風】瘰癧中風湯——生夏を湯に泡けて八兩、甘草を炙いて二兩、防風四  
 兩を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、三十九つを薑湯で服用す。  
 頭、目を利用す。長砂化痰丸——生夏三兩、天南星二兩、長砂（ちやうさ）、枯礬各半  
 茶、或は薄荷湯で嚙んで吞下す。（御藥院方）【搜風、化痰、定志、安神を安んじし、





(三三) 停痰飲留飲。

三兩を用ゐ、四錢つづつを、薑七片、水鍾半を七分に煎して服す。甚だ捷徑であ  
 落付かぬもの、或は痰水を吐くには、茯苓半夏湯（茯苓半夏湯）半夏を湯に泡けて五兩、茯苓  
 薑に煎じて温服する。（和劑局方）【停痰飲留飲】胸膈滿悶し、氣短く、惡心し、飲食の  
 一 半夏を水煮熟して、陳橘皮（陳橘皮）各一兩を用ゐ、四錢つづつを生薑七片、水薑を一  
 九つづつを就寢時に合んで嘔む。（活法機要）【飲】停痰するには、橘皮半夏湯  
 夏半兩、桂心一字、草烏頭半字を末にし、薑汁に浸した蒸餅で炙（炙）て大の丸にし、  
 百病方（百病方）【結痰の出ぬもの】の發音清からずして年久しきものも亦よし。玉粉丸——半  
 で服す。（丹溪心法）【急傷寒病】半夏四錢、粥に生薑七片、酒一盞を煎して服す。（初治居  
 急するには、半夏を油で炒て末にし、粥で綠豆大の丸にし、二十丸つづつを薑湯  
 り、他味の味を入れて二升到煮取り、三回に分服する。（仲景傷寒論）【喘痰の心痛喘  
 兩、栝樓の實して大なるもの一箇を用ゐ、水六升で先つ栝樓を三升到煮て滓を去  
 按ずれば痛み、脈の浮にして滑するには、小陷胸湯（小陷胸湯）半夏半斤、黃連一  
 し、五十丸つづつを薑湯で服す。（活法機要）【小結胸痛】痛が正しく心下に在つて、  
 瀉するには、玉粉丸——半夏、南星各一兩、官桂半兩を末にし、糊で梧子大の丸に

アルモ、結胸、胃脾虛  
 同、三

【氣痰嗽】顔色白く、呼吸迫り、憂鬱にして悪寒、嘔吐、下痢、腹脹、  
 赤痢、兩半生を末にし、薄糊で梧子大の丸にし、五十七九つを薑湯で服す。(活法機要)  
 好み、驚に食物を兼ね、脈の緩なるには、白朮丸——半夏、各一兩、白  
 朮に、薑湯で三九つを服す。(摘玄方)【濕痰】顔色黄に、身體重く、横臥を  
 して牛膽汁で和し、膽の中に入れて風を當る處に懸け、乾くを待つて蒸餅で綠大豆の  
 湯で服す。(龍古活法機要)【小兒の痰熱】驚悸するには、半夏、南星等分を末に薑  
 朮一兩半を末にし、薑汁で浸した蒸餅で梧子大の丸にし、五十七九つを食後に薑  
 色赤く、口燥き、心痛し、脈の洪、數なるには、小黃丸——半夏、天南星各一兩、黃  
 湯で服す。或は栝樓くわろうを煮熟したものを丸にする。(齊生方)【熱痰嗽】煩熱し、顔  
 した半夏、栝樓くわろう各一兩を末にし、薑汁打糊で梧子大の丸にし、二三十九つを白  
 朮を淡薑湯で食後に服す。これは周憲王が親製の方である。(柳珍方)【肺熱痰嗽】制  
 するには、制した半夏一兩、片黄芩二錢を薑汁打糊こしょう汁をうかで綠大豆の丸にし、七十九つ  
 各一寸、薑二片、水一盞を七分煎じて温服する。(和劑局方)【上焦の熱痰】嗽  
(活法機要)【急風痰喘】干熱湯せんねつとう——半夏を湯で洗つて七箇、甘草を炙き、皂莢を炒つ









うにす。る。回敷に拘はらず朝から晩まで試み、三日後に皂角湯で洗ひ落す。顔は玉の心に塗る。【顔面の黒氣】牛夏を焙じて研末し、米醋で調へ、風に當らぬや漱ぎ、冷えてから吐き出す。【小兒の體陷】乃ち冷である。水で牛夏末を調へて足筒を水で煮て再び炮き、熱に乗じて即時に酒一升に浸して密封し、良久して熱して脹大して口を塞ぐには、牛夏を醋で煎じて令嗽する。○又、ある方では、牛夏二十にし、水で方寸匕を服す。嘔き出すものである。羊肉を忌む。【外癰癰】(しんじく)重舌、木舌【舌】水で鼻中に詰ぐ。涎が出て効がある。【集簡方】(しんじく)白芷等分末めて効験がある。【鼻中に詰ぐ】(しんじく)喉痺腫塞【塞】(しんじく)生半夏子を用ゐて炭火の上に掲多に煎じ、三沸して滓を去り、盃中に入れて時に嚥む。極一箇の頭に一箇の孔を開け、黄を去つて苦酒を少し満て、その中に牛夏を入れば、雞子して言語不能となり、聲の出ぬには、苦酒湯を主とする。牛夏七箇を打ち碎き、雞子に水を含む。涎が出ると吐きは去つて再び含む。【生夏】(しんじく)【痛咽】(しんじく)【毒が生はれる】牛夏末に百草霜少量を入れて紙燃に卷き込み、烟に燒いて鼻中に詰めて、効が現

條ニハニ出解。鹿附方ノ

字アリ。觀ニ黄下ニ白

ニ作。觀ニ古今錄驗

があり、猪苓は水を導いて腎氣を通してしめるものであつて、この場合は下元が虚し  
 ず、ために妄に妄行して遣するも腎氣には、この方を用ゐるがよし。蓋し半夏は利する性  
 三十九つづつを茯苓湯で送下する。腎氣が閉ぢたために一身の精氣が包容し把持され  
 し、火毒を出して猪苓を去り、煨いた牡蠣（牡蠣）二兩を入れて山藥糊で梧子大の丸にし、  
 指（方）【白濁、夢遺】半夏二兩を十回洗つて切り破り、木猪苓（木猪苓）二兩と共に炒つて黄色  
 包んで黄色に煨つて研末し、米糊で梧子大の丸にし、三十九つづつを白湯で服す。直  
 崩中、帶下（帶下）の喘急、痰嘔、中滿、宿痰（宿痰）には、半夏を扁擔（扁擔）、薑汁で和した麴で  
 の丸にし、五十九つづつを空心に溫酒で服す。（和麴局方）【失血の喘急】吐血、下血、  
 丸——半夏を炮いて炒り、生硫黃と等分を末にし、自然薑汁で煮た糊で梧子大ほど  
 五十九つづつを熱湯で服す。（和麴局方）【老人の虚秘、冷秘、及び痰（痰）冷氣には、半夏硫  
 夏を醋で煮て一（茯苓）斤、生甘草半斤、生薑汁を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、  
 入れると遂に活（張仲景方）【伏暑の引飲】脾、胃の利せぬには、消暑丸——半  
 する。ある患者は氣結して一旦死んだが、心下が暖だつたので少量を口服  
 熱の取れぬものは、半夏生薑各半斤、水七升を一升五合に煮取り、二二回に分服



















可シ病名ナリ。從原ハ始除  
トア陰トモ大觀ニ除(〇一)

[illegible]

の鬚、いづれも射干に似たもので、今俗間で用ゐるものも多くは射干である。しかし十年経てば二十箇の白があるわけだ。必ずしも九と限るわけはない。根の肉、皮、二箇に一本の莖が伸びて、その莖が枯ると一箇の白になる。假令生えてから一、二年もので、一本の莖が生えて莖の端に一枚の葉があり、また兩岐のものもある。やうなものを生ずる。葉は莖<sup>まき</sup>は麻、重樓などのや

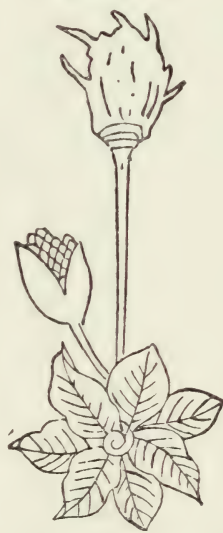
恭<sup>きやう</sup>曰く、鬼は深山巖石の陰に

くであらうか。

何ゆゑにかやうに甚しい隔りを置

か、毒公を用ゐるといふは稀だ。

〔白鬼葉七〕 一花 天 蓋一



やうで、その白の部分が馬の眼に似て柔潤である。當今方家は多く鬼を用ゐる大さくして味は苦く、叢毛がなない。力は劣る。今の馬目毒は、形は黄精の根のもの、味は甘く、上に叢毛があり、最も勝れてゐる。吳興<sup>いへい</sup>會稽<sup>かいけい</sup>に産するものは、似たものもあり、又、鉤吻<sup>こうふ</sup>に似たものがある。二種類ある。錢塘附近に産する射干<sup>しゃかん</sup>、弘<sup>くわ</sup>曰く、鬼は山谷中に生ずるもので、八月に採收して陰乾する。射干<sup>しゃかん</sup>、尤も

臺ノ註見。草類山  
(三)九真ノ草

ト稱スル。  
P. pleianthum, H.  
種ニ似タリ。今モ其見  
ノ後、何カノ科ノ屬ニ  
モカノ能ク分ル。今モ  
其ノ後、何カノ科ノ屬  
ニモカノ能ク分ル。今  
モ其ノ後、何カノ科ノ  
屬ニモカノ能ク分ル。

根を採る。

集解

が、これとは同物でない。即ち海芋のことでだ。

自ら蔽ふは、羞はにかむとある。『とある。』とある。〇別に羞天草といふがあ  
を冒して茂り、莖こゝろ修よくく葉廣く、莖に附いて花を作し、葉はその上を蔽ふ。以てそれ  
天と名けるが、予は改めて羞花と呼んだ。即ち本草の鬼曰である。費に曰く、寒  
處にある。莖に依つて花が綴りつゝ、葉がそれをお蔽ふて自から隠れてゐる。俗に羞  
瘦せたり。以て穀を辟はらく可し』とある。宋の邵の劍南方物贊には『羞花は蜀地の處  
鏡と號す。即ち本草の鬼きなり。歳ごとに一に生ず。黄精の根の如くにして堅く  
ら、鏡、盤、荷、蓮、害母などの諸名がある。蘇東坡詩集に『瑤田草は、俗に唐婆  
盤ばんやうでもあり、荷のやうでもあつて、新苗が生えれば舊が枯死するところ  
蟲を殺し、毒を解するところから犀の字の名があり、その葉が鏡のやうでもあり、  
時珍曰く、物の有毒で、白の形が馬眼のやうなところから馬目毒公と名け、  
のが良し。故にかく名けたものだ。

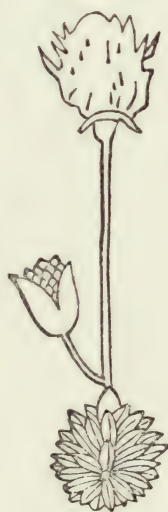
の形が似てゐるから、『とあつて、又、山荷葉、獨荷草、皇荷葉、八角鏡とも名ける。南方には處處に獨歩蓮とくぽれんといふ一般にこれは今一

藥用になる。當今の方家は、鬼燈キテウを鬼キとてゐるが、誤だ』とあり、又、鄭樵の

鬼曰であつて、一歳毎に一箇の白を  
花を開く。俗に羞花といふ。即ち

黄山谷集卷之二十一  
唐渡鏡は葉底

〔白鬼菜重〕



ものも南星だといひ、大きいものを鬼がつかうと稱してゐるが、非常な悪影だ。商人は、小ぢり

時。曰く、鬼根の形状は南星がつかうとなつてゐるが、非常な悪影だ。商人は、小ぢり

商人の手にはなかなかないのだ。

やうだから、これを使つてゐるには、その取寄せによつて、確める必要があるが、億の南星<sup>なんせい</sup>が、側比し相つてゐるやうなものだ。このものも、射干<sup>せくかん</sup>のものがあつて、







ノ註見石ノ南門山關河南  
 屋指陽縣龍門山關河南  
 餘一太如伊ノ山者

倒に垂れやうで、色は青、白、慈は黄で中が空だ。黄色の子を結ぶ。風が吹いても  
 く裏が紫で細毛があら、葉の下に莖に附いて一箇の花を開く。花の形は鈴、鐸を  
 種は葉がすべ七瓣で、一種は葉が數層になる。葉は莖端に似たもので、表は青  
 はづれも南星に似たもので、莖は赤く直上して伸び、莖の端に葉が生える。一  
 付なかつたのだ。又、唐の獨孤は丹鏡源には『虎草には二種類ある』根  
 毒公と鬼とを二種別としてあるが、これは正に一物にして二種あることに氣  
 庚辛玉冊には『蚤休は陽草、早荷は陰草』としてやはり區別をつけ、陶弘景は、馬  
 白色のものが河車、赤色のものが鬼だ』といふが、恐らくそれと違ふ。しかし、  
 だ八角のものが更に靈妙だ』といひ、或はその根は紫河車と一様なもので、  
 葉の河車に似てゐる。丹爐家では、根を採つて三黄、砂、汞を製す。或はこの草は、  
 や李の香がする。花は葉の下に開き、また花の青い裏が紫だ。その葉は、採めば瓜  
 葉は圓く、初生の小さい蓮の葉のやうで、表が青く裏が紫だ。その葉は、採めば瓜  
 草は、ただ一本の莖が上に伸び、莖は葉の中心から生え、中空だ。一莖七葉で、  
 の深山の陰密の處にあるが、北方にはただ(二〇)龍門山、王屋山にあるだけだ。この



『射干層城に臨む』といふ句がある。これは薬には入れない。

花が白く莖が長く、射手が箭をつがへて立つた状態に似たものだ。故に阮公の詩に「花が白く莖が長く、射手が箭をつがへて立つた状態に似たものだ。故に阮公の詩に」  
けだ。恐らく鳥髪とは違ふ。又、別に射干といふものがある。よく似たものだ。  
世間ではその葉を鳥尾といふ、鳥髪といふ草が別にある。よく似てゐる。  
弘景曰く、これは鳥髪のこと、根は黄色だ。庭や築山などに多く種々ある。

つて陰乾する。

集解

別錄に曰く、射干は南陽の山谷、田野に生ずる。三三三日に根を採

ら草薺といふ。○の音は所申の切、扇（せん）とと發音する。

が扇生で根が竹やうだといふ形容だ。根、葉はまた薺のやうでもあるところか  
に鳥扇、鳥髪、鳳翼、鬼扇、仙人掌などの諸名がある。俗に扇と呼ぶは、その葉  
の時、形、その葉は生じて横に一面に鋪き、翅や扇などの形のやうだ。故

い。

る事務を主つたものだが、やはり音を夜と發音した。格別意義のあるわけはな  
が、蓋し古の字の音を多くは通じてて發音したもので、漢時代の官名僕射（わくせつ）は射に關す

ノ註見。南陽山草類  
（三）





時珍。曰、く射干、今の芍竹である。現に一一般に栽培するものも多しは紫花の

花のものを採用した。必ずしも骨髄質を實驗果を認めためたものであらう。

るもの、花の紅いものなどあつて、射干なるものは一種ではないが、丹溪は獨り紫

花の白いもの、花の黄なるもの、花の紫なるもの、

機。曰く、按ずるに、諸家の註に據れば、

○ 子 集

いふ。紫花のもの。紅花のもの。は

震○亨○曰、く射を以て、兼て義を

○ 5



〔尾 薦・干 射〕

とあるがそれだともいふ。陶弘景所説の花の白いいのもいふは、やはり千射の類であらう。一一花は黄紅色で瓣の上下に細文がある。秋、房、葉は黒色だ。散説に、荷子に西の方木あり、名て千射<sup>せんしや</sup>。その葉は細小ではあるが、木に類したものだ。『高山上の千射』、葉の長さ四寸、高山の千射にすずだ。

髪と名ける。葉の中から抽き出る。莖が萱草せんそうの莖に似て強硬だ。六月花を開く。その  
 葉は大いに蟹かにに類して狭く長く、横に疎そに張つて羽の形狀のやうだ。故に鳥  
 類ちゅうるい曰く、今は方方はうはうにあつて、人家で種多てゐる。春、苗が生え、高さは一、二尺、  
 赤黄色で淡く、硬い。五、六、七、八月に採收する。  
 大。明く、射干の根は潤い、たもので、形狀は高良莖に似てゐる。大、小があり、  
 も低く、形狀が鳶の尾のやうで、夏、紫碧色の花を著けるものがある。射干は射干  
 點のある紅色の花を著ける。鳶尾はこれも世間で種多るもので、苗の高さは射干  
 射干は世間で花草として種多る。鳳翼ほうよくと名けるものだ。葉は鳥の翅のやうで、秋、赤  
 藏そう曰く、射干、鳶尾の二物はよく似てゐるもので、一般には多くは區別せぬが、  
 す。  
 で肉が黄赤だ。所在にいつれにもある。二月、八月に根を採り、皮を去つて日光で乾  
 燥ばう。根曰く、射干は、高さ二、三尺、花は黄色、實は黒色、根は鬚が多く、皮が黄黒  
 ない。根は高良莖かうりやうに似て肉は白い。これらを膏頭と名ける。  
 恭。曰く、鳶尾は、葉はすへて射干に似てゐるが、花が紫碧色で、高い莖は抽き出





射干は、ただ花の色が不同なだけで、本来は一類のものである。恰も牡丹、芍薬、菊花、雄黄<sup>おんわう</sup>を煮、雌黄<sup>しわう</sup>を伏し、丹砂を制し、能く火を拒<sup>こは</sup>むとある。『これに據れば、鳶尾、て、碧花<sup>しやくわ</sup>のもは多く江南、湖廣、川、浙の平陸の地に生ずる。八月に取つた汁は、通りて青綠色だ。花の紫なる一種と、花の黄なる一種と、花の碧なる一種とある。種とあつ干、即ち扁竹である。葉は扁に生えて手の掌を側<sup>たは</sup>てたやうな形だ。莖もやうな形だ。』射干なり『とあり、易通卦驗には『冬至<sup>ていし</sup>に射干を生ずることあり、土宿眞君の本草には』射干の紫のものが射干であつて、花の紅なるものは遠くといひ、各、自説を主張するの紅、黄のものが射干であつて、白花のもやうな類だといひ、朱震亨は、花の黄のものが射干だといひ、蘇頌は、花の射干、鳶尾を同一種だといひ、蘇恭、陳藏器は、花の紫碧色のものが鳶尾、花の紅、白、黄のものが射干だといひ、咬んで破れな。い。七月に始めて枯れる。陶弘景は、さだだ。大いさ拇指ほどの房を結び、び、懸る泡桐<sup>ほうとう</sup>子に似てゐる。その房は一箇が四ツに仕切られ、一仕切り十餘箇の子がある。子は大きい胡椒<sup>こしょう</sup>。

【初】はつ 臆おそ 竹たけ 根ね の 嬬はな 煙えん の 形かたち の もの を 草くさ 根ね と 共に 米こめ に し、 臺たい で 調てう へ て 傳でん

射干の汁を煎へて服ませ、通じける。また丸にしてして服するもよし。(肘後方)【乳】

【時後方】陰疽で腫れ刺すもの【の】發つたときには刺すやうに腫痛するもの【だ。生。】

搗れ水聲か、鬼、皮膚の粟をにば、鬼、筋根の搗汁一盃を服用す。水が直ちに下る。

えなものが佳し——を研つて汁を服す  
【大腹水】(水瀝) 直ちに通ずる

てをれ命散と名ける。【二恒不通】諸藥の效なきには、薬花の局竹根——水邊に生

一、錢、黃芽、生甘草、精梗各五分を末にし、水で調へて頓服する。立ち方癒する。

或ハ臨之ヲ以テ其心ヲ引キ出サシムル妙ニアラズ。

○便民ノ方ニ在リテハ、

崇徳天皇御紀

醫方大成では、扁竹の新根を搗つて汁を嚥む。至大肺動を發して解するものだ。

【通】漿水も入らぬにほ、外臺の煎で、射干一片を食んで、その汁を飲むかよし。

【上麻加】  
（原産地不明）  
2 1 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037

神の如く教ふは【佛の】門に入るは生身十住菩薩名四座大

附方  
【睡臥不安】  
身重  
花柳  
粗

結は自から解し、癡癡は自から除けるわけだ。

五(五) 大腑、胃腑、手

モ  
セ  
リ  
。  
陰作ル  
誤ナル  
サレドモ  
コト陽ハ  
必

物の<sup>(四)</sup>厥陽の相火を降すす點を取るのであつて、火が降れば血が散じ、腫が消して痰瘵母を治する<sup>(五)</sup>繼中煎丸<sup>ス</sup>、やはり鳥扇を焼いたものを用ゐてある。いづれもこの痰瘵は、欬して上氣し、喉中に水雞のやうな聲あるを治する射干麻黃湯がある。又、あつて、孫真人の千金方には、喉痺を治する烏髮<sup>鳥髮</sup>膏<sup>髮膏</sup>あり、張仲景の金匱要方<sup>張仲景の金匱要方</sup>に、あつて、射干は能く火を降すも、故に古方では喉痺痛を治する要藥と<sup>時珍</sup>時珍曰く、射干は能く火を降すも、故に古方では喉痺痛を治する要藥と前に服す。二三回便通があつて甚だ效がある。

の瀝氣であつて、疲勞に因つて發るものだ。射干三寸を取り、生薑と共に煎じてて食行、結核を自消せしむると甚だ捷なものだ。また便毒を治す。これは足の厥陰震亨曰く、射干は金に屬し、木と火とを有する。太陰、厥陰の積痰を

發明

(時珍)

【積痰、疰毒を利し、結核を消す】實火を降し、大腸を利し、瘵母を治す【痰瘵、肺氣、喉痺を治す】佳とす【宗義】胃中の癰瘡を去る【元素】腹脹し、氣喘し、痰癖するを破り、胃を開き、食物を著付け、肝を鎮め、目を明に治し、瘵血<sup>瘵血</sup>を消し、婦人の月經閉止を通す【甄權】痰を消し、癥結<sup>癥結</sup>でて、胸膈が満し、





[illegible]

く、長い茎は抽き出ない。花は紫色だ。根は高良薑に似て、皮が黄肉が白く短  
 恭曰、この草は所在にあつて、一般民家でも栽培する。葉は射干に似て瀾<sup>らん</sup>  
 なかつたのだ。

その根をぬるといふとらしい。療體が似てゐるので、本草には取別けて掲載し  
 るだから、これは別の植物であるかと思ふ。『毒頭』を用うところがある。  
 方家でこれは射干の苗だといふが、主たる治療上の效力に異なるところがあ  
 集解別錄に曰く、烏<sup>ま</sup>蔞<sup>りん</sup>は九<sup>くわん</sup>疑<sup>ぎ</sup>山谷に生ずる。五月に採收する。弘景。

して命名したもので、烏<sup>ま</sup>蔞<sup>りん</sup>は書くが正しい。

釋名	烏蔞(別錄)根を毒頭と名ける。時珍。いづれもその形狀に對
----	------------------------------

	尾	本經下品)	和名	學名	科名
(一)	鷹		いすは	Iris tectorum, Maxim.	(ちめい科) 鳶尾科

水三升を二升に煎じて温服し、滓<sup>こ</sup>を瘡上に傅ける。(姚僧坦集驗方)  
 ける神效がある。(永類方)

【射工】中【毒】瘡を生じたのは、烏<sup>ま</sup>蔞<sup>りん</sup>、升麻各二兩、

根を共に搗いた自然汁を、竹筒で咽中に灌ぎ込む。その魚骨は白から下る。牙齒に

を水に搗つて服用す。直ちに解す。【魚骨哽を下す】玉簪花根、山萸紅果

齒に著けてはなす。【斑整毒を解す】玉簪根

砂三渣を傳ける。【海土方】婦人の避妊白鶴仙根、白鳳仙子各一錢半、柴炭二錢半、辰砂

【附方】乳癰の初起、【内消花】即ち玉簪花の根を取り、酒で搗つて服し、

【主 治】【氣 味】【あ り】【主 治】搗汁を服すれば、一切毒

【花 玉 簪】干の皮が微しい。いづれも鬼臼、射

【新五】【附方】乳癰の初起、【内消花】即ち玉簪花の根を取り、酒で搗つて服し、

【主 治】【氣 味】【あ り】【主 治】搗汁を服すれば、一切毒

【新五】【附方】乳癰の初起、【内消花】即ち玉簪花の根を取り、酒で搗つて服し、

【主 治】【氣 味】【あ り】【主 治】搗汁を服すれば、一切毒

【新五】【附方】乳癰の初起、【内消花】即ち玉簪花の根を取り、酒で搗つて服し、

【主 治】【氣 味】【あ り】【主 治】搗汁を服すれば、一切毒

【新五】【附方】乳癰の初起、【内消花】即ち玉簪花の根を取り、酒で搗つて服し、







時臭

【難産、積塊、時臭】

主治

【小毒あり】

【微し苦し、温に】

子氣味

五

恐らくこれ毒なりとは考へられぬものだ。

に浸せばこれ食物になる。但此の草は虫蠹の生ぜぬもので、蜂蝶も近づかない。

般にその肥えた莖を揉つて灼<sup>ややく</sup>せし、それを蒿<sup>こも</sup>の代用にする。嫩<sup>なや</sup>い花は一葉酒一

裂けて、皮が拳<sup>こぶし</sup>のやうに巻上る。苞<sup>はう</sup>中に蘿蔔<sup>らふ</sup>子に似て小さい褐色の子がある。

熟すれば黄になり、少しでも觸れば白から

微し長く、毛桃のやうで、生では青く、

實は紫として大いさ櫻桃ほどあり、形は

結さ、その間<sup>ま</sup>新陳代謝<sup>しんちんたいしあ</sup>して咲きつづける。

また自からその色が變化する。形は飛鳥のやうだ。初夏から秋の終までに咲き盡

極の間に、或は黄、或は白、或は紅、或は紫、或は碧、或は雜色などの花を開き、

は指ほどで、中空<sup>くう</sup>で、脆<sup>もろ</sup>い。葉は長くして、尖り、桃や柳の葉に似てて鋸齒<sup>のこぎり</sup>がある。

種を蒔いて五月に植ゑるがよ。苗は高さ三、三尺、莖には紅、白の二色あり、太

時珍<sup>ししん</sup>曰く、鳳仙は人家で多く栽培し、極めて生え易い草である。二、三

集解

文獻分(五) 水村(康) 浸(一) 帝金(二) 陵(三) 藥分(四) 糖(五) 明、三、



〔花仙鳳〕



(三) 居ハ君ノ誤。

草トニツキリ居ルヲ攝ガ、今ハノ世  
度、ハ馬ノ來、ハ元ノ來、ハ  
世、ハ牧ノ野、ハ云、ハ

んだ。張宛丘はこれをおを菊婢と呼び、草居は羽客と呼んだ。

る。宋の光宗皇帝の后李氏は諱を鳳といて、宮中ではこの花を好み、花と呼

が小桃やうで、老いると裂けはける。それで指甲、急性、小桃などの諸名があ

たものだ。婦人はその花、及び葉を採つて指甲を包んで染める。またその實の形が

が頭、翹尾、足共に具はつて、羽敲きしたやうに見え、鳳のやうな形だから、そ

の花、時。菊婢。染指甲草(救荒)綱目(目)金鳳花(綱目)小桃紅(救荒)莢竹桃

花

釋名

急性子(救荒)

旱珍珠(綱目)

金鳳花(綱目)

小桃紅(救荒)

科名 鳳仙花科

學名 Impatiens Balsamina, L.

和名 鳳仙花

鳳仙(綱目)

渣を傳けて中心に孔に残して、氣を洩す【時珍】

葉

氣味

主治

蛇蝎の瘡傷には、搗汁を酒に和して服し、

分に點ける。自から落ちる。(余居士靈奇方)

砒三分、白七分、礞砂二分、威靈仙三分、草烏頭一分、生末にし、少量を疹く

著けてはならぬ。(應仙乾坤生意)【骨を刮り、牙を取る【玉簪根の乾いたもの一錢、白

堅骨を軟かにし、骨に透る【時珍】

て銅、鐵を吞みたるき、杖刑を受けたたて腫痛するもの。血を散じ、經を通し、雞、魚の骨、哽、誤、つ

根 葉 氣 味 【主 治】 小毒あり、辛く甘く、苦く

前湯で毎日二三回洗滌し、獨活寄生湯を内服する。【時珍】

附 方

【新】 臥床するもの【起き得ぬ】は、金鳳花、栢子仁、木瓜、

し乾し、末にして酒に空心で三錢つづつを服す。血を活血し、積を清す【時珍】

つて服すれば直ちに解す。又、腰、脇が忍び難く引痛するに、は、研つて餅にして晒、蛇傷に、は、酒に搗

花 氣 味 【主 治】 甘く滑す、溫にして毒なし

下血して病が去る。百日間の冷物忌む。【孫天仁集效方】

それを冷まして早朝に食ふ。その日の日没頃には痰が軟になり、三日経てば大便、紙で封じ、小火で蒸乾し、その鶴を取って度翻、黄色になるまで焙じ、

て布で拭ひ淨めた中へ、裴入して絲で括、沙鍋を人に入れた中に水を割き、水を付けやうに、

一 羽 或は白鴨に、毛を去つて腹を割き、水を去つて皮を雨を持、し、白鶴

骨哽を下し、骨に透り、贅を通する【時珍】

發明

時珍曰、鳳仙子性が急速だ。故に能く骨に透つて堅さを軟かにする。料理人が魚肉の硬いものを煮る場合、この子數粒をそれに投ずれば軟かに煮爛れる。その實驗だ。骨に透る位だから、よく歯を損する。その點は玉簪根と同様だ。

凡そこれを服する場合は齒に著けてはならない。多く用ゐればやはり咽を刺戟する。近く用ゐればやばり咽を刺戟する。その點は玉簪根と同様だ。

附方

新五。難産の場合に分娩を促す【鳳仙子二錢を研末して水で服す。】

に近けてはならぬ。外部には、蛇麻子を年齢の數だけ搗いて足心に塗る。【集韻方】  
【噎して食物の落付かぬもの】【鳳仙子を酒に三晝夜浸して晒し乾して末にし、酒で綠豆大の丸にし、八粒づつを溫酒で服す。多く用ゐてはならぬ。即ち急性子の酒である。】  
【骨哽中の骨哽】死せんとするには、白鳳仙子を水に研り、大きく一口に呷す。或は末にして吹く。【普濟方】  
【牙齒を研末して砒少量を大に呷す。或は末にして吹く。】  
【小兒の瘡積】急性子、水紅花子、大













の廣雅に『光決』とあるは誤で、決光とは決明をいふのである。按ずる紅蹄蘭と名くもるものだ。これは毒はなない。此にいふ羊蹄蘭とは別類の植物だ。張揖は皆黃色で、氣味、いづれも惡い。所謂の深紅色のものとは山石榴のことだ。時。曰く、韓保昇の説に桃葉に似たものがあるが最も確だ。花は五出、惡、瓣。な。い。も。い。な。い。



〔蘭 羊〕  
一花 蘭 羊  
一花 蘭 羊

がら錦のやうだ。或はこの種類は藥に入る處に生えてゐて、一帯に深紅色に見え、なるを食へば死ぬ。今は嶺南、蜀道の山谷に到る零花、山石榴などに似て正黃色だ。羊がこれのは三、四尺のものだ。夏花を開き、その花は凌ぎ、葉は應發に、葉は紅花に似て、莖の高さ

頭。曰く、所在にあつて、春苗が生え、三、四月、花を採つて日光で乾す。

保昇。曰く、小さい樹になる。高さ二尺ばかり、葉は桃葉に、花は黃色で瓜花に似る。赤。曰く、花は一向に鹿葱に似てゐない。正(白)旋花に似てゐるものだ。



てある。眼に近づけなす。

花を採つて乾す。私、遠くの川に、ついで、ある。花は真色で、鹽に似てゐる。

集解  
別錄。曰く、太行山(三)の川谷、及びなほ雁南なほの山に生ずる。二月

死ねるところからかけたのものだ。聞かぬところもあるは。燃ゆる事へくさで、燃亂の意味である。

花綱(目) 老虎花綱(目) 玉枝別錄(弘景曰、其味如菜食之) 鹽麴(三) 𩚑(二) 𩚑(一)

釋名 黃鴈(綱目) 黃杜鵑(蒙室) 羊食草(拾遺) 閭韋花(綱目) 羊躑躅

科名 しやくなげ科 (右南科)

學和名  
Rhododendron molle G. Don.  
(新標)

羊(一) 躑 躑 (本經下品)

剉み、水で煎じて三五沸し、朴少量を入れて洗ふ。(儒事親)

へて服用す。御藥院方【大腸脱肛】曼陀羅子々々連<sup>(五)</sup>穀の一二、瀝、糠、六十六、并々

つて十箇、天南星を炮き、丹砂、乳香と各二錢半を末にし、半錢つづつをそへて湯で調

【小兒の慢驚】蔓陀羅花を七朶、その重さ一字、天麻二錢半、全蝎せんかひを炒

【附方】顏面に生じた瘡【曼陀羅花を晒し乾して研末し、少量を貼る。新三。

石類石疏黃ノ註ヲ見  
(三)太行山ノ石部

ト。又。行。キ。ツ。モ。ド。リ。

(二) 部部

二 充テ人々不可テ  
邦ノキレハ人々不可テ

又。種ヲ我邦ニ産セシメ我々之ヲ産セ

フツルガニシニ酷似タリ別品

つゝに、中、我、邦、ん、け、つ

(二)牧野云、羊鄰鄰

夢作

(五) 連發、本書二連

ノ誤作ル。然レトモ景

(四)金陵本、崇禎本、

定シモ種ハ牧ノ地ニ云ノ類モ山ノ事限大汎モ

[illegible]

附錄

で包んで咬み、涎を追ふ。(海上仙方)

蟲の牙痛【鄺圓】錢、草烏頭二錢生を末にし、化しなした臘で大豆の丸にし、一丸を精

入として晒し乾してして来てにし、五分づつを、牛乳一合、酒二合で調へて服す。（聖惠方）【風】

す、肢節が疼痛し、言語が<sup>ヒヤクニ</sup>礙<sup>ヒヤクニ</sup>るには、酈<sup>リ</sup>酒を排せて一炊き蒸し、之を

ちうに能力が發生する。(醫學集集成)【風濕の痺痛】手足、身體の收攏が如意にならな

蠶、黑豆半、酒、水各一盤を徐徐に服す。大いに吐し、大いに泄し、一服で直

むにほ食後に服するが大いに良し  
(續傳信方) 疝風(の)走注【黄蘗歸根一把握米一】

で梧子大の丸にし、三九つづつを温酒で服す。腰脚の骨痛には空心に服し、手臂の痛

餅、しに、五、遍、蒸、し、て、稀、く、す、り、乾、か、し、て、蒸、す、必、ず、こ、の、脂、に、油、を、と、り、ま、し、て、火、を、し、き、み、た、し、て、米、を、し、き、み、た、し、て、蒸、す、例、

附方  
新四。【風痰の注痛】  
躑躅花、天南星をいづつ、生ぬる酒に共に搗いて

附方

新刊

服してはならぬものだ。













減サニ本作草藥言ハニ減

器ノ註ハ見。土部白堊  
ノ註ハ見。豫章石部炭  
類ノ石ノ精州見。石部  
石ノ精州見。石部炭

て用ゐても效力はそれにくだ。

沸し、醋を去つて一夜水に浸し、晒し乾して用うれば毒が滅する。或は醋で炒つ  
數。時珍曰く、荒花は數年間貯藏した陳いものが良し。使用の際、好きき醋で煮て十

二。

弘景曰く、これを用ゐるには微し熬るへきものだ。眼に近けてはなら

修治

外部が赭色のやうに染まる『とある。

り、負傷したやうに赤腫させて相手の者を誣ひ陥れる。鹽を和して卵に擦ると、その  
純たる木ではない。奸佞な賤人は、争闘した場合は、その葉を取つて皮膚に按み  
れば腐敗せぬ』とある。『洪造の容齋隨筆に『今饒州の處にある。莖、幹  
時珍曰く、顧野王の玉篇に『杭木は豫章に産する。煎じた汁で果や卵を貯藏す

ふ。

また藤花に似て細い。現に絳州に産するものは花が黄だ。これを黄芩花とい  
して尖り、楊柳の枝葉に似てゐる。二月紫色の花を開き、頗る紫に似て穂になる。  
根は土に深く、深さ三五寸ほど入り、白色で櫟の根に似てゐる。春苗が生え、葉は小さく

時珍曰、荒花なるものは下品の毒物である。久しく服するに堪へずき道理なる。年百餘歳に達し相繼らずす六十五歳の人のやうであつた』とある。

正誤 愼微曰、三國志に『魏の初平年間、靑牛先生といふ者があつて常

つて相激する關係の應用である。

にある。蓋し患者をして、大いに吐いて瀉を泄さしめるが目的であつて、相反に因が、胡、治居士の痰癖、飲癖を治する方には、甘遂、大戟、芫花、大黃、甘草（かんさう）を共に用ゐて、これを投すれば深大なる確に認め、浮、沈の相異があり、寸の相異あり、外部では皮、毛、中間では肌肉、内部では筋骨であつて、それが脈に現はれては、脚、十二經をそれぞれ領域があり、上にしては頭、中にしては四肢、下にしては腰、脚、ふがよしとある。『癖は好古は、水は肺、腎、三經の主たる所のもので、五臟、六腑を養ふが、土、瀉の直指方には、水、瀉の證を治すとあるが、これは善く應用の妙を得たものだ。』



[illegible]

服し、瘧疾に烏梅湯で服し、婦人の血氣痛には當歸酒で服し、諸氣痛には香附湯  
 半兩、玄胡索を炒つて兩生を末にし、男の元臟の痛むには葱酒で  
 縛る。婦人産後に起る種の痛に就中宜し。【神珍】諸般の氣痛【荒花】醋煮て  
 く痛むには、荒花根末を米醋で調へて傳ける。藥がその部分に留まらぬときは吊  
 を焼いて末にし、一日一回、水で半錢を服す。【時珍】背腰間痛【荒花】ある點が忍難  
 【酒疸で尿の黄なるもの】發黄し、心が懊痛し、足脛が満するは、荒花、椒目等分  
 とを枳殻を入れて煮爛し、搗いて梧子大の丸にし、三十九つを白湯で服す。【普濟方】  
 湯で服す。【直指】水蠱の脹滿【荒花】枳殻等分を用ゐ、先づ醋で荒花を煮て爛れた  
 むには、荒花を炒つて二兩、硃砂五錢を末にし、蜜で梧子大の丸にし、十九つを棗  
 二枚道に起さぬやうの手當に講ずる。【金方】久瘧の結胸、脇に在つて堅く痛  
 潰けて胸上に薄る。兩三回以内でよし、薄つて熱するときは取除き、四肢を温めて  
 煩亂して死せんとするを治す。荒花を一斤、水三升を升半に煮取り、古布をそれ  
 一兩を加へる。【胡洽百病方】天行煩亂【荒花】天行毒病で七八日間積熱し、胸  
 草を加へた五物各一兩、大棗十箇を共に煮て法則に従つて服す。ある方では、芒

作ル。大觀ニ賦ナキ冷ニ

字ニ、  
二、大。就觀ニハ、  
二、虎口ハ一握ヲ

けぬとらゝは翌朝更に服す。仲景傷寒論【】水腫支飲【】及び癰飲には、十棗湯に大黃、甘一錢を、弱い患者は生錢を入れて早朝に服す。下利して病は除けるものも若し除は散にし、大棗十箇、水一升半を入合に煮取つて渣を去つた中に、體力の強い患者はがまだ調和せぬのである。十棗湯を主とする。荒花を熬り、甘遂、大戟と各等分を下痞満し痛が兩脇に引き、乾嘔し、呼吸短く、汗が出、惡寒せぬは、表は解しても裏心止める。病はそれで癒える。古今錄驗【】乾嘔、嘔吐、傷寒で、とすると頭痛し、心いものが出、口、鼻すへて辣くなるものだ。荒花の根全部が飛び盡くを待つて自身にそれ二を吞かせ、飛揚する灰を患者の七孔中に入らせる。眼から冷傷んで喘嗽し、失音したるは、荒花を根を連ねて二虎口を切つて暴乾し、患者どの量を服用す。酸、鹹のもの三を食はば四はなぬ。張仲景急方【】喘失音暴に【】喘失音暴に【】荒花一兩を炒り、水一升で煮て四沸して渣を去り、白糖半斤を入れ、毎服棗五を煮てその汁を煮乾し、し、日毎に五箇つゝの食へば必ず癒える。時後方【】痰ある卒附方【】新十五丸。舊五丸。卒に【】荒花一升、水三升の煮汁で棗十四箇

い。この話柄は仙術家などの無稽の妄言だ。信するに足らない。









(目録)

ハ、集何カち味つ  
ハ、集何カち味つ

科名和	科名	なし
(馬鈴薯科)	まうすこ	Buddleia sp.

不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>が。あつてはならぬ。病應する證を確認して始めて用ゐる。薤花を好<sup>レ</sup>占。曰く、仲景の小青龙湯の證に『著』なるを去つて薤花を加<sup>レ</sup>る。雞子どの量を赤に熱つて用ゐる。『蓋し水を利するのだ。』水を利するを去つて薤花を好<sup>レ</sup>占。曰く、薤花なるものは、やはり荒花の類ののだ。氣味、主治も大略相近い。時珍曰く、薤花なるものは、やはり荒花の類ののだ。氣味、主治も大略相近い。



明發

逆上氣、喉中腫滿、きゆうて注氣、きゆう疰氣、蠱毒、痰癖、氣塊を治す【頸權】



別錄に曰く、一名は毒、一名は春草。

正誤

呼ぶ。

食へば迷因を起す。故に名けたものだ。山間の住民は鼠を毒殺するに川ぬ、鼠と  
はもと蘭の字を書いた。俗に訛つて呼んだのである。時珍曰く、この物は有毒で、  
鼠華（鼠）海經（草）山（草）である。（鼠弘景曰く、莽

釋名

蘭草

木部より此に移入る。

校正

科名 草名  
群衆 未詳

草 莽 (一) 本經下品 (和名 未詳)

に食ひ、花を海粉に和して搗いて貼れば消する【時珍】  
る。久瘡か起つた癰に花を魚の腹中に填充して膿め吐して止む。骨が溶けるの  
かば効がある。又、誤つて石斑魚子を食つて中毒し、吐いて止まぬものを治し、  
し、寒に遇へば發るは、花を取つて研末し、米粉に和して【時珍】炙熟して食

ト唐土ノ來古ノ説ヲ知  
居ルヤハ此ノ説ヲ出  
和名ヤハ此ノ説ヲ出  
中ニ居ルヲ充  
キミ日ヲ充  
白ニ居ルヲ充  
ヒ。又カレノ科屬ヲ  
居ルヤハ此ノ説ヲ  
Sieb. et Zucc.)  
(Il cium religiosum,  
)木蘭科 (ノミ) 科  
之ヲ牧野云々、先  
(一) 國子ノ如キ病。  
ノ如キ病。





主 治

【風頭、癰腫、乳癰、疔瘡、疥癩、結氣、瘰癧を除去し、】

し得る。豆汁をこの草の根に焼けば爛れぬものもだ。性が相制するものである。

て食へば人體を害ふ。時珍曰く、雌黄、雄黄を制するもので、服した黒豆の煮汁を服すれば解

し、毒ありといふ。温にして毒あり、辛く、雷公桐は苦

氣 味

【辛く、温にして毒あり、】

り、乾燥して用ゐる。

草、水蓼二味と共に盛つて生稀絹の袋に入れて口蒸して囊の味を取去

修 治

葉 時珍曰く、范子計然には『三輔は（草）をこれに用ゐる。』とある。

攣生のもを用ゐてはならない。

敗曰く、葉を用ゐる。尖、及び

めば臭気がやうだ。

石南の葉のやうだ。枝梗は乾けば

間は用ゐてゐるものも皆木であつて、葉は



母ノ註見。山草類。知  
（三）居。云ツニ裂生。即  
（五）藥。生。指。南  
（四）地。方。中。建。南  
（三）作。觀。又。入。白  
（二）鮮。上。註。見。山。草。類。白









大觀ニ蟲ニ作ル。

大觀ニ瘰癧ニ作ル。

床子を烟に焼いて下部を熏する。と、それにて癒えた。』とある。

蛇、蘭草、塗り、その腹部に塗り、大慈を研つてその腹部に塗り、蛇

村の王氏の子は、生れて七日にして兩腎が縮入した。二人の醫師が診て「寒氣を受

時珍曰く、古に小兒の傷寒を治する莽卓湯といふがある。又、瑣碎録に思

掌る。蘭草を以て熏すれば死す』とある。

宗頤曰く、濃煎湯で皮膚の麻痺を淋療する。周禮に「煎氏は毒物を除くこと

が、甚だ有効だ。

現に醫家が、葉の煎湯を熱合して少頃して吐き、牙齒の風蟲、及び喉痺を治療する。頤曰く、古に風毒を治する諸酒に、いづれも蘭草を用いてある。

發明

した湯で風蟲を淋す。牙痛を淋す。大明

のやうに調へて毒腫を熨し、乾けば更に易へる。【醃權】皮膚の麻痺を治す。濃く煎

せぬ。頭瘡白禿に主效があり、蟲を殺す。白斂、赤小豆と共に末にし、雞子白で糊

ぬ。【別錄】風疽疔氣、腫膿血を治し、瘰癧を治し、濕風を除く。湯に入れたては服

【喉痺不通、乳難を療す。頭風の瘡を、はこれにて沐するがよし。眼に入れたてはなら



採取する。

大明。曰く、海鹽(み)から出る。形状は石南樹に似て生ずる葉は厚い。五、六、七月にだだ風を療する酒に合はせる。

は莽草に似て細く軟い。細莖を連ねて採るものだ。方に用ゐることは甚だ稀だが、する。弘景曰く、好きも、好きは彭城(ほうじょう)に産する。今は近道にもつて、莖、葉の形状乾

別錄に曰く、黄は大山(おほさん)の谷に生ずる。三月三日に葉を採つて陰乾

は詳かでない。莞草とあるは青莞(あせわ)の名と稱し同いだ。

釋名 莞草 (別錄) 莞草 (別錄) 莞草 (別錄) 時珍曰く、茵芋はもとと因預(いんよ)と書いた。意義

科名 草名 和名 未詳 未詳 未詳

茵芋 (本經下品)

水で莽草末を調へて傳ける。(便民圖纂)

豆等分末にし、苦酒で和して傳ける。(衛生易簡方) 【狗咬(いぬく)で起つた昏悶】椒を浸した  
だ潰(つぶ)れぬもの、方は上に同じ。痛を感ずれば良し。【乳腫(ちしゅ)の消せぬもの】莽草、小  
上(かみ)に塗り、それをついて一日二回易(か)る。效かあれば止める。(聖惠方) 【癰瘡(ようそう)の

確ナ見ハハナノモリシヲ来リシヲ觀テ、正  
ニカ固居ルヲ、我ノ邦ノ學者ハ多  
分居ルヲ、Skimmia I-  
runei, Mast. 香  
科ノハ、料ノ草  
スルヲ、氏ノ據  
ハ分ルヲ、サ  
サレバ、何思  
ナト、何思ハ  
phorbia 種  
たい、即チ  
圖ハ、何物  
草ヲ、文ノ  
集ノ、野  
ノ、牧

三ノ字。大ニ觀。時後方ノ





草弘ニ我邦ヲモテ越年  
ニ收分セリ、野云フ、  
(一) 世界ニ

科名 毛茛科 (Ranunculaceae)  
和名 毛茛 (Ranunculus sceleratus, L.)  
名 毛茛 (Ranunculus sceleratus, L.)  
名 毛茛 (Ranunculus sceleratus, L.)

# 石龍肉 (本經中品)

めて膏にし、十回つづつ擦する。(千金方)

中風【風】茵芋五兩、木防己半斤を苦酒に一夜漬け、猪脂四斤で三回煎し三回休  
して通じをつける。なほ通ぜぬときは再服して速かに通じをつける。(本草方) 【産後

て半兩、右を末にして煉蜜で梧子大ほどの丸にし、二十丸をつを五更に薑棗湯で服

は猪ひを治す。茵芋葉を炒り、薏苡仁と各半兩、郁李仁一兩、牽牛子三兩を研末し

は胡洽居士の百病方にある。(圖經本草) 【茵芋丸】茵芋を微し痺を感ずる。秋は五日

漬けて薬となる。一回、合つづつを服し、微し痺を感ずる。冬は七日、夏は三日、春は五日

十、二味を切つて絹袋に盛り、清酒一斗の中に、冬は七日、夏は三日、春は五日

子、天雄、烏頭、羌活、秦艽、女萎、防風、防己、石南葉、細辛、桂心、各一兩附

子、天雄、烏頭、羌活、秦艽、女萎、防風、防己、石南葉、細辛、桂心、各一兩附

た。醫學界の疎漏、缺點である。

人は風を治する妙品としたのだ。然るに近世では、それ等に関する知識が稀にな

(七) 大觀ニ三ニ作

近不華。正金本ノ草ニ  
（九）華ノ本ノ草ニ

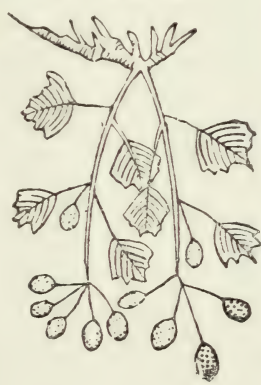
漢魏ノ誤。

陰ノ字アリ。不ノ字上  
ニ（七）大觀ノ字上

作。本。書。子。ナ。草。ニ  
（六）米

作。大。觀。ニ。草。ニ  
（五）經

は大毒がある。食はれない。水草は即ち俗にいふ胡菜のことだ。處處にあるもの  
 つたものである。冠宗、陸地の生ずるいふそのものは毛華のことだ。これ  
 菜部に、水草として掲げたのは、その苗をいつたもの、本經の石龍芮はその子  
 晋の本草に「石龍芮」とあつて、その關係は甚だ明瞭である。唐本草の  
 ある。蘇頌が非なりとして指摘したのは、指摘した方の誤りだ。に漢の吳  
 時珍曰く、蘇恭のいふ水草が即ち石龍芮で  
 莖冷、失精を補するものだ。  
 ずるものは、天然のいひ、不足の陰  
 藥用には水中に生えたり、陸地に生  
 に生ずるものは葉に毛があつて子が鋭い。  
 宗曰く、石龍芮には兩種ある。水中に生ずるものは葉が光つて子が圓く、陸地  
 する。石龍芮として確なものだ。  
 つて石龍芮ではない。兖州から上納するものが正確に本草、及び陶氏の説に合致  
 葉は短小で刻削が多い。子は葶藶ほどの黄色のものと蘇恭のいふものは水草であ



「石龍芮」  
一葉一枚  
石一

本ノ註ヲ見<sup>三</sup>。作<sup>(四)</sup>東山芳草類彙。舊、大觀ニ著<sup>(三)</sup>二

頤曰、今はただ兖州に産する。一叢に數莖を、莖は青紫色で、葉毎に三葉あり、必ず石龍内である。更に別の草をいふのではない。

ある。これ等の説に據れば、莖草とは烏頭の苗のところであつて、水莖といふものが天雄に註して、やはり『石龍内は葉は莖草に似てゐるから水莖と名ける』といつて蘇藏曰く、爾雅に『莖草なり』とあり、注に『烏頭の苗だ』とある。蘇恭は

な。葉は葳花に似て色は紫だ。

は、愛當に説くといふ。又く、莖草は野生のもので、一般に栽培するものであるが、そので、氣力は山南のものより劣る。陶氏細いのも、が異物だといつてゐる。するものは粒が大きく、莖子ほどある。關中、河北に産するものは細く、莖藤ほど實は桑椹のやう、下に濕の地に生え、五月熟する。葉、子づいれども味が辛。山南に産は恭曰く、現に用ゐてゐるものは、俗に水莖と名けるといふのだ。苗は附子に似て、實である。

ノ。腫ニ入リテ大ニ腫ル。服之ノ下ニ下ノ草葉也ノ三字アリ。主止主観ニ主作ニ作ル。

【初期】胡椒葉の葉を採み、患部にのけて採む。(集前方)

【日三回】壓れば瘡を癒える。(五難食療) 【蛇咬】蛇咬の傷を生の草の汁を塗る。(萬世秘血)

【附方】新二、一。結核氣【草葉を日光で乾して末にし、油煎して膏にし、

である。

【發明】

詠曰、草葉は霍亂を止める功力が香茂と同じ。香茂即ち香蒿

に主效があり、瘀血を下し、霍亂を止る。又、生で搗いた汁半升を服すれば、能

塗る【唐本】久しく食すれば、心下の煩熱を除き、寒熱鼠瘻、癰生瘡、結核聚氣

【主 治】搗汁で馬毒瘡を洗ひ、井に毒にして寒にし【時珍】微し辛く苦く瀰し。

【氣 味】甘し、寒にして毒なし【時珍】微し辛く苦く瀰し。

【水 毒】覆盆子と同場のものだ。然るに何故か一般には用ゐることを知らない。

【發 明】

時珍曰く、石龍芮は平、補の薬である。古に多く用ゐてつて、功

ノ。腫ニ入リテ大ニ腫ル。服之ノ下ニ下ノ草葉也ノ三字アリ。主止主観ニ主作ニ作ル。  
【初期】胡椒葉の葉を採み、患部にのけて採む。(集前方)  
【日三回】壓れば瘡を癒える。(五難食療) 【蛇咬】蛇咬の傷を生の草の汁を塗る。(萬世秘血)  
【附方】新二、一。結核氣【草葉を日光で乾して末にし、油煎して膏にし、  
である。  
【發明】詠曰、草葉は霍亂を止める功力が香茂と同じ。香茂即ち香蒿  
に主效があり、瘀血を下し、霍亂を止る。又、生で搗いた汁半升を服すれば、能  
塗る【唐本】久しく食すれば、心下の煩熱を除き、寒熱鼠瘻、癰生瘡、結核聚氣  
【主 治】搗汁で馬毒瘡を洗ひ、井に毒にして寒にし【時珍】微し辛く苦く瀰し。  
【氣 味】甘し、寒にして毒なし【時珍】微し辛く苦く瀰し。  
【水 毒】覆盆子と同場のものだ。然るに何故か一般には用ゐることを知らない。  
【發 明】時珍曰く、石龍芮は平、補の薬である。古に多く用ゐてつて、功





（三）牧野云、海葦

毛 長

（三）海葦 陰命

藏器曰、く、陶氏は、

『海葦は海中に生ずる。』

意して見るがい。

葉に毛があつて末が鋭い。『とある、その葉に毛あるものが此にいふのだ。よく注

謂『石龍内に兩種ある。水に生ずるものは葉が光つて末が圓く、陸に生ずるものは

つてゐるが、大なる誤だ。方士は汁を取つて砂を煮、硫を伏す。沈存中の筆談に所

うな状態で尖峭があり、石龍内の子とは同じくない。世間でこれを不食草とい

の花を開き、花は五出の世だ光つて艶やかであるだけ、結實は縦びんとする青桑椹の

石龍内の莖、葉と一様だが、細い毛があるだけ、相異である。四五月に小さい黄色

を、高さは一尺餘、一本の枝に三枚の葉があり、葉は三尖で細い込みがある。春苗が生

時。移曰、毛建、毛蔓といふは今の毛葦のことだ。下濕の場所によく、春苗が生

子は漢藜のやうだ。

やうで大きく、上に毛があり、花は黄色、

江東地方の田野、澤畔に生ずる。葉は芥の

用ゐれば解す『とある。又曰く、毛建草は



〔夏〕 毛  
内龍石の毛の一  
一岸毛即一

字ニ夏下  
本ニ書  
三ノ

ナル玩モ、充テ其ノ解ヲ文クシ  
レバ、充テ其ノ解ヲ文クシ  
ル。當ニ人々之ヲ集メテ、充テ其ノ解ヲ文クシ  
ル。當ニ人々之ヲ集メテ、充テ其ノ解ヲ文クシ  
ル。當ニ人々之ヲ集メテ、充テ其ノ解ヲ文クシ

毛

夏

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

釋名

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.

義（ハ）自（ハ）炎（ハ）行（ハ）

毛

建

夏（ハ）夏（ハ）夏（ハ）

遺（ハ）拾（ハ）

科名

和名

毛茛科

Ranunculus japonicus, Langsd.























は異なる考、説明を下してゐるが、いづれも大項に於いて是正する。

んでゐる『といふ。これ等の數説は、すべて吳普、蘇恭の說と合致する。陶弘景等

なす。嶺南に生ずるものは花が黄だが、嶺南に生ずるものは花が紅い。火把花と呼

老したも毒がやや緩である。五六月花を開き、柳の花に似て數十莖が穂を

もので、葉は闊く光る。春、夏に於ける嫩苗は毒が甚しく、秋、冬に於ける

るに據ると、鈎吻、即ち胡蔓草である。今一般に斷草といふがそれだ。蔓生

が潰出し、その人は復び蘇生しない』とある。予も又、南方人に就いて尋ねた血

は『胡蔓草は、葉は茶のやう、花は黄色で小さい。一葉を口にすれば百毒から

染にはならぬ。色は黄白だ。葉はやや黒い』とある。又按ずるに、嶺南生方に

州の地方に生ずる。叢生のもの、花は扁たくして屈して、子やうだが、種大くして

る。半日で死するものだ』とある。民成式の西陽雜俎には『胡蔓草は、登州、容

があつて厚い。一名胡蔓草といふ。その地では生蔬の中に入れて毒を告毒す

が珍。曰く、稀合の南方草木状に『野蔓は蔓生のものだ。葉は羅勒のやうで、光

吻は蔓生で、葉が見え、葉に似たものだ』とあるは正確だ。

府ノ容ノ西者ニ地梧置  
ヲ。今容ノ州唐ニ  
二。五ノ容ノ州見。部自終  
二。四ノ容ノ州見。部自終





種の有毒物に相違ない。ただそれを銅吻なりと指定すべきものではないといふだけのこととを辨別せぬやうになつたのだ。けれども、陶氏雷氏の所説のものゝやはりい考へてから多く、學者はたゞに定見を失ひ、たゞが、それは雷氏の説を基として銅吻とし、また更に毛モウ食シヤクの疑問をも擧げ、たゞが、それは雷氏の説を基として銅正に本草の明文に合致する。陶氏は、藤生のものを葛とし、又、小草を指して草木狀に』又、胡蔓草と名く』とつて、藤生なることも顯あきらかだ。吳晉、蘇恭の所説。時珍曰く、神農本草の『銅吻、一名野葛』の一に已に十分瞭あきらにされてゐる。

野葛と名けるといふあた當あたな見解でない。

の柿の葉に似た』といふものは別種の一一植物である。又、昔を銅吻と名け、根を禹錫曰く、陶氏の説の『銅吻は黃精に似た』といふものが眞の銅吻だ。蘇氏の説の南ナン北ペイに由つて異ふのであらう。

が極めて大きくして根が細いだいたといふこととて、蘇恭の所説と異ふ。恐らく產地の頭曰く、江南地方の説では、黃精は莖、葉はや銅吻に類するが、銅吻は葉の頭似てゐない。毛食モウシヤクとは毛モウある石龍肉シヤクのことだ。銅吻と何の關係もない。

いふは謬妄だ。黄精は、眞直ぐに伸びて葉は柳、及び龍膽草に似たものだ。一向に  
赤い。曰く、鉤吻は蔓生のもの、葉は柿のやうである。『飛鳥も集らぬ』と

人體外部の惡毒瘡を治し、地精は人を殺すものだ。

凡そ鉤吻を使用する場合に地精を用ゐてはならぬ。莖、葉は同様だが、鉤吻は  
だが、ただ鉤吻は葉に葉に二箇の毛しゅうすけ鉤子がある。黄精は葉が竹葉に似たものだ。又の  
毀曰く、凡そ黄精を使用する場合に鉤吻を用ゐてはならぬ。眞に黄精と似たもの  
誤も交つてゐるが、それは異なる物で、果して如何なるものか詳でない。

死、生の反對の結果を招くのである。或は、鉤吻は毛けんすけ良のこたといふやうな錯  
初生のうち極めて黄精に似たものだ。そのため一般に多く取り違ひて、遂に  
は別種の一種の植物で、葉は黄精に似て、莖は紫で、中心から引き出して黄色の花を開き、  
ぬいふ。現に一般に膏に合せて服用し、何等の障害を認めない。鉤吻は、それと  
態が牡丹のやうで、その草の生える處にさへやや毒があり、飛鳥もそこには集ら  
いて考察するに、これは二種異なるものと言つてゐるらしい。野葛なるものは根の狀  
弘景曰く、五符經には、やより『鉤吻けんすけ』足れり野葛とある。事實に就

正誤



廣西ノ地ニ入リ。廣東、

を解するに、た甘草汁、人尿にんしを多く飲む、或は白鵝はくがの頭を斬つて毒の筒の中そに灌そそぎ込こみ、數かずの水を易いへる。須臾よにして口が開いて藥を人に入れ得るのだ。毒の筒を開かぬには、大竹筒の節を抜き、その端を兩脇、及び臍へし中に當て、冷水をその口にも人へ害する毒藥だ』葛洪の方には『凡そ野葛に中毒したもので、ややや緩慢そそだ。或は毒蛇を殺してこの草で覆ひ、水を澆そそいで置く、或は急流の水を呑め死するところもある。急流の水を呑め死すれば罪を減す。』

ら苦惱をせぬのである。魏の武帝は野葛を一尺まで食つたといふが、豫めこの菜を南方地方民は藥菜を食つて後、これに物を伏するに、ために、自か蘿菜の搗汁は野葛の汁を解すのだ。その野葛の汁は野葛の毒を採つて、固く生さるるに滴つて、毒を殺して、人々を毒殺して、その屍を樹上に懸け、その屍の汁が地上に



を毒を冷水がその毒を飲めば即死する。冷水を食つて冷水を葉を食つて冷水を飲めば即死する。冷水を

發明

【ある】臭毒

【い】膏中に入る。飲には入れぬ【別錄】喉痺、咽塞で聲音の變じたるに主效

【癰積を破り、脚、膝の痺痛、四肢の拘攣、疥癩、惡瘡、水腫、鬼蛙、蠱毒を殺す】本經

主治

【金瘡、乳癰、中惡、風、欬逆、氣、水腫、鬼蛙、蠱毒を殺す】本經

これで見ても、その毒の通常ならぬところとが判るのである。之才曰く、牛黄が使と

説明をただ有「大毒」としてあるが、獨りこの物にだけ文法を變へて大「有」毒とした。

あり、人を殺すといふ。時珍曰く、その性は大熱である。本草には、毒藥に關する

【氣味】辛し、溫にして大いに毒あり【普】神農は辛しといひ、雷公は毒

ある。なほこれに關する説明は黃精の條に記してある。

なかつたために、これを相似たものと疑つて、遂にかやうな説を生み出したのであるが、これは、この二草を善、惡の對比として言つたものだ。陶氏はそれを正解してある。『鉤吻は人を殺す』とある。告、天姥が黃帝に對した言葉に『黃精は壽を益し、鉤吻は人を殺す』とある。

本草綱目草部  
第十八卷  
上

本草綱目草部第十七卷下終

ば毒物を吐出して蘇生する。や遅れると死にす。『とある。  
鶏が抱いていまだ雛にならぬ卵を即時に取つて研り爛らし、麻油に和して灌ぎ込  
の血を口に瀝し込むか、或は羊血を灌ぎ込めばし『とある。嶺南衛生方に『親









附錄諸藤二十九種

右附方 舊一百三十七 新三百二十八。

藤黃(三)拾遺

千里及拾遺即ち千里光。

風母(二)始附す。

藤黃(三)拾遺海誤。

落鴈木(二)唐本折傷木、

紫藤開寶

省藤拾遺

藤黃(三)拾遺海誤。

清風藤經圖

南藤開寶

柴金藤經圖

藤黃(三)拾遺海誤。

天仙藤經圖

合水藤海藥

甘藤祐經

藤黃(三)拾遺海誤。

忍冬別錄

千歲蔓別錄

常春藤拾遺

藤黃(三)拾遺海誤。

扶芳藤拾遺

蓮蔓拾遺

絡石經本

藤黃(三)拾遺海誤。

桃經本

葎草唐本

烏攸母唐本

藤黃(三)拾遺海誤。

紫葛唐本

赤地利唐本

蘿摩唐本

風子。

藤黃(三)拾遺海誤。

白英經本

白花藤唐本

白菟(二)霍經本

黃藤綱目

藤黃(三)拾遺海誤。

釣藤別錄

天壽根附す。

通脫木法象

通草經本

藤黃(三)拾遺海誤。

防己經本

剪草日華

血藤附す。

茜根(二)經本

藤黃(三)拾遺海誤。

威靈仙開寶

厥白附す。

陳甘藥白會州藥

白藥子唐本

藤黃(三)拾遺海誤。

ニ作ル。大ニ觀ニ絲ナチ磨絲線

大明。曰く、苗、莖は黄色の絲（黄）に似たものので、根も株もなまい。多く畑の草に附著なつてゐる。丸にするがよく、煮てはよくない。

實をば、仙經でも一般方でも、いづれも補藥とし、酒に一一夜浸して用ゐることに弘景。曰く、田野村落に甚だ多く、皆藍、紵麻、蒿（蒿）などの上（上）に浮生してゐる。その

が淺く、大なるものも荒（荒）を患（患）といふ。功用はいづれも同じ

るものだ。九月に實（實）を採つて暴乾する。色の黄にして細かなものを赤綱といひ、色別。錄に曰く、兔絲子は朝鮮（朝鮮）の川澤、田野に生ずる。草木の上に蔓す

集 解

詳細は木部松蘿の條を見よ。又、兔絲と茯苓（茯苓）とに關する説明は茯苓の條を見よ。

は松上に蔓り、枝が生え、正青色で雜莖がなまいとあるはいづれも正確を得て居る。

松蘿は『とあり、陸機の詩に「兔絲は草上に蔓り、黄色で金のやうだ。松蘿は

それ故にかやうな誤謬（誤謬）となつたのである。張揖の廣雅に「兔丘は兔絲なり、女蘿は

二物は全然別物だ。いづれも爾雅を根據として詩を注釋したたみに誤つて一物とし、

蘿（蘿）とあり、陸佃（陸佃）は『木に在るが女蘿、草に在るが兔絲だ』といつてあるが、この

時珍。曰く、毛詩注に『女蘿、兔絲』とあり、吳普の本草には『兔絲、一名松









後  
字  
大ニ  
觀  
カ  
ノ  
上  
ニ

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。【聖惠方】 【卒】

沈香湯で



むを度とす。る。【事林廣記】陽氣の虚損【簡便方】では、鬼絲子、熟地黄じやくちやう等分を末にし、止

附方

に消化する『とある。

を光澤にし、老を變じて少くし、十日以上試みれば、飲食物が雪に湯を沃そそぐやうに酒で浸して又暴し、酒が盡き返しててかみから搗き篩ふるひ、一回、二錢つづの酒で浸して、人服曰く、抱朴子の仙方單服法に『實一斗を取とり、酒一斗に浸して暴乾し、再び浸し、人の筋脈を助けるのである。

從り枝に感じて成り、中春の上陽に従つて結實するものだ。故に特に人の衛氣を補に發明

尿血を治し、心しんの痹びを潤うるほす【天明】肝臟の風虚を補す【好古】五勞七傷を補し、鬼交泄精いせうせき、服すれば、面黧あいかを去り、野合やがを去り、顔色を悦澤えつたくにする【甄權】腰疼、膝冷、消渴しょうかく、熱中ねつちゆうを去る。久しく婦人の虚冷を治し、精を添へ、髓を益し、腰疼、膝冷、消渴しょうかく、熱中ねつちゆうを去る。久しく男子

二ト 瘡ヲ 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
三ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
四ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
五ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
六ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
七ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
八ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
九ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル  
十ト 瘡ハ 面ヲ 排チ 去ル



ル。本草ノ品ニ難  
レ。收ノ曰野火

漿ノ絲ノ誤。

作。大觀ニ上

作。大觀ニ上  
作。肺。大觀ニ

草砂ノ来チ云。黄  
黄。三ノ黄。雄  
黄。硫。雌

。後陰云。中  
。生眉ノ銀。中  
。道ノ後。中

附錄

赤痛【野狐漿草の汁を搗ける。聖藥方】

要なし。【小兒の頭瘡を煮た湯で頻りに洗ふ。子母秘錄】

附方

碎ぎ、湯に煎して小兒を溶すれば熱を療す【私景】

伏し、草砂を結す。【治】

苗氣味

甘し、平にして毒なし【玉冊】

汁はく、黄、硫、末を

【目】

【目】

【目】

【目】

效があり、胃を開き、食物を落付け、腹脹を去る。久しく服すれば目を明にする。

主冷氣風痺に温にして毒なし。味酸。【藏器】曰く、酸漿草の汁を搗ける。聖藥方】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

【目】

下し、嘔逆を止め、虚勞を補し、人體を悦澤ならしめる。【日】を明にし、水臍を氣を治し、【中】を治し、【別錄】を生ずる。陰中の肌を除去し、熱を養ひ、五臟を經【本】を益す。【主】氣を益し、效逆上氣、勞傷、痿痺、不足を補し、陰を強くし、男子の精を

治主

脾、胃を益す。之を、曰く、從容が、辛、苦、心に入つて肺を補し、甘は中に入つ、酸、鹹は肝に入つて胃を補し、辛、苦、心に入つて肺を補し、甘は中に入つ、氣が輕く、陰中微陽であつて、手の大陰の血分、足の少陰の氣分に入る。時珍曰く、厚く、味が酸し、微く、酸味は古く、好古く、酸味は酸く、苦し、味が厚く、

氣味

補藥に入れるには、熟して用ゐ、嗽藥に入れるには、生で用ゐる。時珍曰く、前時から午後四時までで蒸し、更に漿に一夜浸して乾し、用ゐる。蜜に浸して午

修治

になつて旺になる。棚を作つて延び得るやうにするがよい。取つて種を多くと可能で、その年中に旺になる。また二、三年に子種をえれば、翌年、北方の産は色が黒い。滋補藥に入れるには、必ず北方のものを用ゐるがよい。根を、時珍曰く、五味は、現在のものは、南方の産は色が紅く、

作ル。  
 (九) 大觀ニ撰ニ色ニ  
 (八) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (七) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (六) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (五) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (四) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (三) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (二) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ  
 (一) 大觀ニ撰ニ一ニ條ニ











けなかいつた『るすぢ』。

一十卷

久嗽肺脹【五味二兩、粟殼を白飴で炒

つて半兩を來

四  
一  
二

六子監之

一 丸つゝ水で煎して服す。(衛生家寶方)

【久效の止中】

W  
R  
T  
P

○。此方生方ハ、

眞茶四兩、兩、味子一兩、

甘草五錢

廿七眞子

味子、白麝（麝は白麝と黒麝あり）、等分、を末に

二、錢つゝを生猪肺を炙熟して煎け

細田女に對し

二、三

九一道人入心方を傳

守授され、兩服すると病が遂に發らなく

なつた。(並置) 所方

【重刊】

一。劑を盡く服す

且、日以上の互つて女を御し得る

效力がある。

四時雜錄

水に浸し、揉んで核を

と、再び水洗つて、その核を洗つて餘味を

取ふ毒し砂

鍋匠人乙



慎。曰く、抱朴子に『五味は五行の精であつて、その子には五味がある。淮南公（淮南子）の産を用ゐるがよい。風寒が肺に在るものに、南地の産を用ゐるがよい。地がある。津を生じ、渴を止め、肺を潤し、腎を補す。つまり勞の場合には北地が機。曰く、五味を喘の嗽の治療に使用するには、産地の南、北に依つて區別する必要が味に就てその效用を述べ、それを治病の上<sup>（上）</sup>に現はしたものだ。

好占。曰く、張仲景の八味丸はこれを用ゐて腎を補するのだが、やはり種子の形や時に庚金を輔して耗散の氣を收するものである。

生黃蘗（生黄蘗）を加へて湯に煎じて服させる。その患者をして精神（精神）に加はり、筋力を出せしめる。』蓋し五味子の酸は人參の力を輔けて能く丙火を瀉し、同夏と夏末に、體力が衰へて氣力が發せぬ場合には黄芩（黄芩）を少量の盛元。曰く、孫真人の千金令に『五月には五味を常に服して五臟の氣を補し、盛れ、封じて火の邊（邊）に置き久しうして湯になる。それを任意に飲むのである。を木で細かく搗き、甕（甕）中に百沸をたぎらし、た中にそれを投じ、少量の蜜を入ては源を滋（滋）くに下<sup>（下）</sup>に在つては腎を補するものだ。その服湯の法は、五味子大合



り、熱酒で一錢を服す。自消して神效がある。(保幼大全)  
 湯で頻りに洗ふ。(談野翁種子方)【赤遊風丹】漸次に腫大するには、五味子を焙じて研  
 大の丸にし、陰中數に納れて效を取る。(近效方)【爛弦風眼】五味子、蔓荊子（蔓荊子）の煎  
 を服す。(壽叔微事方)【陰冷】婦人の五味子四兩を末にし、唾液中の唾液で和（和）して更尿  
 二兩、茱萸を七回湯に泡けて五錢を共に香く炒つて末にし、毎朝陳米飲で二錢  
 を養ひ、吳茱萸（吳茱萸）で脾の濕を除けば、それで泄は自から止むもの。だ。五味子を極（極）を去つ  
 水性は下流するから腎水が不足するのである。五味子を用ゐて腎水強くし、五臟  
 脾は濕を惡むもので、濕に濡すれば瀉して困する。困すれば水の處が完全でなくなり、  
 一二回瀉（瀉）し、年を経て止まぬものを腎泄といふ。蓋し陰盛なる爲の現象である。  
 の丸にし、三十九つを醋湯で服す。(經方良方)【五更の腎泄】凡そ五更頃になる  
 以兩脇、竝に背脊の穿痛（穿痛）するは、五味子一兩を赤く炒つて末にし、醋糊で梧子大  
 火毒を出し、茶匙で一二匙をつつを空心に百滾湯（百滾湯）で服す。(劉公石保壽堂方)【腎虛白濁】間  
 布で濾し、好きき蜜二斤を入れ、炭火で緩に熬つて膏にし、瓶に取り收めて五日間



地方(正)。微ハ今ノ安微者

機機曰く、蓬藥蓬藥は微地方微地方では寒毒寒毒といふ。麴麴に沿ひ、蓬蓬になつて莖莖は小

甘甘美美なもののみが正正しくそのもの種種類類に三種三種あるが、四月四月に熟熟し、覆盆覆盆のやうな状態状態で味の

落ち散落ち散らないうのだ。これは今は一一般一般に用用にわれない。

宗宗禪禪曰く、蓬藥蓬藥は覆盆覆盆とは違違ふ。これは別別の一種一種のもので、枯枯れ朽朽ちてて枝枝梗梗が

大大明明曰く、母母子子が蓬藥蓬藥で、樹樹母母が覆盆覆盆子子だ。

ころか、いづれも蓬藥蓬藥を覆盆覆盆子子の根根と主主張張してゐる。

小さく、その苗苗もそれぞれ別別な母母子子だといふ。本草本草は家家はその實際實際の智智識識がないとい

紅紅くして大大きく、その味味酸酸い、葉葉は野薔野薔薇薇に刺刺が有有るといひ、覆盆覆盆子子は

土土良良曰く、現現に藥物藥物採採收收家の説説を聽聽いて見るに、蓬藥蓬藥は蓬藥母母子子に似似たもので、色色

八八九月九月に花花が開開き、十月十月に實實に功功用用の點點では同一同一だ。

地方地方ではこれこれを母母といひ、その地地に生生ずるものはやや晩晩く、三三月に始始めて生生がえ、

兒兒が多多く食食ふもので、五月五月實實を採採る。その苗苗、葉葉は一定一定の採採收收時期時期がない。江江南南

彈彈丸丸の半分半分ほどの下下に柿柿の蒂蒂のやうな蒂蒂があつて、その子子を承承けてゐる。



方。今ハ秦ハ今ノ陝西ノ蘇州地

もので一尺以上にはならぬ。莖、葉みな刺があつて、花は白く、子は赤黄で大きい。頤曰く、蓬蘽は覆盆の苗であつて、處處にあるが、秦、吳に就<sup>あ</sup>中<sup>ちゆう</sup>多い。苗は短い。蘇氏は子のこで、一物の異名だといつたが、いづれも事實でない。る。して見れば蓬蘽は明かに藤蘽のものだ。陶氏は蓬蘽とは根のこだといひ、切韻に『苺の音は茂(み)であつて、その子は覆盆である。蘽は藤である』と。志曰く、蓬蘽とは覆盆の苗、莖のこ、覆盆とは蓬蘽の子のこである。按ずる子を甘しとして果部に列記し、二條に重複したが、甚だしい出鱈<sup>たら</sup>目だ。るに子に酸味があるであつて、根に酸味があるのではない。陶氏は根を酸<sup>さん</sup>として、り、肥えた土地の産は子が大きく、瘠せた土地の産は子が細くて酸<sup>さん</sup>い。かやはない。李氏の『苺の子だ』といふが實際に近い。けれども産地に因つて差異がある。恭曰く、覆盆、蓬蘽は一物の異名である。本來は實を謂ふであつて根のこで、今、薬用にする覆盆は少し異ふ。孰<sup>たしか</sup>れが正しいのか判然しない。が、苺の子のこで、その津汁を美味とする。その核は微細なものだといつてある。なつたとはいふそのものだ。覆盆とは實の名稱である。李當之はこれ一般に食

一種は、樹になつて生ずるもので、その樹の高さは四五尺、葉は櫻桃の葉に似  
この種類は藥には用ゐない。

よく、色は赤く、酢く甜く食して得るものだ。

のもんだ。故に郭璞に註に『藟は葇なりといふたのである。子は覆盆に似て大  
は熟すれば櫻桃のやうに紅いものだ。俗にいふ藟であつて、爾雅にいふ藟そ  
が青く、裏面は淡白色で微し毛がある。小さい白色の花を開き、四月に實の  
一種は、蔓は蓬薬より小く、一本の枝に三枚の葉があつて、その葉は表而

この二種類は共に藥用に供する。

本草にいふ覆盆子で、爾雅に葇は缺なりとあるものである。

らだ。生では青色、熟すれば黒色になる。冬季に苗が潤む。俗にいふ挿田  
色の花を開き、四月に實が成る。子はやはり蓬薬より小く、成る數もまば  
あつて、その葉は小さく、表裏共に青くして光があり、薄くして毛がない。白  
一種は、蓬薬より蔓は小さいが、やはり釣刺<sup>つりばり</sup>があり、一本の枝に五枚の葉が

のだ。本草に謂ふ蓬薬そのものである。

形狀は熟したた樵のやうで扁た。い。冬季にも苗、葉が凋まぬ。俗に割田藤といふも一簇となり、生では青色だが、熟すれば紫色となり、微し黒毛があり、その掌のやうな形狀で、小葉の葉に類似し、表面は青く、裏面は白く、厚くして毛がある。六七月小小白色の花を開き、蒂に就いた實を結ぶ。その實は三四十顆が一つ、一

學者の説はいづれも信憑すべきものがない。

擧げてあるものと比較研究を試みた結果、始めて正確な事實を認め得たが、從來諸時。曰く、このものの種類に凡そ五種ある。予は嘗て親しく採蒐し、一一爾雅に

一は夏熟し、一は秋熟する。何として同物といはれやう。

一は葉母のやうに茎が細く葉が密で、結實が小さくして朶になるやうなものではない。わけが何處にあるやう。覆盆は、茎が粗く葉が疎で、結實が大きくして疎らに散つてゐるに記してあるが、誤だ。江南の覆盆もやはり四月に熟する。やや晩いなどいふ量ほどのものだ。霜が降りてから始め紅くなる。蘇頌の圖經に、これらを覆盆の説容は、葉は密で刺が多く、その實は四五十顆が一朶になり、一朶の實は蓋の容

小便を縮める。これを服用すれば尿器を用ゐる必要がなく、重返にしていていゝ。いゝ。小當<sup>○</sup>之<sup>○</sup>曰<sup>○</sup>、予<sup>○</sup>が覆盆の形に似てゐるからかく名けたのだ。宗<sup>○</sup>前<sup>○</sup>。曰<sup>○</sup>、く、胃腸を益し、

經 大麥母の音はば母(モ)である。挿田蘆の音はば母(ハ)である。烏蘆子(綱目)

塞爾雅(音はケイ)である。缺點(爾雅)西國(草圖)經(事)擧(加)圖

校 正

科學和	名	いばら科(薔薇科)
名	ふくし	
名	いばら科(薔薇科)	
名	ふくし	
和名	いばら科(薔薇科)	
學名	Rubus coreanus, Miq.	

(1) 覆盆子 (別錄上品)

田葉覆分に同じ。

に於て。與惠方(

新。一。

發明 覆盆子の條を見よ。

長く、寒瀟に耐へる【泰】

【木經】突然の劇しき中風で、身熱し、大驚するを療す。【別錄】顔色を蒼し、髪を



を強くし、力を倍し、子を儲けしめる。久しく服すれば身體を軽く、老衰せぬ志。【主 治】五臟を安んじ、精氣を益し、陰を長し、人體を堅固にし、志を微熱なり。

【氣 味】酸し、平にして毒なし【別 錄】曰く、く、鹹し。士。良。曰く、甘く酸し、

覆盆といつた。いづれも臆説であつて信據すべきものがない。

は、蓬蘽を苗、覆盆を子といひ、蘇恭は、同一物だといひ、大明は、樹生のものを、蘇頌は、説明が不完だ。陶弘景は、蓬蘽を根といひ、覆盆を子といひ、馬志、頤るであつて、李富之、陳士良、陳藏器、寇宗奭、汪機五氏の説は實に近しいから、やうに分類して考すれば、蓬蘽と覆盆と、それぞれの實際は確定されて來

は本條にある。

のやうで鮮紅色だ。食はれぬものである。本草に所謂の蛇莓といふものだ。記載一 種は、地に就いて莖を生じ、長さ數寸になり、黄色の花を開き、結實は覆

て、陳藏器の本草に所謂の懸鉤子とあるものだ。これは本條に詳記してある。が、ただ色の紅い點が異つてゐる。俗にこれに麝も應といふ。爾雅にいに山莓であつてあるが、狭く長い。四月に小さい白色の花を開き、結實は覆盆子と一様である







とある。

て仰臥する。三四日を過ぎずして少年の如き視力が回復する。酒、麴、油物を禁ず。』

だの乳汁に、人が八里九里(弱)歩行するほどの間浸し、それを日中に點け

一名覆盆子を取つて日光で曝し乾し、極めて細かに搗いて薄綿裏み、男兒を産

ず冷涙が出るもの、及び青盲、天行目暗等の疾を治す。西國草、一名畢撈伽、

頤曰、く、按ずるに、崔元亮の海上集驗方に『目暗で視力を失ひ、ひ、絶え

發明

止め、濕氣を收める【時珍】

り、目中に滴らせば膚赤を去り、絲筋のやうな蟲を出す【藏器】目を明にし、涙を

葉氣味

【微し酸く鹹し、平にして毒なし】

主治

【揉んで汁を絞る取

で錢を服す。【集簡方】

附方

新。一。【陽事不起】

い。その補益の功は桑椹と同様だ。樹母の場合これと混同して採用されぬ。

種であつて、一は早く熟し、一は晩く熟する。兩者はいづれをも兼ね用ゐる差支な

發明

覆盆と蓬蘽とは功用が大抵相近い。別物ではあるがその實は一類の二

リ。天行目暗ハハ。  
ヲ又アコヒ。キマ障  
コト。青盲和ハ緑障  
五。天行目暗ハハ。



(方)局モ二アノ附ス。第四日種ノ利ヲ合別ニシテ、佳味ヲ用ニシテ、製スルモ、實チ金本水(康)日

稀膏にして、點服すれば、肺氣虛寒を治す【宗爽】汁を取つて、少量の蜜と共に煎し、婦人がこれを食べ、へ、食を好くし、髪を塗れば、髪が白くならぬ【藏器】腎臟を益し、小便を縮める。【これ】男子の腎精弱の陰痿を堅長ならしめる。水で三錢を服す【馬志】ある【雄】【これ】男子の腎精弱の陰痿を堅長ならしめる。朝を益し、勞損、風を強くし、膚を悦澤にし、五臟を安和し、中溫め、力【氣を益し、身體を軽くし、白髪にならなくする】【別錄】虚を補し、絶【氣味】甘し、平にして毒なし【權】辛く、甘く、微熱なり。これ酒を搾取したなら、ば、搗いて薄餅にして、晒し乾し、密封して、貯藏し、使用するとき、酒を搾取して、夜間蒸し、用するは、東流水に、黄葉并皮常を淘り、子を取り、雪【修治】凡そこれを使するは、東流水に、黄葉并皮常を淘り、子を取り、雪【用法】日、局水(康)日









大觀ニ葦ニ作ル。

シトカト記憶ス。  
曲ヲ直ナリ  
葉ニ毛アリ  
刺ニ思フ  
ニ難ト云  
ハト見  
倒ル云  
ハ刺ヲ  
無クハ  
白ニ葉  
毛珍  
説ハ白  
井ニ毛  
珍

根皮

氣味

主治

【治】胎兒が死して下らぬも

葉

主治

【治】燒き研つて水で服すれば、喉中の寒うたまるに主效がある【藏器】

射工、

沙虱の毒を解す【時珍】

【治】搗汁を服す

主治

【治】酒を醒まし、渴を止め、痰を除き、

【藏器】

氣味

【治】酸し、平にして毒なし

孟詵と大明とが、これを覆盆といつたのは誤だ。

り、郭璞の注に『今の木苺に似て大きく、食へるものだ』とある。實は薔苺と呼ぶ。爾雅は山苺なりとある。實色は紅い。現に一般に通じてや。薔苺は小い白色の花を開き、結に似て狭く長い。また地味な葉の青く、毛がなくなり、四月五月になり、その莖は白色で倒れ、刺がある。その葉は細齒が、つやが青く、毛がなくなり、高さ四五尺になり、その莖は白色で倒れ、刺がある。時珍曰く、懸鉤は樹生のもの、高さ四五尺になり、味が甘い。これが相異点である。子のやうな實を結ぶ。これは、採って見ると實を握ると中に実が入り、機曰く、梅苺は、枝種が、軟で刺があるもの、四五月に覆盆

一日二回服し、同時に烏梅を漬けた水を濃くして、蜂蜜を入れて飲む。(時後方)【水】

少つししつひ。【傷美類(要)】(三)【傷寒下部】に糖を生じたり【蛇母汁】(四)【合二】つとつと

附方 舊二、一新。【口瘡】の熱甚しきものは、蛇毒の自然汁半升

傷に傳けられば痛が止まる【時珍】

腫を<sup>は</sup>つし、蛇に<sup>は</sup>傷つけらるゝ【大(明)】<sup>が</sup>移兒の口禁に<sup>は</sup>主効ある。汁を<sup>く</sup>【孟(詵)】湯火

【別録】の傷寒の大熱、及び瘧毒の射工の毒に匹敵し（弘景）【月經を】通し、瘡

汁 氣 味

【甘く酸し、大寒にして毒あり】

主治

【胸腹大熱の止まらぬ】

[illegible]

へば、能く人々を殺すといふ『とあるが、よやうなやつて

菓七葉のものかがある『いとひ、又、『俗に、これを食べ

仇遠の稗史には、  
詠つて  
『蛇草』  
『五』と書さ

あるとあるは、その葉と根とを共に取るのである。

とが同じくなく、その根は甚だ細い。本草に汁を用

その實の形狀は覆盆に似たものだが、表面と裏面と

[illegible][illegible]

藥があり、葉には齒刻がある。四五月に五出の小さい黃花を開き、鮮紅色の實を結ぶ。時珍曰く、この植物は地に就いて細い蔓を引き、節節に根が生え、毎枝に三枚の葉がある。つとれとは異ふ。

がぶ。誤つて食へば腹するものだ。覆盆は苗が長く太く、結實が數顆あり、微し黒毛。機曰く、蛇は莖の長さ一尺にたらず、莖の端にただ一顆の小さい光潔な實を結ぶ。春末、夏初に莖枝のやうな色紅い子実を結ぶ。

だ光潔で小さく、微かな皺がある。花は黄色で、莖藜の花ほどだがやや大きい。宗曰く、田野、道旁、處にある。地に附いて生え、葉は覆盆の子やうで、た子を探り、二月、八月に根を探る。

子は黄で赤く、さながら覆盆そのまゝで、根が敗醬に似てゐる。四月、五月に花は保昇曰く、所在にあるもので、下濕の地に生える。莖の先に三枚の葉があり、花はねる。食へない。いた薬にもせぬのだ。

てぬ。弘景曰く、蛇母は煙や野に多くある。子は赤色で、極めて毒の子に似る。毒が移つておせぬかと思はれるので、一般に食はない。

集解

集解















の尖つたものが雄であつて、凡そこれぞ一種の葉は蒲萄のやうだ。その子は漸年毎に一回生れるが、根は枯死せずして春漸年に苗が枯

【子】 隸 木



十箇の核があつて、その形状は扁く、その形は扁く、やうだ。八九月に採收する。嶺南地方で四く、生で青く、熟すれば紅黄色となり、肉上に軟い刺があり、箇の實毎に三、四くは光る。四月に黄色の花を著け、六月實を結ぶ。その實は(五)稜(りやう)状(じやう)で、色青くして表面を、藤になつて葉を生じ、五(ご)稜(りやう)が、あり、山藥(さんぎやく)のやうな形になつて、色青くして表面を、嶺南(りやうなん)の諸州(しよしゆ)及び杭(かう)越(こ)全(ぜん)岳(たつ)に、いづれにもある。春苗が生ずる。

今(いま)は湖廣(こくわう)の諸州(しよしゆ)及び杭(かう)越(こ)全(ぜん)岳(たつ)に、いづれにもある。春苗が生ずる。

集解

木蟹 志曰く、その核が龍や蟹の形状に似てゐるところから名付けたものだ。

木	名
麗	鑑

白。梁。

その核が蟹や蟹の形状に似てゐるところから名けたもの

一、

(六) 朽樓ハキカラス

○ 2

(五) 山嶺

(四)大觀 = 花 = 作ル

○ 見 子 。

陸軍與京省、州

芳草類草註

附、獲、得、重、視、以

鎮令羅、註、杭、感、入

手刃賊、萬曆(三)

。三。五。七。九。十一。十三。十五。十七。十九。二十一。二十三。二十五。二十七。二十九。三十一。三十三。三十五。三十七。三十九。四十一。四十三。四十五。四十七。四十九。五十一。五十三。五十五。五十七。五十九。六十一。六十三。六十五。六十七。六十九。七十一。七十三。七十五。七十七。七十九。八十一。八十三。八十五。八十七。八十九。九十一。九十三。九十五。九十七。九十九。一百。

要之、此論(二)

○。△。△。△。

中二

者

更望之。其國所。高者。

王草子

二島ノ凡

○、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

---



鼈子仁五兩を漬、猪腰子二斤を批開した中に入れ、串に刺して煨熟し、それを搗き爛  
 木【瘡塊】腹中の【瘡塊】（醫方摘要）。久瘡の母あるも【木鼈子、穿山甲】（穿山甲）。調へて傳ける。直ちに止まる。（善境神方）。痛み甚しきは、木鼈子一箇を醋に磨り、黄蘗、芙蓉、  
 して後、兩脚を伸べる。大に歩行が便利となる。ただ三日白粥を食ふが妙である。  
 て切片した中にその末四錢を入れ、濕紙で包んで煨熟し、空心に米飲で飲下す。服  
 困難なるには、木鼈子四兩を皮を去つて甘遂半兩と末にし、猪腰子一箇を去つ  
 服す。酔つて汗が出れば癰を。夢に秘授した方である。（永類方）。濕瘡脚腫【歩行  
 碎き、再び油が盡き去るまで炒つて二兩桂半兩を入れて末にし、熱酒で二錢を  
 效がある。（劉長春齊意方）。脚氣腫痛【木鼈子仁を一箇毎に二つにし、麩で炒つて切り  
 附方】酒疸脾黄【木鼈子醋に磨つて二二錢を服す。利ければ

へない。

だといひ、或は他の思むものを犯したためたといふ。全然木鼈の罪とばかりはい  
 ると、それほどのものでもないが、或ものは、猪肉と調和せぬから





硬塊（二）  
疹、瘡、癰、腫、肉、結、班。

【癰子】仁を泥のやうに研り、醋で調へて一、二、三、五、回傳ければ效がある。（外科精義） 突  
置いて蒸熟し、食後に食ふ。毎日一服すれば半月で效がある。【小兒の丹】（二） 小兒の丹  
【木鼈】年を経た鼈の腹を二箇を油を去つて研り、雞子白で和して瓶に入れ、瓶の中  
にある人に此の方を傳受して癰を癒えた。數人の治療にこれを實驗して皆效果があつた。  
おれば白から消する。江夏の鐵佛寺の藥和尚がこの病を患つて忍び難く苦んだとき、  
はならぬ——一丸づつを唾で溶化して痔の上に貼れば痛が去る。一夜に一丸づつ用  
帶びたるもの雌雄各五箇を乳細して七丸にし、盆覆ふて濕らせて置く——乾して  
じ、後に洗ふ。一日三回つづつ試み、少量を塗る。○瀨湖集簡方では、木鼈仁の潤を  
木鼈仁三箇を砂で盆で泥のやうに搗り、百沸湯（一） 一鉢を入れて熱に乗して先患部を熏  
自酒風瀉血（一） 木鼈子を桑柴（一） いて性存し、冷えてから未らし、一錢づつを煨葱  
【腸風瀉血】木鼈子を桑柴（一） いて性存し、冷えてから未らし、一錢づつを煨葱  
間置いてまた半分の焼餅で換へて癰が止まつて食思が生ずるものだ。（部人經方）  
を二つに切つた半分一孔を穿（一） けて藥を入れ、熱に乗じて患者の臍上へ置き、二、三時  
置へる。（一） 瘰癧扶壽精方（一） 【瘰癧の禁口】木鼈仁六箇を泥に研つて二分し、麝の焼餅一箇







金(方) 【馬兜鈴二兩を殻、及び膜を去り、酥生兩と盤内に入れてよく拌き、

推すことが出来る。】水腫腹大【喘息するにには、馬兜鈴の前湯を毎日毎服す。】

附方

新二、三、舊

これをを用いて吐かせ。この物が肺を補し得るものでないことはその點からも

肺が去れば肺が平安になる道理であつて、その中に用ゐてある阿膠、糯米は確かに

邪が去れば肺が直接の目的ではなく、熱を清し氣を降すこととを目的としたのである。

肺を清し、苦、辛は能く肺氣を降すものだ。錢氏が阿膠散<sup>あぎょうさん</sup>これを用ゐたのは、

熱の形象がある。故に能く肺に入るのだ。氣は寒で味は苦く微し辛。い。寒は能く肺

時。曰く、馬兜鈴は、體は輕虚で、熱すれば上に懸つて四面に開き、

引續いて止むもの【(阿)】肺氣を清し、肺中の濕熱を去る【(元)】

肺熱、嗽、痰結喘促、血痔癰瘡【(開)】肺氣が上急して坐して呼吸し得ず、效逆が

し。呆く、味厚く、氣薄く、陰中の微陽であつて、手の太陰の經に入る。

【主 治】

【氣 味】 苦、寒にして毒なし。【權 曰く、平なり。時珍曰く、微し苦く辛く

(五) 馬兜鈴、木、根、葉、花、果、實、種、子、皆、有毒、性、寒、味、苦、辛、平、微、毒、治、肺、熱、嗽、痰、結、喘、促、血、痔、癰、瘡、





少時して根が出る。(肘後方)【惡蛇傷】青木香半兩を湯に煎じて飲む。(神珍方)  
 てから洗ふ。(薺精方)【丁腫の復發】馬鈴根を搗き爛し、蜘蛛網で裹んで縛ける。  
 馬鈴、穀精草、荆三稜、川烏頭を炒り、味各分を水で煎じ、先づ煙じ  
 温水で一錢を調へて服す。蠱を消し化して排出し、神效がある。(惠苗方)【腸風瀉血】  
 られるもので、その毒に中り、咽に入つて死せんに、免苗一兩を末にし、  
 效驗がある。『といつた。草蠱の中【毒】は、西良の西、及び嶺南地方で用ゐ  
 出すものだ。なほ吐き盡さぬときは再服する。或は末にして水で調へて服するも  
 呼ぶ『とある。又、支大醫は『免鈴根一兩を末にし、水で煎じて服すれば蠱を吐  
 ふことを慎む。もしなほ差をぬき更に服す。その地方ではこれを三百兩藥と  
 二升で三升に煮取つて三回に分服する。毒は尿に隨つて排出する。十日間毒物を食  
 先づ寒気がして瘴に似た症狀を起さしめる。その際に、京都藤十兩を水一斗、酒  
 は、多く食物中に毒を混ぜて人をして漸次に食事を能にし、胸、背が漸次に脹り、

附方

舊一、新四。【五種の蠱毒】附後方に『席辨刺史の言に、嶺南地方の士民

す【時珍】記載は精義にある。

れば大いに效がある【座本】血氣を治す【大明】大腸を利し、頭風癰痒、禿瘡を治す  
兩を煮て汁を取つて服すれば蠱毒を吐く。又、搗いて末にし、水で調へて丁腫に塗  
熱腫。蛇毒には、水で磨つて泥にし、一日三四回封すれば立ち癒える。水で二一  
毒あり。多服してはならぬ。吐利して止まぬものだ。【主治】鬼疰積聚、諸毒

獨行根

氣味

辛く苦し、冷にして毒あり。大明曰く、毒なし。志く、

の煙で患部を熏するが良し。【日華本草】

煎じて服す。直ちに吐出する。【痔癰腫痛】馬兜鈴を瓶の中で燒き、そ  
うに覺え、嚙んでも下らず、吐いても出ず、心下が熱悶するに、兜鈴を水で  
る。【攝玄方】蛇、蠱の解毒の【毒】飲食中にその毒があつて、なめに咽に何物かあるあ  
大馬兜鈴一箇を燈火の上で燒いて性存し、末にして温酒で服す。立ちに效があ  
して呷ひ、或は嚙む。【簡要齋衆】一切の心痛【大人、小兒、男子、婦人】に拘らず、  
慢火で炒し、甘草を炙いて一兩を末にし、一錢つづの水を一盞で六分に煎し、温

黃芪湯で服す。一日一回。

ものぞ紙重に包んで、しき肉を取つて米にし、一錢を食ふ前に

にこの薬を服用す。『極め効がある。』とある。○重厚、極子藤三、厚く重い。

けつづつ口(三)蓋を飲み、少頃して再び酒を飲んで、錢二つづつを温酒して、未だに、

【腸風下血】華佗中藏經には、『橘藤二子一箇、蛙の付かぬ菓<sup>くわ</sup>子<sup>し</sup>十四箇を焼いて性

【五痔下血】  
 檜藤子を焼いて性を存し、米飲で二錢を服すれば功がある。  
 (寇氏衍義)

附方 舊三、新。一。喉痺腫痛【】  
 煑子<sup>煑<sup>しやう</sup>子<sup>し</sup></sup>、酒、一錢、服す。  
 方。

【開寶】諸種の藥毒を解す【時珍】記載は草木狀にある。

【ある】  
は一、二箇所を割って研り、空腹に熱酒で錢を服す。三服以内で必ず效がある。

【小兒の腹、血痢、瀉血を治す。いづれも灰に焼いて服用す。或

痺に、は、仁を粉にし、微し敷つて水で二、二、二と服す。また大豆に和して顔を漂はへ

仁　氣味　【瀼く甘し、平にしてし毒なし】主治　【五痔、蠱毒、飛尸、喉

○ 子 子 垂

大いば一、二寸で圓く楕い。世間で、多くの中肉を剔り去つて、藥瓢ヤクハツに作つて、腰に





附方

新三。

【預知子丸】心氣不足

三言鼎亂、

مجلس  
وحدود

一切の病を治するに、毎日一二七粒を吞む。三十三粒過ぎずして永く健康をえらる【天明】

婉を催ほし、中惡、失音、髮の脱落、天行瘟疫、一切の蛇、蟲、蠱の咬傷に墜る。

功力は述べ盡せ。痰癰氣塊を治し、宿食を消化し、煩悶を止め、小便を利し、分

【一】切の風を治し、五癆、七傷を補す、のそ

主 治  
【鹽】鹽を殺し、鹽を搗じ、諸書を治す。

子 仁 氣 味

氣味

【 $2\pi$ 】

の功力は予よりも勝れてゐる。山川の住民はこれを無きと叫ぶ。

は、冬に於ては、

てゐる。採収して一寺の明王に納められた。

乙字一〇八、非音、乙字留甲更京てあ

○ ○ ○ ○ ○

[illegible]

紅毛豆の國七五の毎第一。となす。



[子知預]

[illegible]



集解

弘○景○曰く、牽牛は藤になつて生え、花の形は<sup>うん</sup>豆のやうで黄色だ。子

○ 24 物の 2 は 3

『鮎草は、蔓のやうで、結實としてから斷つて見ると形狀が益蝨のやうだ』とある。

形の形容である。西陽雜俎に『登』

金鈴は子形の形、盃、獨傾、狗耳は葉の

。のりふに古の事古の在し票。とい

[illegible]

時。珍。曰。く、近頃世間では、その名の稱にて隠

ふから、かやうな名稱が起つたのだ。

釋名 藥は豊民間に用ゐる始めたるものにて、藥の酬禮に生ずるを率ひて往つたといふ弘景曰



〔來 中 士〕

名  
錄

(目錄) 在首

草金鈴(炮炙論)

（目録）

狗耳草(救荒)

曰  
普  
陀

花位置ニテ園ヲ裁ツカヘテ觀其ノ入藥日ヲ  
トナシテ草重ク用一モ爲ナ  
。花ニテ草重ク用一モ爲ナ

素(1) 子(別錄下品)

和名  
あさかほ

あさかほ



さみだり、三錢つづつを温水で服す。【立方已】(顛)【顛】

根 氣 味 【苦、し、冷】 主 治 【蠱、毒、解、す、は、石、臼、搗、

一匙づつを温酒で調へて服す。尾のやうな蟲が大便秘と共に排出する。(聖惠方)

之乳香三兩を水一斗と銀鍋で煮て五升に煮取つた中に入れ、熱つて膏にして瓶

【蟲】ある癘風　眉落ち、聲變るには、預知子膏——預知子、雄黃各一兩を末にし、

滴らす。腦痛覺をさるゝ幕はなにか。かく校隔ててた一回點ける。(聖董方)

糖火で燈臺として取り出し、少量の仙溜子、黒李子末を投入し、その水を取つて耳中

分をば蓋にするため取つて置き、中、米醋を入れてよく蓋をして置く。

【卒に】  
 卒の耳の響閉【八九月に右瘤を取つて一部位を切り開き、切り取つた部位】

一丸を以て陳臺で英子とてし、  
 一丸を以て人參易で放下。

子、石、畧、講、犬、神、百、二、入、參、地、景、友、藝、毒、一、六、三、天

[illegible]

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

.....



般に多く栽培するもので、その蔓は微紅色で毛がなく、柔い刺があり、切れれば濃汁  
枯れる。白と黒の核は棠核たうかくの核と同様だが、色が深黒なだけである。白い種類は一  
だ。花は瓣にならず、旋花せんかのやうで大きい。その實は蒂に裏まれてゐて、生は青く、  
その蔓には白毛があつて、切れれば白汁が出る。葉は三尖があつて楓の葉のやう  
である。時珍曰く、牽牛は黒、白の二種あつて、黒いものは處處に野生して就中多くあ  
れる。その核は木猴梨子のやうで色が黒い、子が蕎麥に似てゐるといふは誤である。  
宗奭曰く、花は梁花たうかのやうだが但し碧色だ。日出時に開き、日が西に廻ると萎し  
が、あり、黒色と白色の二種類ある。九月後に採收する。  
裏まされ、た毬になり、毬毎に四五箇の子があり、子の大小は蕎麥ほどで三稜  
花は微紅色に碧色を帯び、鼓子花こしけに似て大きく、八月實を結ぶ。實の外部は白皮に  
り付き、高さは一三丈になるものもある。葉は青くして三尖角があり、七月花を開く。  
頤曰く、處處にある。二月種を蒔いて三月苗が生え、藤蔓になつて籬や牆に絡からま  
ふ。赤曰く、この花は旋花に似て碧色だ。黄色ではない。また蘿豆らうとうにも似てゐない。  
は小房とあり、實は黒色で核このやうである。









氣を瀉すれば、氣、血、血を俱に損ぜしむる結果となることがある。『盛なるを盛  
 藥を用て上焦、太陰の氣を泄し、下焦に在り、血分中の氣病であつた。血病に對して  
 うけれども、それは濕なる病の根本は下焦に在り、血分中の氣病であつた。幸<sup>ち</sup>な  
 ない。牽牛がよく濕を泄し、小便を利する位のこととを仲景が知らなかつた筈はな  
 種濕熱、小便不利を治するものには、一藥として危険なる牽牛を犯し用ゐたものが  
 の本人は一向にその過の悔ひへきことには氣が付かない。『いつてある。張仲景の七  
 して久きに互つて服用しつある間には身體の元氣が脱して行くのである。が、そ  
 て來る。その時また服すればまた效があり、效があつて後にはまた瘡する。かやう  
 服して一時の快を取るものを見けるが、その藥を一旦用ゐた後はまた瘡が起つ  
 て用ゐてはならない。現に世間には酒食のため瘡を病んで、多く牽牛の丸、散藥を  
 の人の天年を禍する。故に張文懿は『牽牛人は元氣を脱するものだ、耽<sup>た</sup>嗜<sup>し</sup>る  
 なるからである。その容體を重慮といふ。重くければ必ず死す。輕合<sup>けいご</sup>てもそ  
 て、水を泄し、元氣を泄し、小便を利する。その津液<sup>しんりやく</sup>を竭<sup>きよく</sup>さしめる結果と  
 であるものに、反つて牽牛の大辛熱を用ゐたならば、これは氣味俱に陽の藥であつ

下  
集  
二  
卷



蓋し牽牛なるものは、能く氣分<sup>きぶん</sup>に走つて三焦を通ずるもので、氣が順になれば痰、且つ精神元氣もたゞ爽になつたのであつた。

付、爾來腸結だけを覺<sup>おぼ</sup>えたが、その場合は一服すれば順になり、食慾にも妨な果は擧らない。そこで、牽牛末と皂膏とで丸にして進めたところ、直ぐに通利が效その、では血分に入る氣を通ずる力はなく、いつれも阻<sup>そ</sup>んだるだけであつて、その效不能なのだ。血燥のやうなものではないのであつて、潤劑では留滯し、硝、黄などが下つて腸腑を<sup>たふ</sup>滋すことが、火病を起すといふ次第であつた。ほどほどに一日に一鉢ほどの酸痰を吐<sup>は</sup>き、ば寛<sup>かん</sup>やかになるが、また多く憂鬱で、一たび時珍がその容體を診<sup>み</sup>るに、體格は肥えて脂肪に富んでゐるが、また多くの苦味、苦味の通利薬を服すれば意識を失つたやうになり、かく三十餘年の長きに互つ位、その苦痛分婉よりも甚しく、養血潤燥の薬を服用すれば腸に泥<sup>どろ</sup>んで不快を覺え、同某皇族夫人は、年が七十七に近く、平生腸結病に苦しみ、便通は十日一回取つてはならぬのであつて、また常服すれば暗裡に元氣を傷<sup>いた</sup>ふのである。



ただ病が血分に在るものや、脾、胃が虚弱して痞満するものに一時の快效だけを重するもの、及び大腸の風秘、氣秘を治するに卓然たる殊功のあるもの、腰、背が脹率牛なるものは、水氣が肺に在つて喘満し、腫脹し、下焦が鬱<sup>つ</sup>遏<sup>おさ</sup>して腰、背が脹も多かつたことで、これを根據として論ずるは、蓋し脱線<sup>だつせん</sup>の傾がある。

ただ放棄して置いていたなら、思はれない。況や薬に仲景が用ゐなかつたもの、知つてゐたとして、たゞ必す適當な用法を研究してゐたらうと考へられる。本草の中に編入されてゐなかつたのだ。だから仲景も事實知らなかつたのであつて、大いにその蒙<sup>も</sup>啓<sup>き</sup>に力<sup>ちから</sup>をわけてある。しかし、東漢の時代にはこの薬はむしろ、するやうになつたのだ。李<sup>り</sup>之<sup>し</sup>明<sup>めい</sup>（杲<sup>こう</sup>）はそれに攻撃を加へるつのも、右の説を著し、おられ、劉守真、張子<sup>し</sup>和<sup>わ</sup>など、輩出するに及んで、下劑として通用してゐることを、道用<sup>どうよう</sup>時<sup>とき</sup>曰<sup>いふ</sup>、率<sup>すう</sup>牛<sup>ぎゅう</sup>は、宋以後に北方人間で常にその快速なる一時の效力を好んで用ゐる。白

とあるはこの意味をいつたものだ。この薬を用ゐるには大いに慎重を要する。『ならぬ』



見た。すると、一服で病が滅し、三服にして平癒した。

と考へた。そこで煉實レンじつ、茴香ウイヤウ、穿山甲センさんかくの諸藥に牽牛を倍加し、水煎して服せていには小便を阻み、後には大便を阻むのであつて、病は大腸、膀胱に在るのではない。それは瀉熱の邪よはが精道せいだうに在つて、陰路を塞するもので、病は二陰の間に在る。それ以前に見ても效がなく、予の計使で治療を頼んで來た。予はその容體を観察して、坐るも臥すもならず、七晝夜の間に泣なみ泣なみして苦んだが、醫師が通利藥を用ゐず、外甥の柳喬は、元酒色のため病が多く、下部が極端に腫痛して二便が通ぜず、上下が通快になるのである。

早朝（いちうしやく）葱白（そうはく）一握を入れて煎し、十餘沸して空心に二回に分服する。水は小便と共に排  
臥し得（え）るには、牽牛子二兩を微し炒り、搗いて末にして尿に黒牛の尿に一夜浸し、  
その時に臨んで丸にし、三十九丸を煮湯で服す。【普濟方】水氣浮腫（すいそ）氣促し、坐  
るには、黒牽牛末一兩、厚朴（こうぼく）を制して生兩を末にし、二錢つづつを薑湯で服す。或は  
度とすると。千金方（せんぎんぽう）【濕氣中滿（しつきちゅうまん）】足脛が微腫し、小便が利せず、呼吸が急で咳嗽す  
るには百丸を服す。【醫方捷徑】水腫（すいしう）尿澀（せつ）【牽牛方寸匕を服す。小便の利するを  
飯の糕（かう）一兩を末にし、糊で梧子大の丸にし、五十丸つづつを薑湯で服す。利せんと  
ものだ。』といつた。【備門事親】陰水、陽水、黒牽牛の頭三兩、大黃末三兩、陳米  
苗香一兩を炒つて末にし、二錢つづつを生薑の汁で調へて服す。氣を轉下する  
たやうな法を取る必要がある。それでこの方を禹攻散と名ける。黒牽牛の頭末四兩、  
水の人は、長川（ちやうせん）が氾濫（はんらん）するやうで、やうやうに取らねばいまいから、神禹が水を決  
て食ひ、茶を飲下す。氣を降すが效驗（くわうけん）である。【諸水飲水】【病後張子和平病】は熱し  
【満】白牽牛、黒牽牛各頭末二錢、大麥麴四兩を和して焼餅にして、就寝時に焙（やく）し  
牛兩を末にし、熟蜜で梧子大の丸にし、三十九丸つづつを湯で服す。（冠氏衍義）【水蠱脹





三兩を三日月間水に浸して皂を去り、牽牛子を酒一升で煮乾して焙じて研末し、蜜で梧

づつを薑湯で服し、良久して熱い茶を服す。【腸瀉血】牽牛五兩、

で錢を服す。【赤土少量を研末し、胎転するを覺えな時、白糯米煎湯

にする。牽牛一兩、水で調へて服す。【妊婦の臨月に胎を滑

なる。牽牛一兩、粉一字を加へて服す。【小兒の夜啼

に、大黃を煨き、檳榔と各末一錢を取り、五分つを蜜湯で調へて服す。【小兒の夜啼

ける。急に治療せねば旦夕に死する。白牽牛を生炒し、黒牽牛を生炒と名

鼻が張り、悶亂し、欬嗽し、煩渴し、痰が潮して聲の暖れるものも馬脾風と名

【馬脾風病】小兒が急驚し、肺脹し、喘滿し、胸高く、氣急し、脇が縮み、

れて毎日に洗ふ。【斑】黒牽牛末を雞子清で調へて夜傅け、朝洗ふ。

【顔面の粉刺】米粉のやうな子生したるは、黒牽牛末を同量に脂藥中に入

黒牽牛を三晝夜酒に浸して末にし、先づ汁で顔を擦つてからそれと塗る。【顔面風刺

し、五九つづつを葱湯で服し、して一時間ほど睡る。【牽牛子】





書くへきで、音は福鑑(フクリヤセ)である。根を薬に入れる。別に旋覆、音は斑伏(セツペ)とだ。その根が筋に似てゐるところから一名筋根といふ。炳曰く、旋覆は葛旋と經(美草)(別錄)天劍草(綱目)種子花(圖經)鼓子花(圖經)純陽草(圖

釋名 旋花 (本草綱目) 經上品 和名 旋花 學名 Calystegia Scapularis, R. Br. 科 旋花科

痛が止まつた。(許學士本草方)

やまぬときとは隔日に再び試みる。予は嘗てこの病があつたが、發る毎に一服するとどに切り、五更の初刻に水盞で煮熟し、その湯のまゝ温服すれば痛が已む。なほ共によく研りませ、三分してその一分毎に白麴三匙と水で和し、捍いて基石ほにし、自然に半分は生、半分は熟せしめてその末一兩を取り、硫黄二錢半を入れて氣滯の腰痛【牽牛を多少に拘らず新瓦を赤く焼いた上へ載せ、撓き動かさぬやう研末して井華水で調へ、仰で鼻中にその汁を灌ぎ込む。涎が出て癒える。(聖濟錄)

ル。近時此ノ一チ即ガフ邊ヲ置キ、ハクノ姑ノ二名實ハ從卷ノ今ノ植物氣カフニ考ルニ、イタヤナリナリ、シダ、ヘデラ、Wall.)、花ノ味野ヲ、(一)



妙である。これを濟世散と名ける。【方】三仙。龍。三。仙。方。【】黑牽牛七粒、砂仁一粒を熬つて一夜露らし、翌日の五更時刻に溫服する。大便秘からその膿血を排出するとして氣壯なる患者には、淋瀝もたば、瀝もたなく。【直指方】一、一切の癰疽、發背、無名腫毒、年少で泄して腎に入れる方法で、一、縦横、雙方に功力を利用するのである。惡水がそれを切り開いた腎中に入れ、竹葉で包んで煨熱し、空に食つて溫酒で飲下す。腎を三日間酒色、油膩を忌む。【備門事親】【】漏瘡水溢、これは腎虛である。牽牛二錢半を嚼んで食ふ。膿血を取り下して效がある。その人の體質等重量を加減して用ゐる。飲物を攝らずして翌朝空心にし、猪肉四兩を炙いて切片し、その末を藥けて細かに飲は、白牽牛の頭四兩、沒藥くつやく一錢を細末にし、藥をせんとして先に、毎日夜間で盡し、白米飯三匙を食つて壓し下す。白虫を取り下して效がある。またある方で白牽牛各一兩を炒つて末にし、猪肉四兩を切り碎いて炒り熟し、その末を藥けて食ない。病が減じて後は毎日五九つを米飲で服す。【本事方】【】蟲の毒ある痔漏、黒、子の丸にし、一日一回、七九つを空心に酒で服す。黄なる物を下出する。差が差間



時珍曰、旋花は野や圃や溝や處から嫌きらはらず生え、節から節と蔓延するもので、

十日も水をかけ置けば、苗が生える。韓保昇の説が、正確だ。

いものて、取り除いて、いまでも花をうけ開く。四月五日、土に置く。

宗○爽○曰く、今は河北、山西、關、陝の野や畑に甚だ多く、非常に鋤き絶や難し

味が甘美だ。筋根と名け、二月、八月に根を採つて日光乾す。

藥は蔓に似て狭く長く、花は紅く、根には毛節がある。い。蒸し煮れば食料になり、

保昇曰く、これらは旋富の花であつて、所在の川澤にいつついてもあるものだが。

集解 別錄に曰く、旋花は豫州の平靈に生ずる。五月採つて陰乾する。

集解

は色か、粉紅牡丹に似てゐるのので、俗に紅牡丹べにたんと呼ぶ。

「さす、軍隊で吹く鼓子<sup>こ</sup>のやうだ。それで旋花、鼓子<sup>こ</sup>なとど呼んだのだ。千葉の一種」

いふ。その意味は、その花の形が似てゐるといふのだ。時珍曰く、その花は瓣にな

だ。一名、*腸草*（*intcho*）といふは、その形の形容である。宗○*○*曰く、世俗にこれを戴く花と

録に『その根は筋を續くに主效がある。』とある。それで南方の地で續筋根と呼ぶの

7 (カ)とといふ草があつて、花を薬に入れる。今てこれを旋雷と呼ぶは誤だ。例曰く、別

山草類 秦艽ノ註ヲ見

部 丹砂河、北、沐、關西、石

(三) 潑州ハ水部井泉。

ト理想像

之居ルが、多分の

「此、今」

人我日本之米也此

nica, Choisy. ^ 1

沙ノ思フ品ヲ我カヒ

氏「レヘー」園藝

Calystegia 屬

中外。事。カ。ア。ル。名。辭。

地ニ人リ來テ、意













(五) 中藏經ノ誤。

【水】【清方】一、凌骨花、一、兩を搗碎たぎき、水、一盞半で、一盞に煎して、二回に分服する。

後に四物湯を服用す。(五) 丹溪要

【排便】【下血】凌骨花を酒に浸して頻りに飲む。

【附方】【婦人の血崩】凌骨花を末にし、二錢を酒で服用し、（新二）

るものだ。故に産乳、崩漏の諸疾、及び血熱で風を生ずる證に主效がある。

を帶びてゐる。手、足の陰厥いんげつの經の藥であつて、血分に行つてよく血中の伏火を去

【發明】時珍曰く、凌骨花、及び根は、甘、酸にして寒である。莖、葉は苦

痺熱痛を治し、血を涼し、肌を生ず（時珍）

【藥性】熱風、身痒、遊風、風癢、血瘀、帶下、花、及び根も同功である（大明）【氣味】

【主治】【氣味】苦し、平、無毒にして、寒なり【氣味】【主治】【氣味】寒なり（大明）

ある【氣味】熱毒風、刺風、婦人の血脂遊風、崩中帶下（大明）

後奔血が定らずして淋瀝するもの。熱風、風癢、血閉、寒熱羸瘦（大明）【氣味】

【主治】【氣味】婦人出産の餘病、崩中、癢、血閉、寒熱羸瘦（大明）

露が目に入れば昏瞶する。

時珍曰く、花は腦を傷めるから鼻に近づけて香を聞かなくてはならぬ。花の



伯は辛しといひ、扁鵲は苦鹹しといひ、黃帝は甘し、毒なしといふ。權けん曰いく、齒く、岐ぎ、雷らい、神しん、農のう、曰いく、普ふ。【毒なしにして微寒にして酸し、】

氣味

花根も同じ。

する。

兜たう鈴にんのやうだ。根は長くしてやうはり兜鈴根のやうな形である。秋後に採つて陰乾する。なり、八月に豆の莢えいのやうな長さ三寸ばかりの莢を結ぶ。その子は輕薄で櫛し仁に、馬ば牛うほどで頭に五ご瓣はんを開き、赭せ黄わう色しきで細こ點てんがあり、秋深くなるとその色が更に赤くは青い。夏から秋にかけて花を開く。その花は一本の枝に十數じう葉えふ著ちやくいて、大いさ牽けん色しきは初はつに枝が生え、一本の枝に數枚の葉があり、その葉は尖かひつて長く、齒く、齒く、春に枝が生え、數丈までも延びて、久しく年を経たものは藤かひの太さ杯ほどになる。上に伸び、高さ凌りやう霄せうは、野生のものは纔さか數尺さうのだけだが、木があるところに附いて時とき形かたち。曰いく、凌りやう霄せうは、野生のものは纔さか數尺さうのだけだが、木があるところに附いて婦人科の藥に用ゐる。

家で延びる。花は黄色で、夏期中盛んなものだ。現に醫家では、多く花を採つてその木の頂端のちががある。初めは臺になつて生え、大木に依つて伸び、久しくしてその木の頂端のちががある。今、今處處にこれにもある。山中に多く生え、人家の庭や畑にも栽培する。





【別錄】熱毒風氣除之、赤白痢、腸風、血止、結通、齒牙

【るす回復を肌を生しに肉を杖傷に金瘡、諸惡瘡、疽癰、疔除き、邪逆の氣を除き、止め、

根 氣 味 苦 冷 毒 治 主

三錢つゝを溫酒で服す。(聖惠方)

附方

【上集】  
蘇子  
あつ  
て  
よ  
う  
な  
事  
々  
々  
【註】

それである。【本】(巻)

別錄。曰く、微寒あり。

氣味 酸、温、有毒、辛、平。

か、香氣の馥郁たることは格別なものだ。

ある悲微露といふはて花の露だといふてだ

[illegible]

木香と名ける。いづれも艶な香氣があつて人々に

大なるものをば佛ぶつ見けん笑せうと名け、小なるものをば



泥ノ註ヲ見ユ。參照ノ南番ハ土部島參

(五) 水の分は、エロニヨリ、ルマヲ生、成カ  
 加、ハ、實、日、康(木村)曰、

スルビ多ム疑チル口リ  
ニ分シ離ル有別セ  
ニ成

時歐洲ノ實ノ紅  
得ヲエルト。又  
R. can-  
近。

番ノラハハの。ハタ  
ハヲモ聞知トエルチ  
一回トハユエハ素所  
ノトハトハハ素所

實ノ色モ或ハ然ラ















古方では全部そのまゝを用ゐたのだが、後世では子と瓢とをそれぞれ分けて用ゐる。

取つて皮を去り、搗爛たぎらして水で澄まして粉を取つて用ゐる。時珍曰く、栝櫟は、

も殻皮、革膜、及び油を去つて用ゐる。根も用ゐるが、それは太ざ二三箇のを

は、形が長く、皮が赤く、蒂が粗い。陰人は櫟を服し、陽人は栝を服する。いづれ

の別なものである。栝といふのは、圓く黄色で皮が厚く、蒂たぎが小さい。櫟といふのも

実 修治 櫟曰く、凡そこれを使用するに、皮、子、莖、根、それぞれ効果を

熬り取つた油は燈火用になる。

のもので、殻の色は褐、仁の色は緑、脂が多くて青臭い。炒り乾し搗き爛して水で

う。だ。山家小見はやりこれを食べ、内部たぎに扁い子があり、大いざ絲瓜の子ほど

に堪へない。實は圓く長く、青い時は瓜のやうだが、黄になつた時は熟柿のや

たものは結實して粉があるが、夏季に掘つたものには筋が、かあつて粉がなく、用ゐる

時珍曰く、その根は下に直たぎく生え、年久しきものは長さ数尺になる。秋後に掘つ

も同じ。根も白薬と名けて用ゐる。皮が黄で肉が白いいものだ。

黄色になる。その形は正圓のものもあり、鏡かがみつて長いものもあるが、功用はいづれ



つ撮つて嘔む。（方）【肺痰】胸膈の痰滿するに、瓜蒌仁、半夏（方）を湯にて七回ひ去り、盆に盛つて飯の上で蒸し、飯が熟したと取り出し、それを時々に三四匙づ茶湯一鍾、蜜一鍾、大なる熟瓜を皮を去り、その瓢を煮る。【熱欬止ぬ】濃き食ふ。その藥全部を用盡せば病がなくなる。（方）【熱欬止ぬ】濃き痰喘（氣急）蘇合（二）個、明礬を棗一箇を焼いて性を存して研末し、熟羅（方）に攪け餅にして陰乾し、研末して糊で梧子大の丸にし、五七丸を湯で服す。（方）【和してその汁を嘔む】。楊起簡便方（方）【欬痰あるも】熟瓜十箇、明礬二兩を搗き和し、瓜蒌を搗き爛して汁を絞り、蜜等分を入れ、白礬（方）を加へて熱膏し、頻りに含ん薑汁を澄まして濃く淀んだもので彈子大の丸にして嚥む。（方）【痰乾欬】熟

附方

舊二十、新八

をしたものだ。

それで本來苦くないことを知らない、ただ記述の文字にのみ随つて、つじけ解釋とつてゐる。蓋し無已無味はこの意味を理解してゐないから、『苦寒が熱を瀉するのだ。』







【胸痺痰】を重尿に浸し晒して一兩五錢を末にし、蜜で調へて嚙み溶かす。(丹發心法)

【婦人の夜嗽】痰嗽し、月經不順で身體が瘦せるには、瓜蒌仁一兩、青黛、香附（劉河間量明）

一、日三回、錢をつつを温水で溶して服す。効があつたならば止める。

は、瓜蒌實一箇を子去つて末にし、寒食麴で和して餅にし、黄に炙つて再び研末

二錢をつつを葱白湯で服す。(聖惠方)【小兒の痰喘】効嗽し、膈熱し、久しく痰えぬに

な音の間えるには、桔樓實を去つて焙じて一兩、神（神）麴（麴）を炒つて半兩を末にし、

【飲酒の痰】飲酒の痰に滯は、腹中に水聲のやう

し、數匙をつつ毎日食ふ。ある男は二十歳でこの病に罹り、これを服して癒えた。

【酒痰の嗽】この方を用いて肺を救ふ。瓜蒌仁、青黛（青黛）等分を研末し、薑汁、蜜で

肺（肺）一、片を薄く切つた中に參り入れ、一日二回、炙熟し冷して嚙む。(聖濟錄)

に、烏梅肉五十五箇を焙り、杏仁二十箇を皮尖を去り、末にして一、捻つて猪

に薑湯で服す。(醫和齋生方)【肺痿で嗽血の止まぬもの】桔樓五十箇を瓢のまゝ丸焙

泡けて焙じ研り、各一兩を薑汁で作つた糊で梧子大の丸にし、五十丸をつつを食後







本草綱目卷第十八上

時。形。根。は。味。甘。く。微。し。苦。く。酸。し。莖。葉。は。味。が。酸。し。酸。の。能。く。津。

枯。燥。を。潤。し、津。液。を。通。し。行。す。ら。す。の。だ。故。に。渴。に。對。し。て。適。當。の。藥。な。の。で。あ。る。

成。無。已。曰。く、津。液。が。不。足。す。れ。ば。渴。と。な。る。結。核。根。は、味。が。苦。く、微。寒。で。あ。り、

は、こ。れ。以。外。に。よ。く。除。く。も。は。な。い。辛。く、酸。の。も。と。共。に。用。い。れ。ば。腫。氣。を。導。く。

呆。曰。く、結。核。根。は。純。陰。の。も。の。で、煩。渴。を。解。し、津。液。を。行。す。心。中。の。枯。涸。す。る。に。

發。明。恭。曰。く、根。で。作。つ。た。粉。は。潔。白。で。美。し。く、こ。れ。を。食。へ。ば。虛。熱。の。人。に。よ。し。

背。痔。癰。瘻。を。消。し、膿。を。排。し、肌。を。生。じ、肉。を。長。じ、撲。損。の。瘀。血。を。消。す。【大明

小。便。を。止。め、月。經。を。利。通。す。】【別。錄】熱。狂。時。疾。を。治。し、小。腸。を。通。し、腫。毒、乳。癰、發。

胃。中。の。癰。熱、八。疸。で。身。體、而。部。が。黃。色。に。な。り、唇。乾。き、口。燥。き、呼。吸。の。短。き。除。き、

主。治。】消。渴。身。熱、煩。滿。大。熱。虛。を。補。し、中。を。安。し、經。傷。を。續。く。【本。經】腸、

之。曰。く、枸。杞。が。使。と。な。る。乾。薑。を。惡。み、牛。膝、乾。漆。を。畏。れ、烏。頭。と。反。す。

氣。味。苦。し、寒。に。し。て。毒。な。し。時。珍。曰。く、甘。く。微。し。苦。く。酸。し、微。寒。な。り。

し、そ。の。汁。を。澄。ま。し。て。晒。乾。し。用。い。ぬ。る。

切。つ。て。水。に。浸。し、日。毎。に。そ。の。水。を。換。へ。て。四。五。日。取。出。し、搗。搗。い。て。泥。に。し。て。こ。布。で。漚。





乳房腫乳吹房炎及

ス、故ニ此ヲ之  
主、藥ヲ好シ  
風濕退歩ノ困  
症百歩ヲ行ス  
府カ平ノ病  
カ病ノ勞  
後

酒に醗し、それを久しく服するが甚だ良し。(。時後方)【産後の吹乳】硬く腫れて疼  
【幾も經を過せぬ耳聾】桔樓根三斤を細かに切り、水で煮てその汁を普通醗すやうに  
樓根を尖に削り、臘猪脂で煎じて三沸し、それ三日耳間を塞げば癒える。(。時後方) 桔  
草一錢半を水で煎じ、酒を入れて服す。(。金効心經) 【卒にかの烘烘と鳴るもの】  
癒える。(。本草蒙生) 【小兒の囊腫】小兒の膝を按摩しなからず飲下す。直に煎  
じ溶らせて一一夜露し、翌朝低い椅子に坐つて手で午六時から二時まで浸し、微し煎  
んで陰囊を暖め、花粉五錢を酒に、花粉一錢を極痛の偏疳に、集簡方(。米飲で服す) 一、錢つ  
し、樓根末半錢を乳汁で調へて服す。(。聖惠方) 【虛熱欬嗽】天花粉一兩、人參三錢を末に  
樓根末半錢を乳汁で調へて服す。(。聖惠方) 【小兒の熱病】桔樓根の汁二合を取つて大匙とむ  
膚、節肉、顔、目にまでみな黄なるには、生桔樓根の汁二合を取つて大匙とむ  
小、便と共に排出する。(。小兒の發黃) 【小兒の發黃】小兒の發黃は再服する。(。楊起簡便方) 皮  
す。(。外臺秘要) 【百病渴】桔樓根と煎つた牡蠣等分を散にし、飲で方寸匕を服す。





同名のものが甚だ多いから、區別に注意を要する。

『土瓜』といつてあるが、これも別の一種のもので、この土瓜のこてはなはい。異類

あるところを見るに、菟瓜といふは別の一種のものだ。又、<sup>(1)</sup>苺非も郭璞はやはり

『鑿姑』又、<sup>(2)</sup>鉤蘗と名けるといつて

ある『』といつたが、郭璞自身にまた土瓜

菟瓜とあり、郭璞の注に『土瓜に似て

また菟瓜ともいふ。按ずるに、爾雅に<sup>(3)</sup>實、

州、房州地方ではこれを老鴉瓜と呼び、

月、王瓜生ずとあるはこのものだ。均

ある。赤瓟子(衍義)野甜瓜(綱目)師姑亭(土宿)公龔(頌曰く、月令に『四

て

釋名

土瓜(本經)

鉤蘗(郭璞)

老鴉瓜(圖經)

馬兜瓜(經)

王瓜 (本經中品)

科 學 和 名 名 稱  
Thladiantha dubia, Bunge.  
ウリ科(蒔蘿科)

作。爾雅ニ非効ニ

註見。金部石

均州。金部石

花。開花形

花。開花形

花。開花形

花。開花形

花。開花形

花。開花形

花。開花形

花。開花形

【別錄】暑熱、中

主治

【氣味】酸、し、寒にして毒なし

葉

葉

十日餘で癒えた。(周密齊東野語)

した中に入れ、米泔汁で煮熱して切つて食ふ。子の次女がこの病の時、これをして服し

方は上に同じ。【障】後の目、蛇を洗ひ、等分をして未にして羊子肝を批開

傳け、日毎に三回易へれば自から出る。(崔元亮海上方)【針】刺の肉に入らるもの

裏む。熱が除き、痛が同時に止まる。(葛洪肘後方)【箭】鏃の出ぬも、桔槔根を搗いて

を空心に淡薑湯で服す。(簡便方)【折】傷の腫痛、桔槔根を搗いて塗り、重布で患部を

天花粉、川芎せきん各四兩、槐花わいけ一兩を末にし、米糊で梧子大の丸にし、七八丸つ

【天泡瘡】(cinn)天花粉、滑石等分を末にし、水で調へて搽る。(普濟方)【楊梅天泡

に塗つて貼る。○楊文蔚方では、桔槔根、赤小豆等分を末にし、醋で調へて塗る。

腫の初期、孟詵の食療では、桔槔根を苦酒で熬り、燥ふわして搗き、紙

存して研末し、飲で方寸匕を服す。或は五錢を酒、水で煎じて服す。(楊氏產乳)【癰

に、溫酒で二錢づつを服す。(李仲南水類方)【乳汁】の出し、桔槔根を焼いて性

痛するものは、輕ければ乳、重ければ乳癰となる。桔槔根末一兩、乳香一錢を末

天泡瘡、楊梅瘡。

白。この根は二三尺深さに掘つて取れば正しいものが取れる。江西地方では、肥葛根は似ないが、ただ桔梗根の小さいのやうだ。澄し取つた粉は甚だ賦かて熟すると紅色のもとも黄色のものと二種がある。皮はやはり粗澀なものだ。根は六七月に五出で黄色の小い花が簇つて開き、葉は青く、背面は淡く、粗澀で光らない。葉は圓く、馬蹄のやうな形で尖があり、青面は青く、背面は淡く、粗澀で光らない。時珍曰、王瓜は三月に苗が生え、その莖には鬚が多く、いちち如へる。そ

ゐる。

黄色の根が三五本相連つて生え、大指ほどの太さのものだ。根と子と兩<sup>ふたつ</sup>に藥に用今一は一般にこれを赤電子と呼ぶ。その根が即ち土瓜根であつて、細根の上<sup>うへ</sup>にまた尖つて長く、七八月に熟して紅赤色になり、殻<sup>か</sup>の中の子<sup>こ</sup>は蟬<sup>せみ</sup>の頭<sup>かぶ</sup>のやうなものだ。宗<sup>そう</sup>爽曰、王瓜は、殻<sup>か</sup>が徑一寸、長二寸、上部は微し圓く、下部は

れてゐる。

似てゐるが、根の形状が同じくない。黄痘、破血の治療には南方のものが大いに勝<sup>まさ</sup>つてゐる。子<sup>こ</sup>が葉ほどの大いさで鬚<sup>ひげ</sup>と連り、皮が黄で肉が白く、苗と子とはよく



作<sup>ル</sup>。大觀ニ但チ圓ニ

ノ南。魯ノ山東者

熟すれば赤くなくなる。根は葛に似て細く、繆が多い。これを土瓜根といふ。北方の地、刺がある。五月黄色の花を開き、花の下に彈丸ほどの子を結び、その子は生は青く、毛、赤く、四月苗が生えて蔓が延び、葉は枯樓の葉に似て、但だ文<sup>ま</sup>がなくなき、毛、甚しい繆だ。

鄧玄は、月令の四月、王瓜生ずる『とあるに注して『これは莢<sup>つわん</sup>だ』といつたが、は彈丸ほどになる。その根は單行の小方に入れるだけ大方の藥<sup>つわん</sup>に入れない。弘景曰く、現に土瓜は尾敷<sup>おし</sup>の邊<sup>へ</sup>の籬<sup>い</sup>などに生え、子と熟すると赤くなくなり、大い月根を採つて陰乾する。

三。根を採つて陰乾する。

月令に曰く、魯地の平澤、田野、及び人家の垣根の間に生ずる。

集解

これは地黄の苗を婆娑<sup>ばさ</sup>と呼ぶと夫婦一對のやうなものだ。ふ。老鴉瓜などいふ。一枚の葉の下に一本の鬚<sup>ひげ</sup>があるところから、俚人は公鬚と呼ぶ。この瓜は雹<sup>こほり</sup>子に似て、熟すれば色が赤くなり、鴉<sup>から</sup>が喜んで食ふ。それで俗に赤雹、根の味が瓜のやうだから土瓜と名けたといふが、王の字を用ゐたわけが判らない。或は、時。曰く、土瓜は、その根に土臭い臭氣があり、その實が瓜に似てゐる。



ナ引ク。  
(ハ) 大観。  
(ニ) 附後方

ニ停  
ル。急  
腹  
部

不  
通。  
大  
小  
便

なほ出ぬときは再服する。(ハ) 【汁】の如き尿の出るもの【腎虚】である。王瓜散——王  
にてある。土瓜根汁一小升を早朝に温服する。正午頃に小便から黄水が出るものだ。  
同以上必要なし。(ニ) 黄疽の黒く變じたもの【醫師も容易に治療し兼ねるも  
三。】小兒の發黃【土瓜根の生の搗汁三合を與へて服す。】  
を利し、顔面の黒きもの、面瘡を治す【時珍】吐、下するものである【驚】大小便  
も根、及び葉の搗汁を取つて少しづつ服用す。小兒の驚、疳積、痰癰に主效がある。いづれ  
を破り、胎を落す【大明】酒黄病で壯熱し心の煩悶するもの。膿を排し、撲損を治し、癰血を消し、癰  
疾、瘰癧、腫、留血を散す。婦人の帶下、不通。乳汁を下し、小便の頻數にして禁  
ぜざるもの、酒黄病で壯熱し心の煩悶するもの、四肢骨節中の水を逐ひ、馬骨で刺した瘡を治す【別錄】天行熱  
血、月經閉止、寒熱酸疼。氣を益し、聲を癒す【本經】諸種の邪氣、熱結、鼠瘻を  
能く人を吐かす。これを取つて汁は雄、汞を制す。【主治】瘰癧、内瘻、  
根 氣 味 【苦】寒にして毒なし【平】平なり。藏器曰く、小毒あり、

そなた土地に栽培して根を取り、味は山藥のやうだ。

である。<sup>(三)</sup>南康、<sup>(四)</sup>廬陵地方のものは立派なもので、肉が多くて筋が少く、味が甘い。土中に深く入った大なるものほどよいし、それを破り裂いて日光乾して用ゐる。弘景曰、即ち今の葛根のこと、世間でいづれも蒸して食ふそのものだ。これ別録曰く、葛根は<sup>(一)</sup>汝山の山谷に生ずる。五月根を採つて曬乾する。

**集解**

黄斤の意味は判ない。

草冠を付けたもので、同じ發音だ。鹿が食ふ九種の草の内の一種だから鹿<sup>(五)</sup>といふ。雞齊<sup>(六)</sup>本經<sup>(七)</sup>別錄<sup>(八)</sup>鹿藿<sup>(九)</sup>別錄<sup>(一〇)</sup>黄斤<sup>(一一)</sup>別錄<sup>(一二)</sup>葛の字は葛の字に

**釋名**

開寶の葛粉を併せ入る。

**校正**

葛<sup>(一三)</sup> 本經中品<sup>(一四)</sup> 和名<sup>(一五)</sup> 學名<sup>(一六)</sup> *Tuaria triloba*, Makino.  
科名<sup>(一七)</sup> 豆科<sup>(一八)</sup>

地黄<sup>(一九)</sup>二兩、黄連<sup>(二〇)</sup>半兩と末にし、蜜で梧子大の丸にし、米飲で三十丸を服す。<sup>(二一)</sup>指南方未し、空心に錢を無灰酒で服す。<sup>(二二)</sup>集驗方<sup>(二三)</sup>【大腸下血】王瓜<sup>(二四)</sup>を兩焼いて性を存し、研

者ニ縣南二今ノ管ノ郡名、  
宋縣南二今ノ管ノ郡名、  
石部花乳ノ漢註名、  
見

出ス入直凡ノ大藤ノ其ノ草ニ本ヲスル、  
品元來地鮮日本、  
其支那朝日、  
(一) 汝山ノ漢註名、  
(二) 汝山ノ漢註名、  
(三) 汝山ノ漢註名、  
(四) 汝山ノ漢註名、  
(五) 鹿<sup>(五)</sup>といふ、  
(六) 雞齊<sup>(六)</sup>、  
(七) 本經<sup>(七)</sup>、  
(八) 別錄<sup>(八)</sup>、  
(九) 鹿藿<sup>(九)</sup>、  
(一〇) 別錄<sup>(一〇)</sup>、  
(一一) 黄斤<sup>(一一)</sup>、  
(一二) 別錄<sup>(一二)</sup>、  
(一三) 葛<sup>(一三)</sup>、  
(一四) 本經中品<sup>(一四)</sup>、  
(一五) 和名<sup>(一五)</sup>、  
(一六) 學名<sup>(一六)</sup>、  
(一七) 科名<sup>(一七)</sup>、  
(一八) 豆科<sup>(一八)</sup>、  
(一九) 地黄<sup>(一九)</sup>、  
(二〇) 黄連<sup>(二〇)</sup>、  
(二一) 米飲<sup>(二一)</sup>、  
(二二) 集驗方<sup>(二二)</sup>、  
(二三) 大腸下血<sup>(二三)</sup>、  
(二四) 王瓜<sup>(二四)</sup>、  
(二五) 指南方<sup>(二五)</sup>、



ある。聖濟錄

子

氣味

【酸く苦し、平にして毒なし】

主治

【生で用うれば心、肺を

潤

し、

黄病を治す。

炒つて用うれば肺痿吐血、

腸風瀉血、

赤白痢を治す【大明】

【鹽しほ毒どくに主效がある】

【反胃吐食はんゐ せき】

【時珍ししん】

附方

新入。

【消渴飲水】

電瓜でんかを皮を去り、

毎食後に二三兩を嚙む。五七回

で瘡を酒で服す。【聖惠方しんゑ ほう】

【傳尸勞瘵でんし ほう さい】

【赤電見、俗に王瓜と呼ぶものを焙じて末にし、一

錢

錢

つづつを酒で服す。【十神藥書じゅうしん ぎやく しょ】

【反胃吐食】

馬見を燈火の上で焼いて性を存し、一

錢

錢

に好々棗肉平胃散末二錢を入れて酒で服す。食物が落付く。馬電見とは野甜瓜のてん かんの

とで、北方諸地に多くある。【丹溪要略たんぎ ぎやく】

痰熱頭風たん ねつ とう ふう】

懸栝樓けん かく 楼一個、赤電見七個を焙し、

大

力子、即ち牛旁子を焙じて四兩と末にし、毎食後、茶或は酒で三錢つづつを服す。

【筋骨の痛】

【馬電見子炒ば でん けん じ ちやう】

【集簡方しゅう かん ほう】

【赤目で痛み瀼ながるも

つて口を開かせて末にし、一日二回、酒で一錢を服す。【集簡方しゅう かん ほう】

【筋骨の痛】

【馬電見子炒ば でん けん じ ちやう】

【集簡方しゅう かん ほう】

【赤目で痛み瀼ながるも

を九月、十月に探つて日光で乾し、槐花を炒り、赤芍薬と等分を末にし、就寢時に

【忍び難きは、籬かきに實みつた瓜瓢の、大いさ弾丸ほどで小さく圓く刺のあるもの

【忍び難きは、籬かきに實みつた瓜瓢の、大いさ弾丸ほどで小さく圓く刺のあるもの

【忍び難きは、籬かきに實みつた瓜瓢の、大いさ弾丸ほどで小さく圓く刺のあるもの

【忍び難きは、籬かきに實みつた瓜瓢の、大いさ弾丸ほどで小さく圓く刺のあるもの





恐らく、表虚して反て癰癰を増すものだ。

慶亨曰く、凡そ癰疽<sup>うみづ</sup>に紅點の已に現れたものは、葛根升麻湯を用ひてはならぬ。

る。

入ることに、あたかも兎賊を引き込んで一家を破壊するやうなものであ  
すぐに升麻、葛根を服してこれを發してはならぬ。これは反て邪氣を引いて陽明に  
薬なのだ。太陽に初めて病があり、まだ陽明に入らずして頭痛する場合は、  
破るやうに痛むは陽明の風だから葛根、葱白湯<sup>そうはくとう</sup>を用ひて、これは陽明の仙  
路を斷つためであつて、この物も太陽の薬だから用ひたといふのではな  
い、又、葛根<sup>くわこん</sup>、黄芩<sup>わうじん</sup>、連翹<sup>れんせう</sup>、黄芩湯<sup>わうじんとう</sup>を用ひてあるが、これは太陽から陽明に入る  
らぬ。張仲景が太陽、陽明の合病を治する桂枝湯の内には麻黄、葛根を加へてな  
にその症狀を除くものがない。けれども胃氣を傷る恐があるから多く用ひてはな  
元素曰く、陽を升らせ、津を生ずるものであつて、脾虚で渴するにこの薬以外  
に主效があつて、肌を解し、腠理を發する點を用ひたものだ。

頤曰く、張仲景が傷寒を治するに用ひたものに葛根湯といふがある。それは大熱







るが尤も佳し。(傷寒類要)【時氣頭痛】壯熱するに、生葛根を洗淨して搗いた汁一なるに、葛根四兩、水二升に、一升を入れ、半升に煮取つて服す。生薑汁を加へて取つて天行時氣のすへ、兼ね療じてゐるが、初期に頭痛し内熱を覺え、脈の洪【方附】數種の傷寒【凡庸の醫師には判別がつかぬ。現に藥

萬五十八新

とこの對象は遙かに異つてゐる。

ら見て、この二味の藥はいづれも輕揚であり、發散するのだが、その主として入る葛根なるものは陽明の經の藥で兼て脾の經に入る。脾は肌肉を主るものだ。結果か、蓋し麻黄なるものは太陽の經の藥で兼て肺の經に入る。肺は皮毛を主るものだ。時珍曰、本草の十劑の説に輕は實を去るもので、麻黄、葛根の屬だ』とある。發散するが、三、痞疹の出で難きものを發するが四である。

の徐用。曰く、葛根は氣、味と薄く、輕く上行して微降し、陽中又、肌熱を解し、脾胃虛弱の泄瀉を治する聖藥である。

呆曰く、乾葛はその氣が輕浮であつて、胃の氣を鼓舞し、上行して津液を生ずる。

山南、峡中に生ずる。葉は枸杞に似て、根は葛のやうで色が黒い。  
 氣の羸弱に主效があり、人の性を健にする。久しく服すれば風緩、偏風を治す。  
 鐵葛拾遺（藏器）曰く、根——味甘し、溫にして毒なし。一切の風血

附錄

（聖惠方）

吞めず、食物も食へぬには、葛蔓を灰に燒き、一字を乳汁で和して點ければ瘡をさる。  
 小兒の口瘡【麻豆】の【小兒】の【葛蔓】を灰に燒き、水で調へて傳ければ消く。  
 婦人の吹乳【葛蔓】を灰に燒き、一錢を酒で服す。三服で效が

附方

消す【時珍】

蔓 主 治 卒かの喉痺には、燒き研つて方寸匕を水で服す【蘇恭】 癰腫を

葉 主 治

末と共に末にして酒で服す。酒を飲んで酔はぬ。【腸風下血】時珍

葛花 氣 味

主 治 穀に同じ。

【酒を消す】別錄 弘景曰く、小豆花の乾

子ノ江ノ峡中ハ見。類。草。風。二  
 子ノ江ノ峡中ハ見。類。草。風。二  
 子ノ江ノ峡中ハ見。類。草。風。二

腫。五。二  
 癰。子ノ細。子ノ瘡





狼<sup>ハシ</sup>子<sup>シ</sup>と名ける。皂莢のやうな角<sup>ツノ</sup>を生<sup>ハ</sup>るものだ。交州、廣州から太常へ納入するものも  
もは雞<sup>トリ</sup>屎<sup>ノ</sup>根<sup>ネ</sup>といふもので、黄環ではな<sup>い</sup>。これは花が紫色のもので、その子<sup>コ</sup>を  
飲<sup>ノミ</sup>むと解<sup>トク</sup>す。それが眞<sup>マコト</sup>の黄環だ。現に太常で時藏<sup>トクザウ</sup>されるもので、劍南から納入する  
れに近<sup>チカ</sup>い。葛根と取り誤<sup>アヤマ</sup>つてこれを食<sup>タビ</sup>ふと吐<sup>ハク</sup>、利<sup>リ</sup>して止<sup>トメ</sup>まぬが、その場<sup>バ</sup>合<sup>ガ</sup>は土漿<sup>ドシヤウ</sup>を  
六寸七寸あり、根<sup>ネ</sup>はやば葛<sup>カ</sup>の類<sup>ルイ</sup>だ。陶氏<sup>トウシ</sup>が『防已<sup>ホウイ</sup>に似<sup>ニ</sup>てゐる』といふものは、その  
なつて生<sup>ハ</sup>えるもので、太いものは莖<sup>コ</sup>の徑<sup>キヤウ</sup>に現<sup>ハ</sup>て、太いものは莖<sup>コ</sup>の徑<sup>キヤウ</sup>に  
現<sup>ハ</sup>て、これも庭や畑に栽培してゐる。藤<sup>フドウ</sup>に  
稀<sup>ハ</sup>だ。巴<sup>ハ</sup>西<sup>シ</sup>地方<sup>トウフ</sup>ではこれを葛<sup>カ</sup>と<sup>ハ</sup>いひ、  
く、他の地<sup>チ</sup>にはあるにはあつて、やばり  
多<sup>オホク</sup>。曰<sup>イハレ</sup>、黄環はただ陽<sup>ヨウ</sup>だけに甚<sup>オホク</sup>だ  
死<sup>シ</sup>ぬ。それ<sup>レ</sup>を水中<sup>スイジュウ</sup>に投<sup>ナゲ</sup>ぎ、  
交<sup>コウ</sup>、廣<sup>クワウ</sup>に産<sup>サン</sup>する。形<sup>ケイ</sup>の扁<sup>ヘン</sup>た<sup>い</sup>も、これを修治<sup>シュジ</sup>して、難木<sup>ナンボク</sup>で搗<sup>ウス</sup>き、  
に用<sup>ヨウ</sup>ゐることは甚<sup>オホク</sup>だ。稀<sup>ハ</sup>なもので、種<sup>タネ</sup>商<sup>ショウ</sup>でも識<sup>シ</sup>るものが少<sup>オホク</sup>い。又<sup>マタ</sup>、曰<sup>イハレ</sup>、  
あるはこの物<sup>モノ</sup>だ。或<sup>アル</sup>は、『これは大戟<sup>ダイキ</sup>の花<sup>ハナ</sup>だ』といふが、それは誤<sup>アヤマ</sup>に相違<sup>サマダヒ</sup>ない。藥



〔環 狼 子〕  
——子 駭 狼——

蜜ノ註<sup>ミツノチュ</sup>西<sup>シ</sup>見<sup>ミ</sup>ハ水<sup>スイ</sup>部<sup>ブ</sup>露<sup>ロ</sup>

ノ註<sup>ノチュ</sup>交<sup>コウ</sup>、廣<sup>クワウ</sup>ハ金<sup>キン</sup>部<sup>ブ</sup>金<sup>キン</sup>









である——詰の字の音は命(メノ)であつて、名つけ呼ぶである。

垢(カ)を浣へば二種共に淨になる。門冬を浣と呼び、浣草を門冬といふの

で詰けたもの、數種名稱は付せられてあるもの、結局一物の二種類なのだ。

滑かだ。いづれも門冬である。俗に、顛棘、浣草といふのは、それぞれ形状によつ

て滑<sup>カ</sup>、曰く、この草には二種あつて、一、種は昔に刺があつて、瀼<sup>ダツ</sup>、一種は刺がなく

百部根といふがあつて、これも相するものだが、た昔に刺があつたに相異なる。

をいふか、或はこの草そのものが門冬のものであるであらうと思はれる。又、

これ以外に別に門冬なるものはない。恐らくは門冬なるものはその中の一種のも

と顛<sup>テン</sup>勤<sup>キン</sup>と名くるものだ、やはり似たもの、これでは類を浣へば清くなる。

この説は桐君の説と混する。現に一般に採收するはいづれも刺もあるもので、

かこしこれは相似てゐるといふだけ、門冬そのものでない、『按ずるに、

るものだ。現に越地方ではこれを浣と呼び、灰を用ゐるに勝るといつてゐる。し

根を採んで湯に入れば、それで毛織<sup>モオリ</sup>を浣<sup>ス</sup>と、絨<sup>ジョウ</sup>紵<sup>ヂョ</sup>の類を浣つたやうに純白にな

冬<sup>フユ</sup>は葦の間に逆刺がある。若い葉の滑<sup>スベ</sup>かなものをば締體と呼び、一名顛棘といふ。

ハ  
二綿<sup>ニワタ</sup>。絨<sup>ジョウ</sup>。毛織<sup>モオリ</sup>物、紵<sup>ヂョ</sup>。  
ハト。黄<sup>ワウ</sup>色ノ重



吊、その上に攤<sup>の</sup>けて曝<sup>ばう</sup>乾<sup>かん</sup>して用ゐる。

一 伏<sup>ふく</sup>の時、間<sup>かん</sup>蒸<sup>じょう</sup>し、萬<sup>ばん</sup>遍<sup>べん</sup>く酒<sup>しゅ</sup>を注<sup>つ</sup>いで更に火<sup>ひ</sup>を添<sup>そへ</sup>へて蒸<sup>じょう</sup>し、地上<sup>ちじやう</sup>二尺<sup>にじふ</sup>の高<sup>たか</sup>さに柵<sup>さく</sup>を

敷<sup>ふ</sup>く、曝<sup>ばう</sup>乾<sup>かん</sup>して用ゐる。これを探<sup>たん</sup>取<sup>しゅ</sup>したならば、皮<sup>かわ</sup>と心<sup>こころ</sup>とを去<sup>さ</sup>り、柳<sup>りゅう</sup>木<sup>ぼく</sup>柴<sup>さい</sup>を焚<sup>たき</sup>いて

り、曝<sup>ばう</sup>乾<sup>かん</sup>して用ゐる。

頌<sup>しょう</sup>曰<sup>い</sup>く、二、三、七、八、月に根<sup>こん</sup>を探<sup>たん</sup>り、蒸<sup>じょう</sup>して皮<sup>かわ</sup>を剝<sup>は</sup>去<sup>さ</sup>り、四<sup>し</sup>つ、五<sup>ご</sup>つに破<sup>やぶ</sup>いて心<sup>こころ</sup>を去<sup>さ</sup>

もではな

煮<sup>に</sup>て飲<sup>の</sup>むに作<sup>さ</sup>つて用ゐ、健康<sup>けんかう</sup>によいといふことだが、しかしそれは事實<sup>じじふ</sup>の棘<sup>げき</sup>刺<sup>さ</sup>その  
必<sup>かならず</sup>ず口<sup>くち</sup>中<sup>ちゆう</sup>の陽<sup>やう</sup>光<sup>かう</sup>に曝<sup>ばう</sup>し、或<sup>ある</sup>は火<sup>ひ</sup>で烘<sup>ほ</sup>めて乾<sup>かん</sup>してやりやうは潤<sup>じゆん</sup>があつて搗<sup>たき</sup>難<sup>なん</sup>いから、  
食<sup>く</sup>へば甚<sup>し</sup>だに甘<sup>かん</sup>美<sup>み</sup>で飢<sup>う</sup>を止<sup>とど</sup>めるものだ。曝<sup>ばう</sup>乾<sup>かん</sup>してやりやうは潤<sup>じゆん</sup>があつて搗<sup>たき</sup>難<sup>なん</sup>いから、  
根<sup>こん</sup> 治<sup>ち</sup> 弘<sup>くわう</sup>曰<sup>い</sup>く、門<sup>もん</sup>冬<sup>とう</sup>を探<sup>たん</sup>取<sup>しゅ</sup>したならば、蒸<sup>じょう</sup>して皮<sup>かわ</sup>を剝<sup>は</sup>去<sup>さ</sup>る。これ

栽培<sup>さいたい</sup>されるが、育<sup>そだ</sup>つて晩<sup>ばん</sup>れる。

時<sup>とき</sup>曰<sup>い</sup>く、苗<sup>めう</sup>が生<sup>せい</sup>きたと、やうはり沃<sup>わく</sup>地<sup>ち</sup>に移<sup>うつ</sup>して栽培<sup>さいたい</sup>するがよ

といつてある。

或<sup>ある</sup>は散<sup>さん</sup>にし、また汁<sup>じゆ</sup>を取<sup>と</sup>つて酒<sup>しゅ</sup>に作<sup>さ</sup>つて服<sup>ふく</sup>するが、散<sup>さん</sup>する方が佳<sup>よ</sup>いやうだ『

作<sup>さく</sup>二 大<sup>だい</sup>觀<sup>くわん</sup>二 酒<sup>しゅ</sup>ニ 液<sup>えき</sup>ニ



れも鈍<sup>に</sup>いものだ。山中生活に入つたときとは、これを蒸し煮て食へば穀食を断ち得る。その氣の臭いものにはこれに次ぐ。これを服食すれば、氣を下しめしめる效力はあるが、その水の近傍の低地に生え、葉が細い、微し黄に似て、根が長く、味に苦が多く、禹<sup>う</sup>錫<sup>しやく</sup>曰く、抱朴子に『高地に生じ、根短く、味甜<sup>あま</sup>く、氣香しいものを上等品とす

ろがな。

幹が粗く、甚だ類似してゐない。嶺南のものには花がない。その他は別に異ふとして同時に撮<sup>まづ</sup>み取る。頗る百部の根と似たものだ。（二）洛中に産するものは葉が大きく、長さは一三寸だ。大いのが勝れてゐる。一株に本、二十本生えてゐる根を無くして自然に結する。その根は白色、或は紫色で、大さ手の指ほどで圓く實もあつて、秋黒色の子を結ぶ。その子は根の枝の旁<sup>わき</sup>に著くものだ。三伏の後に花の天門冬と名けるものだ。夏細い白色の花を著け、また黄色のもの、また紫色のものも刺のないものもある。それで、葉は細い、散つてゐる。いづつにもなる。葉は昔<sup>むかし</sup>のやうで極めて尖つて細いが、疎<sup>から</sup>で滑で逆刺がある。また澀つ

頌<sup>う</sup>曰く、處處にあるものだ。春生えて藤になり、蔓<sup>つたな</sup>の大さ股<sup>こ</sup>ほど、高さ一丈餘



り、癢癢し臥ふすこととを好み、足下が熱あつして痛むものに主效がある【好古】燥を潤す。風熱ふうねつの煩悶ぼんもんを去る【大明】心病しんびょうで嘔おう吐とするものが乾き、心が痛み、渴かつしてて飲物を欲しがす。心しんを鎮しんめ、五臟ござうを潤うるほし、五勞ごらう七傷しちしやうで吐血とけつするものを補おぎなひ、嗽せきを治し、痰たんを消しょうば肌體きたいを滑澤くわくさくにし、色いろを白しろく淨きよかにし、身體しんたい上じやうの一切いっけつの惡氣あくき、不潔ふけつの痰たんを除のぞく【甄權】煮くて食くへ、肺氣はいき逆さか、喘息ぜんし促せき急きふ、肺はい萎し去をり、肌き膚ふを去をり、寒熱かんねつを去をり、肺氣はいきを保定ぼうていし、去をる。【主 治】諸種の劇しい風濕で偏痺するもの。骨髓こつねいを強つよくし、三蟲さんちゆうを殺ころし、伏尸ふくしを去をる。【本經】氣きを去をる。久ひさく服くすれば身體しんたいを輕かろくし、氣力きりきを益えきし、天年てんねんを延のべ、飢う多おほな【別錄】肺はいの氣きを保定ぼうていし、寒熱かんねつを去をり、肌き膚ふを去をり、養やしなひ、小便せうべんを利きす。冷ひやにして能よく補おぎなす【別錄】中ちゆう毒どくした場合あひあひには、滓汁しじで解とくす。搗汁たうしは雄黃ゆうわう、礪砂りさを制とす。青あおを畏おそる。損そん之の曰いふく、天門冬てんもんとうを服くしたとき鯉魚りぎよを食くふことを禁かぎずる。誤まちつて食くつ足あしの少陰せういんの經けいの氣き分ぶんに入いる藥やくである。之の曰いふく、垣けん地黃ちわう、貝母かいぼが使もちとなる。陰いん、氣きは寒さ、味あじは微こし苦くして辛からい。氣きは薄はくく味あじは厚あつく、陽中やうちゆうの陰いんであつて、手の太陰たいういん、氣きは寒さ、味あじは微こし苦くして辛からい。氣きは薄はくく味あじは厚あつく、甘かんし、大寒たいかんなり、好古こうこ曰いふく、

氣味

附方

舊三、三、新十四。

【服食法】

『八九月天門冬の根を採り、  
天門冬てんもんとうの根を採り、

以、能く大腸を利するものだからである。

しては、必ず腸滑を病み、反つて瘡疾を發するものだ。この物は性寒にして潤ほ  
るに腎の氣を通ずるのである。滋補の方に入れるには、諸種の藥を合くはせて用  
下時珍曰く、天門冬は、金を清し、火を降し、水の上升を益するものだから、能  
とを服すれば、寒を畏れなくなり、大寒の時衣えでゐても汗が出る『』とある。

百餘年であつた『』とある。聖化經には『天門冬、茯苓等つうわく分ぶんを末にして毎に方寸  
細い髪がまた生れたとあり『』太原の甘始は、天門冬を服してこの世に在ること三  
憤曰く、列仙傳に赤松子は、天門冬を食つて一旦落ちた齒が再び生はえ更り、

ち、一日の間に三百里（郭里五十里）を歩行した『』とある。

するが就中善し。杜紫微はこれをを服して八十八人の妾を御し、百四十歳の長壽を保  
すれば、筋、髓を強くし、顔色を移ろはしめぬ。煉つた松脂と共に蜜で丸にして服  
間繼續つづいてすれば、體力の壯健になること尤ついでや黃精に倍する神速力がある。一二日繼續



二五五 作湯液。本草。天手  
 二五五 車前、地黃、貝母、天門冬、茯苓、人參、茯苓、天門冬、  
 二五五 車前、地黃、貝母、天門冬、茯苓、人參、茯苓、天門冬、

或は散にして酒で服するなり、或は搗汁を液膏にするなりして服するがよし。百日  
 或は散にして酒で服するなり、或は搗汁を液膏にするなりして服するがよし。百日  
 或は散にして酒で服するなり、或は搗汁を液膏にするなりして服するがよし。百日

馬。曰く、抱朴子に『山中生活に入つたときは、天門冬を蒸し煮て食ふがよし。  
 黄一斤を用ゐてある。これなら君薬もあり、使薬もあるわけだ。  
 いものだ。この故に張三丰が胡濙尚書に與へた長生不老の方には、天門冬三斤、地  
 であつて、君薬を缺くか、若しくは使薬を缺いては、それは行であつて功果がな  
 の使となるもの、地黄、車前は麥門冬の使となるもの、茯苓は人參の使となるもの  
 趙繼宗曰く、五薬は生脈に相違ないが、しかし、生地黄、貝母は天門冬  
 る。これは上焦に於いて、特に寸口に對して作用を顯はす關係である。  
 すきものであつて、天門冬、五味、杞子同様脈を生かすの劑であ  
 好古曰く、手の太陰、足の少陰の經の營、衛が枯涸するには、濕劑を用ゐて潤ほ  
 わけだ。  
 が燥けば凝つて痰となるのであるが、潤劑を得れば化痰する。所謂痰の本を治する  
 うするものだ。故に痰を清する殊功を擧げる。蓋し腎し津液を主するもので、その津





祖傳經驗の方である。(廣博稟正傳)

好酒で瀉してその汁を頓服する。なほ效なきときは再服すれば必ず癒える。これは、新たに掘つた天門冬三兩を洗淨して沙盆で細に搗り、

煉蜜で彈子大の丸にし、一丸つづつを嚙む。これは僧居寮の所傳の方である。

連年の瘡口瘡癒えぬには、天門冬、麥門冬をいづれをも心を去り、女參と等分に

する。天門冬を曝乾し、蜜と共に搗いて丸にし、それで日毎に洗面する。(聖濟總錄)

偏墜【天門冬三錢、烏藥錢五、水で煎して服す。(吳球活人統)】顔の黒きを白く

末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。久しく服するがよし。(外臺秘要)】小腸

鳴くやうに鳴り、脇に引いて牽痛するには、天門冬を皮を去つて曝し、搗いて

草を去つたものを煎湯で服す。(活法機要)】風の發作すれば吐き、耳が蟬の

から汁を取つて熬膏したものと和して梧子大の丸にし、毎服五十丸を道邊散から

氣喘するには、天門冬十兩、麥門冬八兩をいづれをも心を去つて末にし、生地黃三斤



用にすゑるもよし(孟詵食療)。婦人の骨蒸【煩熱し、寝汗を出し、口が乾き、引飲し、去つて煮て食ふ。或は曝乾して末にし、蜜で丸にして服するが尤も佳し。また洗面を服す。鯉魚を忌む(千金方)。肺勞【の風熱、渴を止め、熱を去る。天門冬を度と心をす(蒙古活法機要)。虚勞で身體で痛むもの【天門冬末を一回、酒で方寸匕つづつを服す。した棗肉を搗き和して梧子大の丸にし、一日三回、食前に三十九つづつを酒で服酒をそそぎ、九回蒸し九回晒し、乾いてから秤るのである。それに人參一兩の末、天門冬を心を去り、生地黃と各二兩を用ゐる。先づ二味を柳ひ導ひに入れて二十丸つづつを茶で服す(簡便方)。陰を滋くし、血を養ふ【下元を温補する。三才丸、去り、その肉四兩と火に當てず晒し乾して共に搗き、梧子大の丸にし、一日三回、洗つて心と去り、その肉二十兩を右で搗き爛らし、五味子水を洗つて核を浸し、陰虛火動、痰があつて、燥劑を用ゐるわけに行かぬには、天門冬一斤を水に浸して丸にし得るまで煎じ、一日三回、杏仁ほとの大い丸の丸を服す(肘後方)。で丸が燥いて渴せぬには、生天門冬の搗汁一斗、酒一斗、一升、柴菴かん合あを罈か咽が動ずるとは酒で服す(醫方摘要)。肺痿嗽【嗽涎沫を吐き、胸の内が温として





ト(ハ)耳ノ門ハ耳ノ孔ノコ

ル。(セ)大ニ觀ニ再服ニ作  
用也。リ。チハス之チノ利  
炮藥ハ日邦生藥及家  
藝井邦産藥除(用ノ  
白從我樹ノ鐵園  
ユ。南等生藥及家  
煎汁人産藥除(用ノ

類が耳に入らるゝ【さ】と【さ】百部を炒つて研り、生油で一、二字を調へて耳門上に置く。  
【さ】百部根四兩を酒に一升に一夜漬け、一日一回、一升つづつを温する。【外臺秘要】蟲  
細く、一株の根に百餘本の細根があるものだ。楊氏經方【誤】銅錢を呑みたと  
根は、一名天門冬、一名百奶といひ、形狀は葱頭やうなものなり、苗、葉は柔かで  
臭く感ずるやうになれば、水が尿に従つて排出し、腫は自から消するのだ。百條  
か採み、それで器にした薬の上を蓋ひ、帛で包んで押へる。一兩日の中が軟  
新鮮な百條根を洗ひ搗いて器の上に乗せ、更に糯米飯に蒸し、水、酒半合を排せて軟  
を加へ、外臺秘要では、一飴一斤を加へる。【千金方】全身の腫【腫】【腫】たばかりの  
を取つて飴のやうに煎じ、一日三回、一、二、三寸方寸つづつを服す——深師の方では、蜜二斤  
にし、二、三、九つづつを温水で服す。【三】年の【嗽】百部根二十斤を搗き、汁  
り、水で三五沸煮て泥に研り、熟蜜を入れた中にその末を入れ、杏仁<sup>あんじ</sup>を皮を去つて炒  
部丸——百部を炒り、麻黄<sup>まわう</sup>を節を去り、各七錢を末にし、杏仁<sup>あんじ</sup>を皮を去つて炒  
けて炙き乾し、發病の都度<sup>みや</sup>人に知られぬやうに含んで汁を嘔む。【小兒の寒嗽】百  
煎膏し、嘔み、○普濟方では、卒<sup>は</sup>かの効の止ぬを治す。百部根を火の上に懸



民間ニハハ各部根ノ

一〇七

明子言一入東醫

一(一)二(二)三(三)

心膽性ハニ退中ノ興

作ニ著シキニ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

性ハ退中ノ興

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附方】

【發明】

【主治】

【氣味】

【用法】

【附註】

【考證】

【按語】

【集解】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

【附錄】

【別錄】

てわるか、難小て、  
 粒を<sup>か</sup>に<sup>わ</sup>、  
 の、  
 の、  
 の、

てす結ぶ。子にいはれかあり、  
素戔嗚尊スサノヲミコの例。

の頃、葛の花のやうな黄白色の花を開い

葉のやうであつても光澤がない。夏、秋、

[illegible]

春苗か、生え、竹や木、塙壁なとて、臺に延す

河南の栢城縣の勝つてゐる。

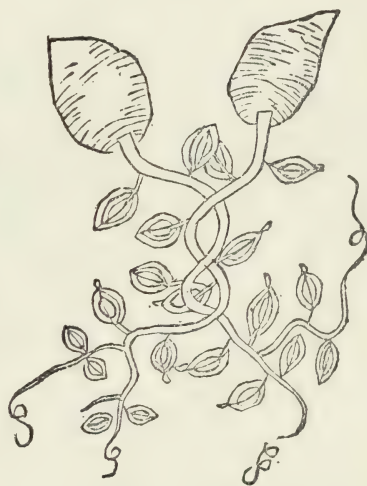
のいづれにあつては  
西洛の嵩山及び

[illegible]

上

○

○昔、九敵を薙りて、  
そゝに衣し



集解

大、高物ノ木村(康)曰、此物ノ重生(藥學)曰、(四一七)四、

八十七

大夏二年、北夏(三)

三

學  
。不  
是二  
知也  
學

今ハ廣西有鬱林

五、五、五

之。四。道。一。所。

6

(四) 栢城縣、未詳。

三  
二  
一

---



得て、やはり長命を保つたといふことである。かやうな珍しい事實を聞いたか  
だ黒かつた。首烏と同郷で親交の李安期といふものも、竊にこの薬を服する方  
首烏であつて、首烏もこれを飲んで數人の子孫を儲け、百三十三歳にして頭髪が  
へて服させたので、これも六十歳の長壽を保つた。その延秀が生んだ子が即ち  
けた。そこで名をも改めたいといふ次第であつた。又、その子の延秀にも與  
疾病は悉く全癒し、白髪は黒く、容貌は若くなくなり、十年間に數人の男子を儲  
それらを常服し、更に服量を二に増加して一箇年を経過した。すると在來の諸  
つたものが頗る强健になつたらしい。それで以來、頗る有望に感じたので、怠  
ろが七日経つと、何となく性的な衝動を感じ始め、數箇月経つと、生來であ  
た。そこで田兒は早速それを末にし、空心に酒で一錢ヒツツを服をしてみた。こ  
あるものだ。恐らく神仙の薬であらう。なぜそれを服せぬのかといふ話であつ  
は世の子といふものが出來ぬといふのだが、この藤はそれには不思議な功  
修道士が來たとき、田兒がその草の如何なるものかを知るかをなかつた。そ  
し



堪ならなかつたので、翌朝起つときにその根を掘り持ち歸つて同輩に訊ねて見た。  
さ合つて良久してまた離れ、離れてはまた抱き絡もむ。田兒は如何にも不思議で  
前にある二株の藤を見ると、互に三尺隔つて生えてゐるのだが、たが、たがと目  
活に入つてゐた。あるとき山酒ひざけの酔心地よく、草枕横はつてゐたが、たがと目  
るまで妻も子もなく、早くから道教の方術ほうじゆつに心を寄せて師に就いて山中の修道生  
嗣しは本の名を田兒といひ、生來生殖機關が弱小でその機能を缺き、年五十八に能  
何首烏こくしやくは順州南河縣の人である。父の名を延秀といつた。能

と題する一篇の文を著作してある。ここに全文を掲げる。

が、茅山ぼうさんの老道士に遇つてその話を聞き傳へ、またそれを聞いた李翺りやうが何首烏傳  
み、その人名をこの草の名に命けたのであつて、唐の元和七年に、僧文象なるもの  
この薬草は本來の名は交藤といふのだが、何首烏なる者が服したといふ話柄に因  
ひは、春期に根を採り、秋期に花を採り、九蒸九曝して服するものだといふ。  
甜瓜かんかに似てゐる。赤、白の二種あつて、赤いものが雄、白いものが雌である。  
秋、冬期間に根を採るのだが、大なるものは拳ほどあつて、各々五稜瓣ごりやうはんがあり、小



月更に曝す。服用する時には、皮を去つて末にし、酒で服するが最も良し。疾病  
 うちに皮を損じてはならぬ。それを烈日で曝乾し、器に入れて密封して、時藏し、毎  
 の日を擇んで雌と雄とを共に採り、潤ふてて曝乾し、間に布帛で泥を拭ひ去る。生  
 が交接する。或は鹽化して見えなくなるといふ。春末夏中、秋初の三期に暗臺  
 黄白、雌は黄だ。その根雌と雄が三尺ばかりの間隔に生え、夜になると苗が  
 のやうで背は偏だ。みな聖生で相對せぬ。雌、雄の別があつて、雄は苗の色  
 諸地方に産したものだ。いづれも禾稔こねのやうな苗で、葉は光澤があり、形は桃  
 夜合と名け、四には地精と名け、五には何首鳥と名ける。二には交藤と名け、三には  
 功力は盡く述べ難い。この草は、一には野苗と名け、二には止血して久痢に入る  
 痿黄、産後の諸疾、赤白帶下、毒氣の腹に入つて久痢して止まぬもの等に對する  
 を壯にし、容色ようしきの移ろひを駐め、髪かみの白を黒くし、天年を延べ、婦人の惡血、氣  
 氣心痛、積年の勞瘦、痰癰、風虛、敗劣を治し、筋力を長じ、精髓を益し、氣冷  
 何首鳥は、味甘し、性溫にして毒なし。茯苓ふくくわうが、使となる。五痔、病、氣冷

(五) 敗劣ノ神經衰弱

(六) 註見。處州。士部。白養。

誤。通ぜ、スル、然レ、亦、意、備  
二作、金、校、本、背、備  
(七)

作ル、大觀二年生ヲ上  
試三



發明

發明 時珍曰、何首烏は足厥陰、少陰の藥であつて、白皮も白氣分に

腸風を治す【大明】  
肝風を瀉す【好古】

治す【開囊】久しく服すれば生殖作用を有せしめ、腹臓の一切の舊疾、冷氣

精髓を益し、天年を延べ、老衰せぬ。また婦人の産後、及び帯下の諸疾を

血氣益し、髪を黒く、顔色を悦ばせしむる。久く服用すれば、筋骨

主 治 【癰 腫】 癰腫を治し、頭、面、鼻の瘡を療し、五痔を治し、心瘡

無鱗魚、蘿蔔、蔥、鐵器忌む。地黄と同様に能く硃砂を伏す。

氣味 【苦く瀉し、微溫にして毒なし】 時珍曰く、茯苓が使となる。諸血、

何首烏を取つて晒し乾し、再び豆と蒸す。かくて九回蒸し九回晒してから用ゐる。

層鋪、同様幾層かにて全部を蒸し、蒸して出さるる子豆を

三ツツツを水で泡過し、その泡けた豆を砂鍋中に先づ一層舗き、その上の一々島貝

米泔一に夜浸して切片し、そのれに麝して黑豆三斗を用ゐ、九分して一回三升三合

時○彫○曰く、  
量近の修治法は、赤、白、各一斤の何甚鳥を用ゐ、竹、刀で粗成を削<sup>け</sup>去り、

22



根　修治

に注意して、やがて蒸氣（モク）が出なくなつた時を見計らつて取り出し、曝乾して用ゐる。既に入れて銅（ドウ）で蒸し、蒸しが少なう少くしづつ熱水を上から淋（しみ）ち溢れぬやうに、微曰（ミホ）米（い）油（あぶら）に浸して乾燥し、木の杵で搗いて用ゐる。鐵器を忌む。

一、夜採つて濯（せん）あるうちに布で拭き去つて曝乾し、使用する時は、苦竹刀で切つて用ゐる。雌雄竝にその根を採り、春秋の三期の間に用ゐる。

てある。  
時珍曰く、凡そ諸處の名山、深山に産するものならば、形體も大きく、質も佳良

三斗栲栳の大いさほどあり、山精さんせいと稱へる。これは純陽の體であつて、これを久  
容よう貌が童どうのうになり、その歩行力は奔馬ほんばに追付くる。三百年年を經たものは、  
二斗栲栳ふたうしの大いさほどあり、山翁さんうと稱へる。これを一個年年服すれば、  
山伯さんはくと稱へる。これを一個年年服すれば、落ちた齒が再び生かえはる。二百年を経  
れば、顔色が紅くして悦澤になる。一百五十年を経たものは益かの大いさほどあり

つて筋、膜、及び浮くものを棄て去り、洗むものを取りつて塊かたまりに揉み、堅め、人乳にゅう十盤じゅうばんを緑返して暴乾し、末に赤、白茯苓各一斤を皮を去つて研末し、水で淘たうす。その時取出して豆を去つて暴乾し、また別な黒豆に換へて再び蒸す。かくして九回せば、せてその中に豆、及び首烏を幾層いくそうにも重ね、釜かまを蒸して蒸す。豆が熟したならば、日浸し、甕かめのかけ、皮を刮り去り、二升の黒豆を使用して、先づ砂鍋さどくに木甕もくそうを載し、生なま殖しよくを完全にし、天年を延へる。赤、白何首烏各一斤を用ゐ、米泔まいざん水に三四くし、附方

【丹】七寶美髯丹しちほうびぜん 新四、二。

し。

甕で梧子大の丸にし、毎に空心にして温酒で五十丸を服す。また末にして服するも煉半斤を用ゐ、米泔まいざんに三夜浸して刀皮を刮り去り、切り焙じてくわいて末にし、煉風を治するの功がある。大いに補するものである。その方は、赤、白何首烏各一と、一、二年ばかり續いたの、竊ひそかに憂慮に堪へなかつたが、その丸を造つて服して見ると、二箇年ばかり續いたが、適ふ盛暑さかの季節に、ある病に罹かかつて半身だけ汗がなくなつてそれが修治して置いたが、適ふ盛暑さかの季節に、ある病に罹かかつて半身だけ汗がなくなつてそれが

膝ノ  
三〇〇  
見。陸草類牛

ル。  
二。大觀ニ  
效。サレト。レバ緩下ノ  
十ニ一。方、日量

首烏丸を服んでゐるといふことだつた。そこでその方の傳授を受け、後、その藥を何なかなかなか健啖な男があつたので、不思議に思つてその健康術を問ふと、何七十余であらうなりが、非常に壯健で、顔色の如きは涅丹のやうな澤<sup>つや</sup>があり、年齢宋の時<sup>三〇〇</sup>、懷州の知事李治が、等<sup>二</sup>同じ州に奉職してゐた一<sup>一</sup>武官に、年

るやうになつたのだ。

て效果を擧げ、引續き多くの皇嗣を儲けられてから、何首烏の方は全國に盛行されて嘉靖の初年、邵應節<sup>つまつて</sup>眞人が七寶美髯丹の方を世宗肅帝に上り、帝がそれを服餌し

この藥は、服餌した來歴は久しいのであるが、實際には服用者が外寡<sup>たんそ</sup>かつた。

あつて見れば、風虛、癰腫、瘰癧<sup>れいご</sup>、天門冬<sup>てんもんとう</sup>諸藥の上にある。氣、血が非常によく和を得るもので

を健にし、鬚髮を黒くすることとなるのであつて、滋補の良藥として寒せず、燥骨氣を收斂<sup>しゆれん</sup>する。その結果が、能く血を養つて肝を益し、精を固めて腎を益し、筋骨

氣が温<sup>ぬく</sup>であり、味苦く澀るものだから、その苦は腎を補し、温<sup>ぬく</sup>は肝を補し、能く精は入、赤いものは血分に入る。腎は閉藏<sup>へいさう</sup>を主り、肝は疏泄<sup>しゆせつ</sup>を主るもので、この物は



得ず、全身が癢痒するに、は何首烏の大ききくして花紋のあるものを用ゐ、牛膝と各  
 つを空に百沸湯で服す。禁忌は前記の通り。【腰、膝、脚、風、痺、行、】  
 曝乾し、瓦で焙じて石臼で末にし、蒸した棗肉で和して梧子大の丸にし、四十丸づ  
 浸し、一分をば早蓮汁に浸し、一分をば人乳に浸し、いづれも三日浸して取出して  
 雌雄各半斤を用ゐ、けそに分け、一分をば當歸汁に浸し、一分をば生地黃汁（生地黄汁）に  
 の隨意のものをを用ゐる。ある方では人乳を用ゐない。○筆、素、難、興、心、に、温、酒、又、は、鹽、湯  
 に十丸づつ増加して百丸に達して止める。服するに、は、空、心、に、温、酒、又、は、鹽、湯  
 て末にし、密雲、棗肉で和して杵き、梧子大の丸にして二十丸づつを服し、十日毎  
 男の子を持つつ年母の乳汁を三回搾て三回し、乾いたときを見て木臼で春（春）い  
 るものを八月に採り、竹刀で皮を削り去つて切片し、米泔水で一夜浸して晒し乾し、  
 毎朝無灰酒で二錢を服す。○積善方では、赤、何首烏各半斤を用ゐ、極めて大な  
 で、は、た、だ、赤、白、何首烏各半斤を用ゐ、粗皮を去つて石臼で杵（杵）いて末にし、  
 に、三、五、十、丸、づ、つ、を、空、心、に、温、酒、で、服、す。忌、む、も、の、は、前、記、の、通、り。○鄭、巖、中、山、丞、方、丸  
 した豆を換へてまた蒸すこと三回繰返して末にし、蒸した棗肉（棗肉）で和して梧子大の丸



サ  
久  
服  
云  
ノ  
益  
ヲ  
得  
ル  
意  
ヲ  
解  
ス  
難  
ト

幾重にも鋪き盡して、互鍋で蒸し、大豆が熟したと取出して、豆を去つて、藥を曝乾し、去つて一斤を切り、淘淨した黒豆、一斗を用ゐて木甕に豆を一層、藥を一層しき、何首烏三斤、銅刀で切片し、乾いたものは米泔水で浸して軟にして切り、牛膝を苗を何首烏多からめ、身體を軽く、天年を延べ、月計足らず、歳計餘あらしめる。て精體を長じ、血氣を補し、久し服すれば、鬚髮を黒くし、陽道を堅くし、人をして通りである。【服食滋補】和劑局方では、何首烏丸專ら筋骨を壯にして、一丸を酒で服す。久し服すれば、極めて顯著な効果がある。忌むものは前記の鹽湯で、百五十丸を作つて、餘つた部分をばいづれも梧子大の丸にし、毎日空心は一日の量を三丸とし、毎日早朝には溫酒で服し、正午には薑湯で服し、就寝時には、何首烏以下の諸藥を石臼で末にし、煉蜜で和して、彈子大の丸、一百五十丸を作り、とき研り爛らし、補骨脂四兩を黒脂に、麝香く炒り——いづれも鐵器を忌む——か、浸して晒し、枸杞子八兩を酒に浸して、晒し、兔絲子八兩を酒に浸して、芽を生じた七回目に蒸す時に、共に飯に入れて、九回目を蒸して、晒し、またまた更に當歸八兩を酒をよく浸み透らせ、乾して、研末し、牛膝と、一日間酒に浸し、何首烏を

（二）  
風毒（五）  
サカハカ  
口

類（二）  
建昌（四）  
註ノ見  
子ハ介部  
蛇

【珍時】

重 藥 主 治

【風毒、疥癬の瘡、洗滌する。湯に煎して、洗滌する。甚だ有效

衰憊方

分を水で煎じ、濃湯で洗滌する。甚だ能く瘡を解し、肌肉を生ずるものもある。主

回、酒で二錢づつ、錢を服す。【聖方】  
艾葉等

で七日間浸して九回蒸し、九回晒し、胡麻四兩を九回晒して末にし、一日

が良し。陳自明外科精要（大風癰疾）何首烏の大きな文として、一斤を、米、

くもの。これは常服するがよいもので、紅内消、即ち何首烏である。建昌の

末にし、酒で煮た糊で梧子大の丸にし、空心に三十丸を温酒で服す。疾はそれで退

て好き無灰酒を等分に人れ、再び煎して、数沸して、時に飲む。その滓を焙じ、研つ

て瘡毒【紅内消を多少に拘らず、瓶中に入れ、文武火で煎熟し、た時を見計ら

藥は、久しく服すれば、延年を延べ、白髪を黒くする神效のあるもの。斗門方【癰

を取つて洗淨して毎日毎に嚼み、または葉を取つて搗いて塗る。數服で止まる。この  
 根は雞卵ほどあり、また雁子のやうなものである。その根  
 前まで選するものをも治癒する。九真藤を用ゐる。一名赤葛（つた）。即ち何首烏である。  
 する。神效あるものだが、藥性難重（ちやう）方（方）【癰癰結核】或は破れ、或は破れず、下つて胸止  
 節に點ける。久しに間は自から平になる。【破傷出血】何首烏末を傅ければ骨  
 前に米飲で二錢を服す。【小兒の龜背】龜尿で紅内消（しんないしやう）を調へて背上の骨  
 臍中を封ずる。【集簡方（方）】腸風臍痛（しやうふうしやう）は、何首烏二兩を末にし、食  
 へ、鞋底（か）を火で炙つて熨す。【經驗方（方）】自汗の止まぬもの何首烏末を唾で調へて  
 箇所のいづれかを問はず、何首烏末を薑汁で調へて膏にして塗り、臍で裹んで押  
 酒糊で梧子大の丸にし、三十九丸つづつを茶湯で服す。【皮裏の痛むもの痛む  
 炒つて頭末を取り、薄荷兩、木香、牛膝各五兩、川烏頭（せん）を炮いて二兩を末にし、  
 何首烏十斤、生黑豆斤を共に煎じ熟し、皂莢（さいけつ）一斤を燒いて性を存し、牽牛十兩を  
 子大の丸にし、三十五丸つづつを空心に酒で服す。【經驗方（方）】筋を寬め、損傷を治す  
 一斤を好き酒一斗に七晝夜浸して曝乾し、木臼で杵いて末にして、棗肉（じやうじく）で和して梧

別名。紅内消（しんないしやう）、何首烏

作。大觀（たいくわん）。觀。棗肉（じやうじく）、

本草綱目草部  
第十八卷  
下



本草綱目草部第十八卷上終

薺に似て少し異ふ。その根は太くして角節が甚だ多く、色が少し淺い。

根は現に處にある。曰景弘。

つて曝乾する。

定の山谷に生ずる。二月、八月根を採

別録。曰く、草薺は景弘

集解

春と同名だ。

狀の形容だ。赤節、百枝といふは狗

名稱の意義は判らない。日華本草に『一般に白薺と呼んでゐるはそ

赤節別録(百枝)吳普(竹木炮炙論)白薺時珍、草薺な

釋名

薺(別錄中品)

科學和

名無

Smilax sp. et Dioscorea sp.

(科薯蕷科)

草の七 薺草類

屬ノモノトシテ、  
按此中ニハ、  
今ハ此ヲシテ、  
ニシテ、  
sten-petala A. Grey.  
(S.)  
ハ我州ノ種ナリ。  
屬ニシテ、  
Smilax  
モ其ノ出ニ  
居ニシテ、  
二十物  
ニシテ、  
モテ、  
致ルニ足  
シテ、  
Franch. et Sav.  
Dioscorea tenuipes,  
謂ハレバ、  
此ハ今  
ニシテ、  
野山ニ  
牧野ニ  
作別錄、  
(1) 當ニ本經







黄ノ註見。草類地

或ハ成德軍ノ註見。草類地  
(四) 四川。荆部ノ湖北  
見。石部ノ湖北  
注。東。西。方。  
誤。河。方。  
(三) 荒。見。類  
(二) 荒。見。類  
ル。至。列。然。何。然。事。取  
名。至。列。然。何。然。事。取  
シ。方。事。取  
兩。方。事。取  
Smilax

てゐる』とある。

としの誤だ。狗脊の條に詳説してある。宋史には『懷慶、草薺を以て貢に充  
それ誤りだ。莖も根も葉も苗もみな同じくなく。異音の本、草に、また薺を狗脊  
硬く、大なるものは商陸ほどあつて堅い。今一般にみな土茯苓を草薺としてゐるが、  
時。曰く、草薺は蔓生の草で、葉は薺葉に似て盤ほどの大いさがあり、根は長  
て用ゐる。

て、子に三稜がある。季と月とに拘はらずその根を採つて利刀で切片し、曝乾し  
に産するものは根はやり山薯のやうで體が硬く、苗は薺を引き、葉は薺葉に  
く、三指ほどの太さのものだ。春、秋の二期に根を採つて曝乾する。現に成徳軍  
の數種があつて、また花無くして白い子を結ぶものもある。根は黄白色で節が多  
葉共に青い。葉は三叉になつて山薯の葉に似てゐる。花には黄、紅、白、苗、  
頗く、今は河、嶺、外、東、荆、蜀の諸郡にいつれもある。蔓になつて生え、苗、  
虚して軟かだ。軟かなものか勝れてゐる。蔓生で葉が薺葉に似たものだ。  
恭。曰く、この草には二種あつて、莖に刺あるものは根が白く實し、刺なきものは



トナ  
ベ。大  
肝ハ  
大腸  
ノコ

水道を轉じて大腸に入らしめ、そこで葱湯で頻りに穀道を洗つてその湯氣を通らせ  
り、鹽を去つて草薢のみを末にし、二錢つゝの水を一盞で八分に煎じて、津と共に服し、  
濯つて病むとは異ふものである。草薢一兩を水に浸し、少時して鹽生兩と共に炒  
又は淫の慾の過度が原因に相違ない。かゝる病の小便秘數にして痛むは淋疾の證で、  
感ずるのだ。酒を飲めぬ者だとすれば、平常辛熱のもの、<sup>賦</sup>物を過食するが、  
物、<sup>瘵</sup>血<sup>け</sup>類が生じ、虚するに随つて水が小腸に入るのである。故に排尿時に腐敗  
場合は重證だ。この疾病は酒色の過度に原因するもので、それがやうになる。そ  
よ<sup>乾</sup>竭<sup>けつ</sup>を加へ、世しければ全身が熱して心躁し、涼水を欲しがらうになる。そ  
初に<sup>大</sup>腑<sup>ふ</sup>が秘熱して通ぜず、水液がただ小腸に往く、随つて大腑はいよいよ當  
頻數で度數かぞへ難く、排尿時に莖の内部が忍び難く痛むのも、この疾は必ず當  
は、正にこの關係を利用したものである。又、楊子建の萬金護命方には、凡そ小便  
足、下焦虚寒で小便が頻數となり、白濁をして膏の如き治する藥にある草薢分清飲  
も、のだから、それで能く濁を去つて清を分つのである。楊<sup>楊</sup>俠<sup>俠</sup>の家藏方に、眞元不  
は、いづれも濕氣下流の現象であつて、草薢は能く陽明の濕を除いて下焦を固くす









斗にに煮取り、麴を漬け滓を去つて一斛の漬飲をとり、暴通の法にやうにして服す。

これを用ゐるが、なかなかに良好な効果を擧げてゐる。接莖を洗い叩いて一斛、水三斛を九

烏梅湯（梅生煎方）で服す

大の丸にし、毎服五匕丸——小兒は三丸——を、白痢には甘草湯で服し、赤痢には

温服する。(普通方) 【赤白下痢】金剛根、鹽茶等分末にし、白梅肉を搗いて共へて。

の止まぬもの【援穀、即ち義を咀して平生、水三盃、烏梅一個を一盃として煎て】

錢つづつ、服して、後、に地椒の煎湯を腹を溶す。須臾、に通して、さる。(藥性)

【沙石淋疾】重さもの病根をとり去る。蔞薺二兩を末にし、米飲で二

附方  
【小便便滑數】金剛骨を末にし、就寢時に三錢つづつ、酒で服用す。

頤。曰、根を侵したる汁を取つて粉を煮て食へば瘰癧を胖ける。

はり用ひて  
つゞき

性は、清收せいしゆで、草薺そうがいと彷彿たつものだ。孫真人の元日に飲んで邪を辟ける薬酒中々

時。珍曰、く、痿痹は、足の厥陰、小陰の薬であつて、氣は温、味は酸、

【好古】  
【清血】  
【治下】  
【時珍】

發明

○  
○

一名。地椒、水楊梅、

ルモノ茶ノ磚茶ハ圍碁ト云フ。

(九) 風毒入寒膿腫。





嘉草ノ註ハ施州ハ京山縣見。E

らニハ是非。ラズ、シマシ見ルニ曰ク、  
糲支品ヲ康木村(三)

陶氏のこの説を観ると、當今土茯苓のここと。故に今尙ほこの物草仙遺糧、冷飯、  
 蘇頌圖經の猪苓うじやうの條下に記した刺猪苓はいづれもこの物である。此はみな併入し  
 た。茯苓、山地栗などいふはいづれもその状態の形容である。俗にまた過剛  
 龍と呼ぶが、埒さへもない妄稱だ。  
 幾箇をか連り、土茯苓は皮は茯苓のやうで、肉は赤く、味は澀い。その土  
 地ではこれを採取して穀食の代用にして、飢えを癒す。一種の刺猪苓なるのは、生で、春、夏に根を採り、  
 皮を刮くつて焙じ乾す。彼らの地ではこれを猪苓の瘡毒のに傅ふけるが、甚だ效がある。  
 時珍曰く、土茯苓は楚、蜀の竹の數年中に甚だ多い。蔓生のもで、草クサのやう  
 で莖に細點があり、葉は對生せず、形は瓠狀の根の形は接莖のやうで圓く、太さは雞、鴨の卵  
 ほどあつて連り合つて生え、遠きは一尺ほど、近きは數寸の間隔に著いてゐる。肉

龍と呼ぶが、毎もなひい妄梅だ。

九。茯苓。

蘇頌圖經の猪苓の條下に記した刺猪苓はいづれもこの物である。此にはみな併入し、蘇頌圖經の猪苓があるのて、やはり傳説の意味が遺つてゐる。陳藏本の草再餘粮、

陶氏のこの説を觀ると、當今の土茯苓のことに、故に今尚ほこの物に仙遺糞、冷飯

發させて作つたものが輕粉だ。銀朱の性は燥烈で善く瘰癧を逐ふものだ。涎なるも發せしめて五七日にして癰を癒する。蓋し水銀の性は走つて守に對して輕粉、銀朱の劫を用人は陽明に屬する關係にあるのである。耳に發する類は相火は厥陰に寄り、肌肉少陽の經を兼ねた場合、少陰、太陰の經を兼ねた場合は明喉に發し、太陽、少陽の二經に屬し、これに他の經を兼ねるものもある。病は先づ第一者に邪に在る類は數種あるが、治療の方法に至つては一途であつて、その病證は多くは厥陰、陽明に侵入して、やがて全世界まで波及することになつたのだ。

北に深く蓄積され、それが發して毒瘡となり、遂に各人の間に互に傳染し、南から然るある。それによく辛熱の物を飲食し、男女の生活が淫蕩であつて、濕熱の邪が自ら地に炎く、山、林、野から起る毒邪の氣があつて人間に薰蒸することゝ發せし瘰癧に至つての病は瘰癧表に發し、それが四方方に傳染波及したものである。蓋し瘰癧表の時。曰く、楊梅瘡は古方には記載されてない。病そのものもなかつたのだ。近世

れば熱が衰へ、氣が消耗して濕鬱が多くなる。それで效が顯れるのである。  
 互。この藥は濕を去るが特長であつて、熱を去る力はないものだ。病が久しきに  
 なるはこの藥を服してて效が顯はれないが、それには火が盛で濕かまだ鬱せぬからあ  
 が柔くなり、肉が實する。それが實する。それで拘攣、癰漏が癒えるのである。この病の初期  
 して平であり、能く脾の濕を去るものだ。濕が去れば營衛が順調に行り、筋脈  
 内經に所謂『濕氣は人の皮、肉、筋、骨を告ふ』とこれはある。土革癖は甘淡く  
 めに濕熱が肌腠に鬱蓄する。故に發して癰疽となり、甚きは拘攣するであつて、  
 火を挾んで脾土を凌ぐところとなる。土はもと濕に屬して肌肉を主るものだから、肝に相  
 干して發するもので、それに輕粉は燥烈な藥を加へれば、久しく水が衰へ、肝に相  
 服すれば、數劑に過ぎずして多きは差さる。蓋しこの疾病は、當初に毒氣が肝陽に分  
 土、革癖、三兩を倒み、或は皂<sup>け</sup>牽<sup>けん</sup>牛<sup>ごう</sup>錢<sup>せん</sup>を加へ、水六盞で三盞に煎じて三回に分  
 じて癰漏となり、そのまじ幾年かを経過すれば、竟には癰疾となる。これにはた  
 藥として輕粉を用ゐるが、癒えてもまた發り、久しきに互れば肢體が拘攣し、  
 變、  
 機。曰く、近世萬風が盛になつてから梅毒を病むものが多く、

發明

過山龍四兩——即ち硬飯——に四物湯一兩、皂角子七七粒、川椒四十九粒、燈心根七煎して茶に代へて服す。一箇月餘にして平安になる『とある。〇〇朱氏集驗方では、熱あるには芽、<sup>ニ</sup>連を加へ、氣虚には四君子湯を加へ、血虚には四物湯を加へ、水で潰爛して攤となり、連年、果月、終身の廢疾となりたるは、土革癰癤一兩を用ゐ、外科發揮に『輕粉』を服して脾、胃、氣、血を傷め、ために筋が疼痛し、久しく土草癰末を乳汁で調へて服す。一箇月餘で白癰を癒える。】外科癰癤（骨癰癤）【骨癰癤は、毎に一に服する。】小兒の梅毒瘡が口中に生じ、延いて全身に及ぶものは、日方では、冷飯團一兩、五加皮、皂角子、苦參<sup>クサマ</sup>、金銀花錢一錢、好酒で煎して、おで煎して茶に代へて飲む。病の淺きは二七日、深きは四七日で效が顯はれる。〇〇水

新六。

附方

【梅毒瘡】梅楊毒瘡。

過度の房事を忌む。蓋し秘方である。

一日に三服する。ただ茶を飲むこと、及び牛、羊、雞、魚の肉、燒酒、法麴、ぬ、氣虚には人參七分を加へ、血虚には當歸七分を加へ、水二大盃で煎して飲にし、土茯苓一兩、薏苡仁<sup>イイ</sup>、金銀花、防風、木瓜、木通、白鮮皮各五分、皂莢子四分を用













泡けて等分を末にし、一日一回、酒で生錢をつつ服用す。【聖惠方】刺の肉中にあるもの  
 咽につかへたるもと【き】及び竹木など硬い物が咽につかへたるは、白斂、半夏を  
 つかへたるもと【き】白斂、白芷等分を末にし、水で二錢を服す。【聖惠方】鐵、刺等の  
 生油で調へて搽る。【談華等方】湯火傷の灼爛【白斂末を傅ける。外臺方】物の咽に  
 して蜜で和し、水を蘸けて顔を試く。【肘後方】耳の凍瘡【白斂、黃蘗等分を末にし、  
 へて塗り、朝洗ふ。御藥院方】顔面の粉刺【白斂二分、杏仁半分、雞屎白一分を末に  
 一日三回貼る。】【顏面、鼻、酒皰、白斂、白石脂、杏仁各兩を末にし、雞子清で調  
 へて塗り、朝洗ふ。御藥院方】一切の癰腫【權曰く、白斂、赤小豆、甘草を末にし、  
 雞子白で調へて塗る。】【聖惠方】方は上に同じ。  
 【初方】方は上に同じ。  
 【附方】發背の初期【水で白斂末を調へて塗る。肘後方】  
 風、及び金瘡を治する而藥の方にくく用ゐ、往往白及と配合して用ゐる。  
 【發明】弘景曰く、生で根を搗いてて癰腫に傅けるが有効だ。曰く、現に醫家

刀箭瘡、撲損に肌を生じ、痛を止める。【大明】狼毒の毒を解毒す。【時珍】

赤白帶下【木經】火毒を殺す【別錄】發背、癰癰、顏面の泡瘡、腸風、痔漏、血痢、

て食ひ、獨り坐すべし。これ其の趣也。

似てゐる。陶氏のいは物は土卵のことで。土卵は薬にならぬ。<sup>(三)</sup>梁漢地方で蒸し

草々木の上に蔓生し、葉は杜衡に

○ 24 の 8 の 25 升 は なる 小、り あ 25

恭曰、赭魁は、大なるは斗ほ

肉は白く皮が黄だ。近道にもある。

弘景曰、く、形状は小寺こてらのやうで、

別、曰く、谷川、中、生、る。二、月、に、排、る。



集解

のである。魁とは酒器の名稱だ。

名  
錄

時の珍。曰く、根が鳳のやうで、蘇<sup>ス</sup>のやうな汁があるところから名をけたもの

二 緒 題  
(本) 經 下 品 (和 科 章 和 名 名 名 未 未 無 譯 譯 し

(二) 緒 題 (本經下品)

①の藥を塗擦する。(古今錄驗)

豐石梁州人註參照。  
(二) 梁漢石部特生。

眞此ノ聲ノ知ヲ書、  
 アカシメテ、  
 ノ、  
 類、  
 noides, Oliv.、  
 即見テ被ルヲ、  
 Rhingo、  
 ル、  
 其種即チ、  
 一、  
 根塊ヲ赤汁ヲ以、  
 手、  
 醗、  
 即チ、  
 Disco-  
 本、

に、し、  
臘猪脂七合で和して煎し、麝香一錢を入れ、湯を浮石で磨り破つて毎日毎にそ

に、は、女蔵膏——魯國の女姜、白芷各一分、附子（子）一分、雞舌香、木香二分を末

子の大丸にし、一日三回、水で五丸づつを服す。（時後方）身體の癰瘍（癰瘍）【瘡瘍】斑駁する

【附方】（四）下痢の止まぬも、女姜、女姜、雲實各一兩、川頭二兩、桂心五錢を末にし、蜜で梧

【氣味】辛し、溫にして毒なし【主治】下痢を止め、食物を消化する

【氣味】風寒でどくどくするもの、霍亂、洩痢、腸鳴、遊氣（遊氣）の上下常なきもの、

【修治】（三）乾豆、酒を搾せて午前十時から午後二時まで蒸し、取り出して（三）乾槐

は蔵紐の條に掲げてある。

時珍曰、諸家は女姜に對する解説を誤つて蔵紐に對して加へてゐる。その正誤

でゐる物だ。

魯ノ參註ノ山參。參ノ石部石部石部。

（五）下痢ハ斑駁トナベレ。下痢ハ斑駁トナベレ。

（四）下痢ハ斑駁トナベレ。下痢ハ斑駁トナベレ。

（三）遊氣ハモカ。遊氣ハモカ。

（三）本一。本一。

て塗れば立ちに癒える【蘇頌】

稱。風毒腫ノ腫ノ汎

末に搗いて酒で服するが有効である。また風熱の結毒を治するもので、酒に靡つた【蘇頌】  
【主 治】 風熱上壅、咽喉腫痛。また毒節の毒を解するに、

【氣 味】 苦し、寒にして毒

陰乾して用ゐる。

二月、八月に根を採り、切片し

ど、小なるは拳ほどのだ。

に似て、大なるは三升入の器に

豆に似たもので、根の形は莢

大石に附いて生え、臺になら

【抱鵝】 宣



頤曰、(三) 宣州の山林下に生ずる。

集解

科 學 和 名 未 詳  
名 未 詳  
詳 詳

抱鵝 (二)

積聚。三蟲を除く【本經】

作。下ニ觀ニ中ニ註。見州。石部。丹砂。出。來。捕。所。何。ス。植。物。ト。ア。ル。十。種。名。曰。牧。野。本。經。書。



根 氣 味

主 治

心腹の

【甘し、平にして毒なし】恭曰く、小毒あり。

げてある。

でない。根といふ名のあるへきわけがあらうか。土卵、即ち土辛である。菜部に掲  
今の土茯苓のこと、食ひ得るから根なる名稱を得たのである。猪魁は食へるもの  
明は甚だ明だ確だが、しかし、これを禹餘糧だと考へただけには誤だ。禹餘糧といふ説  
陶氏が引いて説明したのはこの物だ『とある。謹で按ずるに、沈氏の猪魁の説に  
れで靴を作る皮を染める。閩地方ではこれを餘糧と謂ふ。本草の禹餘糧の條に  
切も破れば中に檳榔ビンランのやうに赤理があり、猪のやうな赤い汁がある。彼の地では  
ない。現に南方の地に極めて多く、皮膚が黒く、肌は赤く、何が首烏に似たもので、  
なためだといふ。沈括の筆談に『本草の猪魁なるものは、いづれの説も明確で  
る時。曰く、猪魁は閩地方では青色染料の國中ウツナクニに入れて置く。色を染上り易くす  
どの。だ。所在にある。  
皮が紫黒色、肉は黄色だ。大なるものは圓い塊で升ほどあり、小なるものは拳ほ  
保。曰く、苗は蔓になつて生え延び、葉は蘿ナツメに似たもので、根は斐やで

地方。  
(三) 閩今ノ福建者

類ノ正ノ註ノ見ヨ  
類ノ正ノ註ノ見ヨ  
類ノ正ノ註ノ見ヨ

ゐる。南地に生ずるものは黄色で細辛のやうだ。③舒州、廬州地方にある一種のつれも藤に近い植物である。北地に生ずるものは、根の太さ指ほど、色は漆に似てい物の状態とが同じくない。しかし、概して主たる治療上の効果は相似たものだ。い實

集解

校正  
木部より此に移し入る。

千金藤 (實) 未開  
科名 學名 未詳  
詳し

藤ノ正ノ註ノ見ヨ  
藤ノ正ノ註ノ見ヨ  
藤ノ正ノ註ノ見ヨ

時珍曰く、根三兩を壓つた汁、或は煎じた汁を服すれば、いづれも蠱毒を解す。花は紫色だ。伏離子と同じく承露仙と呼ばれてゐるが、伏離子は葉の圓いものだ。で研つてつて服し、嶺南の山石の間に生ずる。蔓を引いて生え、葉に三極<sup>あな</sup>があり、人肝藤<sup>あな</sup>拾遺<sup>あな</sup> (遺) 主として諸藥毒、遊風の手脚痺を解す。いづれも生卵ほどのものだ。

山谷に生ずる。苗は承露仙に似て根が圓く、益を仰いだやうな形状で、大いさな雞



六七月に碎小な青黄色の花を開

は二本ふくらみ、垂れてゐる。

毎に子枝が生えて、或は一本、或

く、扁にして圓くなく、葉の短

光り、葉は烏柏の葉のやうで短

さ六七尺になり、莖は細くして高

色は白い。二月苗が生え、莖は高

つて一本に根が九箇連つて

【子仙九】  
——當武——



時珍曰、九仙子嬌

集解

釋名

科學和名  
名未無  
詳し

九仙子綱目

する。

珣曰、味苦し、平なり。酒に浸して服すれば、風を治し、補益し、身體を軽く

粗ノ二并  
ヲ二校  
明二物  
ヲ二野  
二圖  
二覽  
二書  
モ

千  
年  
三  
ノ  
大  
和  
山  
ノ  
見  
ノ  
石  
部  
長

ノ  
大  
和  
山  
ノ  
見  
ノ  
石  
部  
長



ル。  
炭ハ不  
明野  
牧ノ  
植物  
陳  
ヲ思

つて汁を服す。また磨つて瘡腫に塗る。

毒なし。諸藥の毒、熱毒、丹毒、癰腫、天行壯熱、喉痺、蠱毒を解す。いづつれも磨根、及び葉は辛く香しい。一名石黄香、一名千金藤といふ。根は味辛く、平にしてた。

附錄

陳思安拾遺

臟。曰嶺南山野に出る蔓。生で小豆のやうだ。

瘵嗽不利、癰腫大毒、藥石の發動、癰、癰、悉く主效がある【藏器】

氣味

主 治

天行虛勞、瘡瘡、

又、嶺南にある陳思安といふ植物にも千金藤なる名稱がある。

けはあるまい。然らば正確に名稱と實物とを指摘し得るかといふにそれとも困難だ。

味を表した名稱だ。いづれも一種のものが形狀を異にして名を同するといふ

んでゐる。痢、及び小兒の大腹に主效のあるもの。千金といふは貴重なもの、意

葉に似て大いさかだ錢ほどの一種もあり、やかり千金藤といひ、また古藤と呼

膝に似た瘦干があり、葉は柳のやうなもの、これでも千金藤といつてゐる。又、荷

これでも千金藤と呼ばれてゐる。江西の林中に生える草は、葉の生えた頭端に鶴

藤は木蓼に似てゐる。又、烏虎藤といふ樹に絡まつて生え、冬も青いものがある。





部ノ地ヲ指ス。明省ノ  
東部、陝及陝西、  
(三) 四川省ノ

『傳』  
ト、  
リ、  
。『  
集』  
似

(二) 郭生有『雜』。

○ 全集

二  
根塊

二五三

習學下

力二一

三景一

重一

子不遇

木村(康)曰、萬、萬、

○ 尤ル人モ下ル。

Thumb (= 熊手本)

*Agrostis* (C. paniculata,

一種子隨ルに人

(世) 人一人に  
うきうき

(毛茛科) Clematis

下馬の馬

三才圖會

卷之四

田心山田重六人一首

方、算、乙、

濕草頭、虎杖、卜同物

(二) 牧野日、本量

---

名錄

木藥子(目録)

大苦(目)烟

赤藥圖經

士強

時。珍。曰。按。予。の

正校

木部より此に移して入る。

科名 二 (科) 藝科 (科)

Polygonum Reyn-atria, Makino.

黃(1) 子 未開(寶實)

和名 白子

八十二





時。周。  
二。阿。  
七。復。  
一。時。  
十。即。  
四。子。



[子藥赤]

根

氣味

【苦、平、に、して、毒、なし】

を治す。

主治

【諸惡腫、瘡癰、喉痺、蛇、咬毒、に、は、水、に、研、つ、て、服、し、ま、す、】

たは含み、たは塗る【間實】血を涼し、火を降し、癰を消し、毒を解す【時珍】

發明

頌曰、孫思邈の千金方に、『忽に生じた癰疾で、一二年になるを療

ずるものとして、萬の黃藥子半斤を用ゐる——緊つて重いものを上とする。輕く虛したもの、萬州以外に産したもので、力が緩慢だから倍加して用ゐねばならぬ。無灰酒一斗を取つて、藥を其中に投じ、瓶の口を固めて、火で一復時の間、燒き、酒の冷えるを待つて、瓶の口を開け、時に一盃ずつ飲んで、酒氣の絶えぬやうにする。三五日經過してから、常に鏡に映し見えて、癰が消えたなら、飲むことを停止する。そのまゝ飲み続ける頭を細くするものだ』とある。劉禹錫の傳信方には

定もやはり信憑するわけに行かない。定は行くまい。い。蘇頌の斷けり、必ずらず黃藥を指したのといふは、や、無。い。故に蘇恭の所謂藥子とは、や、









て服すれば諸病を治す』とある。

羅門では那屎なふ梅子ばいと呼び、中國人は藥子りやくと呼ぶ。皮を去つてつの中のを仁を取ら、細研し、葛洪の『後方子』に

時珍曰く、この藥子は子こを結ばないが、この物は梅子ばいであつて、葛洪の『後方子』に『あ

は誤つて根の字とした。

て紅白色だ。子の肉は味が酸い。ただその仁のみを用ゐるものだが、本經の記載に似

り、痢りを止め、腫を消し、疰ち、蛇の毒を除く。梅になつて生え、葉は香花に似

ていふ。通州つうしゅう、渝州よしゅうに出る。その味辛く、平にして毒なし。破血はけつに主効があ

い。別錄べつろくに曰く、蜀郡の山谷に生ずる。當今盛んに用ゐてゐるものだ。外國がくこく名那な疏そとい

ふ。絶傷ぜつしやうを續つづぎ、骨髓こつねを補す。一名連木といふ。温にして毒なし。邪氣じあきの諸痺しよひ、疹しん酸さんを治し、

うなものである。

丹に類る。食し鹽しん州しゅうノ註し見る。草くさう類る。石いし類る。通つう州しゅうノ註し見る。石いし類る。今いまノ蜀しやく郡ぐんハ地ち子しノ類る。



【吐血の止まぬもの】紅棗、白藥を各燒いて性を存し、等分を末にして、糯米で飲

【聖惠方】吐血の止まぬもの】白藥を燒いて性を存し、糯米で三錢を服す。(聖惠方)

【白藥末一兩、龍腦一分を蜜で和して、炭子大の丸にし、一丸づつを合んで嚥む。

【散じ、痰を消す、白藥、白朴消等分を末にし、一日四五回吹き入る。(直指方)咽喉腫

末三兩とよく和し、錢つづ茶で服す。(聖惠方)【喉中の熱、腫するもの】の、血を

に、白藥三兩、黑牽牛兩を共に香く炒り、牽牛の半を去つて末にし、防風

芪、効がある。(蘇頌圖經)【風熱、咽喉の利せぬ

白藥根、野猪尾二味を粗皮を洗ひ去つて焙乾し、等分を搗きひ、酒で一錢を服す。

【吐利が數回でなほ止まぬと】冷粥を食へば止む。(聖惠方)【心痛に熱を解す

す。仰臥して少頃すると、心悶し、或は腹鳴し、嘔吐して吐利するものである。

【附方】天行熱病【白藥を末にし、漿水盞で三錢を冷調して服

【馬志】血を散じ、火を降し、痰を消し、毒を解す。(時珍)

【巴豆の藥毒を解す。刀斧の傷、乾折傷に、乾して末にして傅れば能く血痛を止める。

【治す】大(明)【喉中の熱寒不通、咽中の常に痛腫するもの】を治す。(寶鑑)【野苺、生金、

【(一) 熊野山參類照。  
【(二) 熊野山參類照。  
【(三) 熊野山參類照。  
【(四) 熊野山參類照。  
【(五) 熊野山參類照。  
【(六) 熊野山參類照。  
【(七) 熊野山參類照。  
【(八) 熊野山參類照。  
【(九) 熊野山參類照。  
【(十) 熊野山參類照。  
【(十一) 熊野山參類照。  
【(十二) 熊野山參類照。  
【(十三) 熊野山參類照。  
【(十四) 熊野山參類照。  
【(十五) 熊野山參類照。  
【(十六) 熊野山參類照。  
【(十七) 熊野山參類照。  
【(十八) 熊野山參類照。  
【(十九) 熊野山參類照。  
【(二十) 熊野山參類照。  
【(二十一) 熊野山參類照。  
【(二十二) 熊野山參類照。  
【(二十三) 熊野山參類照。  
【(二十四) 熊野山參類照。  
【(二十五) 熊野山參類照。  
【(二十六) 熊野山參類照。  
【(二十七) 熊野山參類照。  
【(二十八) 熊野山參類照。  
【(二十九) 熊野山參類照。  
【(三十) 熊野山參類照。  
【(三十一) 熊野山參類照。  
【(三十二) 熊野山參類照。  
【(三十三) 熊野山參類照。  
【(三十四) 熊野山參類照。  
【(三十五) 熊野山參類照。  
【(三十六) 熊野山參類照。  
【(三十七) 熊野山參類照。  
【(三十八) 熊野山參類照。  
【(三十九) 熊野山參類照。  
【(四十) 熊野山參類照。  
【(四十一) 熊野山參類照。  
【(四十二) 熊野山參類照。  
【(四十三) 熊野山參類照。  
【(四十四) 熊野山參類照。  
【(四十五) 熊野山參類照。  
【(四十六) 熊野山參類照。  
【(四十七) 熊野山參類照。  
【(四十八) 熊野山參類照。  
【(四十九) 熊野山參類照。  
【(五十) 熊野山參類照。  
【(五十一) 熊野山參類照。  
【(五十二) 熊野山參類照。  
【(五十三) 熊野山參類照。  
【(五十四) 熊野山參類照。  
【(五十五) 熊野山參類照。  
【(五十六) 熊野山參類照。  
【(五十七) 熊野山參類照。  
【(五十八) 熊野山參類照。  
【(五十九) 熊野山參類照。  
【(六十) 熊野山參類照。  
【(六十一) 熊野山參類照。  
【(六十二) 熊野山參類照。  
【(六十三) 熊野山參類照。  
【(六十四) 熊野山參類照。  
【(六十五) 熊野山參類照。  
【(六十六) 熊野山參類照。  
【(六十七) 熊野山參類照。  
【(六十八) 熊野山參類照。  
【(六十九) 熊野山參類照。  
【(七十) 熊野山參類照。  
【(七十一) 熊野山參類照。  
【(七十二) 熊野山參類照。  
【(七十三) 熊野山參類照。  
【(七十四) 熊野山參類照。  
【(七十五) 熊野山參類照。  
【(七十六) 熊野山參類照。  
【(七十七) 熊野山參類照。  
【(七十八) 熊野山參類照。  
【(七十九) 熊野山參類照。  
【(八十) 熊野山參類照。  
【(八十一) 熊野山參類照。  
【(八十二) 熊野山參類照。  
【(八十三) 熊野山參類照。  
【(八十四) 熊野山參類照。  
【(八十五) 熊野山參類照。  
【(八十六) 熊野山參類照。  
【(八十七) 熊野山參類照。  
【(八十八) 熊野山參類照。  
【(八十九) 熊野山參類照。  
【(九十) 熊野山參類照。  
【(九十一) 熊野山參類照。  
【(九十二) 熊野山參類照。  
【(九十三) 熊野山參類照。  
【(九十四) 熊野山參類照。  
【(九十五) 熊野山參類照。  
【(九十六) 熊野山參類照。  
【(九十七) 熊野山參類照。  
【(九十八) 熊野山參類照。  
【(九十九) 熊野山參類照。  
【(一百) 熊野山參類照。





衝洞根(拾遺) 藏器曰く、味苦し、平にして毒なし。熱毒、蛇、犬、蟲、癰瘡等  
 末にして傳ける(五)。會州(五)に産し、葉は白斂のやうだ。  
 會州白藥(拾遺) 藏器曰く、金瘡に主效があり、膚を生じ、血を止める。碎いて

同時に毒の解する物も多し。これは天然の配剤といふべきであらう。  
 蜜のやうなところから生ずる人かか葉は車前に似て根は半夏(二)のやうだ。その汁を飲むと  
 以南に産し、日蔭の地に生ずる。性か冷であつて、霍亂下利の患者には相反する(二)。費州  
 と似たものだ。この二物性はか冷であつて、霍亂下利の患者には相反する(二)。費州  
 水で研つて服すれば吐する。なほ毒さぬ。更には更に服して吐く。陳家白藥の功用  
 甘家白藥(拾遺) 藏器曰く、味苦し、大寒にして小毒あり。諸種の藥毒を解し、

にして、古代と現代と名稱が變つてゐるのかも知れぬ。  
 この藥は劉の當時は貢納になつたものらしいが、今は一向にない。或は有  
 するものもあり、(三)。廣府では毎年その土地の貢納物としてある『とある。按ずるに、  
 づるものな、及ぶものに、(三)。封州、康州では栽培  
 時。曰く、按ずるに、(三)。劉の廣表録に『陳家白藥は善く毒を解すもので、諸藥い

遠、寧、會、平、南、龍、西、  
 寧、今、平、南、龍、西、  
 會、今、平、南、龍、西、  
 平、今、平、南、龍、西、  
 南、今、平、南、龍、西、  
 龍、今、平、南、龍、西、  
 西、今、平、南、龍、西、

今、平、南、龍、西、  
 平、今、平、南、龍、西、  
 南、今、平、南、龍、西、  
 龍、今、平、南、龍、西、  
 西、今、平、南、龍、西、

今、平、南、龍、西、  
 平、今、平、南、龍、西、  
 南、今、平、南、龍、西、  
 龍、今、平、南、龍、西、  
 西、今、平、南、龍、西、









(は) 那威靈仙 (Clematis sp.)  
 植物ニ充ル者  
 牧野博士

參ノ類見  
 山類人

地力ヲ指  
 方脈ハ  
 古

食母ノ草  
 州治  
 火

威靈仙

科名 Clematis sp.  
 學名 和名 種一

(科) 毛茛科

牛のやうで、紫で上に白稜がある。二月、八月に根を採つて曝乾する。  
 なるが、虚して軟かい。苗は高三、四尺、春、夏に薄荷のやうな葉があり、花は牽  
 志。曰く、今用ゐるものは潞州から出る。その根は黄白色だ。形は茯苓に似て  
 灰と諸薬とで合成したものだといふ。  
 腰を補し、筋を續く。突國に産するもので、色くして灰のやうだ。そこで石  
 突腰白(宋開寶) 藏器。曰く、味苦し、金瘡に主效があり、血を生じ、血を止め、  
 するものだ。  
 の毒氣、及び蛇傷に主效がある。根を取つて水に磨つて服す。諸毒を悉くみな吐出  
 珣。曰く、苗、蔓は土瓜やうで、根もやうに似てゐる。味辛し、温である。一切  
 と同様だが、苗、蔓は似てゐない。  
 の毒に主效がある。嶺南のこに産し、根を取つて陰乾する。功効は陳家白藥

大風、皮膚の風痒、白癩風、熱毒風瘡、頭旋、目眩、手足の頭痺、腰膝の疼痛で  
 て、言の語もつれ、の、筋節の風、達騰風、胎風、頭暗風、心風、風狂、  
 この薬は、男子、婦人の中風で言語不能の、手足不遂の、の、口眼喎斜し

置。

思齊がその話を聞き傳へ、更に余にそれを物を語つたので、此にその事賞を傳へて  
 服せせて見ると、病人は數日に果して歩いて歩行が自由になつた。その後、道土鄧  
 搜した結果、やがてその薬を採つて來た。その薬といふは乃ち威靈仙だつた。  
 その薬があるかどうか、問だ『家問題だ』といひ、家の懇望に因つて、自山に入地  
 新羅の僧が通りかかり、この病はただ一種の薬で治するが、ただこの土地  
 往來の人の中から救ふを求めるといふ方法を取つた。すると、ただ一人  
 も治效が現はれなかつたので、方法を盡く、家に及ぶ、良醫が術を彈ひく、少し  
 が手足不遂を病み、行歩不能となる、といつ、清涼を得る。曾て商州のある人  
 四が肢が輕になり、手足が微煖になり、微利して瀉せぬ人は、これを服すれば

ニ 比 作 草 二 字  
 三 比 作 草 二 字  
 四 比 作 草 二 字  
 五 比 作 草 二 字  
 六 比 作 草 二 字  
 七 比 作 草 二 字  
 八 比 作 草 二 字  
 九 比 作 草 二 字  
 十 比 作 草 二 字  
 十一 比 作 草 二 字  
 十二 比 作 草 二 字  
 十三 比 作 草 二 字  
 十四 比 作 草 二 字  
 十五 比 作 草 二 字  
 十六 比 作 草 二 字  
 十七 比 作 草 二 字  
 十八 比 作 草 二 字  
 十九 比 作 草 二 字  
 二十 比 作 草 二 字  
 二十一 比 作 草 二 字  
 二十二 比 作 草 二 字  
 二十三 比 作 草 二 字  
 二十四 比 作 草 二 字  
 二十五 比 作 草 二 字  
 二十六 比 作 草 二 字  
 二十七 比 作 草 二 字  
 二十八 比 作 草 二 字  
 二十九 比 作 草 二 字  
 三十 比 作 草 二 字  
 三十一 比 作 草 二 字  
 三十二 比 作 草 二 字  
 三十三 比 作 草 二 字  
 三十四 比 作 草 二 字  
 三十五 比 作 草 二 字  
 三十六 比 作 草 二 字  
 三十七 比 作 草 二 字  
 三十八 比 作 草 二 字  
 三十九 比 作 草 二 字  
 四十 比 作 草 二 字  
 四十一 比 作 草 二 字  
 四十二 比 作 草 二 字  
 四十三 比 作 草 二 字  
 四十四 比 作 草 二 字  
 四十五 比 作 草 二 字  
 四十六 比 作 草 二 字  
 四十七 比 作 草 二 字  
 四十八 比 作 草 二 字  
 四十九 比 作 草 二 字  
 五十 比 作 草 二 字  
 五十一 比 作 草 二 字  
 五十二 比 作 草 二 字  
 五十三 比 作 草 二 字  
 五十四 比 作 草 二 字  
 五十五 比 作 草 二 字  
 五十六 比 作 草 二 字  
 五十七 比 作 草 二 字  
 五十八 比 作 草 二 字  
 五十九 比 作 草 二 字  
 六十 比 作 草 二 字  
 六十一 比 作 草 二 字  
 六十二 比 作 草 二 字  
 六十三 比 作 草 二 字  
 六十四 比 作 草 二 字  
 六十五 比 作 草 二 字  
 六十六 比 作 草 二 字  
 六十七 比 作 草 二 字  
 六十八 比 作 草 二 字  
 六十九 比 作 草 二 字  
 七十 比 作 草 二 字  
 七十一 比 作 草 二 字  
 七十二 比 作 草 二 字  
 七十三 比 作 草 二 字  
 七十四 比 作 草 二 字  
 七十五 比 作 草 二 字  
 七十六 比 作 草 二 字  
 七十七 比 作 草 二 字  
 七十八 比 作 草 二 字  
 七十九 比 作 草 二 字  
 八十 比 作 草 二 字  
 八十一 比 作 草 二 字  
 八十二 比 作 草 二 字  
 八十三 比 作 草 二 字  
 八十四 比 作 草 二 字  
 八十五 比 作 草 二 字  
 八十六 比 作 草 二 字  
 八十七 比 作 草 二 字  
 八十八 比 作 草 二 字  
 八十九 比 作 草 二 字  
 九十 比 作 草 二 字  
 九十一 比 作 草 二 字  
 九十二 比 作 草 二 字  
 九十三 比 作 草 二 字  
 九十四 比 作 草 二 字  
 九十五 比 作 草 二 字  
 九十六 比 作 草 二 字  
 九十七 比 作 草 二 字  
 九十八 比 作 草 二 字  
 九十九 比 作 草 二 字  
 一百 比 作 草 二 字



しかし、その性は大體に於て、疏し利するものだから、久しく服すれば眞氣を損ずるものだ。故に風濕の病で氣の壯なるにこれ、服すれば捷な効果がある。時珍曰く、威靈仙は氣は微し辛く鹹し。辛は氣を泄し、鹹は水を泄すもの擇び用ゐるがよし。

因つてもその性の好く走るものだからといふと判る。用ゐるには、水聲の聞えぬといつたのだ。凡そこの物は、採つたときに流水のやうな聲の聞えるもので、それ故に崔元亮は『諸種の風を去り、十二經脈に通し、朝服すれば脊に效がある』といつてもこれを服すれば尤も效がある。その性好く走り、またた横に擴がるは、震亨曰く、威靈仙は木に屬し、痛風を治するの要藥であつて、病の上、下にある宗。爽曰く、性の速かなものだ。多く服すれば五臟の眞氣を疏通し過ぎる。

效せぬものなし。

恭曰く、腰、腎、脚膝の積聚、腸内諸冷病の積年瘡をぬくにはこれを服す。立ちに美右の詳細は崔元亮の海上集方に記述される。して梧子大の丸にし、二十九乃至三十九つを温酒で服す。





は、威靈仙、雞冠花各二兩を米醋二升で煮乾し、炒つて末にし、鶏子白で和して小し、十九丸から二十九丸まで、一更時に生薑湯で服す。【腸風瀉血】久しに服す。これを化鐵丸と名ける。【大腸の冷積】威靈仙末を蜜で梧桐子大の丸に茶、麴を忌む。【積中の痞】威靈仙、梧桐兒各一兩を末にし、三錢つづつを溫酒でにし、七丸乃至十九丸つづつを薑湯で服す。一三日一回。一個月を續すれば效驗がある。吐き出して癰を癒さる。【唐孫思邈】喘咳宿飲【逆し、食物が全く入らぬのは、威靈仙を焙じ、半夏を薑汁に浸して焙じて末にし、皂角水で煮膏して綠豆大の丸に】ある。摘玄方【威靈仙氣】寒膈【哮喘】一服。蜜各半で五分前に服す。宿痰を塊のある方を下にして睡る。渣は再煎して翌日服す。氣塊に刺痛を覺ゆるが效驗で雞子の殻が軟になる程まで去つて溫服し、乾いた物を食つて壓し、氣に五兩、生根【生根】二錢半、烏藥五分、好き酒一盞、雞子一箇を灰火で一炷【急慢性、慢性に拘らず、威靈を鹽湯で服す。茶を忌む。】煎方【男婦の氣痛】を鹽湯で服す。炒つて五兩、生川烏頭、五靈脂各四兩を末にし、醋糊で梧桐子大の丸にし、七丸つづつを威靈仙は、或は打撲傷損で忍び難く痛むもの、或は癰痰する等の病證には、威靈仙を

し、熱酒を注いで服す。汗が出て癒える。【手足の麻痺】時に疼痛を發す  
れを飲む。【集簡方】破傷風一、獨頭蒸（獨頭蒸は衛生易簡方）。一個、香油一、錢を共に搗き爛ら  
斤、水、酒十瓶を封じて、香炷（炷は香）の間煮滌し、火毒を出してか、癒えるまで逐日三  
梅瘡患者が輕粉の毒藥を服用したため、毒に疼痛を發し、年久しく癒えぬには、威靈仙三  
藥を常服する。孫兆方では、これを放杖丸と名けてある。【集驗】筋骨の毒痛【楊  
は百丸を再服して取り下し、その後一ヶ月間を食つて補す。同時に溫補  
のやうな惡物を微利する。それは即ち風毒の積したものだ。もしなほ利せぬ膠（膠は青膠）腰膝  
沈重なるには、威靈仙末を蜜で梧子大の丸にし、十丸を服す。腎臟（腎臟は腰膝）の風壅（壅は風）【腰  
糊で梧子大の丸にし、先に藥を浸した酒で二十丸づつを服す。【腎臟の風壅】腰膝  
とす。○經驗方では、威靈仙一斤を洗ひ乾し、好き酒に七日間浸して末にし、  
痛千金方では、威靈仙錢一つを、逐日空心に溫酒で微（微は少）利する程度  
仙末二錢づつを酒で服し、痛が一分減ずれば、一分減ずる。【簡便方】腰脚の諸  
附方】新十六。萬四、新十六。【脚氣の腹に入りたるもの】脹悶して、喘急するには、威靈

る恐がある。氣弱のものはやゝ服せぬがよい。







モノ其野山  
ヲ根ニ牧  
ル藥キ曰  
カニ料密  
今ノト根  
日ノ草通

茜草(二) 本經上品

科名 和名 名 名 名 名  
Rubia cordifolia, L.  
茜草科(茜草科)

て効がある。百祥丸と同じ意味だ。(儒門事親)

黒陷【鐵脚威靈仙を炒つて一錢、腦子一分を溫水で調へて服す。瘡癰を取下し  
の搗汁に浸して洗ふ。病の一患者に實驗して有効であつた。李機怪譚(方)】痘瘡  
を吞み下す。甚だ効がある。飛絲の耀れんとするほど腫痛するに威靈仙は、威靈仙  
を治す。赤莖の威靈仙五錢を井華水で煎じて服す。それ骨が綿のやうに軟くなるを  
青末生匙に油二一丸に茶で服して探り吐かす。○聖錄では、雞、鷄、鷄の骨哽を  
糊で梧子大の丸にし、二九つを茶生分生分で服す。吐きかんとするに威靈仙は、威靈仙  
を温服する。○乾坤意では、威靈仙を米醋に二日間浸し、晒し研つて末にし、醋  
で温服する。諸骨の威靈仙二兩、威靈仙二兩、砂仁二兩、薑、薑を一一二錢を一一二錢を  
痛威靈仙三兩、水一斗を湯に煎し、先づ湯を洗ふ。冷めれば再び温める。外  
餅にし、炙き乾しして再び研り、一日一回、陳米飲で二錢を二錢を服す。(聖濟)】痔瘡腫



あり、外に細刺があり、數寸に節あつて節毎に五枚の葉があり、葉は烏藥の葉の時珍曰く、昔草は十二月に苗が生え、數尺に蔓延し、莖は四角で、中が空で筋の硬く、其の千戸侯と等し『とあつて、それは利益の多いことをいつたのである。頌曰く、現に耕作者はやはり種を作つて種を蒔いて栽培する。故に史記に『千』の四、五枚の葉が相對して節の間に生え、草木の上上蔓延する。根は紫色だ。所在い保。曰く、染緋草は、葉は葉に似て、頭が尖り、下が潤く、莖、葉ともに濡る。少弘景曰く、西方のやうに多くはない。詩に『茹蘆阪』に在りといふは、この草である。實は椒のやうである。この物は現に緋(紅緒)を染る昔草だ。東方の地にはあるけれども曝乾する。又曰く、苗根は山陰の谷中に生ずる。草木の上上蔓延し、莖に刺があり、集別。錄曰く、喬山(喬山)は昔根は(喬山)の山谷に生ずる。二月、三月に根を採つて傳寫の際に誤つたに相違ない。併記すべしものだ。

猪肝のやうな血を吐下するに、は、茜草根、藜蘆各三、二、一分、水四升を二升に煮

下。【心痺、心煩】内に熱するは、茜根の煮汁を服す。傷寒類要（要）。【靈の中毒を解毒す】

一、蓋半で七分に煎じ、髮灰を入れて服す。唐玲瓏方【月經閉止】方は發明の項を見

草名五錢、生地黃、兩、小兒の胎髮（先）一枚の燒灰、以上を六帖に分け、一帖毎に水

ぬととほは敗血とななる傾向がある。昔根、一名過山薑一兩、阿膠、側柏葉を炙し、黃

つを烏梅湯で服す。(本事方)

【五十歳以後の月経】五十歳後の婦人にして月経が止ら

【の】茜根、玄葉各一兩、烏梅二錢半を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸。

て井水で鹽子大の丸にし、一丸をつつそを溫水で化して服す(聖濟錄)】  
【京血(の)止を28】

【吐血】  
吐之爲嘔。豆皮を去り、甘草を炙き、等分を末にし

つゝ水で剪じて治服する。また水で錢を和して服するもよし。(周應鑒藥方)

附方 萬三新 吐血 鐘子方 萬三新 附方

信據すゝるに足るや否や

[illegible]

甚に効ある。各別録に之を草入し服すれば、精神を益し、身體を輕

作ル。二(一)本書二分ヲ兩二

作ル。二〇大觀二猪子爛二

カ  
力  
。

(九)一枚一塊ヲ云



婦人の經水不通を治するにこれを用ゐ、一兩を酒でで煎して服するが、一日にして一通、故に手足の厥陰の血分の薬であつて、血を行し、血を活血を特とすると俗方に、色の赤は營に入、氣の溫は滯を行、氣の溫は酸味は肝に入り、鹹は血に走るものだ。時珍曰く、茜根は色の赤いもの、氣は溫、味は酸しくして鹹を帯びてゐる。ば劫す。ほど虚して病はいよいよ深くなるのだ。

て行るために、一時効果は現れるが、病の深くして血の少しのの場合には、却<sup>かへ</sup>つて濕を燥するものだ。病の淺いもの場合には、濕燥し、陰養を得て開き、血が熱を得し、過<sup>あ</sup>山龍<sup>りゆう</sup>等<sup>らう</sup>を佐すとす<sup>く</sup>が、いづれも熱に草藥を用ゐて速效を取り、石<sup>いし</sup>を却<sup>かへ</sup>つて震<sup>あ</sup>。曰<sup>いは</sup>、世<sup>よ</sup>間<sup>かん</sup>一<sup>いつ</sup>治<sup>ち</sup>するに、痛風の治するに最上<sup>さいじやう</sup>のものだ。

除そく、嘉草を以て之を攻む、『あつゝあるが、嘉草は蘘荷と西といふの  
藏。器。曰く、嘉草を治するに煮けす。周禮に『庶民は蠶毒を明發

撲損游血、泄精、痔瘻、瘡癰を止め、膿を排す。酒で煎じて服用す【大明】經脈を通

絲ハ荒絲ノ大餘ヲ致格致ル論、藥石性

狀云。實陰、皮、肉、骨、髓、失、達、ノ、六、病、



時珍曰、く、按ずるに、虞搏は『血藤は過山川龍である。理も相近い』といつてある。

は大拇指の太さほどあり、その色は黄である。彼の地では五月に探り、血を攻め、

附錄 血藤(未圖經)頤曰、(西)信州に生ずる。葉は、(五)葉の葉のう、(五)葉の根、

懼病せぬ。西根の煎汁に少量の酒を入れて飲む。(奇效良方)

て温服する。(重方)【疹疹の豫防】時行瘡疹の發せんとするるとき、これを服すれば

ける。【脱肛】收まらぬもの【茜根、石榴皮各一握、酒一盞】三七分に煎し

【忌む】。聖齋錄（三）。蠅蚋（三）。瘡。【西根の瘡】。千の石炭等分未にして、油で調へて傳へ

毎、日、空、を、い、つ、て、西、で、生、を、起、す。  
 一、月、で、髪、が、泰、の、う、に、な、る。  
 五、幸、を、盡、す。

倭、幸、名、更、之、三、回、訪、し、て、外、を、取、ら、ゆ、脚、黄、之、此、で、微、火、で、雪、の、う、か、つ、し、前、に、成、て、登、つ

【参考】一、丁、圭、地、三、丁、の、収、入、の、十、分、の、十、五、大、體、で、使、用、さ、れ、て、い、る。

て服すれば、豊玉の姓名を呼ぶものなり。小之品方(三)。(三)。

金陵本、  
蘭二作

註見四信州入部金。

ル一三三。腫ナリ。發入ニ上ニ發入。九漏ノ





再び合劑して、まざさに服まうとすると、今度は敷物を引いて、容器を覆して丁ひ、ま  
 然屋根から土が落ちてその薬の中へ落ち、服むてが出来なくなつた。そこで更に  
 猥りに薬を服んで、はなぬと嚴しく戒めた。また翌日その薬を服まうとすると、突  
 が出来上つた。ところがそれらを服まうとすると、前夜、また夢にある人が現はれて、明日  
 らば毎服一匙よし。ある貴婦人が療を患つたとき、この方を得て九日かか  
 ともあるが差間はない。久病の肺咯血はただ一服で癒える。普通の嗽血、妄行な  
 ら塵する。薬は冷服に限る。飲も熱しはならぬ。吐くことと稀い粟あは飲で上  
 方に向ひて坐り、無言のま匙で薬を抄すくつて四匙を服し、良久して稀い粟飲で上  
 日一回、九回蒸し九回曝して止める。患者がこれをするには、五更に起き東  
 晒して末にし、生蜜二斤を入れて和し、膏にして器に盛る。鐵器に觸れてはならぬ。  
 の妄行を治す。その薬を名けて神傳膏といふ。その法は、一斤つづつを用ゐ、洗淨し  
 時珍。曰く、許學士の本事方に「剪草」は、勞瘵、吐血で肺を損じたもの、及び血

發明

元。素曰く、上部の血には、剪草、牡丹皮、天門冬、麥門冬を用ゐるが







なる。これはその薬を用うべからざる病の一例である。もしも患者が甚しく渴<sup>かつ</sup>引<sup>ひ</sup>いては、その場合、防己を用いては便を泄<sup>しやく</sup>するから更に重<sup>おも</sup>ね、その血を<sup>ちち</sup>じふととて、たれども患者がたぬ熱がある。眞<sup>ま</sup>行<sup>ぎやう</sup>に立<sup>た</sup>ぬ熱がある。脚<sup>けつ</sup>氣<sup>き</sup>、脚氣、勝<sup>しょう</sup>胱<sup>きやう</sup>の積<sup>しやく</sup>がある。熱<sup>ねつ</sup>を除<sup>のぞ</sup>いて、その基本<sup>きほん</sup>を<sup>を</sup>に濕<sup>しつ</sup>熱<sup>ねつ</sup>があり、癰<sup>よう</sup>寒<sup>かん</sup>として通<sup>と</sup>ぬ、及<sup>およ</sup>び下<sup>げ</sup>注<sup>ちゆ</sup>させるもの、臭<sup>くさ</sup>氣<sup>き</sup>を嗅<sup>か</sup>げば不快<sup>ふくがい</sup>なもの、で、うややかな性質<sup>しやうしやう</sup>のもの、をば存<sup>ぞん</sup>して、<sup>す</sup>大<sup>だい</sup>腹<sup>ふく</sup>膜<sup>まく</sup>の藥<sup>やく</sup>である。故<sup>ゆゑ</sup>に聖<sup>せい</sup>人は、かやうな性質<sup>しやうしやう</sup>のものを、<sup>す</sup>巧<sup>かう</sup>に善<sup>ぜん</sup>用<sup>よう</sup>すれば、また能<sup>あた</sup>く因<sup>いん</sup>に敵<sup>てき</sup>を突<sup>つ</sup>く、功<sup>こう</sup>の名<sup>な</sup>を舉<sup>あ</sup>げ、やうなもの、で、これは、<sup>す</sup>災<sup>さい</sup>幸<sup>きやう</sup>とし、禍<sup>わざはひ</sup>を樂<sup>が</sup>み、能<sup>あた</sup>く害<sup>がい</sup>者<sup>しや</sup>となつて、不<sup>ふ</sup>逞<sup>てい</sup>の謀<sup>ぼう</sup>を起<sup>おこ</sup>すけれども、これを巧<sup>かう</sup>に、<sup>す</sup>夏<sup>げ</sup>を瀉<sup>げ</sup>するの藥<sup>やく</sup>である。これ、人を物<sup>もの</sup>に譬<sup>たと</sup>へて見<sup>み</sup>れば、<sup>す</sup>春<sup>はる</sup>、その滯<sup>ち</sup>塞<sup>さい</sup>を通<sup>と</sup>じ、またたき、滯<sup>ち</sup>塞<sup>さい</sup>を去<sup>さ</sup>るもの、で、防己<sup>ぼうぎ</sup>なるもの、は、大<sup>だい</sup>苦<sup>く</sup>である。陰<sup>いん</sup>を補<sup>ほ</sup>す。秋<sup>あき</sup>、冬<sup>ふゆ</sup>を助<sup>たす</sup>けて、<sup>す</sup>引<sup>ひ</sup>いて、<sup>す</sup>ある。その、<sup>す</sup>本<sup>ほん</sup>草<sup>そう</sup>の劑<sup>ざい</sup>に『通<sup>と</sup>』は滯<sup>ち</sup>を去<sup>さ</sup>るもの、で、<sup>す</sup>通<sup>と</sup>草<sup>そう</sup>、防己<sup>ぼうぎ</sup>の屬<sup>りやく</sup>である。』といつて

[illegible]







煎じて溫服し、良久して再服する。腹痛には芍藥を加へる。仲景方【風濕の相搏つ半、炙甘草を兩を剉んで散にし、毎服五錢を生薑四片、棗二箇、水一斗、煮半で八分に錢半、浮するは、防已黃芪湯に主たる藥である。防已一兩、黃芪二兩、白朮七錢ひやくちへちや、汗が出で身が重く、脈ので半に升煎じ、一日二回同に服す。張仲景方】（三）【風水惡風】汗が出で身が重く、脈のである。防已、黃芪、桂枝各三兩、茯苓六兩、甘草二兩を用ゐ、毎服一兩を水一升で水氣が皮膚中に在つて四肢がこゝろ毒せきどく、毒せきどくととして動するものには、防已茯苓湯が主たる藥す。氣が惡風せず

附方

合には、よくそれを確かめて然る後にこれをうべきものである。あてはならない。下焦の濕熱が十二經に流入し、ため二陰不通となつたもの場合、これには用ゐない。これは用ゐる場合、それは不通になるもの場合、それは上焦の氣のか濕病か血藥の使用を禁ずる。色となつて不通になるもの場合、それは上焦の氣のか濕病か血藥の使用を禁ずる。外邪から風寒の邪に傷み、それが肺の氣に傳はつて濕熱し、小便が黄赤する。飲むであつて、それは下焦の血分の藥だから、これに用ゐるべき例があるのである。飲するならば、それは上焦の肺の氣分に在るもので、その場合は夢泄す。

[illegible]













ならしめ、十二、三、經脈を通ずる。【三焦】の客熱、胃の口熱、胃が十分攝らしめ、三焦の惡氣を下し、五臟の斷絕の氣を續ぎ、言の發聲の氣を十分ふ。北方の地ではこの物の功力を知らぬ。【腸、胃】の力を厚くし、食物を食味。【甘し、寒にして毒なし】説曰く、平なり。南方の地では多く食

根 主 治 氣 味 子 根 主 治 項下【癭瘤】の實權

方は上に同じ。

【金瘡、膝】通草の煮汁で酒を醸して毎日に飲む。【鼠瘻】の消せぬもの

【水で煎じて服す】。【婦人の血氣】木通を濃く煎じて三、五盞を飲めば通じる。

口が渴くには、導赤散——木通、生地黃、炙甘草等分を用ゐ、水竹葉七片を入れて

【附方】心熱で尿の赤さも【】の顔面が赤く、唇が乾き、牙を咬み、

【附方】心熱で尿の赤さも【】の顔面が赤く、唇が乾き、牙を咬み、

ためである。血は心に屬するものだから、それには木通を用ゐる。心竅が通ずれば胸、腹に隱熱があつて疼痛し、拘急し、足が冷えるは、いづれも伏熱で血を傷めた

北を補し、西を扶け、東を抑へる關係に基いたものだ。楊仁齋の直指方に、全身、





時珍曰、く、白色、通草は、氣は寒、味は淡であつて、その物の體が輕い。故に  
 かめだ。燈草と同功である。生で用ゐるがよし。

發明 果曰、く、通草の肺を瀉し、小便を利するは、甘、平で陰血を緩にする

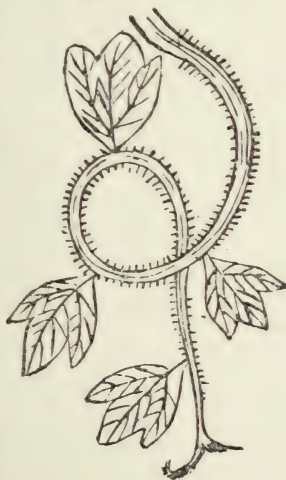
催す【注機】

【李杲】諸毒蟲の傷痛を解す【蘇頌】目を明にし、熱を退け、乳を下し、分娩を  
 陽の陰である。主治 【陰敷を利し、五淋を治し、水腫、癰閉を除き、肺を瀉

氣味 甘く、寒にして毒なし【果曰、く、甘し、平なり。降であつて、

時珍曰、く、山中に蔓するもので、莖の太いものは圍り數寸ある。

て食ふ。味の甘美なものだ。



【木 脫 通】——草通のす

いて栽培し、或は蜜で煎じて菓子にして  
 といつた。現に畑にこれ種を蒔  
 に似て肥え、莖中に白色の蠟がある  
 一丈ほどあつて、葉は大きくして荷  
 高。頤曰、く、郭璞は『江南に生ずる。高







サ我邦ノ牧野ニ生ずル者ナリ。此藥來  
 (二) 我邦ノ牧野ニ生ずル者ナリ。此藥來  
 (三) 我邦ノ牧野ニ生ずル者ナリ。此藥來

類食鹽ノ州ニ見出ス。石  
 (三) 我邦ノ牧野ニ生ずル者ナリ。此藥來

鈔 藤 (二)

別錄下品

科名 學名 和名  
 (科) 苦草科 (U. rhynchophylla)  
 (= Nauclea sinensis, Oliv.)  
 Uncaria sinensis, (Oliv.)  
 (新種) 新種

して效を擧げてゐる。

し、毎年政府へ貢納する。その性は涼であつて、胸膈の煩熱を治す。地方民は常用

附 錄 天壽根圖經 (三) 頤、台州に産

咽を攻むるを療す【蘇頌】瘰癧及び胸中の伏氣が胃、

これ【蘇頌】瘰癧及び胸中の伏氣が胃、

治 花上粉

を押し開けてて灌ぎ込む。【王隱】選方

口、牙關の緊閉するにば、

附 方

新 一。

【頭風痛を洗ふ】新しき通草を互の火上で焼いて性存して研末  
 じ上達して乳汁を下す。その氣の寒なるは降であり、その味の淡なるは升である。  
 大陰、肺の經に入り、熱を引き下し、小便を利し、陽明、胃の經に入り、氣を通



【根 壽 天】 一合





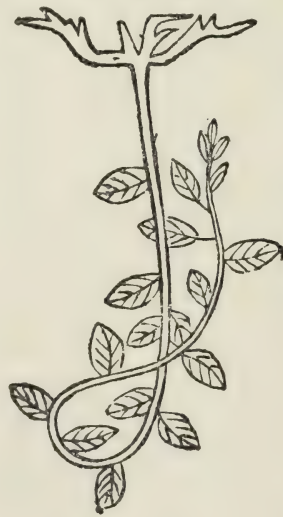








皮は白くして厚い。冬を凌いで潤す。  
保身。曰く、臺生であつて、花は白く、葉に細毛がある。根は牡丹に似てて骨柔く、



「藤花白」  
——州 交——

これを探取したならば根を去り、細  
味が酸い。白花は味が甘い。  
ぬ。真によく似てゐるが、菜花藤は  
に、菜花藤なるものをを用ゐてはなら  
ぬ。曰く、凡そこれを使用する場合。

剝して陰乾して用ゐる。

【氣味】

【味】苦し、寒にして毒なし

【主治】

【諸藥、菜、肉の中毒を解す。酒

に漬けて用ゐれば虚勞の風熱に主效がある【唐本】

【發明】

時珍。曰く、蘇氏は根を用ゐるといひ、雷氏は苗を用ゐるといふ。結局

に、つれも用ゐ得るわけである。按ずるに、葛洪の肘方に『席刺史は久しく嶺南  
にゐた人だが、その人の話に、その地方の住民共は、一般に飲食物に毒が入つてゐ  
た場合、それがたがために多くは自覺せずして漸次に食物を攝れなくなり、或は心中が

はいつれども此にいふ物と名稱は同一だが實物は異ふ。

さ鴨<sup>アヒ</sup>子<sup>コ</sup>ほどあり、七八月に熟して黄色になる。味は酸くして食へるものだ。これ等

な水果といふものがあつて、これも鬼目と呼ばれてゐる。葉は楮に似て、子の大きい

つた『とある。即ちこの草のことだ。また羊蹄草を一名鬼目といふ。嶺南には議

が延びた。長さ一丈餘、葉の廣さ四寸、厚さ三分あつた。世人はこれを見ても思議

熱すれば紫色になる。吳志に『孫皓の時、鬼目菜といふものがあつて棗樹<sup>ササナ</sup>に絡<sup>よ</sup>つ

の花を開き、子は龍葵子のやうで、

白く、食へるものだ。秋小さい白色

ぶものことだ。正月苗が生え、

時<sup>とき</sup>珍<sup>めづ</sup>く、これは俗に排風子と呼

て熱毒を解するものだ。



白 [英] 子風排 —

子が黒いといふは誤だ。江東では、夏期にその莖、葉を取つて粥に煮て食ふ。極め

名、け、郭璞は『葛に似て葉に毛があり、子は赤色で耳瑠<sup>みみたま</sup>珠<sup>たま</sup>のやうだ』といつてある。

藏<sup>くら</sup>器<sup>き</sup>曰く、白英とは鬼目菜のことだ。蔓生で、三月に長く延びる。爾雅<sup>じふ</sup>に『符



はしなかつたやうだ。

これを白草といふ。陶氏の説明では白草を識つてはゐたらしいが、更に確かめやうと、實は圓く、龍葵子<sup>りゅうきし</sup>のやうで、生は青く、熟すれば紫色になる。東部地方では、赤く、白英とは鬼目草のことだ。葉は王瓜に似て少し長く、五極があらでなにかと思ふ。

のを食ふが、體力を充實し、健康無病になるといふことだ。或はこの草のことをいふだ。根や花は用ない。益州に苦菜といふがあつて、その土地の住民は専らこれ。それでなない。この類に白草といふがあつて、葉を羹<sup>かう</sup>にする。甚だ勞を療するものだが、一向に用ない。此に解毒花<sup>どくごはな</sup>といふがある。水中に生じ、蒸して食へるものだが、弘景曰く、鬼目は一般人が白草と呼ぶものだ。又、白英は、方藥には採り、秋、花を採り、冬、根を採る。又曰く、鬼目、一名來甘。實は赤くして五味やうなものだ。十月採收する。

集解

註  
（三）見子  
（二）益州經  
（一）本經  
ノ  
誤。金部金ノ

（四）大觀二弊ニ作ル。

赤。曰。按ずるに、陸機の詩の疏に『蘿摩、  
 氣を補益し、陰道を強盛にするからいつたものだ。

いふ。それは枸杞葉と同じく精  
 と旅では蘿摩と枸杞を食ふな『  
 煮ても食へる。諺に『外里の  
 大さく、生でも食へ、また蒸し  
 種多てあるもので、葉は厚くて



〔子合研・摩蘿〕  
 ——袋婆婆婆——

弘。曰く、蘿摩は藤になつて生え、摘めば白乳汁が出る。民家で多く

集解

ふ。

ばかりの白絲のやうな線がある。それで俗に婆婆線、又は婆婆袋兒などと呼  
 は瓢箪のやうだ。故に雀瓢に雀瓢の字の誤だ。その賞は、嫩い時は裂けたとき  
 時。曰く、白環の環は、雀瓢の環の字の誤だ。その傳説から合子と名けたのだ。  
 祖。か。草の環の環を兵士の金瘡に傅けたといふ。その傳説から合子と名けたのだ。  
 と名ける。(陸機) 研合子 (拾遺) 羊婆奶 (綱目) 婆婆線包 (藏器) 漢の高







やうな紫白色の花を開き、結實は長さ二、三寸、太さ馬兜鈴<sup>馬兜鈴</sup>ほどあつて一方の端が尖り、いづれも斷つて見ると構汁<sup>構汁</sup>のやうな白乳が出る。六七月に小さく長い鈴形の葉も、めて繁殖し易く、根は白く軟<sup>軟</sup>く、葉は長くして後が太く前が尖り、根も、莖も、葉極時珍。曰く、斫<sup>斫</sup>子、即ち蘿摩の子である。三月苗が生え、竹垣などに蔓延し、一腸、一名藁桑といふ。

物などは蔓延し、秋、霜が降りる頃まであつて、合子<sup>合子</sup>が柳絮<sup>柳絮</sup>のやうになる。一名竹垣はよく似てゐるので區別が付きかねる。又、曰く、斫<sup>斫</sup>子<sup>子</sup>は藤になつて生え、竹垣白汁が出る。一名雀瓢といふ。その物は結局は白環とは別物だが、この二は白臙<sup>臙</sup>。曰く、蘿摩は東部地方では白環と呼ぶ。竹垣などに藤生するもので、折ればは太く、實は黒い『とある。

葉は共に臭い。平澤に生ずる。別録に『葉は嫩いときには蘿摩に似て正しく圓く、莖、瓢の形に似て大いさ東<sup>東</sup>ぽののだから雀瓢と名けるのだ。根は白薇に似て、葉がはり雀瓢と名けたのであつて、女青は葉が蘿摩に似て二枚の葉が相對し、そのから、『とあるが、しかし、雀瓢とは女青の別名だ。蘿摩の葉は女青に似てゐるから、



考之ヲシテ來邦ニ我ル草ニ我  
ハ廣ク分佈ス。支那ニ我  
邦藥ニ屬ス。一種ニ我  
二實收メテ、二種ニ我  
二名實收メテ、二種ニ我  
二名實收メテ、二種ニ我

釋名

赤藤(綱目)

五毒草(拾遺)

五毒(拾遺)

蛇商(拾遺)

山藤麥(圖)

拾遺の五毒草を併せる。

校正

科名 藤科 (科名)

学名 *Fagopyrum cymosum*, Meisn.

和名 新稱 (新稱)

赤地利唐本(草)

渣瘡口を罨す。立ちに效がある。(珍)

【金方】損傷血出痛み忍び難きは、籬上婆婆鐵袋兒を取つて水に揉つて服し、

子、柏子仁、乾地黃、各三兩を末にし、一日三回、方寸匕、つづつ酒で服す。

五味

【附方】補益損極めて房勞に益あり。籬上婆婆鐵袋兒を取つて水に揉つて服す。

新二。

腫と(時)なる

の咳傷で、頻りに治療しても癒えぬには、搗いて二三回封する。絲毒が爛れ化して蜘蛛  
け【器】汁を取つて丹毒を腫、及び蛇、蟲の毒に傅ければ直ちに消す。腫毒に傅  
【唐本】子【子】を搗いて金瘡に傅ければ膚を生じ、血を止める。葉を搗いて腫毒に傅  
【治】主【治】虚勞。精氣を補益し、陰道道を強くする。葉を煮て食ふ。功効は子と同

升しやうに煎し、滓しやうを去つて呷す。【金瘡、傷肌】生じ、血を破る。紫葛しやう二兩を順流

附方

血を散す【時珍】

【慈】癰緩おんかん、急、并に熱毒風に主。效があら、小腸を通ずる【大明】肌を生じ、

主治

ある。焼灰は消石を制す。【味甘く苦し、寒にして毒なし】大。明。曰く、滑して冷で

根皮 氣味

て、紫色だ。

頰きん曰く、今はただ江寧府、及び台州だけに生ずる。春生えて冬枯れ、葡萄に似

此にいふ紫葛は藤生のものだ。

今。大明。曰く、紫葛に二種ある。

月に根を採つて日光乾す。

似て、根は皮も肉も紫色だ。三、八

に葉は葉はに産する。雍州ようしゅうに

保ほ。鼻び。曰く、所在いづれにもあり、

【葛 葉】



見部。石類。註ハ江寧府、台州、石類

註ハ見州。陰草類。葉。無中。モ又。





て傳け、また汁を飲む【悲】血を涼し、毒を解し、小便を利す。酒に播つて服すればい癰、腫、疥、咬、虫、根を搗いて傳ける【景】風熱腫、遊、丹。搗

主 治

氣 味

【酸く苦し、寒にして毒なし】

づれも誤だ。

起の簡便方に『即ち老鵲眼暗草』といひ、斗門方に『即ち何首烏』といつたのは

楊醫集集成に『即ち紫葛』といひ、

で、搗けば涎滑が多出る。樽

太いのは指ほど、長さは二、三

り、内に細子がある。根は色く、

大い、生は青く熟すれば紫にな

ほどのものだ。結實は龍葵子ど

は青く背面は淡い、七八月に青白色で

一本の鬚があつて、五葉が著き、葉は長く光り、まばらな齒があり、表面

時珍。曰く、掘り返した所などに甚だ多い。その膝は柔稜があり、一本の枝に



〔母 鐵 烏〕  
——藤 藥 五——

(大) 観ニ驗ニ作ル。  
 藥トスル。其地下生蔓草。多ク生テ、諸處ニ散ル。根ノ味、苦、性、平。牧野曰ク、フ、(一)。

水三盞で一盞半に煎じ、三回到分服する。酒で煎し、いれども妙である。(經方)

烏 斂 母 (草)

科名 和名 学名  
 烏 斂 母 科 (葡萄科) *Cissus japonica, Wild.*

釋 名

(同) 赤發藤 時珍曰く、五枚の葉が白斂のやうだから、烏斂と云ふ。江東では龍尾と呼び、また虎葛ともいふ。龍といふは、いづれも蔓の形狀からいふたもの、赤蔓の濃と赤蔓の蔓とは音が近いところから、たのだ。

集 解

弘景曰く、五葉蔓は、垣根や立て掛けてある物などに藤になつて生る。根を搗いて癰癤に傅けられれば效ある。

赤。曰く、平。澤に蔓生し、葉は白斂に似る。四月、五月に採る。

採り、出を用ゐる。  
 保。昇。曰く、蔓の端に五葉があり、青白色の花を開く。所在にあるもので、夏期に

の形は黄麻子のやうだ。

尖あり、微し莖麻に似て細齒があり、八九月細かい紫色の簇あはれつた花を開き、結子  
時珍。曰く、二月苗が生え、莖に細刺はりあり、葉は一對して生え、一枚の葉に五

別。録。曰く、勤草は山谷に生ずる。枯くわ樓ろうのやうなものだ。

採り、曝乾して用ゐる。

蔓と名ける。夏莖、葉を

麻子ましのやうだ。俗に葛勤

て、花は黄白色、子は大

多おほくある。葉は大麻に似

保たもつ。曰く、野原などに

ある。

[草] 蔓—— 勤草



且つ薄く、蔓生で細く刺がある。また葛蔓と名ける。古方方にはやはり時に用ゐて  
恭。曰く、草は古い村落の道傍などに生える。葉は葛ま麻まに似て小さく  
勤草とあるはこの草だ、故に此に併記した。



麥酒 (一) 牧野曰、彼  
 種「ホ」ヲ同與「ル」  
 無用ニ此屬ハ  
 一年生草ニ過  
 一ニ茂ルモノ  
 葉一ニ生  
 花モ入ル  
 根ニ入ル

律草 (一) 唐本草 (一) 和名 科名 學名 科名 學名  
 Humulus japonicus, Sieb. et Zucc. (科) 科名 學名 科名 學名

詭こて律草といひ、又詭こつて來き草といつたのも地方音である。別録に  
 詭こ刺さがあらつて、よく人の皮膚に著おいて引き止めるから勒草と名けたのだ。それを  
 釋名 勒草 (別錄) 葛勒蔓 (劉圖經) 來母草 (別本) (時珍) 曰く、この草は莖

【跌撲損傷】五爪龍の搗汁に童尿熱酒を和して服し、汗を取る。(簡便方)  
 を取、渣を傳ける。直ちに散る。大熱を薑たの代りに用ゐてもよし。(壽域神方)  
 はその根一握、生薑一塊を搗た爛らし、好た酒一盃を入れて汁を絞たり、熱服して汗  
 出る。(丹發要) 【一切の腫】發背、乳癰、便毒惡瘡の初期には、いづれも五葉藤、或  
 傳の方である。(醫學正傳) 【項下の熱腫】俗に醫家鹽おと名ける。五葉藤を搗たいて傳  
 衛た生易簡方 (附方) 喉痺腫痛 (附方) 五爪龍草、車前草、馬蘭、菊各一握の搗汁おを徐おに嚙む。祖  
 新五。小便血【血尿】五葉藤を陰乾して末にし、二錢つづつを白湯で服す。



方チカ  
(三) 大觀ニ此獨行

弱、白、肉、鱧、種、赤、蛇、  
(三) 九、九、肺、胃、伏、

氣味  
主 治

【勸草】は、瘀血に主效あり、  
【甘く苦し】寒にして毒なし

草は、五淋に主效あり、小便を利し、水痢を止め、癰除く。虚熱を治すには、  
煮汁、或は生の搗汁を服す【慈】生汁一合を服すれば、傷寒の汗後の虚熱を治す【  
宗】癰、久痢、疥癩を療す【頸】二焦を潤ほし、五穀を消化し、五臓を益し、  
九蟲を除き、溫疫を辟ける。【蛇蟻】の咬傷に傳ける【時珍】  
【附方】小便石淋【葛律】の根を掘出して挽き斷ち、孟をその穴の

方

舊三、新六。

中に入れて承けて汁を取り、一升を服す。石が出るものだ。なほ出ぬときは再服す  
る【范汪方】小便淋【生の律草】の搗汁二升、酢二合を和して頓服する。尿に白汁  
を下すものだ【(三)】尿血淋【瀝】同上。【産婦の汗血】衣服が赤色に汚れるもの。方  
上に同じ。【久痢から發つた疳】【葛勒寧末】を管で肛門の中に吹入れる。數回に過ぎ  
して神效がある。【新、久の瘰癧】【一名勒寧】握一握【一名勒寧】の兩端を取去る  
【秋】冬は乾いたものを用ゐる——恒山の末と等分を淡漿水二大盞に浸し、星、月  
の出た晴れた夜に一夜露し、五更に盞に煎じて二回に分服する。痰を吐いて癰を

【蜘蛛の咬毒】羊桃葉を搗いて傳ければ立ち癒える。(備急方)

やうにし、空心に一つを茶で服す。二便が通じてから粥を食つて補ふ。(聖惠方)

木通、大戟を炙り、各半斤を剉み、水一斗で五升を煮取り、その汁を煮つて稀飴（うき）として

少量の鹽（しほ）を入れ漬ける。(肘後) 【水氣鼓脹】大小便の滯（どま）には、羊桃根、桑白皮、

三回到過ぎずして癒える。(千金) 【傷寒の毒攻】手足の腫痛（はれ）するには、桃、羊の煮汁に

桃十斤を搗き熟して、三斗に浸し、正午にその湯の中に入つて一炊時ほど坐る。

【附方】傷寒の變（うつ）【四支煩疼】物を食へず、多く睡るには、羊、

羸弱（れいじやく）、老衰を治す【】藏器（ざうき）

風、痒、及び諸瘡腫を洗へば極めて效がある【】(恭) 【根を酒に浸して服すれば風熱、

鹽、五水の大腹を去り、小便を利し、氣を益す。浴湯にするがよし【】煎汁で

【五】煙（えん）で身體（しんたい）が暴に赤色になるもの、小兒の熱、風水、積聚、惡瘍をを除く【】(本經)

莖 根 氣 味 苦、寒、澀、滑、藏器。【】甘く、毒なし。治

形は芋、臍（へそ）に似て圓い。その枝條を水に浸すと澀滑がある。

嫩條（れんじょう）が延びて柔軟である。葉の大いさは掌ほどで、上は綠色、下は白色で毛があり、

大觀二 國史 作





ある。蘇恭が『石血は絡石だ』といつたのは甚だ誤つてゐる。絡石は葉が圓く正青の、大抵皆風血に主效があり、腰脚を暖め、白髪を黒く變じ、老衰を防ぐものであると相似てゐる。この外石血、地錦等十種に在るものは木の性に随つて功があり、（そと）藤荔と相似てゐる。

七月、莖、葉を採つて日光乾す。

七包み絡まる。花は白く、子は黒い。いた部分から根が生えて石の傍側葉は細葉に似てゐる。莖の節が著石の間に生え、冬を凌いで凋まず、保。昇。曰く、所在にあるものだ。木、敷。風致を飾る。

〔石 格〕



くして圓く短い。樹に絡まるものは、葉が大きく、薄い。人家でもこれを利用して屋根の莖は蔓延して樹や石の上に絡（から）まるものである。石の間に在るものは、葉が細く、厚そ、赤。曰く、この草は陰濕の處に生え、冬、夏共に青く、實は黒くして、圓く、



清といふはこの關係と同一意味である。この場合、醫者は往往急劇に桶の手の當干すのである。史の記載に「夏は土が燥して水が濁り、冬は土が堅いから水が甚しき病狀に至るを土淫といふ。蓋し虚熱があつて腎が不足する、つまり邪が水を『方』に小便の白濁は心、腎に故障があるため、或は酒色が原因となり、遂に存せしめてゐるのではあるまいか。これを服するに酒に浸して服するがよし。仁を知り且つ用ゐるものないのは、あまりに手近なもの、安價なものであるために忽<sup>かた</sup>に藥節、風熱、癰腫に主效があり、白髪を黒く變じ、老衰に耐へる。當今の醫家にこの神農はこれ以上品に列し、李當之稱して藥中の君といつた。その功力は筋骨、關節、氣味が平和なものであつて、

發 明

時珍曰く、

立ろに瘥える(恭)

【一】一切の風に主效があり、白髪を黒く變じ、老衰の傾向のものによし(臟器)

し、目を明にし、潤澤にして顔色を好くし、老衰せず、天年を延べ、神明に通ずる

養ふ。(四)腰痛(うゑん)に主效があり、筋骨を堅くし、關節を利す。久しく服すれば身を軽く

脾(み)ハモハ  
脾(み)ハモハ  
云云ノ骨。



腫閉し、水漿の下らぬもの【本經】大驚が腹に入りたるもの、邪氣を除き、腎を  
治主 風熱、死肌、癰瘍で口乾舌焦するもの。癰腫が消せずして喉舌が

(三) 腹摩ハ七股摩。

鐵落を惡み、貝母、豈浦を畏れ、<sup>(三)</sup>股摩<sup>ツ</sup>の毒を殺す。  
時珍曰く、味甘く微し酸し。苦くはない。之才曰く、杜仲、牡丹が使となる。  
毒なしといふ。當之曰く、大寒なり。藥中の君である。採收に一定の時期はな  
し、苦小温なりといひ、雷公は、苦し、平にして毒なしといひ、桐君は、甘  
氣味 苦】温にして毒なし【別錄曰く、微寒なり。普曰く、神農は、

去、熟甘草水で一伏時の間浸し、切つて晒して用ゐる。

作<sup>ル</sup>。(三) 大觀ニ子チヤリニ

莖葉修治

蘇恭の所説は誤つてゐるでなく、ただだ詳説を缺いただけである。  
葉のものと圓葉のものと二種あるが、功用は同じものだ。蓋し一種のものであ  
頭より小く、厚く實し、木強だ。表面は青く背は淡く、<sup>(三)</sup>濡<sup>ツ</sup>つて光らない。尖  
時珍曰く、絡石は石に貼り付いて生え、その莖は折れば汁が出る。その葉は指  
色のも、石血は葉が尖つて赤色のものだ。









蘇青 蘇宜 連縣 屬今 江

衰弱ノ類カ 貧血 又ノ後 風 詳ナラズ

一名 (三) 蓮蓬 實ハ 蓮房ノ

發明

慎微。曰。經に薛荔は背瘡を治すところあるが、近頃宜興縣のあ

主治

の腰脚を暖め、白髪を黒く變じ、老衰を防ぐ【(無)】血淋の痛澹を治するには、かあ  
【(三)】背癰は、乾末を服す下利して癒える【(類)】風血に主效があ

藥氣味

【酸し、平にして毒なし】

も皆食ふ。

子に一本の鬚があり、その味は微し澹い。その殼は虚して軽く、烏や鳥や兒童など  
空で紅いのが、八月後になると充満し、細子があつて大いさは稗子ほどあり、一箇が  
微し蓮蓬に似てゐるが稍長く、生の無花果のやうなものだ。六七月は實の内部が、  
堅く強く、絡石より大い。花が無くて實が生り、その實の大いさは盃ほどあつて、  
時珍。曰。木蓮は樹木や垣根などに延びて生え、四季共に満す、葉は厚くして  
だ、木蓮は絡石より更に大きく、その實が蓮房のやうなものだ。  
頭。曰。薛荔と絡石とは極めてよく似たもので、莖、葉が粗大で藤のやうな形状  
に一定の時期はなし。



此牧野曰、從來  
 此歸其藥ノ紅葉  
 (Parthenocissus tr-  
 icuspilata, L.) (ニ  
 是ク居テ中ノ花  
 科) 藤臺は地に著  
 藤臺は地に著、節の處に根を  
 山間の住民は産後にこれを

あり、また樹木や石に寄り結り、冬季にも枯れぬ。山間の住民は産後にこれを  
 南地方の林下に生ずるもので、葉は鴨の掌の如く、藤臺は地に著、節の處に根を  
 ぬくの、赤白帯下、天行心を治す。いづれも煎じて服し、また酒に浸して服す。  
 後の血結、婦人の瘦損して飲食不能となり、腹中に塊のあるもの、尿が淋瀝してて  
 産、味甘し、温にして毒なし。老血を破り、

附 録

地錦拾遺 (藏器曰)

一、日て乳が出る。子を産む婦人でもこれを食べへば乳が出る。(集簡方)

飲汁の【乳】木蓮二個、猪蹄一、個を煮爛して食ひ、并に汁を飲

り去つて研細し、酒で解いて温服する。功力は忍冬と相上下するものである。(陳

一) 一切の癰疽、初期には、發生部位の何れを問はず、木蓮四十九箇を用ゐ、毛を拵

にし、毎服二錢を米飲で服す。また夢精をも治す。これを鎖陽丹と名ける。(聖濟方)

(楊家藏方) 【大腸腸脱下】木饅頭を皮、子と切つて炒り、猪苓と等分を末

瀝るには、木饅頭を焼き、木枳殼を炒つて等分を末にし、二錢をつつて槐花酒で服す。

分を末にし、二錢をつつて水で煎じて服す。(惠民和局方) 【腸風下血】大便秘が更に

頭を焼いて性存し、櫚皮を焼いて性存し、烏梅を核を去り、粉草を炙いて等

汁は白い。今では一般人も方藥にもす

だ。葉は鬼桃に似て木の上に蔓延し、

弘景曰く、藤生で葡萄のやうなもの

。山谷に生ずる。

千歲藥は大

集解

といふのだ。

るものは無遠慮に廣がる。故に千歲藥

な

臺藥(別錄) 苣瓜(拾遺)

釋名

校正

別錄有名未用の藥根を併せ入る。

科名 和名 學名 無未詳

干 歲 藥 (二)

鱗 鮮 茹 水 に 研 ち て 飲 む (聖濟錄)

蓋を服用し、外部には急、蜜を搗けて四圍に傅ける。(聖惠方) 【血の止まぬもの】龍

前二見桃、一鬼桃。  
(三) 作

(三) 大觀ニ山川ニ

秘ニ事ヲハ

世明ニ其委ヲハ

井ノ博士ノ證ニ

ヲモツハ其藥ハ

時レハ此ヲ居カ

藥用ニ採甘ハ

分ヲ其物ヲ入

藥ニ其物ヲ入

ノ意味ナリ

ノズカカ、或ハ

義字ニ當ラズ。







黑色に還し、長生するところ至も難でない。この藤は太湖山、終南山に生えてゐる。賢院に召出して種種問ひ訊ねると、撫は『常春藤といふを服すれば、白髪をもと集と、隠民のうちに美撫といふ年齢に近いと稱する者があつた。朝廷でそれを集と宗。曰く、唐の開元末、唐朝に仕へぬ先朝以來の隱民を探し調へたときこのる。陶氏、陳氏の説が當を得てゐる。

に子を探る。子は青黒で微し赤い。冬だけ葉が潤む。春、夏の間に汁を取つて用ゐ四月その莖を摘むと味の甘い汁が出る。五月に花を開き、七月に實を結び、八月頃曰く、處處にある。藤生のもので、木の上に蔓延し、葉は葡萄のやうで小さい。の

は甚しい妄言だ。

つて、その注に『葛に似たる草なり』とある。蘇恭が、これを『蔓草』といつたて美味でない。(四) 幽州地方ではこれを推薬といふとあり、毛詩に『葛藟と酢機の草木疏に「一名苦瓜といふ。連蔓して生え、白く、子は赤く、食へるが酢藏。曰く、蔓は葛に似て葉の下が白く、その子は赤く、條の中に白汁がある。陸へて用ゐることを誡らぬが、仙經では數これを用ゐる。

參ノ註見。山草類人(四) 幽州

のだ。樹に附いて蔓が延び、莖は紫色の時珍く、忍冬は處によつてあるも誤りである。

〔花銀金・冬忍〕



は、或は緒石をこの物としてゐるが、花は白く、葉が紫だ。現に世間では胡豆に似てやうに上下に毛がある。葉が、その嫩い蔓には毛がある。膜が、昔は紫色で、舊い蔓には薄い皮

赤く、藤生で、草や木の上下に覆ひ繞り、莖、葉は紫赤色で、舊い蔓には薄い皮

集解

疏を伏し、表を制す。故に通靈する名稱がある。『とつてある。

とをを表したものだ。土宿真君は『靈植名は藤草である。それから取つた汁は能く金銀、この草は、花に瓣が長く、葉が下種の諸種の名がある。金銀、藤が左纏になつてゐる時珍く、冬を凌いで潤まぬと名を忍冬と名をたのである。





名一紅内消ハ何青烏

種ノ下ノ條附ス。見五  
種ノ乃ニ門後以死ニ入死  
ルニ至年果淋瀝注鬼邪ノ  
難シ氣ニ淋瀝注鬼邪ノ  
風を治し、腹を除き、痢を  
時珍曰、忍冬花の功用は皆  
たが凡の淺間しといふのだ。  
いものほど求めたが、兎角遠いものを貴重なもの、近いものを賤しいもの、考へ  
てとが稀である。凡そ世間で得易い草は多くは用ゐようとしない、考へにくく、得難

を用ゐたものだ。故に張公は「甚だつ、ぬ、物の中」に、異常なる効力があるといふ。物を  
を療するに實驗して奇效を認めたいが如き、その記の方はいづれもこの物  
陽の僧、江西の僧鑒清、内翰洪邁、内翰沈括の諸方に甚だ詳細に記載してあつて、  
消に勝るものだ。内翰洪邁、内翰沈括の諸方に甚だ詳細に記載してあつて、  
に『忍冬酒は、癰疽發背の初發を以ては論じられぬ。按ずるに、陳日明の外科要  
ないだから、飽までで同一轍を以ては論じられぬ。按ずるに、陳日明の外科要  
これは、思ふに古代と現代とではすべの關係、條件なきに變化があつて同じ  
治するの要と稱してゐるのだから、往昔の時代には一向それには言及しなかつた。  
その對症に用ゐるところをば知らぬ。い。後世ではこの草腫を消し、毒を散じ、瘡を  
風を治し、腹を除き、痢を解し、尸を逐ふの要と稱揚してあるが、後世では一  
時珍曰、忍冬花の功用は皆同じである。往昔の時代には、この草を



ノ内一七  
ミハハ  
腫喉痺  
ルモ口

して四錢を用ゐ、凡そ腫毒の初發には、水、酒でそれを調へて、周圍に搽り、中心の藤の大なるものを焼いて、性を存し、葉を焙じ乾し、末にして、各三錢、大黃を焙じ、末に金銀便毒【毒】方方は上に同じ。喉痺【乳蛾】方方は上に同じ。腫に敷いて毒を抜く【金銀瘡】は、氣氣散じ、血を和す。その功力は特に擡たかれてゐる。萬善堂方【丁瘡】は、汁半盤を八分に煎じて服し、渣を外部に傳ける。腐敗の毒が内部に入つたもの、自然初起の發熱を問はず、金銀花、俗にいふ甜藤てんとうの花を、葉と共に採り、その自或は【五痔諸瘻】方方は上に同じ。【一切の腫毒】潰れたもの、まだ潰れぬもの、或この藥は特癰疽を治るばかりでなく、癰疽を止めるに非常によいものだ。外科癰疽で梧子大の丸にし、毎服五十九丸から漸次百丸までを湯、酒任意のもので服す。癰疽取出して晒乾し、甘草少量を入られ、麴もちつて細末にし、先に藥を浸した酒で作つたづれを用ゐてもよし。多少に拘らず、瓶に入れて、灰酒に浸し、糠火で一夜煙い癰疽を發するを豫防する。先づこれを用ゐるがよし。忍冬草の根、莖、花、葉は速效が舉らないといつてある。陳自明外科精要【忍冬】消渴を治し、療えて後



二劑を服用す。それで大小腸が通利すれば藥力がその病に透るのである。沈内翰は『もして滓を去り、それを三服に分けて晝夜間に飲み盡す。病勢の重いものは一日數沸文武の慢火で一盪に煎し取り、無灰酒の好きも一大盪を入れて再び煎し、十數盪で碎き——鐵に觸れてはならぬ——甘草節（かんそうせつ）を生で一兩と共に沙瓶に入れ、亦二盪で瘡の周圍に塗つて口分だけを残して氣を洩す。藤の部分は五兩だけをも木槌で搥一把握を取り、葉を沙盆に入れて研爛らし、生餅子と酒少量を入れて適量（じきりょう）に濃く解き、らば、神異膏をそれにと貼る。その効果は甚だ不可思議なものだ。忍冬（にんとう）の藤生のものな力のない場合は、ただ眞面目にこの藥を服用するがよい。服してその瘡が破れたな場末の貧民窟、極めて貧しい者等で、藥の材料の得難い處に住むか、或は求むる資何れの部位に發したるを問はず、いついれにも奇效がある。田舎の村落や偏僻な土地、と、頭なると、項なると、背なると、腰なると、脇なると、乳なると、手足なると、**【附方】**酒忍冬癰疽發背を治す。肩に發すると、頤（い）に發する

ある。

(鹽 秘 坤 乾)

ても散ぜぬでに熬り、膏通の膏のやうに攤して用ゐる。(乾 坤 秘 鹽)  
 兩、吸鐵石三錢、香油一斤を熬り枯らし、滓を去り、黃丹八兩を入れ、水に滴らし  
 取出せば癒える。(鹽 濟 方)【忍冬膏】諸般の腫痛、金刃傷瘡、惡瘡を治す。金銀藤  
 盤、馬蹄香等分を酒を用ゐて搗き、雞の汁を羽に藥つけて瘡の梗の赤い靈楠藤、高脚銅  
 食ふ。即ち今忍冬草である。(洪 邁 堅 志)【舌口瘡】野菌の中【毒藤】急に驚草を採つて  
 にし、二錢づつを熱酒で調へて服す。(衛生 簡 方)【筋骨引痛するは、驚藤、即ち金銀花を末  
 む。(李 樸 怪 酒 奇 方)【脚氣の痛むもの】筋痛むもの【痛むもの】金銀花一兩を水で煎して飲  
 に連ふて身體の青色になりたるもの【痛むもの】金銀花一兩を水で煎して飲  
 に濃煎し固め、一日二三回、每服子大の量を温で酒で溶して服す。(肘 後 方)【鬼擊  
 と呼應し誘引して目毎に劇に發する病である。忍冬、葉を刈み、數斛を煮て濃汁を取り、更  
 り、季節の變り毎に劇に發するものである。いづつれも身體内部の尸鬼が外部の邪な  
 る。尸注といふは、全身が沈重となり、精神が錯雜し、昏昏として廢人のやうにな  
 し、心脇に迫り及び、發する毎に絞り切るやうに痛み、寒冷に遇へば發るもので結

一名。  
(五)馬蹄香、杜衡、  
(六)高脚銅盤、詳ナ

躍るやうに絶間に痛が傳はつて、一定の部位を判し得ず、發する毎に恍惚として  
 を見る、哀哭の聲を聞く毎に發するものである。尸といふは、手足の末端に不規則に  
 變動なるものがある。通尸といふは、骨に附き、肉に入り、血脈を攻め鑿ち、死體  
 五種【尸注】飛尸といふは、皮膚を遊動して、臟腑まで洞穿し、毎に刺痛を發し、  
 浸して日毎に常に飲む。(癰疽原要訣)【熱毒血刺】忍冬藤を濃く煎じてて飲む。(聖惠方)  
 輕粉毒の【方】上方は上に同じし。【瘡】瘡が久して漏となつて、忍冬草を酒  
 取を繼續すれば瘡か夥しく黄水を出す。その後には肌を生ずる藥を用ゐて效を取  
 紙で七重に封じて一箇の孔を穿つてて氣を出し、瘡をその孔に向けて薫する。六時間  
 の瘡をぬくの【方】左癰藤一把を搗き爛らし、雄黄五分、水二升を入れて互確ひたひたで煎  
 生で一盞に煎じ、病の上、下に隨ひ、一日二回服用し、渣を傳ける。(和劑局方)【惡瘡】  
 潰れる。忍冬葉、黄芩きんぎょ各五兩、當歸一兩、甘草八錢を細末にし、二錢つづの酒一盞  
 虚、實を問はずこれをして服す。ただ十分癰とならぬものは内消し、已に成つたものは  
 無名腫毒の瘡を治す。右の病で、實熱の狀態が傷寒のやうなるには、老人、幼兒、  
 部分を殘して氣を洩す。(楊誠經驗方)【癰疽】癰疽の托裏せるもの、癰疽發背、腸癰、  
 奶癰、なまいん

釋名

木部より移して此に入れ、拾遺の大瓠藤を併せ入る。

校正

科學和  
名名名  
米米無  
詳上

(二) 含 水 膠 (藥 海)

合水藤ハモ、アルト  
合水藤ノ名、アルト  
polygama, L.f.)ニ  
た、(Actinidia  
なるシ科ノ植物、含  
ハ。未詳。曰、野水

(四) 閃癰、疔瘡。

(三) 水イヒノ乾糧ノ類。

大。明。曰。く、消。渴。を。止。め、五。臟。を。潤。し、腹。の。内。部。の。諸。冷。を。除。く。

甜。藤（拾遺）。曰。く、江。南。の。山。林。下。に。生。ず。る。蔓。草。は。葛。の。や。う。な。も。の。で、味。甘。し、寒。に。し。て。毒。な。し。熱。煩。に。主。效。が。あ。り、毒。を。解。し、中。氣。を。調。へ、人。體。を。肥。に。す。る。

搗。汁。で。米。粉。を。和。し、糲（糲）。食。へ。て。甜。美。に。し。て。止。め。る。又、刺（刺）。馬。血。が。肉。に。入。つ。た。も。の、及。び。狂。犬、馬。牛、の。熱。黃。を。治。し、蛇。咬。瘡。に。傅。け。る。中。兒。の。腹。中。間。癰。癰。に。傅。け。る。尖。つ。て。長。く、氣。が。辛。く。臭。い。も。の。が。あ。る。こ。れ。は。搗。蛇。瘡。に。傅。け。る。

ならぬ、顔色を好くする。

人、か、こ、れ、を、服、す、れ、ば、肥、え、る、と、こ、ろ、か、ら、一、名、を、肥、藤、と、い、ふ。味、甘、し、温、し、人、體、を、肥、健、風、血、氣、の、諸、病、に、主、效、が、あ、り、久、く、服、す、れ、ば、中、を、調、温、補、し、人、體、を、肥、健、

米詳ノ植物下。



藤、(三) 井牧日野藤共  
二 共甘露

詳如(一)牧何野  
ル。ナ植物  
未藤

附 錄

甘露藤(嘉祐)藏器。曰く、く、嶺南に生ずる。藤の蔓は箸ほどのもので、

汁

を通じ、諸熱を解し、渴を止め、煩悶を除き、五臓を利し、腎の釣氣(きうき)を治

氣味

【甘】平にして毒なし

主治

【中】氣を調へ、氣を益し、血氣

集解

は本防己のやうだ。切つて一端を吹けば他の一端へ吹く貫ける。その汁は蜜のやう

釋名

ものである。又、甜藤(てんてん)、甘露藤などいふが、この草とは同じくない。

校 正

木部より此に移し入る。

甘

藤(嘉祐)

科名 和名 未詳  
名 未詳  
無 詳

葉は葛の葉に似て圓く小さく、白毛があり、四季共に凋せず、根には鬚がある。夏  
頭。曰く。江、及、（浙江）。春苗堂が生ずる。山中生ずる。春苗堂が生ずる。藤になり、

集 解

天 仙 藤 (宋) 圖 經 (五) 科 學 和 名 未 詳 し

藤 (一) 未 牧 詳 植 物 天 仙

ニ 種 (五) 觀 大 性 温 下 二

未 (四) 牧 野 植 物 藤

附 錄

な。である。酒に浸して服用す。(五)性温であつて、やや悶えさすが苦むいほどでは  
さ、筋骨を壯にし、衰老を補し、顔色を好くする。濃く煮て服し、微し汗を取る除  
陰。接。陽道を益し、小便頻數で白濁するもの、腰痛冷に主效があり、汗風氣を除  
彼。地では甘蔗のやうにこれを食ふ。味甘し、温にして毒なし。男子の五勞七傷、  
かで潔く、枸杞の似たもの、花は白く、節は白く、心か虚だ。苗の端に毛がある。  
藏。器。曰く。南海の海濱の山谷に生じ、藤になつて樹に絡まるもの、葉は  
こらから名けて、その鼠が咬んだ處を人が取つて薬にする『とある。  
鼠 (四) 拾遺 (宋) 日 杓、顧微の廣州記に『鼠が好んでこの藤を食ふと

十ノ廣。東省。現。州。島ノ地。今  
 (三) 朱。里。僂。耳。今  
 嶺南ノ南。北。南。北。嶺南ノ五  
 嶺南ノ南。北。南。北。嶺南ノ五  
 嶺南ノ南。北。南。北。嶺南ノ五

陣に傳ける【藏器】人體に損痛あるを治す。髪を沐すれば長くならん【時珍】廣州記。  
 臟を潤し、燥を解す。瘡瘍、瘰癧、丹石の發動にもこれを用す。小便を利す。その葉を搗いて中の水を爛瘡、皮、渴、心躁を解す。【李時珍】渴を止め、五、煩【治主】寒なり。【藏器】平し、甘し、平にして毒なし【治主】寒なり。  
 時珍曰く、顧微の廣州記に『水藤は、地を去る一丈で斷つとまた更に根が生え、地水がそれ依つて絶えな。山地を行く口が渴するとき切つてその汁を飲む』とある。陳氏の所謂大瓠藤とは蓋しこのものである。  
 の汁取つて用ゐる。その藤の形状は瓠のやうなもので、切斷すると水が出る。それ藏器曰く、安南、朱里、僂耳の水の無い地方では、いづれも大瓠藤を種多てそはれるのだとある。  
 ところから、行路者が水に乏しい處を通るとき此の藤を喫ふ。故にかやうな名で呼海邊の山谷に生ずる。形状は葛のやう、葉は枸杞に似たものだ。多くは路傍に在の瓠。曰く、按ずるに、劉欣期の交州記に『令水藤は嶺南、及び嶺北

冬になるると凋み落ちる。その藤は枯  
 葉は青色で生ずる。春初に草生し、  
 福州の山中に頌曰く、

【紫 金 藤】  
 一州福



山甘草

釋 名

集 解

詳 詳 し

科 學 和  
 名 名 無  
 未 未 無

紫 金 藤 (二) 宋 圖 經

傳 ける。 (摘 玄 方)

を温酒で調へて服す。【肺熱瘥<sup>せう</sup>】桐油に黄連末を入れ、天仙藤で燒きた油を  
 少しつゝ酒で和した酒で調へて服す。【氣血一切の腹痛するに、前記の方  
 枕痛といふのものである。天仙藤を炒り焦して末にし、生薑の汁と童尿を  
 祕方であつて、李伯時の家から傳へたものである。】陳自明婦人良方 (産後の腹痛【痛  
 腫は漸次<sup>しんじ</sup>に消く。三枚と七分に煎じ、一日三回、空心に服す。小便が利しし氣脈が通し、

藤ハ、  
 牧ノ  
 詳野  
 植ヲ  
 物ヲ  
 紫  
 金



二 血が逆ル風邪ノ病。

ヲ。夏ノ條見ヨ。  
ハ。普夏ハ汁製スル法  
（四）ハ。普夏ハ汁製スル法  
（三）ハ。普夏ハ汁製スル法  
（二）ハ。普夏ハ汁製スル法  
（一）ハ。普夏ハ汁製スル法

出（三）風勞、千金方ニ



〔藤仙天〕

治

味

氣

を用ゐる。

季に根と苗を採取する。南方地方で多くこれ

附方

新六。

【天仙藤】氣の痛み。酒一盃で半盃に煮取つて服す。

神效がある。天仁集效方（孫天仁）痰注臂痛、白羌活、白芷、各三錢、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子

五錢、夏生を製して五錢、これを五錢つづ、薑五片と水で煎じて服し、千金子



丸（つ）を乳香湯で服す。極めて効果がある（効驗方）。

錢、肉桂二錢、麝香三分を末にし、米糊で梧子大の丸にして、珠砂を衣にか、十五

錢、土當歸酒、土牛膝三兩、錢、各七錢、【紫金丹】の死胎の下にぬも、

肉桂、青鹽各二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、一、二、三、回、二十丸、温酒

づれもこれを服するがよし。紫金丹、戟天を心を去つて三、兩、吳茱萸、高良薑、

及び婦人の子宮久冷、月經不順で、或は多或少のもの、赤白帶下等を治す。

し、あらゆる節が酸疼し、項筋が緊急し、背脾が勞倦し、陰汗し、盜汗するもの、

なり、口が乾き、舌が澀り、夢想し、虚驚し、耳鳴り、目に涙が出、腰、膝が沈重

し、精髓を填し、顔色の移らぬを駐め、肌肉を潤ほし、元氣が虚して顔面が黎黒に

減、【紫金丹】を腎臟を補し、丹田を暖め、陽道を興し、小便を減

新。二。

附方

腫毒に傳ける【時珍】

氣味 主 治

條に似たもの。皮を採つて晒し乾す。

【男子の腎氣】蘇頌

損傷の瘀血を消す。

搗いて惡瘡、

急痛するものに主效がある。湯にして溶するが佳し。

が、ない。九月莖を採つて曝乾する。味辛し、温にして毒なし。肢節の風冷で筋脈が實、花、で、細なものが似て、公藤に丁葉、莖、出、莖、が、生、え、節、に、生、ず、る。多、く、は、林、や、竹、叢、の、中、に、あ

附 録

宋 綱 目 卷 五 木 部 藤 類

ハ 宋 綱 目 卷 五 木 部 藤 類  
ト 詳 植 物  
ヲ 藤 類

治する力が速なものやうである。

し、南藤と稱してゐる。白花蛇が好んでその葉を食ふのだけ、に、諸風を時珍曰く、近頃、俗間で諸風を治するに南藤を用ゐるで、諸藥を和して諸熱を

た。母はそれをして病癒えた』とある。

で教へて泣いて拜してその藤を請ひ受けた。時、その老翁が酒に漬ける方法

を聴き、泣いて拜してその藤を請ひ受けた。時、その老翁が酒に漬ける方法

藤を指して「丁公藤といふはこのもの、風を伐るで、木を伐るのを見てゐると、その老翁がある

で、醫に訊ね、また本草を調べたが、丁公藤といふ藥はない。ところが各地を捜して、

韓 天ノ草註ハ山草類巴  
見





葉、花、生え、木の上の葉に蔓延し、

集解

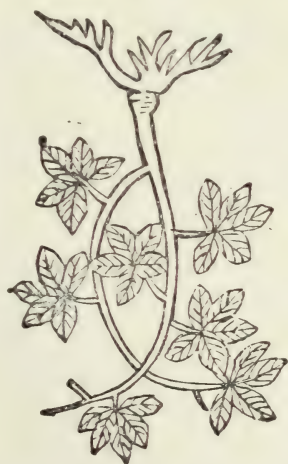
釋名

百靈藤(綱目)

藤(木) 詳野植物ノ百稜

百稜藤(宋)圖經(科學和名未詳) 詳し

るものだ。その後には數日間風に當らぬが良し。(集韻方)



[藤風清]

は冷水一口を飲む。風病は解して全く癒え  
くのである。かゝる時、急に用意した櫛で梳  
なるから、その時、手付けやうな拍子に全  
身が痒<sup>か</sup>くなり、拍子で拍子。その後全  
ら患者の體を掌で一、二拍子、服を量つて  
を量つて酒で一、二拍子、服を量つて酒か  
め、これを、藤を、多少に拘らず、釜に入れ、微火で七晝夜煎つて膏になつたとき、藥器<sup>ヤクキ</sup>に取り

在昌<sup>リ</sup>ノ西ノ支十五里ノ下ニ繁ニ生ケル。モ常ニ治ス。安









こもいふ。

ひ、或は鷹が脚で代州の鷹門まで運び、そこで生きたから右の名稱があるのだい

とい。曰く、藤の高が一寸餘あつて、鷹が通る時皆これに引懸るとい

釋名

校正 木部より此に移し入る。

科名 和名 名 未詳

落鷹木 (藥海)

れば水癰病を下す【微温にして小毒あり】主 治

氣味

を拭ひ取る。

の花を採み砕いて酒、醋の白く腐敗したものを拭ひ取る。

れて置けば酒は腐敗せぬ。その角は角になり、角の中のものに香しき酒に入

る。江東では招豆藤と呼ぶ。その花を間く。長安地方では庭の飾にやばり藤を植

える。四月に美しき紫色の花を開く。心から重重心に皮があつて、その皮が著いてゐるもので

集解

註、代州の鷹門は石部石

植物牧野曰く、未詳

癰病ハ心滴ニ云フ。

池ノ庭ニ觀ツル。早カキヤガ我邦此ナシ。私考ハ先キ之ヲ見シ。學ノ精者邦ニ從



に主效がある。いづれも煎じて服するがよし。

五淋、消三、白濁、下、赤白毒、蛇毒瘡、一切の瘡腫。

に主效あり、小便を利し、煩を解し、目を明にする。いづれも煮て服す。

あるはこの物だ。味苦し、寒にして毒なり。小兒の發熱、發汗、驚風、寒熱、熱淋。

は草、木の上下に絡み、葉の細かいものであつて、劉都賦に『風行は、平衡に』と『臺延す』と

[illegible]

○  
५

跌てつ躓そに主效あり、肌を生じ、血を破り、痛を止める。酒、水各半で煮た濃汁を飲

似てゐる。二月、八月莖を採つて陰乾する。味苦し、平にして毒なし。筋骨の傷折

毎(木)王(唐)本(草)恭、曰く、資州に生ずる。藤は樹木のの上に絡み、葉は葉から

血閉に主效がある。痛を止めるには、水各半で煮た濃汁を飲む。

毒。平にして、毒なし。味、甘く鹹し。平にして、毒なし。傷折、筋骨疼痛、血を散し、血を補して、産後の

皇三

房游不稱心、意此爲

飲一杯不能止渴，及

一、五、十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十、一百。

一、聖書、六、

果、  
國、  
三、  
二、

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

○發

(一) 1980年

用  
影  
及  
四  
三

真入國卷三

。王

三、







氣味

【苦】平にして小毒あり。頤曰く、苦く甘く、寒にして毒なし。

莖、葉を採つてて眼藥に入られ、黃花演と呼んでゐる。蓋し同一種類の物である。毛が、枝、幹は圓くして青い。春苗が生え、秋黄色の花を開き、結ばない。

路旁に生え、葉は菊に似て長く、背而に

薬州に千里光といふがある。淺い山や

住民は花、葉を採つてて服藥に入れる。又、

る。春苗が生え、秋花を開く。彼の地の

頤曰く、千里急は天台の山中に生ず



「及里千」  
——千里光

宣、湖の地方にある。

集解

藏。器。曰く、千里及は路傍や垣根などに藤生する。葉は細くして厚い。

校正

圖經の千里光を併せ入る。

千里及(遺拾)

科名 學名 和名  
Senecio scandens, Ham.  
(菊科) 名 名 名

ト定メタ。堆ノ金ノ意  
入據之ヲレノ意  
三實圖考、卷ノ二、植物  
名實圖考、曰ク、

茅ノ註ヲ州見。  
(三) 仙草。類草。二  
草。本。中。二  
(二) 草。千。里。急。ノ  
圖。經。二。本

浸して服用す。

の、小便の白濁し頻數なるもの、陽道の乏しきもの、に主効がある。煮汁、或は酒に  
としたものだ。陰乾する。味甘し、し、温にして毒なし。腹内の冷、腰膝の痛み弱も  
牛領藤（器）曰く、嶺南の高山に生ずる。形が（樹皮）楸で牛領のやうなところから名

火に近づけて温め、空心に服して微し汗を取る。

喘、手足の離緩に主効あり、虚を補し、陽を益し、冷氣痺を去る。酔酒に浸し、

手やうなものだ。採收に一定の時期はない。味甘し、温にして毒なし。偏風の口

龍手藤（器）曰く、安勞（安勞）浦（浦）に出る。石上に陽に向つて生ずるもので、葉が龍の

して服用す。

内、腰脚の諸冷で食事が順調ならず、肌膚の完全ならぬものに主効がある、酒に浸  
から名けたものだ。吳地方にもあるが少し異なる。味苦し、毒なし。風血風老、腹  
地龍藤（器）拾遺（器）曰く、天目山に生ずる。樹に絡つて龍のやうな（蛇）蟠ること

附錄諸藤十九種

註見ハ里（二）里臨（三）支者  
（一）安勞浦、未詳。  
（二）收野藤本ハ附錄  
（三）植物志曰ハ未詳  
（四）安勞浦、未詳。





熱毒、惡瘡、主效がある。刺猪<sup>うしち</sup>を洗<sup>う</sup>つて粗皮を去り焙じ乾したものと共に等分を

一 定の時期はな<sup>い</sup>。味甘し<sup>い</sup>。涼に<sup>して</sup>毒を<sup>し</sup>。諸

— [藤州]

共に葉があつて花が<sup>い</sup>。皮を<sup>探</sup>るの<sup>て</sup>であるが、  
瓜藤<sup>ひょう</sup>宋<sup>しやう</sup>圖<sup>と</sup>經<sup>けい</sup>曰<sup>い</sup>、頭<sup>かぶ</sup>、施<sup>し</sup>州<sup>しゅう</sup>に生<sup>は</sup>ずる。四季



— [瓜地]

冷氣<sup>れいき</sup>嗽<sup>せう</sup>主<sup>しゅ</sup>に主<sup>しゅ</sup>効<sup>きう</sup>がある。煮<sup>に</sup>汁<sup>じつ</sup>を<sup>を</sup>服<sup>はく</sup>す。

藍藤<sup>らんとう</sup>曰<sup>い</sup>、生<sup>は</sup>ずる。根<sup>こん</sup>は細<sup>さい</sup>辛<sup>しん</sup>のや<sup>や</sup>だ。味<sup>あじ</sup>幸<sup>しん</sup>し<sup>し</sup>温<sup>おん</sup>に<sup>して</sup>毒<sup>どく</sup>な<sup>し</sup>。

温<sup>おん</sup>して毒<sup>どく</sup>な<sup>し</sup>。酒<sup>しゆ</sup>に浸<sup>ひ</sup>に<sup>して</sup>服<sup>はく</sup>す。根<sup>こん</sup>は細<sup>さい</sup>風<sup>ふう</sup>血<sup>けつ</sup>、積<sup>しやく</sup>冷<sup>れい</sup>に<sup>して</sup>主<sup>しゅ</sup>効<sup>きう</sup>ある。

温<sup>おん</sup>藤<sup>とう</sup>曰<sup>い</sup>、江<sup>かう</sup>南<sup>なん</sup>の山<sup>さん</sup>谷<sup>こく</sup>に生<sup>は</sup>ずる。梅<sup>ばい</sup>に著<sup>しやく</sup>いて潤<sup>じゆん</sup>ま<sup>ま</sup>な<sup>い</sup>。莖<sup>けい</sup>は味<sup>あじ</sup>甘<sup>かん</sup>し<sup>し</sup>、

す。い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>れ<sup>れ</sup>煮<sup>に</sup>汁<sup>じつ</sup>を<sup>を</sup>服<sup>はく</sup>し、ま<sup>ま</sup>た生<sup>は</sup>ずるに<sup>して</sup>搗<sup>たう</sup>いて汁<sup>じつ</sup>を<sup>を</sup>服<sup>はく</sup>す。人<sup>にん</sup>を下<sup>げ</sup>痢<sup>り</sup>を<sup>を</sup>解<sup>かい</sup>する。

對<sup>たい</sup>ひ<sup>ひ</sup>合<sup>が</sup>つて生<sup>は</sup>ずる。味<sup>あじ</sup>苦<sup>く</sup>し、平<sup>へい</sup>に<sup>して</sup>毒<sup>どく</sup>な<sup>し</sup>。諸<sup>しよ</sup>種<sup>しゆ</sup>の毒<sup>どく</sup>物<sup>ぶつ</sup>、天<sup>てん</sup>行<sup>かう</sup>瘡<sup>そう</sup>の疫<sup>えき</sup>毒<sup>どく</sup>を<sup>を</sup>解<sup>かい</sup>する。

百丈青<sup>ひやくさうせい</sup>曰<sup>い</sup>、江<sup>かう</sup>南<sup>なん</sup>の林<sup>りん</sup>澤<sup>さく</sup>に生<sup>は</sup>ずる。藤<sup>とう</sup>蔓<sup>まん</sup>は緊<sup>きん</sup>つて硬<sup>かう</sup>く、葉<sup>えふ</sup>は薯<sup>しよ</sup>蕒<sup>たう</sup>のや<sup>や</sup>うで

り、癰<sup>おん</sup>を治<sup>ち</sup>す。

い<sup>い</sup>ふ。味<sup>あじ</sup>甘<sup>かん</sup>し<sup>し</sup>、温<sup>おん</sup>に<sup>して</sup>毒<sup>どく</sup>な<sup>し</sup>。久<sup>きう</sup>し<sup>し</sup>服<sup>はく</sup>すれば、長<sup>ちやう</sup>生<sup>せい</sup>し、天<sup>てん</sup>年<sup>ねん</sup>を延<sup>えん</sup>へ、久<sup>きう</sup>嗽<sup>せう</sup>を去<sup>さ</sup>と

た<sup>た</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>もの<sup>もの</sup>で、葉<sup>えふ</sup>は柳<sup>りゅう</sup>のや<sup>や</sup>うだ。春<sup>しゆん</sup>紫<sup>し</sup>色<sup>しき</sup>の花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>開<sup>ひら</sup>く。蜀<sup>しやく</sup>方<sup>ほう</sup>ではこれ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>沈<sup>ちん</sup>腐<sup>ふ</sup>藤<sup>とう</sup>と

蔓草<sup>まんそう</sup>（五）施州<sup>ししゅう</sup>見<sup>けん</sup>山<sup>さん</sup>草<sup>そう</sup>類<sup>るい</sup>部<sup>ぶ</sup>

寒<sup>かん</sup>（大）觀<sup>くわん</sup>ノ下<sup>げ</sup>

天<sup>てん</sup>門<sup>もん</sup>（七）安<sup>あん</sup>山<sup>さん</sup>在<sup>ざい</sup>徽<sup>き</sup>省<sup>しやう</sup>

無門（六） 爲牙、門、無爲、安  
縣、牙、門、無爲、安

草、冬、二、月、ヨリ、入、本  
草、冬、二、月、ヨリ、入、本

蔓藤。蔓。曰。く、無爲の天門山の谷に生ずる。形状は寄生が大樹に著い  
蛇咬に主效がある。柞いて末にし、水で和して樽ける。  
萬一藤。蔓。曰。く、嶺南に生ずる。蔓は小豆のやうなものだ。一名を萬吉といふ。  
毒なし。産後腹痛、血露の盡きぬものに主效がある。濃煮汁を服す。  
息王藤。蔓。曰。く、嶺南の山谷に生ずる。冬期にも潤まないう味苦し、温にして  
瘦、婦人の諸疾に主效がある。  
斑がある。冬期に取る。味甘し、温にして毒なし。酒に浸して服すれば、風血、羸  
斑珠藤。蔓。曰。く、山谷の中に生ずる。冬月にも潤まないう味苦し、温にして毒なし。酒に浸して服すれば、風血を去る。葉と共  
に搗いて腫に傅ける。  
のやうだ。藤の味苦し、温にして毒なし。酒に浸して服すれば、風血を去る。葉と共  
鬼臚藤。蔓。曰。く、江南の林や澗の邊に生ずる。葉は梨の葉のやうで、子は糖子  
食へば飢えぬ。その根を食へば髪が落る。  
ふ。その中に粉がある。味甘し、温にして毒なし。饑餓で食物缺乏の場合にこれを食  
牛嬌藤。蔓。曰。く、深山に生ずる。大々しくして樹のやうなものだ。牛が好んで食

作  
 (一)頭 大サニ 觀ニ 藥ニ 根ニ 藥ニ 附ニ 方ニ 百  
 (二)頭 大サニ 觀ニ 藥ニ 根ニ 藥ニ 附ニ 方ニ 百  
 (三)頭 大サニ 觀ニ 藥ニ 根ニ 藥ニ 附ニ 方ニ 百

て末にし、(二)錢を酒で服す。  
 を解す。百藥頭と等分を焙じ研  
 て毒なし。心氣痛に主效あり、熱し  
 あつた花が味苦く涼し、涼しが  
 藤は大木に纏ひ著る、四季に葉が  
 野猪尾頭。曰く、施州に生ずる。

〔尾猪野〕  
 州施——



地の者は葉を採つて諸風を治す。有效だ。

〔藤婆天〕  
 古——



〔藤用獨〕  
 州施——



初婆藤 (Chū Po Teng) 頭曰く、天台山中に生ずる。木の上下に蔓延し、四季に葉がある。その  
 主效あり。小頭葉を焙じて等分を研し、酒で服す。

金陵本ニ 郡ニ 作



字リテ  
類證(二)風上三腫

類證(二)見本馬脚三卷。外脚十馬脚。續筋根。旋花ノ



[藤 春 合] 一古 一天

合春藤。頭曰く、台州に生ずる。その苗は木に延び、冬も夏も常に青い。葉を採

のはな。

つて諸(二)風を治するに效がある。

獨用藤。頭曰く、施州に生ずる。四季に葉が倒(て)れ、葉の上(うへ)に倒れが。皮を採るのであるが、一定の時期は。味苦く辛く、熱にして毒なし。心氣痛



[藤 稜 金] 一州 施

等分を末にして酒で二錢を服す。忌むも接脚と共に粗皮を洗ひ去つて焙じ乾し、骨の疼痛に主效がある。温にして毒なし。一定の時に葉が花が。採收に一定の季節に生ずる。四季に葉が倒れ、葉の上(うへ)に倒れが。皮を採るのであるが、一定の時期は。味苦く辛く、熱にして毒なし。心氣痛

金稜藤。頭曰く、施州に生ずる。四季

搗いて篩ひ、甘草調へて貼る。

本草綱目  
草部  
第十九卷

本草綱目草部第十八卷下 終

を抄書して此に附したものである。

んでゐる。この骨路支の條は、もともと紫葳の後に附録してあつたのだが、遺落した飛藤と呼び、安南にもあつて、草木香のやうな根は凌霄藤に似て生じ、苗は凌霄藤に似て根は青木香のやうな根に主效があり、二三蟲を殺す。

馬。來。牛。島。船。國。地。今。指。ノ

瘰癧に主效あり、二三蟲を殺す。  
水、氣逆、婦人の崩中、血餘の癥、  
し、平にして毒なし。上氣浮腫、  
骨路支（瘰癧）曰く、味辛。

〔草合石〕——州施——



瘰癧を斂める。焙じ研つて溫水で調へて貼る。  
その地の住民は葉を採る。味甘し、涼にして毒なし。一切の惡瘡に主效があり、  
石令草。頭曰く、藤は木の上に纏ひ、四季共に葉があつて花がな

右附方 舊四十八、新七十二。

石帆

華日

水松

綱目

海蘊

拾遺

海帶

綱目

荇菜

唐本

草別錄

水藻

綱目

海藻

綱目

萍水

綱目

蘋草

綱目

萍藻

綱目

拾遺

即水藥。

白昌

別錄

香蒲

綱目

菰別錄

青草

綱目

酸模

華日

牛舌實、麝香を附す。

龍舌草

綱目

葛蒲

綱目

澤瀉

綱目

酸模を附す。

醉草

唐本

羊蹄

綱目

草の八

水草類三十二種

本草綱目部目錄第十九卷













氣味

乾し、必ず要に應じて用ゐる。

【しな毒てしに寒、し丹】  
 別錄に曰く、鹹、く權、く曰く、し苦。元素曰く、

根 修 治

つて穀精草に似てゐる。秋の末に根を採つて暴乾する。

多くは淺水の中に生える。葉は半舌に似てて、莖は長い。花期に白花を開き、莖葉に花萼を被る。

頤○曰く、今は山東、(毛)河(カ)陝(セ)に江に淮あるが、漢中のものが佳し。春苗が生え、

22

華○日、今、は、汝、南、で、一、向、に、採、ら、な、い。  
 温、州、ぬんしゅうの、州、の、も、か、が、暴、し、な、る、こ、と。

○ 山 集 二 七

いものたから、密封して貯へる必要がある。浅水の中に生ずるもの、葉は狭く

尾の部分に必ず兩岐のあるものが好しとなつてゐる。この物は、朽ち、蠹か、付き易

な。い。た。だ<sup>(五)</sup>漢中、南鄭、青州、代州のものだけを用ゐる。形體が大大きく長く、

弘景曰、豫州<sup>(四)</sup>汝南郡は、今將近にともあるか、用ゐるに堪へ

○ 乙卯年

陝西(上) 陝西、陝

花乳石註見○

(六) 涇州、山、草、類、黃

見

、理ノ舟童、保五ノ

石、鄭、南、漢、中、見、三

(四) 豫州 水部 井泉

(三) 汝南、山、真王

揮し得るわけのものではない。

に相違ないにしても、諸種の補薬が多く集つた中に在つては、さやうに瀉の力を發に虚損、五勞を植するの功を用ゐるが目的であつたのだ。澤瀉は能く腎を瀉するものゝ用ゐてあるのは、蓋し澤瀉が腎の邪を瀉し、五臟を養ひ、氣力を益し、陰氣を起し、始めて力がそれが達するといふわけではないのである。して見れば八味丸にこれを附子、官桂なるものは右腎、命門の薬であつて、いづれも澤瀉の誘導を待つてを「生ずる」の事實である。地黄、山茱萸、茯苓、牡丹皮といづれも陽旺あつちなれば能く陰を補ふだけではなく、同時に氣を補ふことになつてゐる。所謂『陽旺あつちなれば能く陰を補ふ』に依れば、八味丸は地黄を君となし、他の諸薬を佐としてあつて、單に血を王わう廢はい曰く、王好古は寇宗奭の說を是ぜと認めてゐるのであるが、余の確信するところ。

『目か明かになるのである。また小便を利用すれば腎氣が虚するから目が昏くらむのだ』  
 『去るは、その味の鹹が能く伏水ふくすいを瀉する關係に依る。伏水ふくすいを瀉し、留垢りゅうこうが去るから目が昏くらむ』  
 『目か明かになる』と云ふのは何故であらうか。易老の議論に依るとして『留垢りゅうこう中ちゆうの留垢りゅうこうを』



ルモシヲ云フ。  
種ニシテ氣息。  
女(三)欲ノ  
一

を、水一盞、薑五片、燈心十莖で八分に煎して温服する。【支飲苦冒】仲景の澤  
霍亂【亂】小便便利せず、頭運し、引飲するに、三白散——澤瀉、白朮、白茯苓各三錢  
白朮、澤瀉各一兩を末にし、或は丸にし、三錢つのを茯苓湯で服す。(後集)【冒暑  
冒暑腫脹】水瀉腫脹を見よ。【方】方は陳銜ちんげんの條を見よ。

附方

新五、一、昔

ことは言ふまでもない。  
久しく服するとは不可能なものだ。そこに神功あるへき道理はない。マヤ膠りである  
余は根本的にこれを疑ふのである。澤瀉は水を行ひ、腎を瀉するものであつて、  
澤瀉といふとある。陶氏、蘇氏は、いづれもこれを事實と信じてゐるのであるが、  
澤瀉すれば人の身體を軽くしめ、一日に百里を歩行し、水上を走れる。一名  
く、顔面に光澤を生じ、能く水上を歩行し得るといひ、典術には『澤瀉は、久  
時、珍く、は神農の書に澤瀉を上品に列して、また久しく服すれば、身體を輕  
一に六兩を分服し、百日繼續すれば身體が輕くなり、歩行が健になる。ある。  
頤曰く、仙方でもやはり單服する。澤瀉一物を搗き篩つて末を取り、水で調へ  
して能く水上を歩行するといつてある。



正 誤

弘。曰く、仙經の服食、斷穀に皆てれを用ゐてある。また身體を軽く

み事にするために、結局は原則通りに、久しく服して偏勝の害を招いてゐる。

といふものである。後世ではこの機微な必然關係に注意をかくて、そそ眞に理想的な手段と揮する、一つの面について聞き、一面に於いて聞き、その兼用してある。邪が去れば補藥が十分に發する場合には必ず邪を瀉するもの、誘導を目的としたものでない。古人は、補藥を用ゐるかぬでないか。仲景の地黄丸、茯苓、澤瀉を用ゐたのは、澤瀉の膀胱の邪氣に甚だ度を過ぎて清氣が升らず、眞陰の力が潜逃し消耗する。目昏を惹起せぬわけに目を聴にするの功がある。故に澤瀉には、五臟を養ひ、氣力を益し、頭を治し、耳が明爽になるのである。澤瀉は、來の發揮の完全を得、清氣が上行し、天の氣が熱も隨つて去り、それで土氣がその本に對して、澤瀉はその濕を滲去するので、目昏し、耳鳴るのであるが、それに對して、澤瀉は其の濕熱があれば、頭が重く味共に瀉き水を利用して洩下する所以であつて、脾、胃に濕熱があれば、頭が重く時珍。曰く、澤瀉は氣は平、味は甘にして淡である。淡は能く滲洩するものだ。氣、

に生じ、形狀は澤瀉のやうだ。

附錄(惡)別錄(有名)未。用。に曰く、惡痞に主。效。あり、白蟲を去る。水邊

録

わけにかなない。

くする。と解釋する。ことに無理はない。結局文獻載を讀むには一方のみ固執する。なる。は、腎氣が大いに洩して血が反つて寒する。その關係は子久し服く下焦の濕熱、邪垢を驅逐するであつて、邪氣が去れば陰が強くなり、海が靜か、子を持つ。何故であるか。しかしこれは、澤瀉は補藥と共に用れば能く、いふからには、何故に子を生まなくするのであるか、能く催生するところもある。し、子を持つ。『』といつてあつて、同じからざるものがあるやうだ。陰を強くすば子を生まなくする。『』といつてあるが、日華子は『澤瀉は催生し、婦人の血海を補時。』曰く、別錄に『澤瀉の葉、及び實は陰氣を強くし、久し服すれ

發明

をなくする【別録】

陰を強くし、不足を補し、邪滯<sup>とらひ</sup>を除く。久しく服すれば顔面に光澤を生じ、子を

實 氣味甘し、平にして毒なし【主治】風痺、消渴。腎氣を益し、

を通する【大明】

産。陰氣を強くする。久しく服すれば身體を軽くする【別録】水臌を壯にし、血脈

葉 氣味鹹し、平にして毒なし【主治】大風、乳汁の出ぬもの、難

れは、日毎に澤瀉の煎湯を二三盞<sup>さん</sup>續<sup>つづ</sup>け、必ずに服す。五日で瘥<sup>よ</sup>る。夏子<sup>なつこ</sup>瘵<sup>しやう</sup>疾<sup>しやく</sup>方<sup>かた</sup>に

りが肩で擴がり、肉と連つて金石より堅くなり、飲食不能になる病がある。

鼻中の氣が旋<sup>まわ</sup>り廻つて散らず、凝つて黒蓋<sup>くがい</sup>のやうになり、十日を過ぎるとその凝

大の丸にし、空心に溫酒で十丸から五丸までを服す。【經<sup>けい</sup>驗<sup>けん</sup>方<sup>かた</sup>】瘡<sup>かさ</sup>後の【証<sup>しやう</sup>】口、

れば必ず瘥<sup>よ</sup>る。【五<sup>ご</sup>臟<sup>ざう</sup>腎<sup>じん</sup>風<sup>ふう</sup>瘡<sup>そう</sup>】澤瀉、皂莢<sup>さいけつ</sup>を水で煮爛<sup>ろん</sup>して焙<sup>はい</sup>し、研り、煉蜜<sup>れんみつ</sup>で梧<sup>こ</sup>子

の二汁を合<sup>あ</sup>して二回に分服する。病甚<sup>ふつ</sup>しくして眩<sup>くら</sup>せんとすると眩<sup>くら</sup>しくしてこれを服す

では、先づ水二升で二物を煮て一升を取り、又水一升で澤瀉を煮て五合を取り、

瀉湯——澤瀉五兩、白朮二兩、水二升を一升到煮取り、一二回に分服する。〇〇深師方

等<sup>たう</sup>腎<sup>じん</sup>五<sup>ご</sup>臟<sup>ざう</sup>風<sup>ふう</sup>瘡<sup>そう</sup>。指<sup>さし</sup>ス。腎<sup>じん</sup>瘵<sup>しやう</sup>疾<sup>しやく</sup>。腎<sup>じん</sup>瘵<sup>しやう</sup>疾<sup>しやく</sup>ヲ。大<sup>だい</sup>觀<sup>くわん</sup>ニ據<sup>よ</sup>ル。





釋名 蓄(經) 禿(榮) 弘景(敗毒) 綱目(羊舌菜) 同(羊蹄) 大黃(庚)

ルモ故先其體ハ合致トス  
ト然ラハハルヲ多シ  
釋ニ邦所處ノ少  
我牧野曰羊蹄  
(一)

羊蹄

木經下品

科名 和名 名  
Rumex japonicus, Meisn.  
たてて(科)蓼(科)

熱、喘息、小兒の丹腫【恭】



〔草〕

【氣味】甘し、寒にして毒なし【主治】暴  
である。五六月に莖を採つて暴乾して用ゐる。  
で、江南地方ではこれを魚を蒸して食ふが、甚だ美味  
小く、花は青白である。これでも蒸して食へるものも  
葉は澤瀉に似て

集解 釋名

恭、曰禿。榮は所在あり、水邊に生ずるもので、

我(一) 邦牧野曰羊蹄  
チ(二) 是者ノ、此草來  
交(三) 見居ル  
ヤ(四) 果シテモリ集解ニ  
ヤ(五) 私其列然餘ノ充  
ガ(六) 始先定苦ノ  
セ(七) カ所ニ從テ置  
バ(八) 實ヲ卷ル  
名(九) 據圖ハハハハハ  
二(一〇) 草ヲ觀ル  
ノ(一一) 大ニ觀ル  
ノ(一二) 字ニ觀ル  
ノ(一三) 葉ニ觀ル  
ノ(一四) 丹腫ハハハハハ  
ト(一五) ナリ

解草(一) 唐本草(二) 羊蹄

科名 和名 名  
Morochoia vaginalis, Presl.  
かあひひ(科)藨草(科)

**發明** 震亨曰く、羊蹄根は水に屬し、血分に走る。  
頤曰く、新たに採つたものを醋で磨つて塗れば癰腫に速效がある。また煎じて丸にして服するもの、多少に拘らず根を採つて搗き、絞汁を一斗升を白蜜半升と共に熬つて稠饒ちゆうじやうに入れ、更に防風六兩を入れて和して丸になるやうにし、それに梧子大の丸にし、一日三回、桔樓甘草を酒で煎じたもので三十丸を服す。

**附方** 舊新七。大便の卒に結するも【羊蹄根】一兩、水一大盞を六分に分けて煎じ温服する。(聖惠方) 【腸風下血】敗毒菜根を洗つて切り、皮付きの老薑と各半斤を共に炒り、赤くなくなつたところを無灰酒淬ただし、少頃の間蓋ひ、滓を去つて任意に飲む。(永類方) 【喉痺の言語不能】羊蹄の獨根のものを、風、日光及び婦人、に拭つて赤くした上へ塗り塗る。(千金方) 【顏面に紫塊あるもの】或は顔全面に紫塊あるものは、野大黃四兩の汁を取り、穿山甲十片を燒ける。生布で拭つて赤くした上へ塗り塗る。(千金方) 【顏面に紫塊あるもの】錢ほどの錢を、生薑五錢、川椒末五錢、生薑四兩から取つた汁と和して研り、生絹で包んで擦る。性存し、川椒末五錢、生薑四兩から取つた汁と和して研り、生絹で包んで擦る。

サ。藥植(邦藥)。

【大明】擣汁三匙を水半盞に入れて煎し、空服温服すれば産後の風秘を治する

【手】(別錄) 【蠱毒持瘵】(恭) 【癰治一切蠱毒殺。】  
【之邪】  
腫てし  
腫之醜。

主 治 【頭禿、疥癬。熱を除く。婦人の陰蝕】（本經） 【浸淫する疽痔。蝨を殺

曰、能く三黄、砒石、丹砂、水銀を制す。

根(五)氣味

長さは一尺近くあり、赤黄色で大黃、胡蘿蔔のやうな形である。

葉と色は同一のものだ。夏に至りては秋深くして生え、冬を凌いで枯死する。眼の

似てゐる。蒺藜には似てゐない。夏に入つて臺が起ち、花を開いて子実を結ぶ。花と

時○珍曰、水邊、及び濕地に極めて多い。葉は長さ一尺ほどもあり、牛の舌の形にて

子と金を蕎麥と名け、  
(4) 煙煉家にてはそれを用ゐて鉛、汞を制する。

は厚く、花もすもやもはり渡稜に似てゐる。その葉は石礫<sup>せきだ</sup>に付く。得るものゝた。

宗○  
龍○  
曰く、葉は菜の種類の渡りやうだが、たゞ岐が無くても色かや青く、葉

て趣く眞しき

青白の花を聞いて種になり、三稜の子を結び、夏のうちに枯れる。根は牛蒡に似

[illegible]

實氣味

【苦】平 性 毒なし

主治

【赤白痢】(恭)【婦人】の

工品、冷えれば、田手(單讀)。

附方 一。舊。【腫】咽に氣息をうせたるは、幸而鼻塞して涕を鼻から出さず

蒸しし爛らして一、盤を食へ、腸痔爲血を治するに甚だ效がある【時珍】

食へば瘡を止める。多く食つてはならぬ。氣を下さしめるものである【説】根共に【菜】菜にして

鮭魚(けいご)、鱒魚(ます)、檀胡魚の毒を殺す。菜にして多く食へば大腑を滑する。【天(前)時○珍○】曰く、

藥 氣 味 【甘し、し、滑する。寒にして毒なし】 主治 【小兒の疳蟲、胡、夷、魚、

外臺秘要

【疥瘡】の鹽あるもの【羊蹄根】を搗いて、猪の脂を和し、鹽少々を入れて、毎日毎に塗る。

ハ。大醋を和し、患部を洗淨し、上になすり、一時、冷て水洗ふ。一日一回。(萬全)

【海癰瘰癧】癰瘰癧を和して塗る。

癰を患ふる。千金方では、細癰を治すに、苦參根五升を煮て、五、四、三、



空心に服す。熱い物を食つてはならぬ。その滓は瓣を抓み破つて擦りつける。三回  
 揉む。三錢に川百藥煎錢を入れ、白梅肉を井華水一盞で搗つて濾し、澄し、早曉  
 を搗る。○永類方では、癰の年を經たものを治するに、獨生の敗毒菜根、即ち羊蹄根  
 羊蹄根を根を杵いて汁を絞り、輕粉少量を入れ和して膏のやうにし、三回塗れば癒え  
 生布で擦つて赤くし、擦る。久しき瘡をぬく。【簡要濟衆方では、  
 人、雞、犬、風、日光に當らぬやうにして陳醋で泥のやうに研り、一日一回、禿を  
 を杵き、羊膽汁と共に塗る。永く病を除く。】(聖惠方) 【頭上の白禿】獨根の羊蹄を、婦  
 方である。硫黄をこれに用ゐるが更に妙である。【問氏經驗方】頭風白屑【羊蹄草根  
 力を入れて擦る。然る後に器具を暖にして汗を取れば瘡を癒さる。これは鹽山の劉氏で  
 うにし、湯で漂して手から患部を抓き、粗皮を起したところへ藥を布に包んで  
 羊蹄根二兩、獨科掃帚頭一兩、枯礬錢、輕粉、生薑半兩を共に杵いて泥のや  
 刮つて塗る。硫黄少量を入れるが更に妙である。日毎に用ゐる。】(聖惠方) 【汗斑瘡徐に  
 氏積蠶臺方】(永)癰瘍風【駭】羊蹄草根を生鐵の上で好ききき磨り下し、少しづつづつ  
 る。乾いたときは醋を入れて潤濕し、初に通りに數回擦る。屢々效驗を認めたる。

毒が、臟腑に入ると遂に死にす。これ、その醬子の上に灸を百壯し、核に中心に達するほどの深い根があり、腫泡が紫黒になる能く筋骨を爛し、その梅李、ぼどあり、或は赤く、或は黒く、或は青く、或は白く、その中に核があつて、そのは新。一。【瘡毒】肉中に突然粟か、豆、ほどの醬子<sup>醬子</sup>が生じ、大きいものは

附方

は紫<sup>紫</sup>と共に搗いて擦る。數日てなくなると時<sup>時</sup>【疹】瘡を去るに

主治

の【瘡毒】疥を治す【頭瘡】瘡を療するに佳い【疥瘡】汗斑を去るに

氣味

【酸】酸し、寒にして毒なし【時疹】葉は酸し、根は微し苦し。

だ。根、葉と連ねて取つた汁を煉つた霜は雄、汞を制し得る。

味が酸いだけの相異である。その銀は赤黃色、はいつれも羊蹄と同じだが、ただ葉が小さく、時珍。曰く、平地にもある。根、葉、花の形

模酸

。【酸模】



に似て稍細く、味酸くして食へる。一名蓂と



る(多能部事)

附方

新

【乳腫母毒】

龍舌草、

忍冬藤を研り爛らし、

蜜に和して傅け

【時珍】

氣味

【甘く鹹し、寒にして毒なし】

主治

【癰疽、湯火灼傷に搗いて塗

を煨き、三黄を制するに用ゐる。

〔草

舌

龍〕



胡蘿蔔根に似て香しい。

〔根は

鴨卵

は

じ、

莖が水から引き出た白色の花を開く。根生

及び根の形状のやうなもので。根は水底に生

葉は大葉の葉、

集解

時珍曰く、龍舌草は南方諸地の池澤や湖沼中に生ずる。葉は

大葉の葉、

根は水底に生

じ、

莖が水から引き出た白色の花を開く。根は鴨卵

に似て香しい。

〔根は

鴨卵

は

じ、

莖が水から引き出た白色の花を開く。根生

及び根の形状のやうなもので。根は水底に生

葉は大葉の葉、

〔水牧所、草野、明、未詳

龍舌草綱目

科名和名

未詳

詳し



ル。未<sup>ル</sup>詳<sup>ル</sup>ノ植物<sup>ヲ</sup>曰<sup>フ</sup>野麋<sup>ヲ</sup>。

イ。平<sup>イ</sup>、シ<sup>イ</sup>、果<sup>イ</sup>ヲ<sup>イ</sup>然<sup>ル</sup>ニ<sup>シ</sup>詳<sup>ル</sup>カ<sup>ニ</sup>居<sup>リ</sup>ナ<sup>リ</sup>。  
ア。之<sup>ア</sup>牧<sup>ル</sup>羊<sup>ニ</sup>曰<sup>フ</sup>野麋<sup>ヲ</sup>。  
(三) 蘭<sup>ア</sup>實<sup>ニ</sup>居<sup>リ</sup>ナ<sup>リ</sup>。

を治するに用ゐて甚だ良し。

弘景曰く、少しばかりの水の中に生ずる。今一五五日に採つて乾し、霍亂

。水中に生ずるもので、五月に採る。

舌<sup>(四)</sup> 別錄に曰く、味辛し、微温にして毒なし。霍亂腹痛、吐逆心煩に主效があ

ずるものとである。

この物は實のことをいふのであらう。さもなくばこの物は羊蹄の水中に生

時珍曰く、現に世間では羊蹄を牛舌菜と呼んでゐるが、恐らく羊蹄といふのは根

のをば牛耳菜といふ。

藏器曰く、現に東方地方の住民は田水中と呼ぶ。葉が大きくして牛耳のやうなも

ある。五月實を探る。一名冢首といふ。

輕くし、氣を益すの主效がある。水中、澤の邊に生え、葉は大きく、長さ一尺ほど

附 錄

牛舌實(別錄) 有名。用曰く、味鹹し、温にして毒なし。身體を

療する(千金方)

酸模の葉でその面を押へて成長を防ぎ、莖根汁を内服するがよし。その毒は自ら

はない。現に五月五日にこれを採收する。その根は盤屈して節があり、形状は馬鞭長ざ一尺ばかりあり、その葉の中心に脊があつて、その形は劍のやうだ。花、青く、頭。曰く、處處にあるものだが、戎州、池州、戎州のものが佳し。春生えて葉は青く、一寸に九節の最良品は宣州に産する。二月、八月に採收する。

大明。曰く、菖蒲は石澗（せきゐん）に生えたものは堅く小さい。

のは正にこれ（せ）を謂ふのである。

服食は入れない。詩歌に多く詠じてある蘭蓀なるものと、菖蒲といつてゐるが、誤である。これはただ主として欬逆を治し、蚤（つみ）、虱を驅除するだけのもので、を石上菖蒲といつてゐるが、一般人は多くこれ

〔蒲 菖 石〕



あつて、根の形や氣、色は極めて石上菖蒲に似てゐる五月にやほり小さい理のある花が咲く。東部地方の溪澗にはまゝ（ま）とていふものが名ける。これは服食には堪へない。眞の菖蒲は葉に劍に刃さながらの春（はる）があり、四月、積の上に生える。が好し。下濯の地に生えて根の太いものを昌陽と

泉註ノ戎州見  
（四）池州見  
（三）宣州見  
（二）石部  
（一）水部  
井藤







二浙地方の民家は、瓦器や石器に種々水を易へる。すとの度にあるが、めつて緊つて根鬚が一、二に九節、一寸に絡り、一向に少しの泥土もいやうになつてゐて、根、葉は逆承。曰く、今（六）は陽（七）の山中に生える。その間に生えたるのは、その葉が、水に逆

かそれおのを見けつゝかゝる。

なへな。い。現に藥店で賣つてゐるものは、多くは右の二種を雜まぜてあるのである。又、水菖蒲といふ淺淵や水澤に生ずるものがあるが、藥に用ゐる人にはかなかない。二、節のうち、一本の根の旁に三、四本の根が生え、隣の根が尤も節が密で、一寸に十

能 (六) 陽 註 見 部 類

(五)部銀、蜀中、蜀、黔、西註入。申

時珍。曰く、明朝建國の初、太祖高皇帝が、周顛仙に『常に膏蒲を嚙んで水を飲む

效がある。

行の際携帯して、突然心痛を患つたととき一二寸を嚙み、或は酒で送下するも、また旅の痛を治するに、一二寸を取つて搥き碎き、吳茱萸と共に湯に煎して飲む。また旅、頤曰く、古くは膏蒲を單服する法があり、蜀地方では、心腹の冷氣、

發明

癰腫を散す。搗汁を服すれば、巴豆、大戟の毒を解す【時珍】

積伏梁【好古】中惡、卒死、客忤、癰下血、崩中を治し、胎漏を安かにし、

止めるには、末にして炒り、熱に乗じて裏んで穿つ。甚だ效驗がある【大明】心

の血海の冷敗で多く物を忘れもの、煩悶を除き、心腹痛、霍亂轉筋、及び耳痛を

を治し、諸蟲を殺す。疥癬を【寶鑑】風を除き、氣を下し、男子の水腫、婦人

積熱の解せぬには、浴湯にするがよし【別錄】耳鳴、涙の流れるもの、鬼氣

志を高くし、老衰せぬ【本經】四肢の濕痺で屈伸し得ぬもの、小兒の溫瘧で身體の

しく服すれば、身體を軽くし、物を忘れず、迷ひ惑はず、天年を延べ、心痛を益し、

明にし、音聲を出し、耳聾【別錄】胃、腸、胃を温め、小便利を止める。久

伏梁、胃癰。

を耳目を九竅を通過し、五臟を補し、風寒濕痺、效逆上氣。心孔を開き、

主治

に觸てはならぬ。人をして吐逆させるものである。

秦皮、秦皮（クハクハ）が使となる。地膽、麻黄を惡む。大明。曰く、羊肉を忌む。鐵器

に、は、だだ毛を去り、微し炒つて用ゐればよし。【味】辛し、温にして毒なし。曰く、辛く、苦く、平なり。之才。曰く、

る時珍。曰く、服食の方法としては上記の如くして制すべきものであるが、通常用ゐ

り、嫩桑の枝條と互にまぜて蒸熟して、暴乾し、剉（ソ）んで用ゐる。

ならば眞物である。これを採取したならば、銅刀で黄黑色の硬節の皮を重を刮り去

た。石上に生え、根の條が嫩く、黄色で硬く、緊り、節が稠密で一寸九節あるもの

を用ゐてはならぬ。それは竹根（タケネ）のやうな形で、黒く、氣（キ）が穢（タガ）く、味（ミ）が腥（ニホ）いものである。

根 修治 曰く、凡そこれを使用する場合には、夏、泥（ドロ）、夏、夏（ナツ）喜（キ）喜（キ）の二種のもの

修治

取つて食へば、天年を長くする『とあるがそれである。

てゐるのだから、花が無いわけではない。應劭の風俗通に『喜蒲を花の咲いたとき

なつた細い黄色の花を開いてゐる。昔の人も、喜蒲は花を見ることができ得難いといつ

作ル。大觀ニ  
八〇。大村ル  
三（一三五）  
水一、雄合、  
ノサレ酸種  
ハ主ル糖及  
セヤル成分  
（木）村康曰





え更にる。この薬の有する五徳は五行に配するもので、葉は青く、花は赤く、節は生に達いたすれば、骨髓が充實し、顔色が悦澤になり、白髪が黒くなり、落ちた歯が生ずれば食物がよく消化し、二个月に達すれば痰が排除され、更に服すると五年もので三十丸を服し、就寝時に更に三十丸を服す。かくて服すると一ヶ月に達し、粗葛布の袋に盛つて風当る場所に置いて乾し、毎朝、酒、飲つて服す。いづれも任意の粗い搗こき、糯米粥と和し、更にに熟蜜を入れ、れ、かきまぜて梧わす大の丸にし、して似たもの一斤を採り、水と米汁とで各一夜づつ浸し、皮を刮去つて切り、暴乾し、似たもの一斗とを採り、水と米汁とで各一夜づつ浸し、皮を刮去つて切り、暴乾し、粗鱗

喜蒲は水草の精英、神仙の靈藥である。これを服するの法は、小さく緊きつて魚鱗その文章、論旨は粗難こがた陋ろうなものであるが、茲にその要領を略載しよう。

そのなかから、辛を以て補ふがそれである。道藏經の中に喜蒲傳一卷の書がある。者にこれをを用ゐるは『虛するはその母を補ふ』の意味であつて『肝は急を苦む』喜蒲は、氣が温、味が辛であつて、手の少陰、足の厥陰の薬である。心氣不足のふことを答へたことがあつた。それは高皇帝製の碑に記載されたい。

のは何の理由であるか、『問はれたとき、これを服すれば腹痛の疾に罹かからない』とい



を用ゐ、少量の苧蒲を入れて服するがよし。胸中がよく開いて自然に食思が付くが、これはたゞ參茸白朮散じんじやくはくじつさんに石苧蒲を加へ、粳米飲で調へて服し、或は參茸、右連肉りつれんにくに起る現象である。俗間では、木香を用ゐて温に失し、山藥を用ゐて閉に失してゐる楊土。曰く、下痢禁口は脾虛には相違ないが、やはり熱氣が心胸を閉するため

つてある。

らずして生きに到つては、昌陽の如き到底拂するさへ思ひも寄らぬといふ。無論昌陽などの比較になるへきものでない。寒を忍び、淡泊にして、泥土の力に依邊を快くし、久しく玩あそんで更に面白。その天年を延べ、生涯を完了するの功は、互つとも枯れない。節せう葉が堅く瘦せ、根鬚が連なつて、蒼然として児案かんののだ。然るに石苧蒲だけ、は、泥土を濯すすひ去つて清水で盆の中に生けると、數十年もある。蘇東坡は『凡そ草は、石上に生えても、必ず微の土がその根に附いてゐるといふ。白晝に星を見得るやうになる。端午の日に酒で服するが尤も妙だ』とすれば、葉尖の露水を取つて目を洗へば、大いに視力を明かして、久しく繼續して試験朝露つちつゆし、た星の夜に露つゆし、或は晴れな。告目て目を告ふ思おもひな。





動、半產【俄かに動して不安なるもの、或は腰痛し、胎が轉して心下を搶さ、血の  
つて末に、毎二錢を更に薑湯を浸した酒で調て一日一回服す。婦人真方【胎  
白礬等分を末にし、新汲水で服す。事林廣記】赤白帶下【石薑、破故紙紙等分を炒  
末、白麴等分を、一日一回、三錢つゝ新汲水で服す。聖濟總錄】一切の毒【石薑、蒲  
治するに尤も妙である。或は香附末二錢を入れる。奇效方】肺積の吐血【九節薑、蒲  
然る後に末にして醋糊して梧子丸の如くし、三十五丸つゝを温い白湯で服す。腫脹を  
を去つて共に黃色に炒り、斑疹は去つて用ゐず、布袋に盛つて整の末を挽き去り、  
【諸積の鼓脹】食積、氣積、血積の類には、石薑、蒲八兩を剉み、斑疹うらんは四兩を翅と足  
痛【生薑、蒲を剉んで四兩で、水で和して搗き、その汁を四回に分けて温服する。聖惠方】霍亂腹  
を嘔み、その汁を、鐵てつを燒いて酒一盞に淬したもので飲む。聖濟總錄】喉痺腫痛【薑、蒲根  
蒲を切り、酒に漬けて飲む。或は雄黄少量を加へる。洞天保生錄】端午の日に薑  
【薑根の汁を含めば立ち止まる。後方】一切の惡を除く【端午の日に薑  
を鼻中に吹入れ、桂末を舌の下へ納め、井に薑根汁を灌ぎ込めば、更なる。そこで薑末  
腫、及び足の拇（四）趾の甲の際に痛く嚙み、その顔に唾すれば、更なる。そこで薑末



め。さ。昔。ハ。唱。ト。ハ。之。ハ。昌。草。ヲ。其。物。是。カ。ヲ。誤。ラ。シ。テ。出。シ。人。牧。野。曰。我。

也。

蘭孫(弘景)時珍。曰、これは今の池澤に生える昌蒲であつて、葉に劍脊がなく、

科名 天南星科 (Acorus Calamus, L. var. angustatus, Less.)

昌蒲(別録) 水宿(別録) 莖蒲(別録) 昌陽(拾遺) 溪蓀(拾遺)

葉 主治 疥、癩、大風瘡を洗ふ【時珍】

る。(濟急仙方)

半升つづつを服す。千金方(陰汗濕痒)【石菖蒲、蛇床子等分を末にし、一日三回搽末五斤を酒に漬け、それを釜で蒸して味を出し、先づ一日間酒を絶ち、一升、或は方で人を治療するに、手に應じてて神驗があつた。本草衍義(蟲)ある風癰【菖蒲のた睡眠も十分に取れ、五七日ならずして瘡はその瘡は失ふ如くに無くなた。その後布いて横臥し、その上から寝具をかけて寝た。それと、それで衣被にも粘らず、それれを寝臺にかつたが、ある人から教へられ、菖蒲三斗を日光乾して末にし、それを微背睡眠し得むけれども痒くなく、手足に就中多く生じて甚しく衣服に粘著し、微背睡眠し得む

時珍曰、蒲は水際に叢生するもので、葉に似て、<sup>葉に似て</sup>春があとつて柔い。三二月、

ものであつて、商人は蜜をせせて菓子にし、商品として賣つてゐる。

のは、即ちその花の蕊の層で、金粉やうに細なもので、開かんとするときに取る

棒、杵やうなところから、俚俗に蒲槌といふ。また蒲花ともいふ。蒲黄なるも

ら、葉の中から梗が抽き出て、その梗を抱く。その形がながら兵士を持つ

は一般にこれを食べるが、<sup>た</sup>夏になつてか

味だ。周禮にはこれを蒲菹といつてある。今で

く脆い。又、醋で浸せば筍を食ふやうで甚だ美

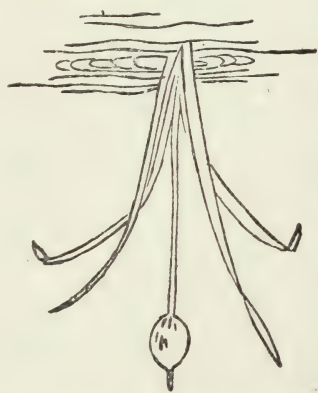
弱の太ざしものだ。その中心の地に入つて食へば

其<sup>う</sup>茸<sup>う</sup>と生え、嫩葉<sup>う</sup>が水から出たときは紅白色で

春初<sup>う</sup>に生え、嫩葉<sup>う</sup>が水から出たときは紅白色で

で、<sup>（四）</sup>秦州のものも良しとする。

頤曰、香蒲は蒲黄の苗である。四月に採る。



[黄蒲・蒲香]

集解

別錄に曰く、香蒲は南海の池澤に生ずる。蒲黄は河東の池澤に生ずる。

註見秦州石部。膽  
（四）見。類蒲  
（三）註南。草類  
（二）山。類蒲  
（一）斷。比  
種。以。ノ  
ル。物。ト。比。得。ノ。經。サ







燥を去り、小便を利す【生】生で咳へば消渴を止める【中】中氣を益

目を明にし、耳を聴く【久】久し服すれば身體を軽くし、老衰を防ぐ【熱】熱

【時珍】時珍曰く、寒なり。【主 治】五臟、心下の邪氣、口中の爛臭、齒を堅くし、

【氣 味】甘し、平にして毒なし。

【名 一】蒲葇（食物）【蒲兒根】（野菜譜）

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

【類】香茅、燕麥、

回通しをつける。【金瘡の出血】。後方。【蒲黃生兩】を熱酒で灌下す。

出【血】方は上に同じ。小便轉胞【蒲黃布に包んで腰を裹み、頭を地に下げ、敷、

患者の年齢、體格を量つて加減して服す。或は髮等を分入れる。【逆濟錢】。小便、

するが妙である。【節要方】。老人、幼兒吐【血】。蒲黃末二兩を溫酒、或は冷水で毎日三錢つづつ調へ、

へて服す。【節要方】。吐血、唾【血】。蒲黃末二兩を溫酒、或は冷水で毎日三錢つづつ調へ、

青黛各一錢を新汲水で服す。或は青黛を去つて油、髮等を分入れ、生地黃汁で調

たるもの。蒲黃末を傅ける。三回に過ぎずして瘡を癒せる。【金方】。肺熱の血【蒲黃、

【附方】新十四、新十一。口に滿つる舌脹【方】は前項にある。重舌で瘡を生じ

用ゐたのは陰、陽共に濟ふわけである。

外部に現はれた一機關であり、手の厥陰の相火は心の臣である。使藥として乾薑を

涼し、血を活すものだから、こゝが立證されるわけである。蓋し舌なるものは心の

蒲黃、乾薑末等分を乾して搽ふと癒えたことある。『説に據れば、蒲黃の血を

賞玩せよとして、ある夜俄かに舌が腫れて口に滿ちた。そのとき侍醫蔡氏が、

するところの翌曉頃には癒えて了つた』とある。又、『宋の度宗皇帝が花を



聲を出してとさへ不能になつたとさ、ある老人に教へられて蒲黄を頻りに摻すりつた。

るに、許叔微の本事方にある紳士の妻が、吾が俄かに脹れて口が塞ふさがるやうになり、按す

の心腹諸痛を治す。それについて、熟では能く止める。五靈脂と共に用ゐれば能く一切

の時珍。曰く、蒲黄は手足の厥さかの血分の薬である。故に能く血を治し、痛を治する

食つてはならぬ。多く食へば自利して極めて虚し易いものである、

は、一個月を過ぎれば燥かわいて色も味もみな淡くなるから、蜜水で和すがよし。多

し、一般に食つてそれで心臓の虚熱を解す。小兒が特に好んで食ふのだ。その粉

よ。宗。曰く、汗あせ地方では、仙經にも用ゐてある。

發明

汁じゅうを下し、濃精じゆうけいを止める。弘景曰く、蒲黄とは蒲ぼ薢ば花はに著いてゐる黄色の粉のことである。甚だ

下血、墜胎、血逆、血癥、見枕、氣痛、顛撲、血悶、排膿、癰癤、遊風、腫毒。母乳

通し、婦人の崩中を止める。【女科】婦人の帶下、月經不順、血氣の心腹痛、妊婦の





氣味 同 菜 經 白 菱 筍 (用 日)

名 一 筍 菱

物のことである。

の時の代用食になる。杜市の所謂『波は菰米に漂ふて沈雲黒し』といつたのはこの月、草のやうな花を開き、青い子を結ぶ。粟を合せて粥にして食へば、大いに凶作を飼ひ鷹を作るに用ゐるだけだ。

河朔地方の邊僻な土地では、ただ馬

を飼ふ。菰は蒲の類のもんだ。

する。

〔菰・菱〕

ある。凶年には人民がそれを食糧に秋になると實を結ぶ、即ち胡麻である硬いものは菰蔴草といふ。



つてから始めて耕作して物を時く、それでこれを一名蔴田と呼んでゐる。その蔴の葉を刈り去る。生えて水上に浮んでゐる。彼の地ではこれを蔴蔴草といひ、その葉を刈り去る。下の地、澤地には菰草が最も多く、その根と根は結び合ひつゝ生え、久しく経つた

北ノ地ヲ指ス。河朔以

ト讀ム。蔴田ノ生ルヲ併セ井





拘らず乾いたい<sup>時珍</sup>【時珍】

めに面黄となり、無力となつたものに主效あり、末にし、脂麻と炒り<sup>時珍</sup>和して時に

【氣味】<sup>時珍</sup>婦人の白帶<sup>白帯</sup>には煎湯を服す。又、乾茶を嗜好して已ぬた

のやうなものである。

【集解】<sup>時珍</sup>曰く、湖や澤の中に生え、長さ二三尺になり、形は茅、蒲の類

ナル。  
品ヲ偽ニシテ置キ、  
蘭ヲ山ニ從ニテ姑ニ其  
列ルヲカシ、能ハス  
アセキヤ、單ヲ果  
交極野ヲ集

科名 水鼈科 *Vallisneria spiralis*, L.  
學名 苦草  
和名 苦草  
目 (綱)

薺米穀部に掲げてある。

【主治】五臟を利す【大明】

【毒蛇】<sup>母秘錄</sup>蛇の咬傷<sup>傷</sup>に、蕪荳根の焼灰を傅ける。【外臺秘要】

【附方】<sup>舊二</sup>小兒風瘡【久しく瘡を癒えぬには、蕪荳<sup>うせう</sup>將即<sup>しやく</sup>を燒き研つて傅ける。

めるに、搗汁を飲む【別錄】灰に燒き、雞子白<sup>鶏子白</sup>に和して火燒瘡<sup>火燒瘡</sup>に塗る【藥譜】

なものが、だが、冷利の點は更に甚しい。【主治】腸胃の痼熱、消渴。小便の利を止

蕪根 氣味 甘し、大寒にして毒なし【頤曰く、蕪根はより蘆根のより

小兒の水痢を止める【(藏器)】

主 治 【心胸中の浮熱、風氣。人の齒を滋くする【(孟詵)】煮て食へば、渴、及

を禁ず、犯せば瘡疾を發する。世豆を服する人は食つてはならぬ。

性は滑して冷氣を發し、人をして下焦を寒し、陽道を傷めしめる。蜜を加へて食ふ

ある。氣味 【甘し、冷して滑す、毒なし】大明曰く、微毒あり。詵曰く、

蕪根 一名 蕪菜 (日用) 茭白 (通志) 茭把 (俗名) 蕪蔬 (音 稷) (ササキ) で

酒毒を解し、丹石の毒發を壓する【(藏器)】

除き、大小便を利し、熱痢を止める。鯽魚と雜ぜて羹にして食へば、胃を開き、

かに心痛するもの。鹽醋で煮て食ふがよし【(孟詵)】煩熱を去り、渴を止め、目黄を

主 治 【五臓の邪氣を利す。酒酸、面赤、白癩、癰瘍、目赤、熱毒、風氣で卒に

する人だけに適する。

皆極めて冷たなるものだから過食してはならぬ。世だ人體を益せなさい。ただ金石を服

し毒なし【詵曰く、中を滑するもの。多く食つてはならぬ。頤曰く、蕪の種類は

いものである。七月に採る。『老血が化して萍となるが、

面は青くして背面は血のうに紫色だ。これが萍といふもので、薬に入られて良

髪がうつて、それが根である。一種のものは表面に緑色だが、一種のものは裏

一宿つと数枚の葉が生え、葉の下に微な

化したものなどといふ。一枚の葉から

だ多く、春處の生え。或は楊花が

浮萍は、萍處の流ぬ水の中に甚

載した

故に今はこれを訂し、萍の條にも互に記

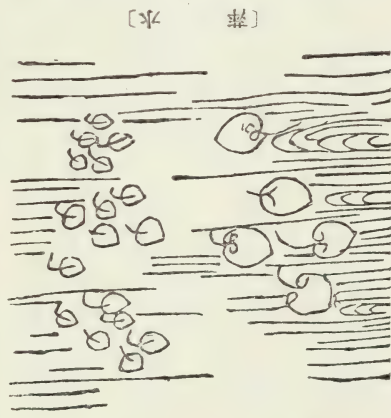
が同じく、實物の形も遂に別なものだ。

氏、蘇氏が共に大蘇を以て註してあるは誤だ。萍とは發音は近けれども字脚

時。曰く、本草に用ゐる水萍といふは小萍のことで、大萍のことでない。陶

る。

の浮萍だ『といつてあるが、今の醫家では大なるものをば用ゐない。浮萍だけを



藥大

萍小

水

萍

ノ註見澤補名ハ。大シ。モ  
リ(三)之ヲ補ハ。大シ。  
。陰草類。據







師曰く、你醫はこれで行熱病を治療するが、やはり十分に發汗して甚だ有功で

【發明】震亨曰く、浮萍は發汗劑として肺裏に勝る。

風、丹毒に主。效がある【時珍】

傳ける【風濕痺、脚氣、打撲傷損、目赤、膜、舌、口瘡、吐血、衄血、蟹血、癰

が、あり、小便を利す。末にして酒で方寸匕を服すれば、中毒を治す。膏にしていして、面黡に

風、熱、狂、腫毒を協し、湯火傷、瘰癧を治す【大明】擣汁を服すれば、水腫に主。效

ば、身體を輕くする【水經】氣を下す。これに浴すれば、毛髮を生ずる【別錄】暴熱で身體

の瘰癧も。水氣を下し、酒に勝る。へ、鬚髮を長くし、消渴を止める。久しく服すれ

【氣味】辛し、寒にして毒なし【別錄】酸し。主 治

して晒す。その下に盆の水を置いて、映させば、乾き易い。

【修治】時珍曰く、紫背浮萍は、七月に採つて、別け、淨く洗つて竹篩に攤

この萍としたのは誤である。

雅に『呦呦たる鹿鳴、野の萍を食ふ』とあるは、蒿の屬をいつたのだ。陸佃がこれ

恐らく、やうな種類も自然にあるので、盡くが化したものといふては、あるまい。

兩の濃煎汁で洗ひ、同時に滓に熱をして斑點の上を擦る。一、三、五、七、九、試みる。藥その  
用ゐ、毎日毎に採んで含し、井に汁少量を飲む。○善濟方では、紫背滓四兩、防已  
を擦る。或は漢防已二錢を入れるもよし。(柳珍方)【少年の而<sup>ん</sup>】外臺では、井に滓を  
【端午の日に紫背滓を採收して晒し乾し、四兩づつづつ水で煎じてし、井に滓を  
錢つづつを服す。(古今錄驗)】風熱丹毒【滓の搗汁を全體に塗る。(子母秘錄)】汗斑  
し、牛蒡子酒で煮て晒し乾して炒り、各一兩を末にし、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
錢と四物湯とで調へて服す。(丹溪書)【風熱癰<sup>とん</sup>】滓を蒸して焙じて乾  
聖散——紫浮滓を末にし、乾して貼る。危氏得效方(力)【身體<sup>しんたい</sup>】滓木錢を、  
滓を日光乾して末にし、飲で方寸匕を服するが良し。(姚僧坦集驗方)【大腸脱肛】水  
を入る。(聖惠方)【毒中】水で薑蜜水で調へて服す。(聖濟總錄)【鼻衄<sup>びじく</sup>】止まぬもの、浮末を吹  
にし、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、錢を薑蜜水で調へて服す。(聖濟總錄)【紫背滓】柴半兩、  
參、枇杷葉を炙いて各一兩を用ゐ、毎服錢五錢に薤白<sup>さいはく</sup>四寸を入れて酒で煎じて温服す  
寸匕づつづつを白湯で服す。(聖惠方)【霍亂心煩<sup>かくらんしんぱん</sup>】蘆根<sup>ろこん</sup>を炙いて一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、水滓を焙じて、人







五月浮萍を取つて陰乾して用ゐる。(孫真人方)

【煙】(方集)。回試みる。一日に一二回試みる。蚊を去る。

腫<sup>しん</sup>厥<sup>くわく</sup>し、赤熱するは、浮萍を搗き、雞子清に和して貼る。(聖惠方)。楊梅瘡癰。

【發背の初期】(肘後方)。初起に貼るが效がある。

【毒腫】(危氏方)。初起に水の中、浮萍を搗き、片腦少量を入眼の上貼るが效がある。

【青萍】(方集)。少量を研り爛らし、片腦少量を入眼の上貼るが效がある。

【羊子肝】(生草子)。生、羊子肝を水半箇を水半蓋で煮、已に傷んだものも十服で效が現れる。(危氏方)。弩肉の眼。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

【浮萍】(方集)。浮萍を水で煮、汁で末を調へて服す。甚し。

余は、その實物の一一に就いて研究を試みた結果、頗るその真相を掴み得た。

就いて確實な調査を試みたことがなく、ただ机上の臆度だけに過ぎなかつたのだ。

いつた。これ等はいつれもその説に一定の根據がない。蓋し深くその物の實體に楊慎の『言には四葉菜は考だ』といひ、陶弘景は『楚王が取つたものは蘋だ』と

の『香、即ち金蓮である』といひ、蘇恭は『大なるは蘋、小なるは香』だといひ、

の『藻といひ、沈むものを蘋といふ』とあり、『白仙は白花のものは蘋、黄花の

の美なるものに昆崙こんろんの蘋ありとあるが、この草のことである。韓詩外傳に『萍く

やうなところから、花を開くところから白蘋と稱する。その葉が集り、萍の

秋に小さく白い色、花を開くところから白蘋と稱する。その葉が集り、萍の

が、あり、頗る馬蹄明の葉に似たもので、四枚の葉が合して、文中に『折を夏、

莖は葦わづかの香かほりも細く、その葉の大きいとは指の端ほどあり、表は青く裏は紫で細

時珍曰く、蘋とは四葉菜のことである。葉は水面に浮び、根は水底に連り、そ

の葉は、この蘋を用ゐるが、い。ただ小萍のみを用ゐてゐる。

して茹にして食へる。又、苦酒で漬けて酒のツマにするといつた。けれども今



ものを蕚といひ、小なるものを萍といふ。春末に始めて生えるもので、<sup>糝</sup>と共に蒸  
又、詩に『于<sup>三</sup>以<sup>二</sup>蕚を采<sup>一</sup>る、澗の濱に』とあり。陸機は注して『その粗<sup>ん</sup>く大なる  
馬。錫く、按ずるに、爾雅に『萍は萍<sup>な</sup>なり、その大なるものを蕚といふ』とあり、  
るものだ。

がある。一名萍<sup>さい</sup>といふ。藥に入れて用ゐるものだ。小萍といふは溝渠の中に生  
藏。曰く、蕚は、葉が圓く潤くして一寸ばかりあり、葉の下に水沫やうな一一點

れも似て圓い。その小なるは水上の浮萍である。

赤。曰く、萍に三種あつて、大なるをば蕚と名け、中なるをば<sup>ぢ</sup>持と名け、葉はいつ  
が江を渡つたとき取つたといふはこの物の實である。

弘景曰く、水中の大萍は五月白色の花を開く。溝渠に生えるものは蓬ふ。楚王

で乾す。

の莖に一枚の葉があり、根は水底に入る。五月白色の花を開く。三月採取して日光

集解

普。曰く、水萍、一名水廉<sup>な</sup>。池澤の水上に生じ、葉は圓く小さく、一本  
のである。本書は吳本草に依據し、別に一條を設けて此に記載した。



氣味

【甘】寒にして滑す。毒なし

主治

【氣】暴熱に水氣を下し、小便

物をいつたのだ。或は青蘋は水草だといふものもあるが、それは誤である。

を煮る場合に用ゐ、水田翁といつてゐるものでもある。項氏の所謂青蘋とは蓋して未と高と三、四寸になる。これは食へないもので、取つて硫を煨<sup>ほ</sup>き、炒を結し、生えて高の場所が生え、その葉は四片が一合して白蘋と一様だが、た茎が地に生えて溜りの田字草といふのは水、陸の二種類あつて、陸生のものは多くは稲田や水溜、今の田字草は白蘋は水中に生じ、青蘋は陸地に生ずるといつたが、按ずるに、又、やうに區別して見れば、自一目瞭然たるわけだ。

かやうに葉が合して一葉となり、田の字のやうな形になつたものは蘋である。

四枚の葉が合して一葉となり、田の字のやうな形になつたものは萍の實だ。

萍蓬草である。楚王が取つた萍實といふは、この萍の實だ。小角黍のやうな實を結ぶもの

がある。

葉の徑二、五寸、小さい荷葉のやうで、花が黄色、小角黍のやうな實を結ぶものがある。葉の徑二、一寸、一箇所の缺があり、形が圓く、馬蹄のやうなものもある。葉の二、白色、白の二色、花にはいつれにも黄、白の二色





入をして饑を覺えざらしめる【時珍】

子

氣味

【甘く平にして毒なし】

主治

【脾を助け腸を厚くし、

花を開き、夜は縮んで水に入り、それが翌日にはまた水上に出るものである。

ある。その葉は荇のやうで大きく、その花は葉に布いて數重になり、夏の草の類に煮るに能く火を拒ぐ。又、段公路の北戸録にある睡蓮といふも、やはりこの草の類の實を取りやう筈はない。萍蓬草は、三四月に莖、葉を採り、汁を取つて硫黄をこれを食べへば蜜のやうに甘かたといふ。蓋しこの物の類である。水萍ではく、昔、楚王が江を渡つた時に取つた萍實は、大いさ斗の如く、赤きと日のごとくである。凶年にこれは食料とするが、藕のやうな香氣があり、味は栗子のやうに米を取つて粥、飯にして食ふ。その根は大いさ栗ほどで、また雞頭子の根のやうに覺えうだ。澤州では農民がこれを探り、洗ひ擦り皮を去つて蒸し曝し、春期に實の形狀は角黍のやうで、長さ二寸ばかり、内部に細子があり、一包の花を開き、太さは徑四五寸になり、初生の荷葉のやうである。六七月に黄色の花を開き、時珍曰く、水栗は三月に水から出る。莖の太さは指ほどになり、葉は荇の葉に似

○ 乙 卯

時珍曰、楊慎の言に、西葉菜を著といつたのも誤だ。西葉菜とは積のてつて

20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525  
 526  
 527  
 528  
 529  
 530  
 531  
 532  
 533  
 534  
 535  
 536  
 537  
 538  
 539  
 540  
 541

未<sup>ミ</sup>用<sup>ヨウ</sup>の條<sup>ジョウ</sup>に記載<sup>キザイ</sup>してある。

正誤

正誤 恭曰、鳥糞は、南方地方では糞草と呼ぶ。ふんぞく食へるものである。有名

砂を煮、これを薬を制し得る。『これ花の色から香を區別したもので、種あるが、その功は同一のものであつて、その莖、葉、根、いづれも硫を伏種あるが、その功は白麝、白の花のもの、白の草である。一種池すい、水あるが、水麝と名ける。かほき』



能カニ供ル藥骨ノ其ノ名ニ食ハル。用ル。能カニ供ル藥骨ノ其ノ名ニ食ハル。用ル。能カニ供ル藥骨ノ其ノ名ニ食ハル。用ル。

真(一)別錄下品(四)

科學和	名名名	いせん
		Brasilia
		いせん





恭曰、く、草は、久しく食すれば大いに健康によく、鯛魚と合せて羹にして食へば、  
もや、水を逐ふ。しか性滑であつて、服食家には多に用ゐられぬものだ。

發明 弘景曰、く、草は性冷にして楠、氣を下す。鯛魚（ニギハヤヒ）に雜ぜた羹を食つて

竝に蟲氣を解す（大明）

【孟詵】熱疸を治し、腸、胃を厚くし、下焦を安じ、水を逐ひ、あらゆる藥毒、  
止める。多食すれば、丹石、麝を楠す。大小腸の氣を楠す。過多に食ふことは宜くな  
【主 治】消渴、熱痺（別錄）【鯛魚（ニギハヤヒ）と和して羹にして食へば、氣を下し、嘔を

もので、それを食へば霍亂になる。

李時珍曰、く、多食すれば、性が滑であつて時を發す。七月頃には蟲が付いてゐる

醋に和して食へば骨痿（金匱）になる。

り氣を擁して下らざらめ、甚だ胃、及び齒を拒し、顔色を惡くし、毛髮を損ずる。

詵曰、く、草は冷にして楠するものではあるが、熱食し、また多食すれば、やは

あつて、擁（擁）するものだ。

氣味

【甘し、寒にして毒なし】

藏器曰、く、草は水草であらうが、性は熱で

牡丹、薔草、薔草などといふ。その他に就ては鳥薔の條に記載してある。  
 老いたものや薔草をば薔草といひ、或は薔草ともいふ。それは猪の飼糧になるからだ。  
 だ。葉がやや長く、舒びたものを絲草といふ。その薔草がやうだから。秋になつ  
 中に細子があつて、春、夏に黄色の花を開き、結實は青紫色で、大いさ梨ほどあり、  
 滑かで羹になる。夏期に黄色の花を開き、結實は青紫色で、大いさ梨ほどあり、  
 菜のやうだがやや圓く、その形は馬に似てゐる。薔草は紫色、大いさ筋ほどで、柔  
 時珍曰く、薔草は南方諸地に生え、吳越地方ではよくこれを食ふ。葉は若  
 世人は汁を取つて羹にするが、やはり菜に勝る。  
 は泥中に萌芽があつて、粗く短い。これを名けて薔草といふ。味は苦く、鹽は澀る。  
 味は甜く、體は軟だ。九月から十月までは、漸次に粗く硬くなる。十一月  
 へ黄色だ。その長く短くなる。深淺による。これを名けて絲草といひ、  
 のだ。花は黄白色、子は紫色で、三月から八月までは、莖が軟く細くし  
 保昇曰く、草は、葉は鳥薔に似てゐる。莖を採つて食へる。  
 集解  
 ことである。或はその名を諱んで錦帶ともいふ。





【瘡】黄泥で豆豉を包んで燻熱し、取出して末にし、蓴菜を以て油で燻けて傳ける。  
 【頭上】頭上(保生餘錄)は毒散す。取らぬを以て傳ける。また成らぬを以て傳ける。冬、夏は蓴菜を用ひ、春、夏は蓴菜を用ひ、冬、夏は蓴菜を用ひ、

附方

新三〇

[illegible]













細目牧野日之草  
(Chlosiphon  
decipiens, Okam. =

# 海蘊

す上(る)の三音の去聲、上聲、入聲、平聲、發音、  
又、溫、細、蘊、(い)ん、(え)ん、(お)ん、(あ)ん、(う)ん、  
るに發音、

## 拾遺

科學和名、本草類、  
詳

米は科に米詳

米飲で服す。必ず毒氣を泄する。(危氏得效方)

を蠶を炒つて等分を末にし、白梅を湯けて和して梧子大の丸にし、六十九つを

後【蛇盤癰】頭にから項部に相接し交るものには、海藻茶を煮粥で炒り、白

やなら形状のも一切の濃厚な味の食物を連り服するに、服するに、梅、李などの

めて嚙む。豫め一切の濃厚な味の食物を連り服するに、服するに、梅、李などの

過ぎずして瘡える。(范汪方)【瘰癧】の初期に、海藻一兩、黄連二兩を末にし、時に

とさは再び作る。その滓は曝乾して末にし、一、二、三、回、同、方寸匕つを服す。二劑に

に浸し、春、夏は二日、秋、冬は三日浸し、一日、三、回、同、方寸匕つを服す。酒が盡きた

【海藻酒】瘰癧を治す。一斤を絹袋に盛つて清酒二升

### 附方

舊、二、新、三。

小便から排出せしめるのである。

瘰癧、結核、陰癰の堅聚を消し、浮腫、脚氣、留飲、痰氣の濕熱を除き、邪氣を









食はぬがよし。海岸や島嶼とうとうの住民は好んで食ふが、それは他に好む菜がないために洗せん曰く、昆布氣を下す。久く服すれば瘦せるものだ。故にその病のなものは物以外では除けない。海藻と同功である。

明發

利、腫而去、瘻惡、風壅、去之【(癰)】

【増録】積聚を破る【單】陰癰腫を治すには含んで汁を吮む【器】水道を

【主】治

種の水腫、癭瘤、聚結、瘡。

【性味】温く、日。燥。  
温にして小毒あり。

氣味 【し、寒、鹹】 【し、毒、寒、鹹、酸、日暴。

○ ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

わて、  
細剣  
として東流  
水で午前十  
時から午後  
十時まで煮  
る。それで  
味がよくな  
るから

修品  
蠶○繭、凡そ昆布を速用するに、は昆布一斤毎に蠶(三)葉(二)六(一)十(十)蠶(十)を用

あ、まゝに打てる筈だよ。

羽丘、主たる台森上の牧果も大豊盛であつて、やや可じからぬ點もあるとして

折て出る刀は、大にきく、以て、さす、生、

腸、陰囊脫下、鼠蹊類。(三)

子ノ五ノ癸ノ底ノ  
、リノ真ノ草(二)





[illegible]

附錄

食つても『しよ』として記載してある。

る。それにかからかやうな名稱か？言ひ傳ひられたいのだ。

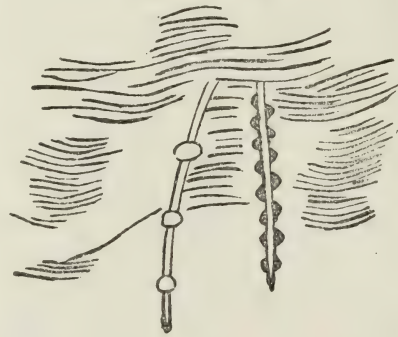
そのゆゑに葉の白い骨、黒い角に似てゐ

中、棄てた。それによつて生じたもの、

黒色の角と白色の骨で算盤を製作し、餘つた部分を水

の異苑に『昔、晉安から越王が南海に渡つたとき、

釋名集解



〔算餘王御〕

釋名集解

[illegible]

建名、晉安廢入晉、治今福  
省閩縣入晉、治今福

餘亦算動ニ似テ、牧野曰、モ前ノ者、越テ王レ

科學和	名	名	名
ウミカサゴ(ウミカ)	科	海鰻科	(鰻科)
Virgularia sp.			

(一) 越王餘算(海藥)

本草綱目  
草部  
第二十一卷



右附方舊十、新四十七。

白龍鬚目

仙人草經圖 崖經圖 紫背金盤經圖

地錦經圖 離經圖 仙草經圖 野蘭、回、天、生、金、小、草、附、

螺經圖 壓經圖 昨經圖 漿經圖 唐經圖 三、葉、附、

景天經圖 虎耳草經圖 石胡荽經圖 石莧經圖 石草經圖 金星草經圖

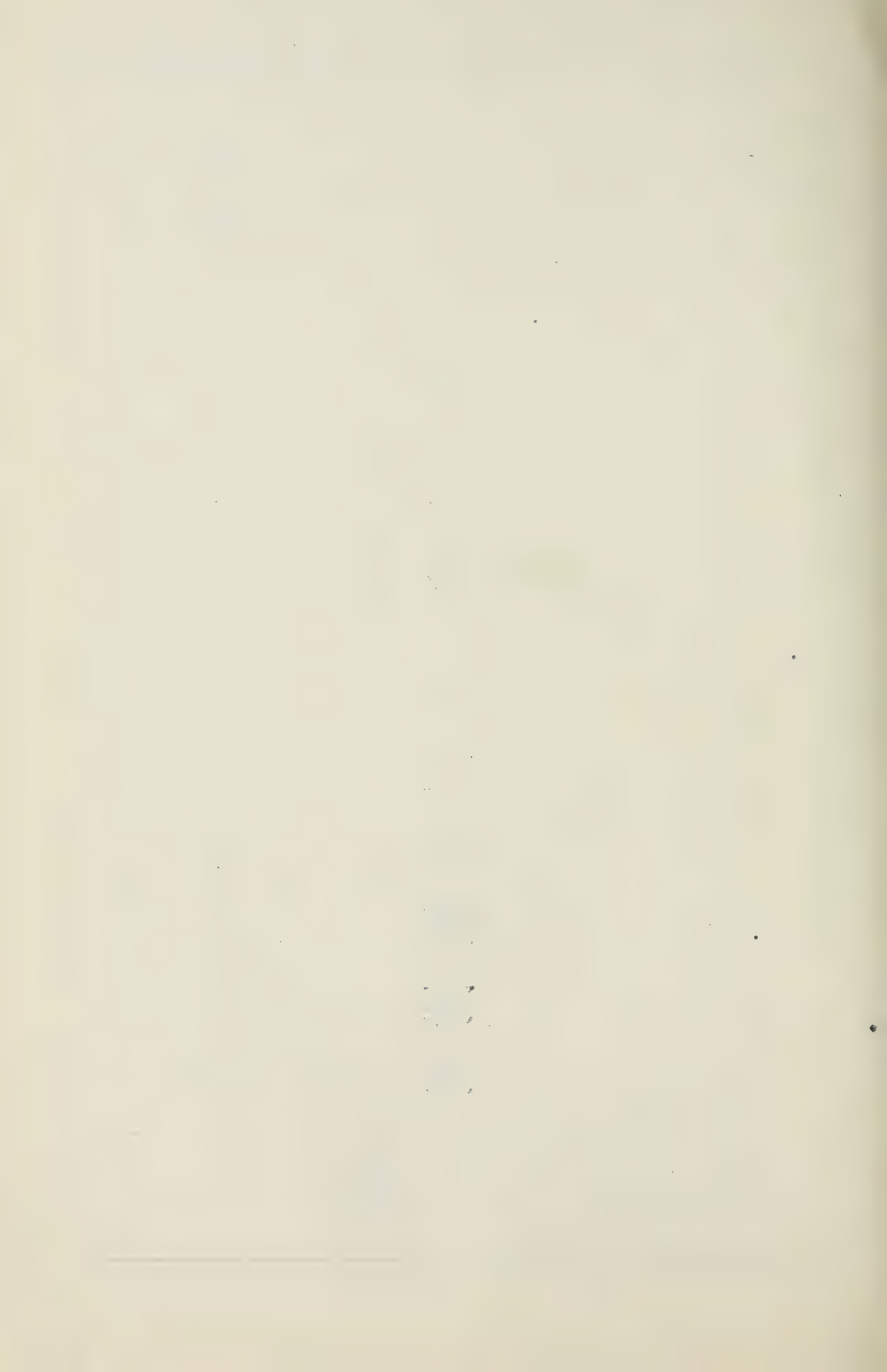
石長生經圖 佛甲草經圖 石莧經圖 石草經圖 金星草經圖

石斛經圖 骨碎經圖 石草經圖 金星草經圖

草の九類十九種

本草綱目部草目第二十二卷















から出るものだ。なほ出ぬことは再び試みる。(聖濟)

蠟ろうで封じ閉ぢて火で燒き、石斛が盡きたとき止める。かく右耳を熏すれば蟲は左石斛數本を、根を去つて筒のやうにし、その邊を組み捻ひねつて耳中へ入れ、四圍を水を含み、倒毛の左右に随つてその方の鼻はなに喘うづふ。(袖珍)飛蟲の耳に入つたことを【毛含み、倒毛の左右に随つてその方の鼻に喘ふ。(袖珍)】飛蟲の耳に入つたことを【毛含み、倒毛の左右に随つてその方の鼻に喘ふ。(袖珍)】

新二

方附

【毛の倒入】

川石斛、川芍藥等分を末にし、一回、口中に

だ『といつてある。

つに生薑しょうが一片を入れて水で煎じ、茶に代へて飲む。甚だ肺を清くし脾を補するものひ、精が少く、小便に餘滯あるにはこれを加へるがよし。ある法では、二錢つゝある。それで足の大陰——脾——右腎の薬なのである。深師は『養ようがが』降くだ時珍し。氣は平、味は甘、微鹹であつて、陰中の陽であり、

宗そう。曰く、石斛は胃中の虚熱を治するに有功である。

一銖しちまでを全部服すれば、永く骨痛を患はぬ。

發 明 石斛は涎を鎮め、男子の元氣を澀する。酒に浸して蒸して

治 し、癰疽の膿の内毒を排す【時珍】智を煖め、水臟を煖め、皮肌の風痺、骨中の久冷を逐ひ、腎を補し、力を益す【權】

骨を治し、陽を健にし、皮肌の風痺、骨中の久冷を逐ひ、腎を補し、力を益す【權】

除き、身體を軽くし、天年を延べ【別錄】氣を益し、熱を除き、男子の腰脚軟弱を

し、肌肉を長くし、皮膚の邪熱、痺氣、脚膝の疼冷、痺弱を逐ひ、志を定め、胃氣を平精

【主 治】傷中。痺を除き、氣を下し、五臟の虚勞、羸瘦を強くし、陰

く、陸英が使となる。凝水石、巴豆を惡み、雷丸、蠶豆を畏る。

【氣 味】甘し、平にして毒なし【普】神農は甘し、平なりといひ、

は酸しといひ、李當之は寒なりといふ。時珍曰く、甘く淡にして微し鹹し。之才。

【修 治】獸を拌ぜて午前十時から午後六時まで蒸し、それを徐に乾し乾して用ゐる。

補藥に入れて效がある。

し、

乾

乾

ル

（四）大ニ觀ニ

（三）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

（一）字ノ大ニ觀ニ

（二）字ノ大ニ觀ニ

は、急に用ゐる。乾して晒して一日煎で、蜜と拌せて潤し、切つて蜜と拌せて潤し、根を刮き去り、銅刀で黄色の毛を刮き去り、細

**根 修 治**

いふも違ふ。

隨る貴衆の葉の形に似てゐる。葉が菴間に似たといふは甚だしい謬だ。石草のやうだと時珍曰く、その根は扁く長く、葉の形に似てゐる。その葉缺には柳缺うしあがあつて、

ある。

牙が兩兩相對し、葉は長くして尖舞が、大葉が兩旁にあつて、小葉が、又、な。また花に似てゐない。枝毎に、宗曰く、この物は葉に似てゐる。

〔柳 碎 骨〕  
——靈 孫 胡——



に入る。

があり、春生をた葉が冬になると乾いて黄色になる。花も實もない。根を採つて薬が抽出て枝になる。葉は表は青緑色で、背面は青色で、赤紫の點上、毛と短葉が付き、又、大葉





し、火で炮（たう）に乘じて耳を塞ぐ（塞ぐ）病後の髪落（落）、胡孫（胡孫）、野薇（野薇）の嫩  
 乳（乳）中を塞ぐ。これに金針丸と名ける（聖濟總錄）。耳鳴（耳鳴）、骨碎（骨碎）を削つて細條  
 に認め（認め）た『といつてある。』風虫（風虫）、牙痛（牙痛）、骨碎（骨碎）、乳香（乳香）等を木にし、糊（糊）で丸にして神效  
 ちんとするものは、數（數）擦れば立ち、骨中の毒氣を去る。牙が動（動）き、實験（實験）の結果神效  
 堅くし、牙を固くし、精髓を益し、骨中の毒氣を去る。牙が動（動）き、實験（實験）の結果神效  
 『この法は靈苑方から出たもので、ただ牙痛を治すに止まらず、極めて能く骨を  
 通齒を磨くやうに齒に揩（す）り、良久してそれをつき吐く、嘔（嘔）下しても差（差）なし。劉（劉）石松  
 るは、骨碎（骨碎）二兩を銅刀で細んに割（き）んで、互鍋（互鍋）に入（入）れ、慢火（慢火）で煮（煮）く、妙（妙）つて末は痔し、善  
 す。】齒が牙を攻むるもの【齒が牙を攻むるもの】或は痔し、或は痛す

## 附方

舊二、三

これよりやむあり腎虛骨痿に對する治法の應用だ。

には杜牛膝（杜牛膝）、杉木節（杉木節）、草薢（草薢）、白芷（白芷）、南星（南星）を洗（洗）ふがよいとある。  
 斤丸を加へ、或は痛か、或は痺し、遂に痢風となる。これに獨活（獨活）、寄生（寄生）、虎骨（虎骨）、四  
 足（足）が痿（痿）し、或は下（下）體（體）は、攝生（攝生）を善くせず、或は遠路を歩行し、或は房勞（房勞）し、或は外感（外感）から兩

瘡ニ作惡ル。大觀ニ惡ヲ證シ。病ノ名ニ解者ニ由極ノ虛氣血極ノ肉筋極ノ精

を治す』とあるが、耳やものはより腎の發である。按ずるに、戴原禮の證治要訣に『痢故に專ら脾、胃のみを目標としてはならぬ。雷公炮炙論に『この方を用ゐて耳鳴傾に住んだ。蓋し腎は大小便を主するものであり、久泄は腎虛の關係に由るものだ。重態に陷つたが、子、が、この葉末をを腎中に入れて煨熟し、それを與へて食はせると治するのである。骨刺史の氣息が久泄を患ひ、多くの瘡も效なくして危篤の時珍。曰く。骨碎補は足の陰少の藥である。故に能く骨に入ら、及び久泄痢をそれの有効だ。した傷損を治するに、根を取つて搗き篩ひ、黄米を煮た粥と和してして傷處を裹む。そ

頭。曰く、骨碎補は婦人の血氣の藥に入れる。蜀地方では、筋骨を閃折して猪腎で夾み、煨いて空心に食へば、耳鳴、及び腎虛の久泄、牙疼を治す【時珍】研末上熱下冷に主效がある【權】【惡】に用ゐて爛肉を蝕し、蟲を殺す【大明】研血を止め、傷折を補す【開寶】骨中の毒氣、風血疼痛、五勞、六極、手足不收、氣味【苦】し、溫にして毒なし【大明】。曰く、平なり。主【治】血を破ら、







ノ註見。江州石部雲母

水ノ註見。非泉

の品。金(康)上、海

ン品。本集、此ノ説等

ン本。書ノ集、此ノ説等

ン何。別々ノ種、草、十

六。植物ノ名、考、充

ン。先。輩。ノ。分。岐。ヲ。

頤。曰く、七星草は江州の山谷の石上に生ずる。葉は柳のやうで長く、長さ二三

折つて見る。花も實もなく、冬を凌いで潤まぬ。その根は盤屈したた竹根のやうで細く、

のやうだ。それで金星なる名を呼ばれた

に黄色の星がでて、兩兩相對し、色は金

の長さ二一ばかり、冬深くなる青面

の上にも生え。初生には深緑色で、葉

え、或は大の木の下の陰になつた古い生

管の中などの日光の當らぬ處にや、竹と

と。錫曰く、金星草は西南方の州郡に多くあるが、我州のものを上と

[草 星 金]



集 解

とにいた。

あるもの。このとである。圖經には七星星草を多重し、此には併記する

釋 名

金釧草(圖經) 鳳尾草(綱目) 七星草

時珍曰く、即ち右草の金星

本草 下集 文 採 石 州、海  
牧 野 云、  
金 星

ト 誤ハ可キヲ射云ル。  
毛ハ人ヲ射云ル。  
一 毛ハ人ヲ射云ル。  
二 毛ハ人ヲ射云ル。  
三 毛ハ人ヲ射云ル。  
四 毛ハ人ヲ射云ル。  
五 毛ハ人ヲ射云ル。  
六 毛ハ人ヲ射云ル。  
七 毛ハ人ヲ射云ル。  
八 毛ハ人ヲ射云ル。  
九 毛ハ人ヲ射云ル。  
十 毛ハ人ヲ射云ル。  
十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
二十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
三十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
四十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
五十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
六十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
七十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
八十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十一 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十二 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十三 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十四 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十五 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十六 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十七 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十八 毛ハ人ヲ射云ル。  
九十九 毛ハ人ヲ射云ル。  
一百 毛ハ人ヲ射云ル。

金星草 (二)

科 名 科 名 科 名  
學 名 學 名 學 名  
和 名 和 名 和 名  
嘉 祜 嘉 祜 嘉 祜

【氣熱】 欖榔等分を末にし、薑湯で二錢を服す。(聖濟錄)

【便前】 便前に血あるもの。石皮を末にし、一錢を茹子枝の前湯で服す。

【食前】 食前に服す。指迷方。【閉中】 石草を末にし、三錢をつつ酒で服す。

【小便轉】 小便轉。石草を毛を去り、車前子と各二錢半を水で二盞で一盞で服す。

【小便淋痛】 小便淋痛。石草、滑石等分を末にし、一刀圭をつつ酒で服す。

【金瘡】 金瘡に主效があり、肺氣を清する。(時珍)

【淋瀝】 淋瀝。遺溺を治す。【炒】 炒つて末にし、冷酒で調て服すれば發背を治す。(類

を下し、膀胱滿を通じ、五勞を補し、五臟を安し、惡風を去り、精氣を益す。(別錄)

【主 治】 勞熱、邪氣、五種の癰閉不通、小便道を利す。(本經)

【氣 味】 平、苦、平にして毒なし。別錄曰く、微寒なり。

【氣 味】 平、苦、平にして毒なし。別錄曰く、微寒なり。

たのだ。

丹沙草 (本草)

時珍曰く、四季を通じぬみかから生長といふ

釋名

科 名 和 名 無 未 詳 (科) 水龍骨科

石 長 生 (本品)

乾く。集簡方

つづつを新汲水で服す。(本草方) 【脚膝の爛瘡】金星草の背 upper 上を刮して下して傅ければ  
 油の肥物、毒物を忌む。(經驗方) 【熱毒下血】金星草、陳乾各三兩を末にし、一錢  
 し、更に溫酒二三升を和し、餅こに入れて密封して、時時飲む。生、冷物、沸  
 づに甘草せうかく一錢を入れ、搗いて末にし、四服に分け、一升を酒で煎して、一升で煎して、三四兩  
 づに甘草一錢を入れ、搗いて末にし、四服に分け、一升を酒で煎して、一升で煎して、三四兩  
 づに甘草一錢を入れ、搗いて末にし、四服に分け、一升を酒で煎して、一升で煎して、三四兩

附方

發毒したものは適當でない。

時珍曰く、この藥は一般に金石藥中毒を治するものだが、憂鬱、氣血の凝滯で

物ハ實能ク列ノ十種其  
 然居何種ヲモテ光  
 (Adiantum mono-  
 eblamys, Eat.)ニ  
 之レハ野云、牧  
 (一)



三(五五七七) 餘木平一藥有ス。照、  
カ(四) 木(村)康(日)曰、  
カ(四) 木(村)康(日)曰、

すばかりでなく、同時に毒が去つて瘡が癒える。酒を飲まぬ患者は、末にして新汲  
を酒一盞で煎じて服用す。黒い汁を取ら下すものだ。ただそれまで服した石薬を下  
宗。曰く、丹石の毒が背に發したものを、一切の癰腫には、その根と葉と二錢半  
それで平復する。老年者には服せられぬ。  
性至て冷なるもので、服して後には下痢する。故に補治の方法を講ずるやうにすれば  
も。曰く、瘡毒ならは如何なるものでもこれを服するがよし。けれども  
生ずる【】髪を黒くする【】熱を解し、五淋を通し、血を涼する【】時珍  
するもよし。瘡腫に塗れば甚だ效がある。根を油に浸して頭に塗れば大いに毛髪を  
器で煎じて服用すれば、先に服した石薬は悉く下る。また末に冷水で方寸匕を服  
主 治 【發背、癰瘡、結核、疏黃、丹石の毒を解す。根共に半斤を酒五升で銀  
味 氣 味 【苦し、寒にして毒なし】 頤。曰く、微酸しし。崔昉曰く、雄黄、砂、  
定の時期はない。  
尺、壹になつて延びる。その葉は堅硬で背面に七星のやうな黄點がある。採收に

ぬ。故にここに附記して置く。

この草は長生なる名があるが、石生長紅茂草とやはいり類のものか否かに判然せず。入つて泉下に達するといふところから紅茂草と名ける。俗に「充瘡花」と呼ぶところある。色で雪のやうな、また麥飯を撮み取つたやうな花を開く、年を経ても枯れず、根は地路、丘、荒れ果てた土地に生ずる。葉は地丁に似て中心に莖が抽出で、黄白時、日、按ずるに、庚辛玉冊に『(五)通泉草、一名生長草は多くは占りたる

と葉を採る。

ふ。施州に生じ、四季共に枝葉が繁ることろから長生なる名稱を呼ばれる。春、黄根主、效がある。焙じ研つて末にし、冷水で調へて貼る。一名地後藥、一名生長草といひ、癰疽、瘰癧を治し、頭痛、日く、味苦し、大涼にして毒なし。癰疽、瘰癧を治し、頭痛、日く、味苦し、大涼にして毒なし。

附 録

ニシハ、草(四)牧何野云、草紅詳茂

主 治

【主 治】寒熱、惡瘡。大熱、氣、不祥を辟ける。【本(經)】三【蟲をを下す】(附 録)

といひ、桐君は甘しい。酸、く、小毒あり。

ナ、何ノ草カ、詳カ、フ、イ、草中、モ、ク、居、(Makino.)ニ、科、先、草、牧、野、云、ノ、頭、は、泉、





〔天景〕  
——草火慣——

を開き、秋後に枯死する。またこれらも舊  
めて、夏季中に紅色の碎けた花  
を大く、層をなして上に伸び、莖は極  
に置く。春苗が生え、葉は馬齒莧に似  
て置く。人家で中庭に種を、或は盆栽にして屋上など

頤曰く、今は南北にいづれにもあり、  
て陰乾する。

集解

別錄に曰く、天は太山の谷に生ずる。四月四日、七月七日に採つ  
ぬ。それで慣火といふ。方に用ゐることは一向に稀だ。

世人はいづれも盆に盛り屋上に置いて栽培し、火を辟けるを、  
い。人はいづれも盆に盛り屋上に置いて栽培し、火を辟けるを、  
い。人はいづれも盆に盛り屋上に置いて栽培し、火を辟けるを、

釋名

(同) 火母 (別錄) 弘景曰く、藥の稱のついで、景と、  
(同) 慎火 (本經) 戒火 (同) 救火 (別錄) 護火 (綱目) 辟火

アトシテ。證シテ居ルガ實ニ  
之ヲ考ル。即チ植物通名ニ  
關シテ。考ルヘキ其下ニ  
種ニシテ。私ニシテ居  
モ、(S. alboroseum, Ba-  
ker.) 人ト云フ、先輩

景天 (本經上品)

科名 和名 學名  
景天科 (Sedum spectabile, Borein.)  
景天科 (Sedum spectabile, Borein.)



〔一〕未ノ牧ヲ云フ、石ノ寛ヲ云フ、

〔三〕茅ノ註ヲ見ヨ。草類仙ノ州ハ

ル。未ノ牧ヲ云フ、石ノ寛ヲ云フ、

〔三〕ハ。駒ノハノキ

附錄

〔四〕垂石

る。生で搗いて末にし、丸にして服すれば、毒を治す。

す〔頤〕

ば、胸に主效があり、また風涎を吐

【主治】甘草と共に煎して服すれ

【氣味】辛く苦し、小毒あり

を採る。

のやうで短い。八九月、土地の者がそ

る。茎は青く、高さ一尺ほど、葉は水

多は河岸の沙上に著き、春、苗が生

集解

頤曰く、鐘州に生ずる。



〔寛石〕——山當武——



〔垂石〕——州福——

科名無詳  
名名無詳  
和名無詳

石〔二〕寛〔一〕宋圖經





【氣味】微し辛く辛く寒し

【主治】湯火灼瘡に研つて貼る【類】

花を開く。

の耳の形に似てゐる。夏小さい淡紅色

形は生えなばかりの小麦葉、及び虎

は石荷葉と呼ぶ。葉の大きいのは錢ほど、

は荷葉を蓋にせやうだ。それで世間で

一本の莖一枚の葉があつて、その形

は。莖の高さ五六寸、細毛があり、

は。莖の高さ五六寸、細毛があり、

【草耳虎】——荷石——



時珍曰く、虎耳は陰濕の處に生え、

下女に記す。

集解 釋名

科名 虎耳草科 (Saxifraga surmentosa, L. f.)  
学名 Saxifraga surmentosa, L. f.  
和名 虎耳草

(目) 綱 虎耳草

氣味

【甘し、寒しして微毒あり】

主治

【湯火灼瘡に研つて貼る】

民間(二) 木村(康)曰く、

花淡紅色、葉の形は錢ほど、夏小さい、葉の形は生えなばかりの小麦葉、及び虎は石荷葉と呼ぶ。葉の大きいのは錢ほど、は荷葉を蓋にせやうだ。それで世間で一本の莖一枚の葉があつて、その形は。莖の高さ五六寸、細毛があり、は。莖の高さ五六寸、細毛があり、



集解 日本産スル草也。根は細く、葉は長く、花は白色、果は赤く、根は土に生ずる。多くは石に附き、陽に向つて生ずる。四

草牧野云、二葉佛、

リク、一葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二葉名、二葉名、二葉名、

二尺で葉の甚だ大なるものだ』とあるが、それは景天であつてこの草ではない。

に裁多、佛指甲と呼んでゐる。救荒本草に『高』

は枯れる。世間では多く庭の石山や瓦の壁の上など

うに尖長だが小さい。夏黄色の花を開き、霜を經れ

葉は脆く、葉は細く、柔か澤あり、馬齒草のや

莖は脆く、葉は細く、柔か澤あり、馬齒草のや

時珍曰く、二月苗が生えて叢になり、高四五寸、

李を通してある。

佛甲草



もので、馬齒草に似て細く小びく、且つ長く、黄色の花を開くが實は結ばない。四

草牧野云、二葉佛、

集解

頭曰く、佛甲草

科名 景天科

學名 Sedum lineare, Thunb.

和名 佛甲草

圖經 (宋) 佛甲草

乾し、酒五升で煮た汁一升を四回に分服する。(子母秘録)

産後の陰脱【慎火草一斤を陰

發明

**發明** 時珍曰。驚不食草。は、氣が温であつて升り、味が辛であつて散ずる。  
 す。鼻。鼻を塞げば、患が耳に聾（さう）ふ。又、脊腫を散す（時珍）。鼻が塞（さい）つて通ぜぬを治  
 眼の赤腫、雲翳（くもり）、腦酸（のうさん）を散し、癰疽（ようじゆ）を治し、鼻が解（は）れし、目（め）を明（あ）くし、  
 中（ちゆう）を塞（さい）げば、鼻膜（びまく）が自（みづか）ら落ち（お）つる（藏器）。【痔瘻（しろう）を療（りやう）す】（詠）【毒（どく）を解（は）し、目（め）を明（あ）くし、  
**主治** 【鼻氣（びき）を通（とほ）し、九竅（きやう）を利（り）し、風痰（ふうたん）を吐（は）す】（頌）【目（め）を去（さ）る。按（あん）で鼻（び）

氣味

珍。日。く。幸。し。温。り。汁。は。砒。石。雄。黃。

○ 𪛗

海鏡を賜ふといふと名種は一回だけだが物は

○此の車のてはあて『あけなて』

類した草を天胡荽と名ける。

トビに生える一種の小草で、形狀の胡荽に似

千金方に「水に近き處や渠の中、溪地な

おるゝゝゝゝ。按ずるに、採置薬の

〔葵 胡 石〕——草食不露——

〔荃胡石〕





三錢拾指す酒一盤に人れて汁を絞つて服し、渣を傳ける(集簡方)

【切の腫】野、把、穿せん、山さん、をを、焼や、いて、性せいをを、存ぞんして、七七しちしち分ぶん、  
尾び、歸き、歸き、當たう

にし、水を一口含んで置いて、疼の左右に随つてその方の鼻の間に啗ふ。また接んて塞ぐ。

項に記してある。  
【牙疼鼻淵】と「穢不食草を綿に懷て入れ乾かして米

有てしなほ、あつては再び貼る。(孫)天集に「毒を以て治す」【耳】

し、その上貼つて一夜にして取り下し、黃連、黃蘗の煎で洗つて置く。物を

卒 ソウ 三 さん として 錢 せん 上 じやう の 等 とう 一 いち 木 もく 錢 せん 半 はん、 龍 りゆう 二 に 龍 りゆう 一 いち 錢 せん、 砂 さ 少 せう 木 もく 細 さい、 として、 和 わ 二 に 臺 たい として

【る取をを】 食草の汁を煮散して一兩、爐甘石を三三回繰返しして火で煨き重尿に

【目】に貼る。は、ある方であつて、涙の出る處をすする。ひ入られ、涙の出す處をすする。【目】に貼る。は、ある方であつて、涙の出る處をすする。ひ入られ、涙の出す處をすする。

青黛・川芎各一錢を細末にし、一口水を嚙くんで置いて、いここの藥米粒をつづつと、内臍へ

風、瘁、鼻、毒、頭、痛、腦、咳、外、瞽、  
 拔、睛はくしやうの諸病を治す。蔓、小、食、草、を、晒、し、乾、し、て、二、三、錢、

【鼻】ににんぢやうとてふを去る【目】赤の腫脹、羞明、昏暗、陸漚、疼痛、眵泪、

附方  
新七  
【寒痰の  
驚喘】野  
園姜の研  
汁に酒を  
和して服  
す。住ばれ  
集る方

三日の間に、こゝに居て、舊の『明に復す』とある。

三(三) 目ハ目ノ疑ル

(三) 膠ハ目汁ノ凝ル

(三) 膠ハ目汁ノ凝ル



忽ちに生ずるには、草中驚不食と名くするものを、鼻内寒いで頻と換ふれば、  
だものばまた別種の神效がある』といつてある。王璽の集要の詩には『赤眼の醫  
聚積するがよし。凡そ目の諸病にはいづれもこの薬を用ゐて差間ない。生で接ん  
に路を開けて置く方法だ。故に力に小さいが鋭い。この薬は常に嚙くはつてその力を  
銅の蓋を開いて置くやうな具合の方であつて、常に邪毒をして閉ぢし籠らせぬやう  
破り邪を除くの使として用ゐるのであつて、これは升透の薬である。大體に於いて  
を鼻に嚙くはふ。即ち驚不食を解毒の君とし、青黛せいだいを去熱の佐とし、川芎の辛を留を  
て了へきではない。按ずるに、倪惟德の原機微集に『目を治するには碧雲散  
を認めて發表した點は、大いに眞摯な努力といはねばならぬ。徒に博にだけといつ  
ものまで説明したものは、如くにいついてゐるが、この薬の類の如き、その著しい功  
神妙なものだ。世人は陳藏器の本草を目して、ただ徒らに廣に鏡うたいを漁あさつて鄙俚な  
達して鮑、胎、痰瘰を治し、瘰癧を散ずるのである。その醫を除く功力は就中就中著しい  
く上は頭、腦に達して頂、痛、目を治し、鼻氣を通して瘰癧を落し、内は肺の經に  
陽である。能く天に通ずるものだ。頭と肺とはいづれも天に屬するものだから、能



【草 藤】  
—— 草 藤 鏡 ——

り 出 入 水 に 入 れ て 見 る と、

間 で 泥 を 去 り、

臥 す。 か く 耳 に 泥 す。 三 四 時

門 に 貼。 そ の 氣 を 閉。 ち、

が 疼。 く は 左 耳 を、

碎、 左 疼。 く は 右 耳 を、

握 に 麻 油 點、 家 方 で は、

牛 草、

、 膏 に、

( 采 氏 集 驗 方 )

【附 方】

新 七。 吐 血、 血 鈕 【鏡 面 草 水 を 洗 ひ、

と、 それ は 鏡 面 草 で あつ た 『 と あ。 。

一、 器 に 少 量 の 蜜 水 を 入 れ た も の を 進 め、

を 飲 ん で こ ろ、

り、 小 便 後 に 數 點 の 鮮 血 が 出 た。 し か し 疼 き は な く、

酒



端ノ字ヲ觀ニ枝ノ下ニ

地方。圖ノ福越者

Var. tropaeoli-  
des, Makino. 呼

通ニ見ル品ヲ呼外ヲ  
呼見ル品ヲ呼外ヲ

云々。此種は、  
葉ノ品種たるヲ

ノ付カセバ、  
此ノ種ミ



〔草藥酢〕  
—酸葉三—

集解

の濕つた場所にて生えて叢生し、莖の端に陰  
泰日、酢漿は道旁の陰

は黄で實は黒い。

とその他二枚の葉が同一の枝に著く。

保。昇。日。葉は水萍に似て、大葉一枚

四月、五月に採つて陰乾する。

二枚の葉があり、その葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

一葉は細萍のやうだ。

に併記した。

はこの草のことだ。

孫施といふやみやは

蘇頌の經に「赤孫施は

蘇頌の經に「赤孫施は

蘇頌の經に「赤孫施は

蘇頌の經に「赤孫施は

蘇頌の經に「赤孫施は

蘇頌の經に「赤孫施は



之ハ赤ノ字ノカヲ思  
 ば赤ヲ施ルカ  
 ハ赤ヲ施ルカ  
 一ノ名ニ多ク  
 外野牧  
 普救  
 思

釋名

酸漿圖經

三葉酸

三角酸

酸母綱目

醋母蘇恭

校正

圖經の赤孫施を併せ入る。

酢漿草 (唐本草) 和名 名 名 名 名  
 Oxalis corniculata, L.  
 科 名 名 名 名  
 酢漿草科 酢漿草科

(張泉醫説)

各一盃を和して服す。毒を下す。三五回試みたらば肉粥で補ふ。遅れてはならぬ。  
 入れて杵き爛らし傳けるが妙である。【鼠莽の毒を解す】鏡面草の自然汁、清酒  
 し、痛を止める。鏡面草を搗き爛して傳ける。【蛇纏惡瘡】鏡面草に鹽を  
 して傳ける。立ち効がある。【楊氏家藏方】手】指の腫れ【毒】指の惡瘡にも毒を消  
 出で平安になつた、小兒の頭瘡【鏡面草を日光乾して末にし、輕粉、麻油に和  
 安の一乳婢がこの病に罹つて飲食不能になつたとき、この方を用ゐると數箇の蟲が  
 色、新なるものは白色なものである。この方法を用ゐるには、午前中がよい。徐克  
 つて浮き出るものだ。久しに互つたもの蟲は黒く、比較的久しくいものは褐

弘。曰景く、李當之はこれに『酸箕草のことに布いて生えるものだ、

色である。玉を溶し得るものだ。一。名を醜草といふ。

る。名山、醜草の鹽泉の上の日に生ずる。葉は五枚あつて青く澤あり、根は赤黄

有。名。未。に。用。に。曰。く、身體を軽く、延年を延へる主效がある

附錄

する。(節醫論)

み、し、め、箸ほどの太さにし、それを豆粒大に切り、一塊つで痛む處を搗げば止

腫【痛、酸漿草一把握を洗淨し、川椒四十九粒を目を去り、共に搗き爛らして網片で裹

を數回擦れば癒える。(永類方)【蛇虺の瘡傷【酢草を搗いて傅ける。(崔氏方)【牙齒

一三日一回服用すれば效は現れる。(外秘要)【癰瘡の痒きも【雀兒草、即ち酸母草

溫酒で三錢匕を服用す。(千金方)【痔瘡の血出【大握を水二升で一升到煮取り、

ほ通せぬときは再服用する。(摘玄方)【赤白帶下【三葉酸草を陰乾して末にし、空心に

便不通【酸草一大把、車前草一握の搗汁に砂糖一錢を入り、調へて一盞を服す。な

自然汁合一酒一合を合せ和して空心に溫服する。立ちるに通ずる。(沈存中藥方)【二

嗽と名けるはこれである。(王璆百一選方)【諸淋赤痛【三葉酸漿草を洗ひ研つて取つた



脈を流通する。また氣を治するにも用ゐ得る【前】腫痛、惡瘡、金刃、撲損の出

し。主 治】地脈は、心氣、陰疽、血結に主效がある【別錄】地錦は、血

氣 味】辛し、平にして毒なし【錄】地脈は、苦し、平にして毒な

方土は秋期にこれを探して雌黃、雄黃、丹砂、硫黃を煮る。

さて莖は赤く、花は黄で實は黒く、形狀は葵の葉のやうで、莖を斷てば汁が出る。

の隅などいづいにもある小草だ。地に就いて生

時珍曰く、野や、畑や、寺院の境内や、

じだが實物は異ふ。

あるが、それは藤蔓の類だ。これとは名稱は同

子と取つて用ゐる。絡石の註に地錦といふが

し、六月紅色の花を開き、細い實を結ぶ。苗盛

中佳し。莖、葉は細く弱く、地上に蔓延し、葉は青紫色で、夏期中茂

解 集】錫曰く、地錦は近道の野や畑に生える。蘇州に産するものが就



【地錦】 愁見血——

參ノ註サ州ヲ見ル。草類  
(三)用ルモノ類  
ノ類

稱がある。薺、葉の形容だ。







Eノ四ノ雄ノ熱ノ少  
 三ノ雄ノ熱ノ少  
 二ノ雄ノ熱ノ少

がある。血見愁は雄瘡だけに用ゐる。雌瘡には用ゐない。(楊清夏外科方)  
 する。もし生のものなかつた場合には、酒で搗つて熱服し、渣を傳けるもやはり效  
 當歸二錢半を焙じ、乳香、沒藥各一錢二分半を末にし、七錢つづつ熱酒を調へて服  
 いて聖。瘡聖すれば自から出る。(本草權度)癰腫、背瘡【血見愁一兩、酸漿草半兩を焙し、搗  
 塗る。(危氏得效方)【惡瘡の血の出るもの】方は上に同じ。瘡瘍の刺骨【草血竭を搗  
 てる。服す。三回で癰を瘥える。劉長春經驗方(血見愁を研り爛して  
 るもの、平地に在ること稀だ。(危赤林得效方)小便血淋【血風草を井水で搗え  
 錢を服す。一服で止まる。この草は磚たは陰乾して末にし、薑酒で調へて二  
 淹つけて食ひ、酒二盃を飲んで送下する。或は陰乾して末にし、薑酒で調へて二  
 飲で服す。(藥原禮證治要訣)婦人の血崩【草血竭草の嫩いものを蒸熟し、油、鹽、薑を  
 つを空心に米飲で服す。(乾坤生意)大腸瀉血【血見愁少量を薑汁に和して搗き、米  
 を服す。立ち止まる。(經驗方)】血痢の止まぬもの【地錦草を晒して研り、二錢つ  
 錢を服す。】附方 新、一、舊 白赤毒臍【地錦草を洗つて暴乾して末にし、米飲で  
 血、血痢、下血、崩中に主效があり、能く血を散じ、血利小便を止める(時珍)

ル。(三) 大觀ニ無時ニ作

壁ニ大觀ニ石ニ下ニ

草ニ大觀ニ石ニ下ニ

草ニ大觀ニ石ニ下ニ

草ニ大觀ニ石ニ下ニ

草ニ大觀ニ石ニ下ニ

草ニ大觀ニ石ニ下ニ

仙掌草 (二)

經圖宋 (一)



〔草 掌 人 仙〕

冬になつてある。四季を通じて採收す。葉は細く長く、春生えて、掌の形やうなものでかく名人は石の上に貼つたやうに生ずる。頭曰く、台州、温州に生ずる。

集解

科名 和名 未詳  
名 未詳  
詳 未詳

ふかよし。又、接んて汁を以て目に滴らせば、目を明にし、醫を去る。(鑑)

い。冷薬を飲ませ、またこの湯を用ゐて洗

井に擣りて傅ける。丹毒が腹に入れば必ず危

頭が小さくして硬いものに煮て溶し、

【主 治】小兒の腫瘡の

〔草 人 仙〕



離宮草に似たものだ、北方地方には生えない。















本草綱目部第二十七卷終

が現はれる。痛みを感ずるやうで、ふあれば治癒するものだ。(坦仙教方)

飲得るものは三盃、飲めぬものは一盃つづつ就寝時に服す。三五盃まで服すれば效  
老虎花七分、好き焼酒三斤を固く封じ、一炷香の煮一夜土中に埋め、平常酒を  
蘭羊花、即ち

附方

新二

【諸風癱瘓】

だ米粥、蔬菜を食ふがよしとある。

及び寒冷物、動風の物を忌む。又、酒、及び麪食を過飲、過食してはならぬ。  
蒸骨、追風、逐邪、排血安神の方法といふ。房事、魚、鷺、雞、羊、韭、蒜、蝦、蟹、調  
經、返す。か一個月餘を繼續すればその病は漸次に癒える。これを升陽氣、調  
し、又一日隔てて五分を服し、又一日隔てて三分を服し、又一日隔てて一分を服  
し、酒で服し、一日を隔てて二分を服し、又一日隔てて三分を服し、又一日隔てて四分を服  
し、酒の場合には、前の場合に二服して次々湯を二服し、痰が老い、氣が微なる  
先づ小續命湯、及び參湯を服して後これにこれを服す。凡そ婦人産後の腰腿痛には、  
先して舊に復し、世壽百歲にして逝去した。凡そ男子婦人の風濕の腰腿痛には、先  
落ちて了つた。かく三年にして病を扶けて山に入り、この方を得て服し、百日

本草綱目  
草部  
第二十一  
卷





雜草 拾遺四種、二種、綱目三種

草の十一種 雜草九種 有名未用五百五十三種

右附方 舊三十三新

馬勃 別錄

石松 拾遺

卷柏 經本

烏韭 經本

垣衣 別錄

船底苔 食療

陟釐 別錄

草の十

苔類十六種

乾苔 食療

石蕊 拾遺

尾遊 別錄

百藥草 附す。

地柏、栢、含生草 附す。

桑花 日華 艾納を附す。

玉柏 別錄

上馬腰 附す

昨葉何草 唐本即ち瓦松。紫表を附す。

地衣 艸日華即ち仰天皮。

井中苔 及び萍監 別錄

本草綱目部目録第二十一卷







百草

雞菜花百

豬口井草

牛胎孔草

產婦人上草

神農本草經

別草

別藥

名醫別錄

離樓草

神九草

益決草

幸熟草

節草

驪實草

漏陰實

馬頭草

金蓮

白背草

赤蓮

養藍草

紫藍

石路藍

竹石

秘惡石

河煎

匪余達

千河

共明王

船師

虹系唐

姑活

井苦知

文石

紫給石

赤齒

鹿聚可

實

實

實

實





氣味

【甘し、大溫にし、毒なし】

5597 あり。

とて、いふに、あつてゐるに、いふに、山に在るに、いふに、水に在るに、いふに、

てん長は數ふにあつるものにも五種あつて、右に在るを非島（ミナト）といふ、左に在るを互松

諸工の業、  
 以て其業を以て  
 其業、  
 以て其業を以て  
 其業、  
 以て其業を以て

類には五種あつて、水に在るを浮塵、風に在るを墨、互に在るを

いふたのは、賦に專じたものは、多く誤を謀りにして、たゞいひぬき兼ねる。蓋し是の衣

『とあるは鳥養と同名だが、實物は異ふ。蘇氏がこのものを指して鳥養を』

性味はいつれとも同じ。  
 俗に水綿と呼ぶ。  
 ものをはく状態の  
 流異記に「  
 錢名

水汚中石に著目から生るる  
 結核菌の分布

神皇正統記

ある。

いづれも互右の氣を感じて生るものだ。故にこの賦には類隨つていたもので

藥に在るは『ふ』といふところである。澤養とよはすのことは異なりが。













し太陽に晒されたり、内側が果<sup>も</sup>り風や日光に晒されたり、久しきに亘つて變色して青色となる。蓋を分ち、邪熱を去り、臟腑を調へる。物の氣味が應用に適する結果だ』といつて

解す。五兩を酥餅（餅）未（未）一兩半に和し、麴糊で梧子大の丸にし、五十九をつつを温酒で服

主治 鼻衄、吐血、淋疾には、炙甘草、豉汁かじと共に濃く煎じ、た湯を呷すふ。孟

【鼻洪、吐血、淋疾には、甘し、冷にして毒なし】

(一) 船底苦食(療)和名ふなけ

氣味 【甘し、大寒にして毒なし】 主治 漆瘡、熱瘡、水腫、非中の監

別二種のものがあるでなほ。

主治 漆瘡、熱瘡、水腫、非中の藍



ては飲めない。た。だ。の。う。ま。い。は。湯。に。浸。り。て。吸。つ。て。味。が。あ。る。白。色、輕。薄。で。花。蕊。の。や、香。氣。は。草クサの。う。ま。い。は。甘。く。清。進。物。と。す。る。そ。の。形。狀。は。蒙。山モウサンの。石。上。に。生。ず。る。煙。霧。の。熏。染。日。久。し。く。結。成。す。る。も。で、蓋。し。苔。衣。の。類。あ。る。

今は一般にこれを蒙頂茶と呼び、  
亮州(三) 亮んちやう

處の高山の右上のものか。を良として、

を知らなかつたのだ。この物はないだ、諸

右澤とて、  
右澤といふ  
に、澤田といふ  
物一回の  
あつた

が、その功力は石燐と同じものだ。蓋し

[illegible]

な。い。陳藏器は、これを屋遊の類のものと

時珍曰、別錄には、石瀉としてその功用を具に記してあるが、形狀の説明が

はてしなく石井茶屋に名付たる

散に有霽と。ふ。春の早いうちに青翠色になり、  
 端に四枚の葉を開く。山間の住人。



〔慈〕 〔慈〕  
——茶 雪——

石。青。石。魯。兗。州。蒙。山。石。部。註。

[illegible]





釋名

垣（名） 垣（名） 天（別錄） 韭（別錄） 鼠（別錄） 昔邪（別錄）

（新藥）

和名

（別錄中品）

衣垣（名）

種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
（一）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（二）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（三）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（四）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（五）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（六）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（七）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（八）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（九）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十一）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十二）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十三）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十四）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム

（十五）種ニ生ナル草ノ葉ハ或ハ縹色ニ染ム  
根ニ生ナル葉ハ或ハ縹色ニ染ム



〔衣垣〕一度天仰

附方

新三

身腫

面部の丹腫

蛇のやうな形に

れば中暑を治す（時珍）

ける（大明）目（明）を明にする【】研末して新汲水で服す

七粒を服す。又、馬反花猪に主效がある。生油で調へて

【主治】卒心痛、中惡には、人間の垢（垢）で丸にして

て毒なし。

氣味

【苦】し、冷にして微毒あり【】藏。日平に





し淋汁を取つて頭を沐すれば髪を長くする。これは古木の錦花であつて、石互にも洗重なるに主效があり、水すゐ膠かを下す。また熱痢を止めるにこれを煮て服す。灰に炙黄にして

附 錄

柴衣さいい拾遺しつゐ

藏ぞう

曰いく、

味苦し、

黄疽わうしゅ毒なし。

目黄にして

を研をつて貼はれば毒が發はせぬ（生々編）

がある。【】方は上に同じ。【】狂犬の咬傷くわうきやう、互松ごしょう、雄黄ゆうわう

敏らぬもの、互松を陰乾して末にし、先槐せんかい枝え葱そう湯とうで洗つた後に摻さる。【】立ろに效

互松ごしょう、生枯せいこ葉えを共ともに搗ういて傅はける。乾いたものなら末にする。【】灸瘡しうそう

が裂ひけて生せいじ瘡そうた互花ごか、生薑せいきやうに鹽しほ少量を入いれて搗ういて塗ぬる。【】湯火灼傷とうかしゃくきやう

【】牙齦がこんの腫しほ痛いた【】互花ごか、白礬はくらん等分を水で前まへして含漱くわんしゆくする。立ろに效がある。【】唇ちん【】唇ちん【】唇ちん

松しょうを暴乾ばうかんし、灰かいに燒やいて淋汁りんじつを取とり、熱ねつして洗せんふ。六七回を過すしてはなぬ。【】聖惠方せいゑいほう

じ焦しやうして末まにし、別に生麻油せいまあぶに浸ひして塗ぬる。【】聖惠方せいゑいほう、互

を紅花湯くわがたうで服はくす。【】搗玄方たうげんほう、髮はつを黒くろく染せんめる。乾互松かんごしょう一斤、生麻油せいまあぶ二斤を共に煎せん

盡じんきき、燒やき、陰いんに生せいえた互花ごかの活かつき、たもの五兩ごらうを煮膏しゆかうし、乾漆かんしつを煙えんが

【】舊屋きうゑきの日に陰いんに生せいえた互花ごかの活かつき、たもの五兩ごらうを煮膏しゆかうし、乾漆かんしつを煙えんが



(三) 沙淋、尿石病。

凡そ三時四時で通じ、（經験方）に乘じて小腹を熏し洗ふ。月經を通じ、血を破

附方 舊、一新九。  
【小便沙淋】即ち屋上の無根草を濃く湯に煎し、熱

灰に燒いて一錢を水で服す。又、諸瘡の斂らぬものもこの塗る【時珍】

生ずる膏として重要な薬である【馬志】  
婦人の經絡を行らす【蘇頌】  
大腸下血に【は

主 治 口 中 の 乾 け て 痛 む も の 。 水 、 穀 、 血 痢 。 血 を 止 め る 【唐本】

た『眉髪を生ず』とある説と反對だ。注意せねばならぬと。

黄、雄黄、丹砂、汞、白礬を伏す『と記載してある。この説は本草の『毒なし』と

で髪を洗すれば髪が落ち、誤つて目に入れば失明する。搗汁には能く草砂を結し、

漆のやうに黒くして圓く鋭く、葉は背面に白毛がある。大毒があつて、焼灰の淋汁

即ち互松は蔭草である。屋瓦の上、及び深山の右の割目の中に生ずるもの、蕨は

氣味 酸し、平にしして毒なし【時珍曰く、接するに、庚辛玉叩て向天草、

○ 手轉之米日上

志、曰く、處處にある。年久しき互屋の上生えるもので、六月、七月に苗を採つ

8のて、高さ一尺餘になり、遠望するところ松を裁き、あやうに見えらる。

入をれたま再び煮て一回流らして温服する。【方】水煎。毒婦難水。火の灼傷。【石花を焙し  
 酒を盛つて鍋に入れ、一滾り滾らしてかから右の藥末を入れて一夜露（翌）早く藥  
 花、細茶を焙じて末にし、舊漆（古）を中（中）で焼いて性（性）を存して各匙（匙）を用ゐ、光（光）盤（盤）に  
 石【石花を焙し】婦人の血崩【方】聖藥。飲む。浸して酒に。花を。脚の風冷。【腰】新。三。附。方。

頭を沐すれば、髪を長くし黒くする【大明】

氣を利す【木經】、金瘡【黃疸】、疥癩【疥癩】、中（中）を柿【氣を益す】、灰【灰に燒き】  
 冷（冷）にして毒あり。恒衣（恒衣）が使となる。【治】皮膚の往來寒熱。小腸、膀胱の

【氣味】甘し、寒にして毒なし【大明】。

は四五寸ばかりある。

大明。曰く、これは石衣のことだ。長いもの

昔ではない。

青翠色で茸（うづも）と似たものだ。昔に似てゐるが、

藏（蔵）。器（器）。曰く、大石、及び水間の陰處に生ずる。

卷。柿と相類するものだ。

鳥

非





切、二錢つゝの水を蓋して前して服す。【耳上】濕瘡、士馬駿、井中苦等分を  
 服すれば立ち止まる。【通】二便不【衛生理】士馬駿を水で淘り、互で燻いて再。  
 寸金散、士馬駿、二錢半、石州黄薬子五錢を末にし、二錢を新水でて服す。再。  
 【附方】【新五】九竅出血【方】海上方【鼻衄】鼻衄の止まぬもの

を通し【時珍】

主治

骨熱、煩熱、毒壅、鼻衄【鼻衄】

氣味

【氣味】甘く酸し、寒にして毒なし

と、これは土壙の上の鳥韭のことだ。

時珍曰く、垣衣とは櫛櫛ついでの上の苦衣のこと

を馬駿うまけんといふ。苦の類である。

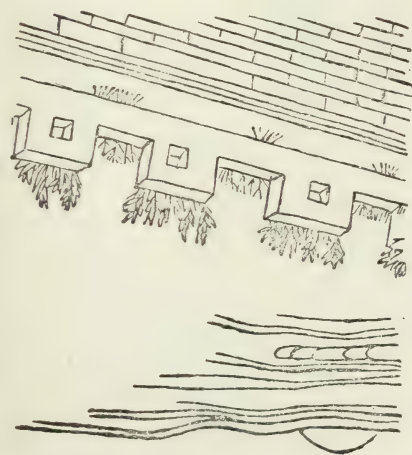
ので、垣衣に比すれば更に長い。故にこれ

の側に生え、これには垣壙の上に生えるも

ふものもあるが、それは違ふ。垣衣は垣壙

にはこれが茂盛する。或はこれを垣衣とい

【士馬駿】



スモ  
ノ  
ヲ  
ア  
ル  
カ  
モ  
知  
レ













(六) 草十字花科ノ *Anastatica hierochuntica* 今生

種ヲたぐさハトモ固ヨリ然セ  
種名ハトモ固ヨリ然セ  
種名ハトモ固ヨリ然セ

(元) 牧野曰ク、*Selaginella* 地

平ににして毒なし。婦人の難産に主效があり、含ん汁を呑めば直ちに子が生れる。性は寒く、大さうで葉は卷柏のやうである。  
時珍曰く、これよりもやはり卷柏であつて地上に生ずる。葉は卷柏のやうで大さうで性  
四ヶ月採つて暴乾して用ゐる。蜀中では九月に探り、商店で多く賣つてゐる。

くして上には黄色の點があり、花も葉もない。三、四月生えて四五寸ばかりに成長する。細この草は蜀中の山谷に生じ、河中府にもある。根は黄色で、形状は絲の如く、莖は細し、米飲んで二錢づつづつを服用す。蜀地方の住民はこの方を甚だ神なるものとしてゐる。

附録（五）地柏（宋圖經）頌曰く、臙毒下血に主效がある。黃芪きうぢと等分を末にし、酒で服す。又飯で丸にして服するもよし。（存方）【遠年の下血】卷柏、三錢づつづつを酒で服す。また飯で丸にして服するもよし。（存方）【大腸下血】卷柏、側柏、棕櫚等を焼いて性をして未にし、水で服す。（百選方）

附方新二

生で用ゐれば血を破り、炙いて用ゐれば血を止める【大明】頭風を除く、水臙を暖める。鬼魅瘧疾、精を益し、容顏をよくする【別錄】月経を通じ、戸桂こへち、鬼桂の腹痛、邪強く、



















(八) 牧野日ノ、死産、

生草ノ、草中ノ、

生草ノ、穴ノ、

生草ノ、樹ノ、

生草ノ、野ノ、

生草ノ、二ノ、

生草ノ、三ノ、

生草ノ、四ノ、

生草ノ、五ノ、

生草ノ、六ノ、

生草ノ、七ノ、

生草ノ、八ノ、

生草ノ、九ノ、

生草ノ、十ノ、

生草ノ、十一ノ、

生草ノ、十二ノ、

生草ノ、十三ノ、

生草ノ、十四ノ、

生草ノ、十五ノ、

生草ノ、十六ノ、

生草ノ、十七ノ、

生草ノ、十八ノ、

生草ノ、十九ノ、

生草ノ、二十ノ、

生草ノ、二十一ノ、

生草ノ、二十二ノ、

生草ノ、二十三ノ、

生草ノ、二十四ノ、

生草ノ、二十五ノ、

に持ち帰り、湯にして溶する。三。回到に過ぎずして差を。

〔八〕産死婦人塚上草拾遺（藏器）曰く、小兒の醋瘡には、これを取つて後を顧みず

けて置けば止まる。記載は聖方にある。

〔七〕樹孔中草綱目時珍曰く、小兒の腹痛、夜啼に主效がある。暗に戸の上に著

に水で服せれば、酒が嫌になり、飲まぬやうになる。或は飲んでも酔はなくなる。

〔六〕思遠曰く、五月五日に井中に倒れに生じた草を取つて焼き研り、本人に判らぬやう

に入れて置く。

〔五〕井口遼草拾遺（藏器）曰く、小兒の夜啼には、母に知らぬやうに私に床の下

にある。

〔四〕れやつた。する。直ちに活きた。剛は薬を服し、百餘歳にして（五）地肺山に入つた『

水に漬け、泥で封じて百日の間埋め、それ煎じて丸にして、卒死者の口にそれを入

酒を醸す。按ずるに、異類に鳳剛は（四）陽の、ある。百常に百花を採つて

〔三〕百草花拾遺（藏器）曰く、病を主治し、長生し、神仙となる。やはり煮汁で

る。





讓實別錄。曰く、味酸し、喉痺に主。效あり、波刺を止める。十月に採つて陰

乾する。

の客熱の氣に主。效がある。一名山節、一名達節、一名通漆といふ。十月に採つて暴暴  
節華別錄。曰く、味苦し、毒なし。傷中、痿痺、癰腫に主。效がある。皮は脾中  
り、煩を解し、筋骨を堅くする。

懷華別錄。音は臆（ラ）である。別錄。曰く、味甘し、毒なし。上氣に主。效があ  
る。夏（ハ）至（シ）の日に採る。

封華別錄。曰く、味甘し、毒あり。疥瘡に主。效があり、肌を養ひ、惡肉を去る。  
蔓生する。一名鹿と（カ）いふ。九月に採つて陰乾する。

女勞疸を療じ、煩を解し、筋骨を堅くし、風頭を療ず。沐川の藥にする。木の葉の上  
に、英華別錄。曰く、味辛し、平にして毒なし。瘰癧に主。效があり、陰を強くし、

黄の葉（ハ）の葉（カ）の葉（サ）で、葉の葉の葉だ。

萎草別錄。曰く、味甘し、毒なし。盛傷、痺腫に主。效がある。山澤に生え、蒲

ある。



龍草 別錄に曰く、味辛し、毒なし。傷金瘡に主效がある。龍の音は起(キ)で

灌草 別錄に曰く、一名鼠肝。葉は滑かで青色だ。癰腫に主效がある。

木の上の生え、葉は葵のやうで莖の旁に角があり、白い汁が出る。

異草 別錄に曰く、味甘し、毒なし、瘰癧、寒熱に主效があり、黒子子を去る。癰

へる主效がある。冬生えて草木の上に蔓をかけ、葉は黄色で毛がある。

免草 別錄に曰く、味酸し、平にして毒なし。身を軽くし、氣を益し、天年を延

一年間に九回熟する。七월에採收する。

る主效がある。一名鳥栗、一名雀栗といふ。人家の庭中に生え、葉は栗のやうで、

九熟草 別錄に曰く、味甘し、温にして毒なし。汗を出し、洩(つせ)を止め、悶を療す

る。山の陰に生じ、根は細辛のやうだ。

益決草 別錄に曰く、味辛し、温にして毒なし。效で肺の傷んだものに主效があ

收する。

を折つて種多も生えるものだ。五月白い花を開き、實の核は赤い。三月三日に採

で、三月蛇牀のやうな形状の大きな葉が生え、四つづつ相値(あひひか)ふて生える。ただ枝

燕 國 別 錄 曰 く、小兒の癩、寒熱に主效がある。五月五日に採る。

弘 景 曰 く、葉と實と麥あはと李のやうだ。

雀 石 谷 石の間に生ずる。

雀 梅 別 錄 曰 く、味酸し、寒にして毒あり。惡瘡を蝕する主效がある。一名千

い。

犀 洛 別 錄 曰 く、味甘し、毒なし。癰疾うづに主效がある。一名星洛、一名泥洛と

入。雞山とに生ずる。採收に一定の時期うづはない。

(註) 雞山、未詳。

腫 邪 氣 別 錄 曰 く、中を補し、白沃はくを療ず。婦人の白沃を止め、一名陰洛とい

水 雞 淫 別 錄 曰 く、味甘し、平にして毒なし。目を明にし、中寒風諸不足、一名

ある。五月に採收する。

鹿 良 別 錄 曰 く、味鹹く、臭し。小兒の驚癇おそ、大人の狂くるに主效がある。

陽 陵 地 別 錄 曰 く、味酸し、身を輕くし、氣を益する主效がある。(註) 丹

(註) 丹陽、金部赤銅。

馬 逢 別 錄 曰 く、味辛し、毒なし。癰蟲うづに主效がある。

鱈魚 別、曰、味、甘、韋、と、浮腫を療ず。多、食、つて、は、な、ら、じ。

○鼻、曰く、蔓は瓜のやうな。

で葉が小さく、實は櫻桃のやうで七月に成る。

小便を利し、天年を長くする主效がある。深山、及び烟の中に生え、莖は茶みのやう

滿陰實。別錄曰、味酸、平。無毒。氣、益。除、止。め。

て葉は艾かいのやうだ。五月に採收する。

一。主にすたるが、ある。

一名を長壽といふ。

山野や道路などになんて生え、

麦のやうな種子も、

田畑に

可○葉○萬  
曰○之○聲○  
非○其○  
之○聲○  
有○之○  
之○聲○  
之○聲○  
之○聲○

煙の中に生る。十月に採收する。

身を軽くして、氣を益す。一名卓葉といふ。桂のやうで、整が四角で葉が大きい。

秦靈實 別錄。曰、々、味酸、温にして毒なり。妊婦、産出、力餘病にて主に效あり、

蜀郡に生ずる。

美實別錄。曰、々々、味苦し、寒なり。頭禿、惡瘡、疥癩、癰疽(カサカサ)に主。效かる。

(三) 癰、瘻、疔、腫。

樟(八)石(八)陵(八)石(八)部(八)生(八)

朱巴(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)甘(八)し、毒(八)な(八)し。寒(八)に主(八)效(八)が、血(八)を止(八)め、帶(八)下(八)を止(八)める。

房(八)陵(八)生(八)ずる。

味(八)甘(八)し、毒(八)な(八)し。寒(八)に主(八)效(八)が、血(八)を止(八)め、帶(八)下(八)を止(八)める。

除する。

藍(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)鹹(八)し、毒(八)な(八)し、肉(八)食(八)は、中(八)毒(八)に主(八)效(八)が、能(八)くその毒(八)を消

下地(八)生(八)ずる。

味(八)鹹(八)し、毒(八)な(八)し、肉(八)食(八)は、中(八)毒(八)に主(八)效(八)が、能(八)くその毒(八)を消

柴給(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)鹹(八)し、毒(八)な(八)し、肉(八)食(八)は、中(八)毒(八)に主(八)效(八)が、能(八)くその毒(八)を消

味(八)鹹(八)し、毒(八)な(八)し、肉(八)食(八)は、中(八)毒(八)に主(八)效(八)が、能(八)くその毒(八)を消

一。名(八)經(八)緯(八)といふ。

味(八)鹹(八)し、毒(八)な(八)し、肉(八)食(八)は、中(八)毒(八)に主(八)效(八)が、能(八)くその毒(八)を消

黃(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)甘(八)し、平(八)に(八)して毒(八)な(八)し。

味(八)甘(八)し、平(八)に(八)して毒(八)な(八)し。

ては桐根(八)やうだ。

味(八)甘(八)し、平(八)に(八)して毒(八)な(八)し。

黃(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。

味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。

除(八)益(八)州(八)の川(八)谷(八)に(八)生(八)ずる。

味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。

赤(八)別錄(八)に曰(八)く、味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。

味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。

す。蜀郡(八)の山(八)石(八)、陰(八)地(八)の濕(八)つる。

味(八)苦(八)し、毒(八)な(八)し。



石ノ方ハ山ヲ見エ。部方解

赤澄。別。錄。に。曰。く。味。甘。し。し。毒。な。し。性。温。中。に。主。効。が。あ。り。血。を。止。め。氣。を。益。

中。に。核。が。あ。る。三。月。三。日。に。葉。を。採。つ。て。陰。乾。す。る。

い。山。の。陰。に。生。え。二。月。鏡。い。花。が。咲。い。て。草。の。上。に。蔓。り。五。月。黒。實。を。結。び。そ。

赤。鬱。別。錄。に。曰。く。味。甘。し。毒。な。し。腹。痛。に。主。効。が。あ。る。一。名。羊。脂。一。名。羊。骨。一。名。羊。骨。

い。楚。の。山。に。生。す。三。月。に。採。收。す。る。根。は。白。く。し。香。い。

辛。別。錄。に。曰。く。味。辛。し。毒。あ。り。寒。熱。に。主。効。が。あ。る。一。名。鹿。尾。一。名。羊。草。

名。虫。損。一。名。孟。推。と。い。ふ。方。山。の。谷。に。生。ず。る。

青。雌。別。錄。に。曰。く。味。苦。し。惡。瘡。禿。敗。瘡。火。氣。に。主。効。が。あ。り。三。虫。を。殺。す。一。

山。陵。生。え。根。は。紫。く。似。葉。は。燕。廬。の。や。う。だ。採。收。に。一。定。の。時。期。は。な。い。

白。背。別。錄。に。曰。く。味。苦。し。平。に。主。効。が。あ。り。惡。瘡。疥。を。洗。ふ。

草。と。い。ふ。澤。中。の。高。處。に。生。え。る。

金。莖。別。錄。に。曰。く。味。苦。し。平。に。主。効。が。あ。る。一。名。葉。金。

く。主。効。が。あ。る。山。陵。の。地。中。に。生。じ。形。狀。は。馬。牙。の。や。う。だ。

土。菌。別。錄。に。曰。く。味。甘。し。平。に。主。効。が。あ。る。身。を。輕。く。し。氣。を。益。し。天。年。を。長。



指部、(一) 如東部ノ方州。  
參見。山類沙。  
ナ。河南陽、今離水ノ陽ノ  
河陽、離水ノ陽ノ

敗石。別錄。曰く、味苦し、毒なし。渴、痺に主效がある。

渴を止める主效がある。江南に生ずるもので、石草のやうだ。

曠石。別錄。曰く、味甘し、平にして毒なし。氣を益し、神を養ひ、熱を除き、

十月莖葉を採つて陰乾する。

莖は赤黒色で、三年に一回實を結ぶ。その實は赤くして麻子ほどのものだ。五月、大雨の際にもこの物のみは乾き、日が出てもこの物のみは濡れぬ。花は黄色し、酒、氣を益し、寒に耐へ、骨髓を實てる。一名陵石といふ。右の生に生じ、路石。別錄。曰く、味甘し、酸し、毒なし。心腹に主效があり、汗を止め、生

の山澤中。水の中に生える。五色で汁があつて潤澤だ。

文石。別錄。曰く、味甘し、寒熱、心煩に主效がある。一名泰石といふ。東郡

七月に採る。

肉を長ず。久しく服すれば身體を軽くし、天年を長くする。宛句うんこうに生じ、二

紫。別錄。曰く、味苦し、小腹痛に主效があり、小腸を利し、積聚を破り、肌

雜陽（九）に生ずる。

一名歸澤麻、一名天麻、一名蒼草といふ。野や畑に生え、五月に採收する。

五母麻 別錄。曰く、味苦し、毒あり。痙攣、大便秘下痢に主效がある。一名鹿麻、

五月二日探之。○

拵。拍腹。別に。曰く。味、幸、し。盟、つ。お。身。す。陣、つ。の。主。放。

५५२

又陸根。別錄。曰く、味辛し、毒あり。癰腫、膚脹を癒す。  
一名青魚。一名梓澤ヨウラク。

黃白支別錄に曰く、山陵に生ずる。三月、四月に根を採つて乾す。

[illegible]

白馬根。別錄。曰く、味苦く、寒にして毒なし。瘰癧、瘰癧、瘰癧の雲熱に主す。效あり。

を療し、瘡癰を破る。深い山谷に生じ、葉は藍のやうで實は赤い。赤女腸も同じ。

[illegible]

恭。曰く、別(六)本に「名義」とある。

冬菜といふが、やはり菜の冬菜子とは異なる。

弘景曰く、薬の無用のものはば、汚丸といふ。即ちこれらは野葛の名稱だ。一名一

作ル。(一七)變、大觀二摩二

作ル。  
二(一)ア。二觀ニ本ヲ錄ニ  
用方ア。四ノ藥ノ下ニ無ニ  
方方ア。觀ニ藥ノ上ニ無ニ



河東に生ずる。

省地。東河。今山河。西

作。氣。大觀。壽。

あ、久し服すれば身を輕くし、氣を益し、老に耐へる。一名冬葵子といふ。

姑活。別錄に曰く、味甘し、温にして毒なし。大風、邪氣、濕痺、寒痛に主效が

湯藥とす。色が黄なり。蜀郡に生ずる。立秋に取る。

船虹。別錄に曰く、味酸し、毒なし。氣を下し、煩渴を止める主效がある。溶

惡む。

邪氣があり、手足が寒して色なきものに主效がある。益州の山谷に生ずる。蜚蠊を

戈共。別錄に曰く、味苦し、寒にして毒なし。驚氣、傷寒、腹痛、癰腫、皮中に

え、莖は莖延し、大いさ莖は莖ほど、子は滑かで小さい。

夏達。別錄に曰く、齒痛に主效があり、身體を輕くする。山の陰に生

葵千。別錄に曰く、味苦し、毒なし。易耳に主效がある。一名耳馬といふ。

薰。一名玉荆といふ。三月に採つて陰乾する。或は音は或は(カ)である。

并苦。別錄に曰く、欸逆上氣に主效があり、肺氣を益し、五臟を安する。一名臈

一名臣堯、一名巨骨、一名鬼世といふ。平澤に生ずるもので、八月に採收する。

る。此にいふ吉祥とは異ふ。

し、夏紫色の穂に成る花を開き、繁殖し易い草がある。やはり吉祥なる名稱はあ

る。時珍曰く、今世間で栽培する一種の草に、葉が樟蘭のやうで四季共に青色を呈

て毒なし、目を明にし、記憶力を強くし、心力を補す。

吉祥草。蔵。曰く、西國に生ずる。胡人が齋し來つたものだ。味甘し、温し

な淡黄色の花を開き、實は結ばない。癰腫、瘰癧を療す。採收に一定の時期はない。

頤。曰く、鵝鳥威は信州山野中に生ずる。春葉が生え、九月蓬蒿花のやう

がある。

すところからかく名けたものだ。山中生活者は酒に浸して服す。風血、羸老に主効

で冬潤す、珠のやうな赤色の子がある。味甘し、温にして毒なし。能く諸毒を解

る。鵝鳥變藏。曰く、江南地方の木の皮下に生ずる。高さ一二尺、葉の陰は紫色

本草拾遺 十二種

く主効がある。一名梨といふ。葉は大青のやうだ。

藥(一) 未詳ノ草ヲ鵝鳥

註(一) 見。信州ノ鵝鳥威ノ

草(三) 未詳ノ草ヲ吉祥

Reincokia 即チ Reinokia

特ノ巴註ハ見チ。類天名

芥。別錄。曰。く、味苦し、寒にして毒なし。消渴、血を止め、婦人の痰、痺を除く。延。主。效。がある。山谷中に生え、白い順理のものだ。十月に採收する。  
腰。音は戸の切(カ)である。別錄。曰。く、味甘し、毒なし。天年を  
慶。別錄。曰。く、味苦し、毒なし。咳(せき)に主。效。がある。  
載。別錄。曰。く、味酸し、毒なし。諸惡(そ)氣に主。效。がある。  
毒なし、目を明にするの主。效。がある。實に刺があり、大いさ稲、梁ほどのものであ  
常。生。罰本には、吏の字を更と書いてある。別錄。曰。く、味苦し、平にして  
人家の宮室に生ずる。五月、十月に採つて暴乾する。  
救。人。者。別錄。曰。く、味甘し、毒あり。氣を通じ、諸不足に主。效。がある。  
れ。その色に随つてその臟を補す。一名女木といひ、巴(こ)の山谷に生ずる。  
調へ、氣を益し、目を明にし、蟲を殺す。青符、白符、赤符、黒符、黄符、それぞ  
五色符。別錄。曰。く、味苦し、微温なり。效。逆、五臟の邪氣に主。效。あり、中  
時。珍。曰。く、花の白、ものをもつた天麻草と名ける。

除、さ、虚損、産後の血病を補す。水で煮て服し、また搗いて傷處に傅ける。

毒なし。折傷内損の療血に主效があり、膚を生じ、痛を止め、五臓を治し、邪氣を

温にして 臟。曰く、胡國に生ずる。乾草に似て黄赤色のものだ。味鹹し、温にして

氣攻で臍下痛むもの主效がある。

頤。曰く、根子は威州山中に生ずる。味苦く辛く、温なり。中心の結塊、久積

毒し、暴下血に主效がある。酒か飲に磨つて服す。

苦し、温にして毒なし。冷熱、遠近を問はず心腹痛、惡鬼の氣注、氣刺痛、霍亂、

つて潤ふてゐる。冬も潤ふない。根の太さは指ほどある。また根子と名ける。味

筋子根。曰く、四明山に生ずる。苗高さ一尺餘、葉は圓く厚く、光があ

し。一切の毒を解し、鼻衄吐血を止め、煩躁を秘る。

藥王草。曰く、苗、莖の色は青く、摘めば汁が出る。味甘し、平にして毒な

病を逐する。絶陽の、子無きもの、婦人の老血に主效がある。酒に浸して服す。

顔色なまき、絶陽の、子無きもの、婦人の老血に主效がある。酒に浸して服す。

註ノ威州ハ見。草類譜

註ノ四明山ハ見。草類譜

ノ廣西ノ桂林ノ地ナ今



(七ノ) 如(ハ)安(ハ)始(ハ)誤  
(物ノ)見(ハ)桂(ハ)州(ハ)草(ハ)類(ハ)飼

字(五) 大(五) 觀(五) 鐘(五) 二(五) 下(五) 草(五)

草(五) 下(五) 無(五) 風(五) 雞(五) 脚(五)  
草(五) 至(五) 下(五) 無(五) 風(五) 雞(五) 脚(五)  
草(五) 至(五) 下(五) 無(五) 風(五) 雞(五) 脚(五)

もよし。

倚待草。藏。器。曰くく、桂州、如安の山谷に生ずる。葉は圓く、高さ一三、尺、八

て毒なし。腹冷、氣痛、痲癰に主效があり、酒で煎じて服す。また搗汁を温服して

土落草。藏。器。曰くく、嶺南山谷に生ずる。葉は細く長いもの。味甘し、温に

る。搗上に瘡に傅れば肌を生じ、痛を止める。

千金。藏。器。曰くく、江南に生ずる。高さ一三、尺、蛇、蠍の毒に主效があ

根を抜く。○重の音は奇(チ)であつて、羊蹄根のことだ。

小兒髮、緋帛と等分を合せ、五月五日に灰に燒き、一錢つづつを湯で服すれば

斷。藏。器。曰くく、丁、落に主效がある。白牙重、秦、半夏、地骨皮、青苔、蜂葉、

發する熱を解す。

味し、平に毒なし。金瘡に主效があり、血を止め、肉を生じ、丹石を服して

兔肝草。藏。器。曰くく、初生は葉が細く軟か、で兎肝に似てゐる。一名雞肝といふ。

だ。味苦し、平に毒なし。赤白久痢で疳になつたものに主效がある。

雞脚草

藏。器。曰くく、澤

葉が赤く、生えて

葉が對して生えて

百合の苗のや

釀し、それを三勒漿と呼ぶ。

して服す。西國に生じ、胡人が齎し來つたものである。胡人はこの花を採つて酒に浸

（一）陀得花 志。曰く、味甘く、温にして毒なし。一切の風血に主效がある。酒に浸

宋開寶本草 一 種

た。命名の意は宜草を男と云ふと同じくない。

盛つて臂に佩れば、惡を辟け、驚を止める。この草は南方に生ずるから宜南と名け

のやうな大いさ蟬の羽ば、薄片がある。邪に主效があり、少男、少女が緋絹袋に紙

（二）宜南草 珣曰く、廣南の山谷に生ずる。葉が（三）長さ二尺ばかり、紙

唐海藥本草 一 種

起させる『といつたその物のやうである。同一物をいふのではあまりいいか。

り、郭璞の註に『一名荒夫草』とある。この説は陳藏器が『これを持ひければ愛情を

ル。花（一）牧野草、フ得

地。方。南。今ノ安南  
（三）廣南ノ今ノ安南  
ル。草（一）牧野草、フ得

山アトアリ。東二百里。姑次之。  
『在縣次二百里。』  
陸軍今ノ南ノ河之南  
七經ノ三ノ鼓之山  
始姑之山、中次

註雅州ハ水部露見。

註大秦國ハ石部玉見。

た。その葉は相重り、花は黃色、實は鬼絲のやうだ。媚藥としてこれぞ服す『』とあつに、山海經に「姑嬌の山、帝女が死んだところであつて、それが化して、著となつる。又按ずる。これは虞美人草のことだ。やはり無風搖の類である。又按ずる。か近づいていて、歌を謳ひ、また臺を拍つて拍子を取ると、その葉は舞ふやうに動く人明のやうな三葉があつて、一葉は莖の端にあり、二葉は莖の半に相對してゐて、一葉が、實物は同じくない。段成式の西陽雜俎に「雅州に舞草といふが生える。決る時珍曰く、羌活きやうかつ、天麻、鬼臼きびう、薇きの草にもみな無風獨搖草なる名稱はあつて、藏器曰く、これを帶びれば、夫に愛情を起させる。瘡かさに主效がある。煮汁で淋し洗ふ。のを見る、と自ら動く。故に獨搖といふ。性は温、平にして毒なし。頭骨の遊風、全身を諸處の山野にも往來する。頭は彈はの子やう、尾は鳥の尾のやうで、兩片が開合してた無風獨搖草（拾遺）。曰く、及（二）大秦國、及び嶺南に生じ、五月五日に採る。またとある。時珍曰く、外臺祕要に『落馬の内損を治す。麋藥末（二）一兩、牛乳一錢を前（二）服す』

黃素郎

頤○曰く、天台山中に生ずる。冬、夏とも常に青い。土の地（の）は、根を探つ

量はなひ。

ば酒で二十丸をつつし未にしして煉蜜で梧子大の丸にし、一日一回、が苦、微寒にしして毒なし。難<sup>なん</sup><sub>れん</sub><sup>れん</sup>諸風、手足不遂に主。效味。州に生ずる。冬、夏とも常にある。花、實はなしい。

〔草邊遺石〕



石道邊(六)頤(七)。

藥草ノ註ヲ見ヨ。類金  
(八)常州二草。陰草。類  
(七)大觀二草。字リ。  
ル。  
共悉ノ詳。未詳。ノ品。ア  
(六)黃野。曰。黄花。石  
遺。

又、伏牛花を一名隔鹿刺といふ。

虎刺、即ち「毒星草」の搗汁を擦る。『丹』曰く、毒、域方に治するに、

○ 服

效があら、剉<sup>さい</sup>み焙じて末にし、酒で一錢

入る。味甘し。一切の腫痛、風痰に主。根、葉、枝、採つて藥に

刺虎(四)、曰々、睦州(五)に生ずる。



(註)見チ陸州ノ石部石膏ニ今之ニシテ從テ無クハ。 indicus, Gaertn) = Damacanthus (科トテ) 昔京科ノセリチ虎刺モ、虎刺此牧野曰ク、同輩アリ。

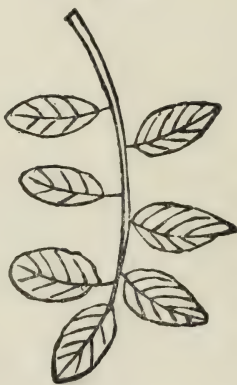


時珍曰、五加皮にも風使なる名稱がある。

を採つて風の治に用ゐるが、有效だ。

中冬、夏とも常に青い。土地の者は葉

[祖藥百]



曰く、天台山  
催風使  
効だ。

用ゐるが、有

[使風催]



とも常に青い。土地の者は葉を採つて風の治療に

夏、冬、天台山中に生ずる。曰く、百

[草水建]



し、走注風<sup>そうちゅうふう</sup>を治す。

の住民は葉を取つて焙じ乾し、研末して温酒で服

地。四季を通じてある。

(一) 建水草。頌曰く、福州に生ずる。

# 宋圖經外類二十種

芍薬ノ天山ノ註ハ、見ヨ。類  
(一) 金匱ノ註ハ、見ヨ。石  
(二) 共ニ、詳ノ品ヲ、風建  
(三) 草、牧、祖、曰、水

はなす。五月根を採る。性涼なり。煩熱、

實、花、實。田母草。頤曰く、江車に生ずる。

〔草母田〕



癰腫、瘡、毒氣を下し、堅積を破り、臍を利し、

陰乾する。味微し辛し、溫にして生ずる。三、月花を開いて、子、五、六、月

に採つ。地茄子。頤曰く、商州に生ずる。三、月花を開いて、子、五、六、月

して用ゐ、風涎を治す。

ほどこし乾

色、花を開く。五月根の長さ一寸

四、月、星宿花に似た黄

て、臺青のやう、莖は細く色が青く、

河中に産するものは、根が赤くし

〔金剛可〕



を結ぶ。實は生は青く、熟すれば赤くなる。時、咽喉腫痛を治す。一寸を含んで汁を嚥む。

心去つて用

〔註〕商州ハ、今陝西ニ屬ス。觀風ノ江、今江蘇ニ屬ス。田母草、今江蘇ニ屬ス。地茄子、今江蘇ニ屬ス。

〔註〕商州ハ、今陝西ニ屬ス。觀風ノ江、今江蘇ニ屬ス。田母草、今江蘇ニ屬ス。地茄子、今江蘇ニ屬ス。

百、金、剛、可、見、エ。



花は紫色で、一枝に七葉あり、花は一二三莖に出る。春苗を採る。

[草董胡]



[汗貫茹]



胡蔓草。頭曰く、密州の東武風腫を治し、七月根を採る。花は白い。青く、枝葉は小董葉に似て、

葉は信州に生ずる。頭曰く、

汗貫茹

毒あり。瘡を治し、味甘し、寒にして小

焙じて末にする。へば湯する。根皮を採り、

その實を食なつて花が開かすに實がな

る。夏に高三四尺、葉は李に似て

生ずる。頭曰く、南恩州の原野中に

布里草。

[草里布]



蛇ノ註南恩州見。石部石

作二苦二大觀ニ

東者、武山見。今在山。唐密州。類地。中私ハ充レハ科ノ草之草ノ野曰く、





本草綱目 三十九種

蜘蛛、蜈蚣、咬傷に主效あり。焙じ研つて白礬と水で調へて貼る。  
 き、碧綠色の子を結び、四季共に潤す。その根は味辛く、性涼にして毒なし。  
 露筋草 頤曰く、施州に生ずる。高さ三尺ほど、春苗が生え、随つて花を開  
 なし。金瘡を療す。



[草合石攪]



[草筋露]

に似てゐる。十二月に萌芽し、二月花が咲き、實は結ばない。その苗は味甘し、毒  
 類。合草、牧草、施州草、露筋草、石攪。見。山草類。共石攪。二石攪。頤曰く、類。

春ノ註チ見。合草、施州草、露筋草、石攪。二石攪。頤曰く、類。

上青下紫。紫其脚四寸。五寸葉。

何葉トノ穉ノ根シメギノ科ノ  
Podophyllum versipelle, Hance. 八

ハカニカニ

三三三。大觀二叢下二生

管草ノ施州ハ見。類  
三三二(二)山草。類  
ル。管草ノ施州ハ見。類

三三三

字ニアリ。大ニ觀ニ腫ニ上ニ作ニ。廊  
字ニ九ニ大ニ觀ニ。字ニアリ。大ニ觀ニ。皮ニ下ニ膚

左 郎 花 根

九里香時珍曰、傳滋の醫學集成に『腫癰を治す。搗き碎きて酒に浸して服

る。』

蛇魚草時珍曰、戴原禮の證治要訣に『金瘡出血の止血を治す。搗いて傅け

共に研末し、瘡口に吹けば效がある。』とある。

生じた瘡を治す。花を取つて白芷、椒根皮と

同く、時珍曰、腫癰、腫仙、腫域、腫方、腫明、腫喉に

らして患部に傅ける。』とある。

園だ。唐瑤の經驗方に『蛇咬を治す。搗き爛

竹葉のやうで、背面は全部蛇の目のやうな紅

形状は淡。』とある。

地榆等分を湯に煎し、綿纏け熱に乘せて手休めず、二三日で消く。』とある。

て服す。』とある。楊誠、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、

透骨草、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、

前、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、



[草眼蛇]

蛇眼草時珍曰、古井、及

地榆等分を湯に煎し、綿纏け熱に乘せて手休めず、二三日で消く。』とある。

て服す。』とある。楊誠、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、

透骨草、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、

前、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、

線が、腫方には一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、



方に『癘風、全身の瘡癰を治す。透骨草、大黃、雄黃各五錢を研末して湯に

方に『癘風、全身の瘡癰を治す。透骨草、大黃、雄黃各五錢を研末して湯に

透骨草、一名天

透骨草一名天

水銀草、一名天

水銀草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天

九龍草、一名天

九龍草一名天







〔柴 犀 羊〕

ノ風、葉下紅、共ニ草ニ要スルニ信ナキ、科ノ先ト先ト花ヲ碎ミ、汁ヲ取リ、湯ニ煮シ、服ス。時珍曰く、一名牛屎柴といふ。山野に生じ、葉は鶴虱(こむぎ)の類に似て、四月に

傳ける。又、水を加へて注ぐ。下に血をす。する。乾いたものを末にして漿水で調へて爛らし、傅ければ瘡口を合し、膿血を散搗。冬は根を用ゐる。癰疽(ようじゆ)發背に主效がある。根は魚類の毒し得る。夏は昔と葉を用ゐる。やうな形状の子を結ぶ。これを鐵草といふ。白色の花を開く。紅花のものもある。羊の尿に

用ゐる。(一) 羊屎柴 時珍曰く、一名牛屎柴といふ。山野に生じ、葉は鶴虱の類に似て、四月に

を出せば癰を治す。時珍曰く、一名牛屎柴といふ。山野に生じ、葉は鶴虱の類に似て、四月に

湯に煎じて服す。須臾にして耐ひ切れぬほど痒くなつたとき、手で爬き破つて毒氣

を治す。王永輔の患痔方に『癰瘡』を治す。皮を取り、

直に止まる。時珍曰く、一名牛屎柴といふ。山野に生じ、葉は鶴虱の類に似て、四月に



泡瘡に傳ける。虎搏の醫學正傳に『哮喘』根を取つて剉み、水で煎して服す。

郭公刺カクシ時珍曰、一名光骨刺、いふ。葉を取つて細かに搗き、油で調へて天

を治す。蜜と生薑、と共に研つてその汁を服し、外部に天加葉テンカハを貼る。『とある。

佛掌花時珍曰、く、普濟方に『櫻桃のやうな疔瘡

を一切の腫を治す』とある。

を散じ、痛を止め、已に化膿したのもも平安になる。

生じたる腫毒を治す。鹽醋と共に搗いて傳ければ、腫

を入れて傳へける。王璽の醫林集要に『腋下アキタに鹽

雞ニ癰アとハいふ。蛇傷に主效あり、金沸草と共に鹽

を煮ア葉は小さく、芥のやうな形状だ。味苦し。一名

を末にし、筒で吹入れ、二三回に過ぎずして癒える』とある。

猪藍子時珍曰、衛生易簡方に『耳中に膿あるをば通耳と名ける。この草の子

の牙カ疳ンを治す。搗き爛して貼る』とある。

握れば分婉する。又、腫脹に主效あり、小便を利す。衛生易簡方に『大人、小兒



[芥 芥 天]



ト之ヲ當テスル  
ニカ不ハ明或ハ平  
草サリ不ハ明或ハ平  
ノ像ハ其ノ極ニ至  
ラレタリ其ノ極ニ至  
是屬ハ其ノ極ニ至  
屬ハ其ノ極ニ至  
紅(二)牧野曰フ、滿江

石見穿時珍曰く、骨痛、大風、癰腫に主效がある。

湯星朱砂各一兩、急性子二錢を末にし、煉蜜で小豆大の丸にし、一錢づつを淡薑

南星、朱砂各一兩、急性子二錢を末にし、煉蜜で小豆大の丸にし、一錢づつを淡薑

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

。孫天仁の集效方に「氣膈の悶食、轉食を治す。膈山二兩、雞肺皮二兩、牛膽、

昭和六年六月十五日發行  
昭和六年六月十一日發行



# 刊行所

## 春陽堂

振替口座東京一六七一  
電話日本橋區通町三丁目八七三

東京市日本橋區通町三丁目八番地

印刷者

吉諭

發行所

利田

東京市日本橋區通町三丁目八番地

翻譯者兼

海郎

非賣品

註頭 國譯本 草綱部 第六册 (賣)



本草綱目草部第二十一卷終

作ル。本ニ書ル。ニ  
ニ  
阿貝兒

す『とある。

氣息

時。珍。

曰く、

西域に

出る、

形狀は

地骨皮の

如く、

婦人の

産後に

とある

奴哥撒兒

時。珍。

曰く、

西域に

出る、

形狀は

桔梗の

如く、

金瘡、

及び

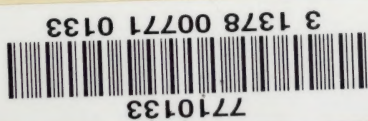
腸

と筋との斷れたものを治す。嚙み爛らしめて傳ければ自から續がる。』とある。





日-4141









京 出 版  
東 春 陽  
堂

